

宮本武蔵

火の巻

吉川英治

青空文庫

西瓜

一

伏見桃山の城地を繞^{めぐる}っている淀川の水は、そのまま長流数里、浪華江^{なにわえ}の大坂城の石垣へも寄せていた。――で、ここら京都あたりの政治的なうごきは、微妙に大坂のほうへすぐ響き、また大坂方の一将一卒の言論も、おそろしく敏感に伏見の城へ聞えて来るらしい。

今――

摂津、山城の二カ国を貫くこの大河を中心にして、日本の文化は大きな激変に遭^あっている。太閤^{たいこう}の亡き後を、さながら落日の美しさのように、よけいに權威を誇示して見せている秀頼や淀君の大坂城と、関ヶ原の役から後、拍車をかけて、この伏見の城にあり、自ら戦後の経綸^{けいりん}と大策に当たり、豊臣文化^{とよとみ}の旧態を、根本から革^{あらた}めにかかっている徳川家康の勢威と――その二つの文化の潮流が、たとえば、河の中を往来している船にも、陸^{おか}をゆく男女の風俗にも、流行歌^{はやりうた}にも、職をさがしている牢人の顔つきにも、混色^{こんしよく}し

ているのだった。

「どうなるんだ？」

と、人々はすぐそういう話題に興味を持つ。

「どうって、何が？」

「世の中がよ」

「変わるだろう。こいつあ、はつきりしたことだ。変らない世の中なんて、そもそも、藤原道長以来、一日だつてあつた例はねえ。ためし——源家平家の弓取が、政權を執とるようになってからは猶なおさらにそれが早くなつた」

「つまり、また戦いくさか」

「こうなつちまつたものを、今さら、戦のない方へ、世の中を向け直そうとしても、力に及ぶまい」

「大坂でも、諸国の牢人衆へ、手をまわしているらしいな」

「……だろうな、大きな声ではいえねえが、徳川様だつて、南蛮船から銃や弾たまぐすり薬をしこたま買いこんでいるというし」

「それでいて——大御所様のお孫の千姫を、秀頼公の嫁君にやっているのはどういふもの

だろ？」

「天下様のなさることは、みな聖賢の道だろうから、下人^{げにん}にはわからねえさ」

石は焼けていた。河の水は沸いている。もう秋は立っているのだが、暑さはこの夏の土用にも勝^{まさ}って酷^{きび}しい。

淀の京橋口の柳はだらりと白っぽく萎^なえている。気の狂ったような油^{あぶら}蟬^{ぜみ}が一匹、川を横ぎって町屋の中へ突き当ってゆく。その町も晩の灯の色はどこへか失って、灰を浴びたような板屋根が乾き上がっているのだった。橋の上^{かみしも}下には、無数の石船がつながれていて、河の中も石、陸^{おか}も石、どこを見まわしても石だらけなのである。

その石も皆、畳二枚以上の巨^{おお}きなものが多かった。焼けきった石の上に、石曳^{いしひ}きの労働者たちは、無感覚に寝そべったり腰かけたり仰向けに転がったりしている。ちょうど今が、昼飯^{ひるめし}刻でその後の半刻休みを楽しんでいるのであろう。そこらに材木をおろしている牛車^{よだれ}の牛も涎^{よだれ}をたらして、満身に蠅^{はえ}を集めてじつとしている。

伏見城の修築だった。

いつのまにか、世の人々に「大御所」と呼ばしめている家康がここに滞在しているからではない。城^{しろ}普^ふ請^{しん}は、徳川の戦後政策の一つだった。

譜代大名の心を弛緩させないために。——また、外様大名の蓄力を経済的にそれへ消耗させてしまうために。

もう一つの理由は、一般民に、とにかく徳川政策を謳歌させるためには、土木の工を各地に起して、下層民へ金をこぼしてやるに限る。

今、城普請は全国的に着手されていた。その大規模なものだけでも、江戸城、名古屋城、駿府城、越後高田城、彦根城、龜山城、大津城——等々々。

二

この伏見城の土木へ日稼ぎに来る労働者の数だけでも、千人に近かった。その多くは、新曲輪の石垣工事にかかっているのである。伏見町はそのせいで、急に、売女と馬蠅と物売りが殖え、

「大御所様景気や」

と、徳川政策を謳歌した。

その上、

「もし戦争になれば」

と、町人たちは、機と利を察して、思惑に熱していた。社会事象のことごとくを、そろばん珠にのせて、

「儲けるのはここだ」
もう

無言のうちに、商品は活潑にうごいた。その大部分が、軍需品であることはいうまでもない。

もう庶民の頭には、太閤時代の文化をなつかしむよりも、大御所政策の目さきのいい方へ心酔しかけていた。司権者は誰でもいいのである。自分たちの小さな慾望のうちで、生活の満足ができればそれで苦情がないのだ。

家康は、そういう愚民心理を、裏切らなかった。子どもへ菓子まを撒いてやるより易々たる問題であつたろう。それも徳川家の金でするのではない。栄養過多な外様大名に課役させて、程よく、彼らの力をも減殺させながら効果を挙げてゆく。

そうした都市政策の一方、大御所政治は、農村に対しても、従来の放漫な切り取り徴発や、くにもち国持まかせを許さなかった。徳川式の封建政策をぼつぽつ布しきはじめていた。

それには、

（民をして政治を知らしむなかれ、政治にたよらせよ）

という主義から、

（百姓は、飢えぬほかにして、気ままもさせぬが、百姓への慈悲なり）

と、施政の方策をさずけて、徳川中心の永遠の計にかかっていた。

それはやがて、大名にも、町人にも、同じようにかかって来て、孫子の代まで、身うごきのならない手かせ足かせとなる封建統制の前提であったが、そういう百年先のことは、誰も考えなかった。いや、城普請しろぶしんの石揚げや石曳きに稼ぎに來ている労働者などは、明日の^{あした}ことさえ、思っていないのである。

昼飯をたべれば、

「はやく晩になれ」

と祈るのが、いっばいな慾念だった。

それでも時節がら、

「戦争になるか」

「なれば何日頃いつ？」

などと、時局談は、いっばし熾さかんだったが、その心理には、

「戦争になったって、こちららは、これ以上、悪くなりようがねえ」

という気持があるからで、ほんとにこの時局を憂^{うれ}いたり、平和の岐点をじつと案じて、どの方へ曲がるのが国と民のためだろうなどと考えているのでは決してないのである。

「――西瓜^{すいか}いらんか」

いつも昼休みに来る百姓娘が、西瓜の籠を抱えて触れて来た。石の蔭で、銭^{ぜに}の裏表を伏せて、博戯^{ばくち}をしていた人足の群れで、二つ売れた。

「こちらの衆は、西瓜どうや。西瓜買うてくれなはらんか」

と、群れから群れへ唄つてくると、

「べら棒め、銭がねえや」

「ただなら食つてやる」

そんな声ばかりだった。

すると、たった一人ぼち、青白い顔をして、石と石のあいだに倚^よりかかって膝を抱えていた石曳きの若い労働者が、

「西瓜か」

と、力のない眼をあげた。

瘦せて——眼がくぼんで——日に焦^やけて、すっかり変ってしまったが、その石曳^{いしひ}きは、
ほんいでんまたはち
本位田又八^{ほんいでんまたはち}だった。

三

又八は、土のついた青錢を、掌のうえでかぞえた。西瓜売りにわたして一個の西瓜と交換した。それを抱え込むと、またしばらく、石に倚^{うづ}りかかったまま、ぐんなり俯向^{うつむ}いているのである。

「げ……げ……」

突然、片手をつくと、草の中へ牛みたいに唾^{だえき}液を吐いた。西瓜は膝から転がり出している。それを取ろうとする氣力もないし、食べようという氣で買ったわけでもないらしいのだ。

「……………」

にぶい眼で、西瓜をながめていた。眼は虚無の玉みたいに何の意力も希望もたたえていない。呼吸^{いき}をすると肩ばかりうごいた。

「……畜生」

呪う者ばかりが頭脳あたまへ映つてくる。お甲こうの白い顔であり、武蔵たけぞうのすがたであつた。今の逆境へ落ちて来た過去を振顧ふりかえると、武蔵がなかつたらと思ひ、お甲に会わなかつたらと彼はつい思う。

過あやまちの一步は、関ヶ原いぐさの戦の時だ。次に、お甲の誘惑だ。あの二つのことさえなかつたら、自分は今も、故郷ふるさとにいたろう。そして本位田家の当主になって、美しい嫁をもち、村の人々から、羨望せんぼうされる身でいられたに違ひない。

「お通つうは、怨んでゐるだらうなあ……。どうしているか」

彼の今の生活は、彼女を空想することだけが慰めだつた。お甲という女の性質がよくわかつてからは、お甲と同棲してゐるうちから、心はお通へもどつていたのだつた。やがてあの「よもぎの寮」と呼ぶお甲の家を、ていよく突き出されたような形で出てしまつてからは、よけいにお通を思うことが多かつた。

その後また、よく洛内らくないの侍たちの間で噂にのぼる宮本武蔵なる新進の剣士が、むかし友達の「武蔵たけぞう」であることを知ると、又八はじつとしていられなかつた。

（よしつ、俺だつて）

彼は酒をやめた。遊惰な悪習を蹴とばした。そして次の生活へかかりかけた。

（お甲のやつにも、見返してやるぞ。——見ていやがれ）

だが、さしずめ適当な職業は見つからなかった。五年も世間を見ずに、年上の女に養われて来た不覚のほどが、はつきり身に沁みて分つたが、遅かった。

（いや、遅かあない。まだ二十二だ。どんなことをしたって……）

と、これは誰にでも起せる程度の興奮だったが、又八としては、眼をつぶって運命の断層をとび越えるような悲壮をもつて、この伏見城の土木へ働きに出たのだった。そしてこの夏から秋までの炎天下で、自分でもよく続いたと思うほど労働をつづけていた。

（おれも、一かどの男になつてみせる。武蔵のやる芸ぐらい、俺に出来ない法はない。いや、今にあいつを尻目にかけて、出世してみせてやる。その時には、お甲にも黙って復讐できるのだ。見ていろここ十年ばかりに）

だが——と彼はふと思うのだった——十年経ったら、お通は幾歳いくつになるだろうと。

武蔵や自分よりも、彼女は一ツ年下だ。すると今から十年経つうちには、もう三十を一つこえてしまう。

（それまで、お通が、独り身で待っているかしら？）

故郷のその後の消息は何も知らない又八だった。そう考えると、十年では遠すぎる、少なくともここ五、六年のうちだ。なんとしても身を立てて、故郷へ行き、お通に詫びて、お通を迎え取らなければならない。

「そうだ……五年か、六年のうちに」

西瓜を見ている眼に、やや光が出てきた。すると、巨おおきな石の向う側から、仲間の一人が、肱ひじを乗せていった。

「おい又八、何をひとりでぶつぶついつてるんだ。……オヤ、ばかに青い面つらして、げんなりしているじゃねえか。どうしたんだ、腐った西瓜でも喰くらって、腹でも下痢くだしたのか」

四

つけ元気に、又八はうすく笑った。だがすぐ、不快な眼まいがこみあげて来るらしく、生唾なまつばを吐いて顔を振った。

「な、ななに、大したことはないが、少し暑あつさ中あたりしたらしいんだ。……すまないが、午ひるから一刻ときほど、休ましてくれ」

「意気地のねえ野郎だな」

逞しい石曳き仲間は、慍れむように嘲った。^{あざけ}

「なんだい、その西瓜は。喰えもしねえのに買ったのか」

「仲間にすまないから、みんなに喰べてもらおうと思つて」

「そいつあ如才のねえこつた。おい、又八の奢りだ^{おご}とよ、食つてやれ」

西瓜を持つて、その男は、石の角へたたきつけた。忽ち、そこらの仲間が蟻^{あり}のように寄つて来て、赤いしずくの滴^{したた}る甘肉の破片を貪^{むさほ}り合つた。

「やあい、仕事だぞうつ」

石曳きの小頭^{こがしら}が、石のうえに上がつて呶鳴つた。監督の侍が、鞭^{むち}を持つて陽除け小屋から出て来る。遽^{にわ}かに汗のにおいが大地にうごき、馬蠅^{うまばえ}までわんわん立つ。

「テコ」や「コロ」に乗せられた巨大な石が、一握りもある太い綱に曳かれて徐々に前へ出てゆくのだつた、雲の峰がうごくように。

築城時代の現出は、それにつれて全国に、石曳き歌というものの流行を興^{おこ}した。今、この人足たちが唄い出したのもそれである。阿波の城主蜂須賀至鎮^{よししげ}が城ぶしんの課役に
出て、そこから国表へつかわしたその頃の書信の一節にも、

(——ゆうべさる方にて習い申しそろ儘^{まま}、名古屋の石曳きうた書きつけて参らせそろ)
とあつて、その歌詞に

われが殿衆は

藤五郎さまじやに

^{あわたぐち}
栗田口より

石また曳きやる

エイサ、エイサ

コロサと曳きやる

お声きくさえ

^{よあし}
四肢がなゆる

まして添うたら

死のずよの

(——^{おい}老も若きもうたい囃^{はや}しそろ。これにてなくば、うき世なるまじく見え候^{そろ})
労働歌が絃歌になり、蜂須賀侯のような大名までが、^{やきよう}夜興の口^{くちずき}誦みに戯^{たわむ}れたものと
みえる。

街に歌がさかんになりだしたのは、何といっても太閤の世盛りからだった。室町將軍の頃には、歌があつても^{はいたいてき}廃^{はい}頽^{たい}的な室内のものだけだつた。その頃は、児童がうたう歌まで、ひがみッぽい暗い歌が多かつたが、太閤の世になつてからは、歌も明るくなり大きくなり希望的になつて、民衆はそれを汗をかきながら太陽の下でうたうことを甚だ好んだ。

関ヶ原の役の後、社会文化に家康色がだんだん濃くなつてくると、歌もすこし變つて来て、豪放さはうすくなつた。太閤様のころには、民衆からひとりでに歌が湧いてきたが、大御所の世間になつてからは、徳川家^{いえつき}付の作者が作つたような歌が民衆へ提供されて来た。

「……ああ、苦しい」

又八は、頭をかかえた。頭は火みたいに熱かつた。仲間のわめいている石曳き歌が、^{あぶ}蛇に取り巻かれてるように耳にうるさかつた。

「……五年、五年。アア五年働いていたらどうなるんだ。一日稼いでは、一日分食つてしまい、一日休めば、一日食わずにいなけれやならない」

^{なまつば}生睡も出しきつて、青ざめた顔を^{うつむ}俯向けていた。

——すると、いつのまに來ていたのか、そこから少し離れた所に、^{わらあ}藁編みの目の粗い^{あら}笠

を眉深^{まぶか}にかぶつて、袴^{はかま}腰^{こし}へ武者修行風呂敷をしばりつけた背の高い若者が、半開きに
した鉄扇^{てっせん}を、笠のひさしにかざして、熱心に伏見城の地勢や工事のさまを眺めていた。

佐々木小次郎

一

何思ったか、武者修行はそこへ坐りこんだ。面積一坪ほどな平石^{ひらいし}の前である。坐つてみるとちようど机の高さぐらゐに肱^{ひじ}がつけるのだ。

「ふツ……ふツ……」

焦^やけていた石の砂を息で吹く、砂とともに蟻^{あり}の列もふき飛んでゆく。

ふたつの肱をつくつと、編笠はしばらく頬杖に乗っている。陽ざかりで、石はみな照り返すし、草いきれは逆さに顔を撫でるし、さぞ暑いだろうに、身うごきもしない。城の工事に眺め入っているのである。

少し離れた所に、又八がいることなどは、意に介さない様子であつた。又八もそこへ来

てそういう態ていをしている武者修行があろうとあるまいと、もとより自分に何の交渉があるわけではないし、頭や胸も依然として不快なので、時折、胃から生唾なまつばを吐きながら、背を向けて休んでいた。

——と。その苦しい息を耳にとめたのだろう。編笠がうごいて、

「石曳き」

と、声をかけ、

「どういたした？」

「へい……暑あつさ中あたりで」

「苦しいのか」

「少し落ちつきましたが……まだこう吐きそうなんで」

「薬をやろう」

印籠いろうを割って、黒い粒てのひらを掌へうつし、起つて来て又八の口へ入れてくれた。

「すぐ癒なほる」

「ありがとうございます」

「にがい」

「そんなでもございせん」

「まだ、貴様はそこで、仕事を休んでおるのか」

「へ……」

「誰か参つたら、ちよつとおれの方へ声をかけてくれ、小石で合図をしてくれてもいい、頼むぞ」

武者修行は、そういつて、前の位置に坐りこむと、今度はすぐ矢立から筆を取り出し、半紙綴の懷中手帖ふところを石の上にひろげて、ものを書くことに没頭しはじめた。

笠のつば越しに、彼の眼のやりばが、間断なく城へ向つたり、城の外のほうへ行つたり、また城のうしろの山の線や、河川の位置や、天守などへ、転々とうごいてゆくところを見ると、その筆の先は、伏見城の地理と廓外廓内の眼づもりを、絵図に写とっているにちがいはなかつた。

関ヶ原の戦の直前に、この城は西軍の浮田勢と島津勢に攻められて、その増田廓ますだぐらわや大蔵廓おくらぐらわや、また諸所の墨濠すみこうなどもかなり破壊されたものだったが、今では、太閤時代の旧観にさらに鉄壁の威厳を加えて、一衣帯水の大坂城を睥睨へいげいしていた。

今——武者修行が熱心に写している見取図みとりずをのぞくと、彼は、いつの折かに、その城の

うしろをおおっている大亀谷や伏見山からもこの城地を俯瞰ふかんして、べつに一面の搦手からめてず図を写しているらしく、いかにも精密なものが出来かかっている。

「……あつ」

又八が、そういつた時には、写図に一心になっている編笠のうしろへ、工事課役の大名の臣か、伏見の直臣じきしんかわからないが、草鞋わらじばきで、太刀を革紐かわひもで背なかに負うた半具足の侍が、武者修行の気のつくまで、黙って立っていたのだった。

——すまないことをした。又八は正直にすまないと思った。けれどもう遅い。石を投げても声をかけてやっても、もう遅い。

そのうちに、武者修行は、汗の襟元へ食いついた馬蠅うまばえを手で払う拍子に、

「——あ？」

振り仰いで、驚きの眼をみはった。

工事目付の侍は、その眼をじつと睨め返して、石の上の見取図へだまって具足の手を伸ばした。

この炎天下の我慢と、粒々^{りゅうりゅう}の辛苦をして、やっと写した城の見取図が、ものもいわず、いきなり肩越しに出て来た手のために、皺くちやに掴み奪^{つかと}られようとするのを見ると、武者修行は、火薬の塊りが火を呼んだように、

「何するかッ」

満身で呶鳴^{てくび}った。

手頸^{てくび}をつかまえて立つと、工事目付は奪^とり上げた彼の写図帖を、奪り返されまいとして、宙へその手をさしあげつつ、

「見せろ」

「無礼なッ」

「役目だ」

「なんであろうが」

「見ては悪いものか」

「悪いっ。貴様などが見たってわかるもんじやない」

「とにかく預る」

「いかん！」

帖の写図は、双方の手に裂かれて、半図ずつ握りしめた。

「曳ッ立てるぞ、素直にせぬと」

「どこへ」

「奉行所へ」

「貴様、役人か」

「然り」

「何番の。誰の」

「左様なこと、汝らが、訊かんでもいい。此方^{このほう}は、工事場見廻りの役、怪しいと認めた
によって、取調べるのじゃ——誰様のおゆるしをうけて、お城の地勢や、御普請などを写
し取ったか」

「おれは武者修行だ、後学のため諸国の地理や築城を見学しておる、なんでわるいか」

「さような口実でうろついておる敵の間者^{かんじゃ}は、蠅^{あり}や蟻^{あり}ほど多いのじゃ。……とにかくこ
れは返せん、其方も一応取りただすによって、あつちまで来い」

「あつちとは」

「工事奉行のお白洲^{しらす}」

「おれを罪人扱いするのか」

「だまって参るのだ」

「役人、こらつ。——貴様あ、そんな権柄^{けんぺい}顔^がさえすれば愚民が驚くと思つておる癖がついてるな」

「歩かんか」

「歩かせてみる」

てこでも動かない姿勢を示すのである。見廻りは、青すじを立てた。掴んでいた写図の破れを、地へすてて踏みにじり、二尺余りの長い十手を腰から抜いた。

武者修行の手が刀へかかったら、すかさず、その肱^{ひじ}へ十手の打撃を入れてやろうとするもののように、腰を退^ひいて身構えたが、その様子もないので、もう一度、

「歩かんと、縄を打つぞ」

ことばの終らないうちに、武者修行のほうから一步出て来た。何か大きな声を発したと思うと、見廻りは首の根をつかみ寄せられていた。武者修行の片手はまた、彼の鎧^{よろい}帯^{おび}の腰をつかんで、

「この、虫けら」

巨石^{おおいし}の角へ向つて抛^{ほう}り投げた。

見廻りの侍^{さむらいがしら}頭^{さつき}は、先刻そこで石曳きの男がたたき割った西瓜のようになって、形を失つてしまった。

「……アツ」

又八は、顔を抑えた。

真つ赤な味憎^{あなた}みたいなのが彼のいる辺りまで刎^はねて来たからである。平然たるものは、彼方の武者修行であつた。よほどこんな殺人に馴れているのか、また一氣に憤りを爆發させて後の涼しさに落着いているのか、とにかく、あわてて逃げ出す様子もなく、見廻りの足で踏みにじられた写真の断片と、そこらに散らばっている反古^{ほご}をひろい集め、次に、相手を投げる途端に紐^{ひも}が切れて飛んで行つた編笠を、静かな目で捜している。

「……………」

又八は、凄惨な氣に打たれていた。恐ろしい力量を見て自分の毛穴までよだっている。

——見るところ武者修行はまだ三十に届くまい。陽焦^{ひや}けのした骨太の顔に薄あばたがあり、耳の下から顎にかけて四半分ほど顔がない。ないというのはおかしいが、太刀で斬られた

痕の肉が変に縮んでしまったのかも知れない。その耳の裏にも黒い刀痕があり、左の手
の甲にも刀傷がある。なお肌着を脱いだら幾つでも同様な刀傷が出て来そうな——見るか
らに近寄りがたい猛気をその顔はそなえていた。

三

笠を拾って、怪異なその顔へかむると、武者修行はさつと足を速めた。風のように彼方
へ向つて逃げ出したのである。勿論、そこまでの行動は極めて短い間だった。蟻のように
労働している何百という石曳きも、鞭や十手を持つて、そのあぶら汗を叱咤している監督
も、誰も気づく違がなかったほどに——

だが、その広い工事を、絶えず高い所から見渡している独特な眼があった。それは丸
太組の櫓のうえにいる棟梁衆や作事与力の上役だった。そこから突然、大きな声が
放たれたと思うと、櫓の下の湯呑み所の板がこいの中で、大釜の火にいぶされながら働い
ていた足軽たちが、

「なんだ？」

「何だ」

「また、喧嘩か」

と、外へ飛び出した。

もうその時は、作業場と町屋の境に出来ている竹矢来たけやらいの木戸で、真っ黒にかたまつた人間の怒号が黄いろい埃ほこりにつつまれていた。

「間者かんじゃだな！ 大坂の」

「性懲りしょうこもなく」

「ぶつ殺せ」

口々にいって、石工いしくや土工や工事奉行の配下は、みな自分の敵でもいるように駈け集まつて行く。

半分顎あごのない武者修行が捕まつたのだ。竹矢来の外へ出て行く牛車の蔭にかくれて、すばやく木戸の口をすり抜けようとしたが、その番衆たちに拳動を怪しまれて、釘の植わっている刺さす又またという柄えの長い道具で、いきなり足を搦かちみ取られたのであつた。

そこへ、櫓やぐらの上からも、

「その編笠を引ッ捕えろっ」

と、呼ばれる声が同時にあつたので、理由などは問わず、遮二無二、組み伏せにかかる
と、武者修行は形相をあらためて、野獣のように死にもの狂いとなった。

刺叉を引つ奪^たくられた男が、真つ先にその得物の先で髪を引つかけられた。四、五人叩
き伏せておいて、虚空へさつと閃^{ひらめ}かしたのは彼の腰に横たえていた胴^{どう}田^た貫^{ぬき}らしい大太刀
である。平常^{ふだん}の差^さ刀^{しもの}には頑丈すぎるが、陣太刀にすれば手ごろである。――それを抜い
て額^{ひたい}の真つ向に揮^ふりかぶると、

「こいつらッ」

睨^{くぼ}んだだけで、その重囲^{くぼ}が凹^{くぼ}んだので、武者修行は血路をひらくつもりで駆けこんで
行つた。

すると、危険を避けて人間はわつと散らかったが、途端に八方から小石が降つて来たの
である。

「殺^やつちまえ」

「たたつ殺してしまえつ」

肝^{かん}腎^{じん}な侍たちが臆して近よらないので、平常、武者修行というものに対して、彼らは
少しばかりの知識や学問を鼻にかけ、世の中をただ威張つて横に歩くのを見栄にしている

無産の僻^{ひが}み者か、一種の逸民と認めて、それに反感を抱いている石工だの土工だのという労働者たちが、

「殺^やつちまえ」

「のしちまえ」

と叫んで、四方から抛^{ほう}りつける、それは無数の石つぶてであつた。

「この凡^{ぼんげ}下どもめ！」

駈け入れば、わつと散るのだ。武者修行の眼はもう自分の生きる路を見つけるよりも、その石の来るほうの人間へ向つて、理智や利害を越えている。

四

怪我^{けが}人も多く出たし、死者も幾人かあつたのに、それから一瞬の後は、めいめい職場にかえつて、けろりとした工事場の広さであつた。

何事もなかったように、石曳きは石を曳き、土工は土をかつぎ、石工^{いしく}は鑿^{のみ}で石を割っている。

鑿^のが火花を出す暑い音、霍^{かく}乱^{らん}をおこして暴れくるう馬のいななき、残暑の空は、午後に入つて、じいんと鼓膜^{こまく}が馬鹿になるような熱さだった。伏見城から淀のほうへ背のびをしている雲の峰は、しばらくうごきもしなかった。

「もう九分九厘まで、くたばっているが、御奉行が来るまでこうして置くから、汝^{てめえ}ここにいて、こいつの番をしておれ。——死んだら死んだまでのことでもいい」

人足^{がしち}頭や目付の侍に、こう命じられたことを又八は覚えている。——だが頭がどうかなくつてしまったのか、先刻^{さつき}から目撃^{めいき}したきりそう吩咐^{いいつ}けられたことも、なんだか悪夢をみているようで、眼や耳には意識しても、頭のしんまで届いていない。

「……人間なんて、つまんねえものだ。たった今そこで、城の見取図を写していた男が」
又八のにぶい眸^{ひとみ}は自分から十歩ほど先の地上にある一個の物体を見つめたまま、最前からぼんやりと虚無的な考えに囚われている。

「……もう死んでるらしい。まだ三十前だろうに」
と彼は思い遣^やった。

顎の半分ない武者修行は、太い麻縄で縛られて、血に土のまぶされた黒い顔を、無念そうにしかめたまま、その顔を横伏せにして倒れている。

縄尻はそばの巨きな石に巻きつけてあるのだった。もう「ウ」も「ス」もいい得ない死人の体をそう大仰おおぎように縛くくっておかないでもよさそうなものと又八はながめていたことだった。何で撲られたのか、破れた袴はかまから変な恰好して露出している脚の脛すねは、肉が弾はじけて折れた白骨の先が飛び出していた。髪は粘ねばつて血を噴ふいているし、その血へは虻あぶがたかり、手や脚にはもう蟻ありの群れが這はっている。

「武者修行に出たからには、のぞみを抱かかっていたらうに。——故郷くこは何処か。親はあるのかないのか」

そんなことを思い遣おもると、又八はいやな気持ちに襲やわれて、武者修行の一生を考えているのか、自分の身の果てを考えているのか、分らなくなってきた。

「望みをもつにも、もつと慓巧せうこうに出世する道がありそうなものだ」
と、つぶやいた。

時代は若い者の野望を煽あおつて、「若者よ夢を持て」「若者よ起て」と未完成から完成への過渡期にあつた。又八ですらその社会の空気を感じるほど、今は、裸から一国一城あるじの主を望める時である。

そのために、青年は続々離郷する——また家を離れ骨肉かえりも省かえりみない。その多くが武者修

行の道をとるのだ。武者修行をして歩けば今の社会では到るところで衣食に事を欠くことはない。田夫野人でも武術には関心をもっているからだ。寺院へ頼つても渡れるし、あわよくば地方の豪族の客となり、なお、幸運にぶつかれば、一朝事のある場合のために、大名の経済から「捨て扶持」^{ぶち}「蔭扶持」などというものを貢^{みつ}がれることもある。

だが数多い武者修行の中で、そういう幸運にあう者がどれほどあろうかといえば、これは極めて少数にちがいない。功成り名を遂げ、一人前の禄^{ろく}取りになるほどの者は一万人中で二人か三人を出ないであろう。——それでいて修行の苦しさと、達成の至難なことは、これでいいという、卒業の行き止まりがないのである。

(馬鹿馬鹿しい……)

又八は、同郷の友の宮本武蔵が行った道を憐^{あわれ}んだ。おれは将来、奴を見返してやるにしても、そんな愚かな道はとらないぞと思う。ここに死んでいる顎のない武者修行のすがたを見てもそう思う。

「……おやつ？」

又八は飛び退いて大きな眼をすえた。なぜならば、死んだものときめていた蟻^{あみ}だらけの武者修行の手がびくつと動き出して、縄目の間から鼈^{すっぽん}のような手首だけを出して大地へつ

き、やがてむくりと、腹を上げ、顔を上げ、次に前のほうへ一尺ばかり、ずるりと這い出して来たからであつた。

五

ぐ……と生唾なまつばをのんで又八はなおも後へ摺ずり退さがった。腹の底から驚きを感じると声も出ないものだ。ただ眼のみ大きくみひらいて、目前の事実茫失した。

「……ひゅつ……ひゅつ……」

彼は、何かいおうとするらしい。彼とは顎の半分ない武者修行である。完全に死んでいると思つていたこの男は、まだ生きていたのだ。

……ヒュツ、ヒュツと断き断きれ断きれに彼の呼吸が喉のどで鳴るのである。唇は黒く渴かわいてしまつて、そこから言葉を吐くのはもう不可能な業わざであつた。それを必死に一言でもいおうとするので、呼吸が割れた笛の鳴るような音を出すのだつた。

又八が驚いたのは、この男が生きていたからではない。胸の下に縛りつけられている両手で這つて来たからだ。それだけでも、驚くに足る人間の死力であるのに、その縄尻の巻

きつけてある何十貫もあろう巨^{おおい}石が、この瀕死の傷負^{ておい}が引つ張る力で、ズル、ズル……と一、二尺ずつ前へ動いて来たからである。

まるで、化け物のような怪力だ。この工事場の労働者のうちにも、ずいぶん力自慢があつて、十人力とか二十人力とか自称している天狗もあるが、こんな化け物は一人もいない。しかも、この武者修行は、今や死なんとしている体なのだ。——死なんとする境にあるために、そんな人間業^{にんげんわざ}でない力が出るのかも知れないが、とにかく、その飛び出しそうな武者修行の眼が自分の方を見つめて這い進んで来たので、又八は腰^{すく}が竦んでしまった。

「……しよつ……しよつ……お、お、おねがい」

また何か、変つた語音^{ごいん}を出している。意味はまったく分らない。ただ判じのつくのは武者修行の眼だ——死なんとするのを知っているその眼である——血ばしっている中に涙腺はかすかに涙みたいなのを湛^{たた}えている。

「……たつ……た……たのむ……」

がくつと首を前へ折つた。こんどはほんとに息が絶えたのだらう、見ているうちに襟首^{えり}の皮膚の色が青黒く沈んで行つた。草むらの蟻がもう白っぽい髪の毛にたかっている。血のかたまつた鼻の穴を一匹はのぞきこんでいた。

「? ……」

何を頼まれたのか、又八は茫^{ぼう}としているだけだった。けれどこの怪力の武者修行が臨終^{いまわ}の一念は、自分へ憑^つき物のようについていて違^{たが}えることのできない約束の負担を負わされたような気持がしてならない。——自分の病苦を見て、薬を服^のませてくれたり、誰か来たら合図してくれと頼まれたのに、うっかりしていて、それを告げてやらなかったことなども、妙に深刻な宿縁^{しやくえん}みたいに思い出されてくる。

——石曳^{いしひ}き唄^{うた}は、遠くなっていた。お城^{おしろ}は暮靄^{ぼあい}にかすんで来た。いつのまにかもう黄昏^{たそが}れかけて、伏見^{ふしみ}の町には早い灯^{あか}りがポツポツ戦^{そよ}ぎだしている。

「そうだ……何かこの中に」

又八は、死者の腰に結びつけている武者修行風呂敷^{ふうりふし}をそつと触^ふつてみた。——生国^{なまくに}、骨肉^{にく}などの身許^{みぎ}も、この中を見ればわかるにちがいない。

(故郷^{こきやう}の土^{つち}へ、遺物^{いぶつ}を届^{いた}けてくれというのだろう)

そう彼は判断した。

包みと印籠^{いんろう}を、死者の体から取^とつて、自分の懐^{ふところ}中へ入れた。——そして髪の毛でもと思^{おも}つて、一握^{ひとつか}り切^きろうとしたが、死者の顔をのぞいて、ぞつとしてしまった。

——蹺音が聞えた。

石の蔭から見ると、奉行配下の侍たちだ。又八は、死骸から無断で取った品物が自分の懐中にあると思うと、自分の危険を感じて、そこにいたたまらなくなった。——背を屈めて、石の蔭から蔭へと、野鼠のように逃げて行つた。

六

夕ぐれの風はもう秋だった。糸瓜は大きくなっている。その下で、盥の湯に浴かっている駄菓子屋の女房が、家の中の物音に、戸板の蔭から白い肌を出していった。

「誰だえ。又八さんかい？」

又八はこの家の同居人だった。

今、あたふたと帰つて来ると、戸棚を搔廻して、一枚の単衣と一腰の刀を出し、姿をかえると、手拭で頬冠りして、またすぐ草履を穿こうとしていた。

「暗かろ、又八さん」

「なに、べつに」

「今すぐ灯^{あか}りをつけるで」

「それには及ばないよ、出かけるから」

「行水は」

「いらん」

「体でも拭いて行ったら」

「いらん」

急いで裏口から飛び出して行った。といつても、垣も戸もない草原つづきである。彼が長屋から出て来ると入れちがいに、数名の人影が、萱^{かや}の彼方^{かなた}を通つて、駄菓子屋の裏表へ入つてゆくのが見えた。工事場の侍が交^まじつていた。又八は、

「あぶない所だった」

つぶや
と呟いた。

顎の半分ない武者修行の死体から、包みや印籠^{いんろう}を取った者のあることは、その後ですぐ発見された筈である。当然、その側にいた自分に盗人の嫌疑がかかったに相違ない。

「だが……俺は盗みをしたのじゃない。死んだ武者修行の頼みにやむなく持物を預かつて来たのだ」

又八は疚しくなかつた。その品は懷中に持つてゐる。これは預かつた物だと意識しながら持つてゐる。

「もう石曳きに行かない」

彼は、明日からの放浪に、なんのあてもなかつた。しかし、こういう転機でもなければ、何年でも石を曳いてゐるかも知れないと思うと、かえつて先が明るく考えられる。

萱の葉が肩までかかる。夕露がいつぱいだ。遠くから姿を発見される懼れがなくて逃げるには氣樂だ。さてこれからどっちへゆくか？ どっちへ行こうと体一つである。何かいい運だの悪い運だのがいろいろな方角で自分を待つてゐるらしく思う。今の足の向き方ひとつで生涯に大きな違いが生じるのだ。必然、こうなるものだど決定された人生などがあるとは考えられない。偶然にまかせて歩くよりほか仕方がない。

大坂、京都、名古屋、江戸——流浪の先を考えてみるが、何処に知己があるわけではない、賽ころの目をたのむように頼りがない。賽ころに必然がないように、又八にも必然がないのだつた。何かここに起つてくる偶然があれば、それに引かれて行こうと思う。

だが、伏見の里の萱原には、歩けど歩けど何の偶然もなかつた。虫の音と露とが深くなるばかりだつた。単衣のすそはびつしより濡れて足に巻きつき、草の実がたかつて、脛が

むず痒い。

又八は、昼の病苦をわすれた代りに、すっかり飢^{ひも}じくなっていた。胃液まで空っぽなのだ。追手の心配がなくなつてからは、急に歩くことが苦痛になつていた。

「……何処かで寝たいものだ」

その慾望が彼を無意識にここへ運んで来たのである。それは野末に見えた一軒の屋^やの棟^{むね}だった。近づいてみると垣も門も暴風の時に傾いたまま誰も起してやり手がない。おそらく屋根も満足なものではあるまい。しかし一度は貴人の別荘とされて、都あたりから、糸毛^{くるまろう}の輦^{くるまろう}に薦^{すす}たけた麗人が、萩を分けて通つたこともありそんな家造^{やつく}りなのである。又八はその無門の門を通つて中へ入り、秋草の中に埋まつている離^{はなれ}亭^{てい}や母^{おも}屋^やをながめて、ふと玉葉集の中にある西行の、

会^はひしりて侍^{はべ}りける人の伏見にすむと聞きて尋ねまかりけるに、庭の草、道も見えずしげりて虫の啼^なきければ——「わけて入る袖にあはれをかけよとて露けき庭に虫さへぞ啼く」

——そんな文句を思いだして、肌寒げに立ちすくんでいると、当然人は住んでいないものとばかり思っていた家の奥に、風で燃え出した炉^ろの火がぱつと赤く見え、しばらくする

と尺八の音がそこから聞えだした。

七

ちようどよい時^{ねぐら}とここに一夜を明かしている虚無僧らしいのである。炉^ろの火が赤く立つと、大きな人影が婆娑^{ばさ}として壁に映る。独り尺八を吹いているのだ。それはまた他人^{ひと}に聞かそうためでもなく自ら誇つて陶醉している音^ねでもない。秋の夜の孤寂^やの遣^やる瀬なさを、無我^{さんまい}と三昧^{さんまい}に過^あごしているだけのことなのだ。

一曲終ると、

「ああ」

虚無僧は、ここは野中の一軒家と、安心しきっているらしく独り言に――

「四十不惑^{ふわく}というが、おれは四十を七つも越えてからあんな失策をやつて、禄^{ろく}を離れ家名をつぶし、剩^{あまつさ}え独りの子まで他国へ流浪させてしまった。……考^{かん}えれば慚愧^{ざんき}にたえない。死んだ妻にも生きている子にも会わせる顔がない。……このおれなどの例を見ると、四十不惑などというのは聖人のことで、凡夫の四十だいほど危ないものはない。油断のならな

い山坂だ。まして女に關しては」

胡坐あぐらの前に、尺八を縦たてに突き、その歌口へ両手をかさねて、

「二十だい、三十だいの年でも、由来おれは、やたらに女のことと失敗をやつて来たが、そのころにはどんな醜聞をさらしても、人も許してくれたし、生涯の怪我けがにもならなかった。……ところが、四十だいとなると、女に對してすることが厚顔あつかましくもなるし、それがお通つうの場合のような事件になると、今度は世間がゆるさない。そして、致命的な外聞になつてしまった。祿も家もわが子にも離れるような失敗になつてしまった。……そして、この失敗も、二十だい三十だいなら取り返せるが、四十だいの失敗は二度と芽を出すことがむずかしい」

盲人のように俯向うつむいたまま、声を出してそういつているのである。

——又八は、彼のいる近くの部屋までそつと上がつて行つたが、炉の火にぼつと浮いている虚無僧の瘦せおとろえた頬の影や、野犬のように尖とがっている肩や、脂あぶらけないほつれ毛などを見つつ、その告ひとりごと白を聞いていると、夜鬼のすがたを思い出して、ぞつと背がすくんでしまい、近寄つて話しかける氣持になどはともなれなかった。

「アア……それを……おれは……」

虚無僧は、天井を仰向いた。骸骨がいこつのように鼻の穴が大きく又八のほうから見える。凡ただの浪人の垢あかじみた着物を着て、その胸に、普化ふけぜんじ禪師の末弟しるしという証しるしばかりに黒い袈裟けさをつけているに過ぎないのである。敷いている一枚の筵むしろは、常に巻いて手に持って歩く彼の唯一ふすまの衾ふすまであり雨露の家だった。

「——いつても、返らないことだが、四十だいほど、油断のならない年頃はない。自分だけが、いっぱし世の中も観み、人生もわかつたつもりで、少しばかりかち得た地位に思い上がって、ともすると、女に対しても、臆面のない振舞に出るものだから、おのれのような失敗を——運命の神から背負い投げを喰くわされるのだ。……慚愧ざんきのいたりだ」

誰かに向って謝っているように、虚無僧は頭を下げて、さらにまた下げて、

「おれはいい、おれは、それでも、いいでしょう。——こうして懺悔ざんげの中に、なお許してくれる自然のふところに生きて行かれるから」

と、ふと涙をこぼし、

「——だが、済まないのは、わが子に対してだ。おれのした結果は、おれに酬むくうより、あの城太郎のほうへより多く祟たたっている。とにかく、姫路の池田侯に藩臣としてこのおれが歴れつき乎しとしていれば、あの子だって、千石侍の一人息子だ。それが今では、故郷くにを離れ、父

を離れ……。イヤそれよりも、あの城太郎が成人して、この父が、四十だいになつてから、女のことでは藩地から放逐されたなどと知る日が来たら、おれはどうしよう。おれは子に会わす顔がない」

——しばらくは、両手で顔をおおっていたが、やがて何思つたか、炬のそばを立つと、「やめよう、また愚痴が出て来おつた。……おお月が出たな、野へ出て、思うさま流して来ようか。そうだ、愚痴と煩惱を野へ捨てて来よう」

尺八を持つて、彼は外へ出て行つた。

八

妙な虚無僧である。よろよろ立つてゆく時、物蔭から又八が見ていると、その痩せこけた鼻下にはうすいどじよう髭ひげが生えていたように思う。そう年を老とっているほどでもないのに、ひどくよぼよぼした足元だった。

ふいと出て行つたきり、なかなか戻つて来ないのだ。少し精神に異常があるのだろうか、又八は不気味に思う半面にあわれな氣もした。それはいいが、物騒なのは、炬に残ってい

る火であつた。ぱちぱちと夜風がそれを煽^{あお}つてゐる。燃え折れた柴の火は、床を焦^こがしてゐるではないか。

「あぶねえ、あぶねえ」

又八はそこへ行つて、土瓶^{どびん}の水をじゅつとかけた。これが野中の破れ邸^{やしき}だからいいようなものの飛鳥朝^{あすかちよう}や鎌倉時代の二度と地上に建てることのできない寺院などであつたらどうだろうと考えて、

「あんなのがいるから、奈良や高野にも火事があるんだ」

と彼は、虚無僧の去つたあとに自分が坐つて、がらにもない公德心と呼び起していた。家産や妻子もない代りに、社会への公德心も絶無な浮浪者には、火が怖いものという觀念も全くないらしい。だから彼らは、金堂^{こんどう}の壁画の中ですら平然と火を燃やす。世の中に無用に生きているに過ぎない一個の空骸^{むくろ}を暖めるために火を燃やす。

「だが……浮浪人だけが悪いともいえねえな」

又八は自分も浮浪人であることを思つて考えた。今の世の中ほど浮浪人が多い社会はない。それは何が生んだかといえ、戦^{いくさ}だつた。戦によつてぐんぐん地位を占めてゆく者も多い代りに、芥^{あくた}のように捨てられてゆく人間の数も実に夥^{おびただ}しい。これが次の文化の手枷^{てかせ}、

足枷となるのもやむを得ない自然の因果といえよう。そういう浮浪の徒が、国宝の塔を焚^た火^{きび}で焼く数よりは、戦が、意識しつつ、高野や叡^{えい}山^{ざん}や皇都の物を焼いたほうが、遥かに大きな地域であつた。

「……ほ。洒落^{しやれ}たものがあるぞ」

又八はふと横を見てつぶやいた。この炉も床の間も、改めて見直せば、元は茶屋にでも使つていたらしい閑雅^{かんが}な造りなのである。その小床^{ことこ}の棚に、彼の眼をひいた物がある。高価^{はなひけ}な花瓶^{けいぶ}や香炉などではない。口の欠けた徳利と、黒い鍋^{なべ}だった。鍋には食べ残した雑炊^{ぞうすい}がまだ半分残っているし、徳利は振つてみると、ごぼつと音がして、欠けた口から酒がにおう。

「ありがたい」

こういう場合、人間の胃は、他の所有権を考えている^{いとま}違^{ちが}はない。徳利の濁り酒をのみ、鍋^{から}を空^{から}にして、又八は、

「ああ、腹^はが満^みつた」

ごろんと手枕になる。

トロトロと炉の火もとに眠りかける。雨のように野は虫の音に更^ふけてゆく。戸外ばかり

でなく、壁も啼く、天井も啼く、破れ畳も啼きすだく。

「そうだ」

何か思い出したとみえる。むくりと彼は起き直った。懷中にある一個の包み——かの顎の半分ない武者修行から、死に際に頼まれて持つて来た包みの中を——こうしている間に一度見ておこう。そう急に思いついたらしい。

解いてみた。——それは蘇芳染の汚れきった風呂敷だった。中から出て来たのは、洗いざらした襦袢だの普通の旅行者の持つ用具などであったが、その着がえをひろげてみると、いかにも大事そうに、油紙でくるのである巻紙大の物と路銀の金入れであろう、どさつと重い音が膝の前に落ちた。

九

むらさき革の巾着であつた。その金入れの中には、金銀取交ぜてだいぶの額が入っていた、又八は数えるだけでも自分の心が怖くなって、思わず、

「これは他人の金だ」

と、殊さらにつぶやいた。

もう一つの油紙に包んであるものを開いてみると、これは一軸の巻物である。軸には花^か梨^{りん}の木が用いてあり、表装には金^{きん}欄^{らん}の古^{ふる}裂^ぎれが使^いつてあつて、何となく秘品の紐を解^いく氣持^{いだ}を抱^{いだ}かせられる。

「何だろ？」

全く見当のつかない品物だつた。巻を下へ置いて、端の方から徐々に繰^{ひろ}り展^{ひろ}げて見てゆくと――

印可

一 中条流太刀之法

一 表

電光、車、円流、浮きふね

一 裏

金剛、高上、無極

一 右七劍

神文之上

口伝授受之事

月 日

越前宇坂之庄浄教寺村

富田入道勢源門流

後学 鐘巻自斎

佐々木小次郎殿

とあつて、その後、別に別な紙片を貼り足したと思われるところには「奥書」と題して、左の一首の極意の歌が書いてあるのであつた。

掘らぬ井ゐに

たまらぬ水に

月映さして

影もかたちもなき

人ぞ汲む

「……ははあ、これは剣術の皆伝の目録だな」

そこまでは又八にもすぐ分つたが、鐘巻かねまきじさい自斎という人物については、何の知識もなか

つた。

もつとも、その又八にでも、伊藤弥五郎景久といえはすぐ、

(アアあの一刀流を創始して、一刀斎と号している達人か)

と合点がゆくであろうが、その伊藤一刀斎の師が、鐘巻自斎という人で、またの名を外^と他^だ通^{みち}家^{いえ}といい、まったく社会からは忘れられている、富田入道^{せいげん}勢^{せい}源^{げん}の正しい道統をうけついで、その晩節をどこか辺鄙^{へんぴ}な田舎に送っている高純な士であるなどということはなおさら知らない。

そういう詮^{せん}索^{さく}よりも、

「——佐々木小次郎殿？ ……ははアすると、この小次郎というのが、きよう伏見のお城工事で、無残な死に方をしたあの武者修行の名だな」

と、そこに領^{うなず}いて、

「強いはずだ。この目録をみても分るが、中条流の印可をうけているのだもの。惜しい死に方をしたものだ。……さだめしこの世に心残りなことだったろう。あの最期の顔は、いかにも死ぬのが残念だという顔つきだった。——そしておれに頼むといったのは、やはりこの品だろう。これを郷里の知^しる^べ辺^へでも届けてくれといったかかったに違いない」

又八は、死んだ佐々木小次郎のために、口のうちで、念仏をとなえた。そしてこの二品は、きつと死者の望むところへ届けてやろうと思った。

——また、ごろりと彼は横になっていた。肌寒いので寝ながら炉の中へ柴を投げこんで、その炎にあやされながらウトウト眠りかけた。

ここを出て行つた奇異な虚無僧が吹いているのであろう、遠い野面のづらから尺八の音が聞えて来る。

何を求め、何と呼ぶのか。彼が出て行く折につぶやいたように、愚痴と煩惱を捨て切ろうとする必死がこもっているせいかも知れない。——とにかくそれは物狂わしいまで夜もすがら吹いて野をさまよっていたが、又八はもう疲れきつて、熟睡してしまつたので、尺八の音も虫の音も、すべて昏々こんこんの中であつた。

狐雨

野は灰色に曇っている。今朝けさの涼しさは「立つ秋」を思わせ、眼に見るものすべてに露がある。

戸の吹き仆くりやされている厨くりやに、狐の足痕がまざまざ残っていた。夜が明けても、栗鼠りすはそこらにうろついている。

「アア、寒い」

虚無僧は、眼をさまして、広い台所の板敷へかしまった。

夜明け頃、ヘトヘトになって戻つて来ると、尺八を持ったまま、ここへ横になって眠ってしまった彼である。

うす汚あわせい衾けさも袈裟けさも、夜もすがら野を歩いていたために、狐に魅ばかされた男のように草の実や露でよごれていた。きのうの残暑とは比較にならない陽気なので、風邪かぜをひき込んだのであろう、鼻のうえに皺しわをよせ、鼻腔と眉を一緒にして、大きな嚏くさめを一つ放つ。

ありやなしやの薄いどじよう髭ひげの先に、鼻汁がかかった。恬てんとして、虚無僧はそれを拭こうともしないのである。

「……そうじや、ゆうべの濁り酒がまだあつたはず」

つぶやいて起たち上がり、そこも狐狸妖怪の足痕あしあとだらけな廊下をとおって、奥の炉のあ

る部屋をさがしてゆく。

捜さなければ分らないほど、この空屋敷は昼になってみるとよけいに広いのである。もちろん、見つからないほどでもないが――

（おや？）

うろたえた眼まなこをして見廻している。あるべきところに酒の壺がないのだ。しかしそれはすぐ炉のそばに横たわっているのを発見したが、同時に、その空からの容器いれものとともに、くち枕よだれをして、涎よだれをながして眠っている見つけない人間をも見出し、

「誰だろ？」

及び腰に覗き込んだ。

よく眠っている男だった。撲りつけても眼を醒さましそうもない大鼾おおいびき声をかいているのである。酒はこいつが飲んだのだな――と思うとその鼾声に腹が立つ。

まだ事件があつた。今朝の朝飯として食べのこしておいた鍋なべの飯が、見れば底をあらわして一粒だにないではないか。

虚無僧は顔いろを変えた。死活の問題であつた。

「やいつ」

蹴とばすと、

「ウ……ウむ……」

又八は、ひじはず肱を外してむつくと首をあげかけた。

「やいつ」

つづいて、もう一ツ、眼ぎましにあしげ足蹴を食らわすと、

「何しやがる」

寝起きの顔に、青すじを立てて、又八はぬつくと起ち上がった。

「おれを、足蹴にしたな、おれを」

「したくらいでは、腹が癒えんわい。おのれ、誰に断つて、ここにあるぞうすいめし雑炊飯のあまりと酒を食らったか」

「おぬしのか」

「わしのじゃ！」

「それやあ済まなかった」

「済まなかったで済もうか」

あやま
「謝る」

「謝るとだけでことは納まらん」

「じゃあ、どうしたらいいんだ」

「かやせ」

「返せ^{かえ}たつて、もう腹の中に入つて、おれの今日の生命^{いのち}のつなぎになつてゐるものをどうしようもねえ」

「わしとて、生きて行かねばならん者だ。一日尺八をふいて、人の門辺^{かどべ}に立つても、よう貰うところは、一炊^{ひとかし}ぎの米と濁酒^{どぶろく}の一合の代^{しろ}が関の山じゃ。……そ、それ無断であかの他人のおのれらに食われて堪^{たま}ろうか。かやせ！ かやせ！」

餓鬼の声である。どじよう髭^{ひげ}の虚無僧は、飢えてゐる顔に青すじを立て威猛^{いたけだか}高に喚^{わめ}いた。

二

「さもないことをいうな」と又八は蔑^{さげす}んで――

「多寡^{たか}が鍋底の雑炊飯や、一合に足らぬ濁り酒のことで、青筋を立てるほどのことはある

まいが」

虚無僧は執しつこく憤いきどおつて、

「ばかをいえ、残り飯でも、この身にとれば一日の糧かてだ、一日の生命だ。かやせつ、かやさなければ――」

「どうするって」

「うぬっ」

又八の腕くびを掴つかまえ、

「ただはおかぬっ」

「ふざけるなっ」

振り離して、又八は、虚無僧の襟えりがみを掴み寄せた。

飢えた野良猫にひとしい虚無僧の細っこい骨ぐみだった。叩きつけて、一振りに、ぎゅうといわせてやろうとしたが、襟がみをつかまれながら、又八の喉輪へつかみかかって来た虚無僧の力には、案外な粘ねばりがある。

「こいつ」

と、力りきみ直したが、相手の足もととは、どうして、確しつかりとしたものだ。

かえつて又八が顎をあげて、

「うッ……」

妙な声をしぼりながら、どたどたと次の部屋まで押し出され、それを食い止めようとする力を利用して、手際よく、壁へ向つて投げ捨てられた。

根太も柱も腐蝕くさっている屋敷である。一堪りもなく壁土が崩れて、又八は全身に泥をかぶった。

「ペッ……ペッ……」

猛然と唾つばして立つと、ものをいわない代りに、凄い血相が刃物を抜いて、跳びかかってきた。虚無僧も心得たりという応対で、尺八をもつて渡りあう。しかし情けないことにはすぐ息喘いきぎれが出て来て、尖った肩でせいせいいうのだ。それに反して又八の肉体はなんといつでも若かった。

「ざまを見ろッ」

圧倒的に又八は、斬りかけ斬りかけして、彼に息をつく間を与えない。虚無僧は化けて出そうな顔つきになった。体の飛躍を欠いてともすると蹴つまずきそうになる。そのたびに何ともいえない死に際のさけびを放った。そのくせ八方に逃げ廻つて、容易には太刀を

浴びないのである。

しかし結果は、その誇りが又八の敗因となった。虚無僧が猫のように庭へ跳んだので、それを追うつもりで廊下を踏んだ途端に、雨に朽ちていた縁板がみりつと割れた。片足を床下へ突つこんで、又八が尻もちをついたのを見ると、得たりと刎ね返して来た虚無僧が、

「うぬ、うぬ、うぬっ」

胸ぐらを取つて、顔といわず鬢びんたといわず、撲りつけた。

脚がきかないので又八はどうにもならなかった。自分の顔が見るまに四斗樽のように腫はれたかと思う。——すると、もがき争っている懷ふところ中から、金銀の小粒がこぼれた。撲られるたびに美しい音ねがして、貨幣はそこらに散らかった。

「——やつ？」

虚無僧は、手を放した。

又八もやつと彼の手をのがれて跳び退いた。

自分の拳こぶしが痛くなるほど、憤怒を出しきった虚無僧は、肩で息をしながら、あたりにこぼれた金銀に眼を奪われていた。

「やいつ、畜生め」

腫れ上がった横顔を抑えながら又八は、声をふるわせてこういった。

「な、なんだつ、鍋底のあまり飯くらいが！ 一合ばかりの濁酒が！ こう見えても、金などは腐るほど持っているんだ。餓鬼め、ガツガツするな。それほどほしけれやあ、くれてやるから持つてゆけつ。その代り、今てめえが俺を撲っただけ、こんどは俺が撲るからそう思えつ。——さつ、冷飯ひやめしと濁酒どぶろくだい代に利子をつけて返すから、頭を出せつ、頭をここへ持つて来いっ」

三

又八はなんと罵ののつても、相手の虚無僧がそれきりぐうの音も出さないので、彼もようよう気を鎮しずめて見直すとどうしたとか、虚無僧は縁板に顔を沈めて泣いている——
「こん畜生、金を見たら急に哀れっぽいふうを見せやがつて」

と、又八は毒づいたが、そうまで、恥かしめられても、虚無僧はもう先の勢いはどこへやら、

「あさましい。アア、あさましい。どうしておれはこう馬鹿なのか」

もう又八へ対していつているのではない、ひとりで悶え悲しんでいるのだ。その自省心の烈しいことも、常人とは変つていて、

「この馬鹿、貴さまは一体、幾歳になるのか。こんなにまで、世の中から落伍して、落魄れ果てた目をみながら、まだ醒めないのか、性なしめ」

そばの黒い柱へ向つて、自分の頭をぐつんぐつん打つては泣き、打つては泣き、

「何のために、汝は尺八をふいているか。愚痴、邪慾、迷妄、我執、煩惱のすべてを六孔から吐き捨てるためではないか。——それを何事だ、冷飯と酒のあまりで、生命がけの喧嘩をするとは。しかも息子のような年下の若者と」

ふしぎな男だ。そういつて口惜しげにベソを搔くかと思うと、また、自分の頭を、柱に向つて叩きつけ、その頭が二つに割れてしまわないうちは止めそうもないのである。

その自責からする折檻は、又八を撲った数よりも遥かに多い。又八は呆つけにとられていたが、青ぶくれになつた虚無僧の額から血がにじみ出て来たので、止めずにいられなくなつた。

「ま、ま、止したらどうだ、そんな無茶な真似」

「措いて下され」

「どうしたんだい」

「どうもせぬ」

「病気か」

「病気じゃござらぬ」

「じゃあなんだ」

「この身が忌々しいだけじゃ。かような肉体は、自分で打ち殺して、鴉からすに喰くわせてやつたほうがましじゃが、この愚鈍のままで殺すのも忌々しい。せめて人なみに性しょうを得てから、野末に捨ててやろうと思うが、自分で自分がどうにもならぬので焦しれるのじゃ。……病気といわれれば病気かのう」

又八は、何か急に氣の毒になって来て、そこらに落ちている金を拾いあつめて、幾らかを彼の手に握らせながら、

「おれも悪かった、これをやろう。これで勘弁してくれ」

「いらん」手を引っこめて、

「金など、いらん、いらん」

鍋の残り飯でさえ、あんなに怒った虚無僧が、けがらわしい物でも見るように、強く首

を振つて、膝まで後へ退^さがつてゆく。

「変な人だな、おめえは」

「さほどもござらぬ」

「いや、どうしても、少しおかしいところがあるぜ」

「どうなとしておかれい」

「虚無僧、おぬしには、時々、中国訛^{なま}りが交^まじるな」

「姫路じやもの」

「ほ……。おれは美^み作^{まさ}だが」

「作州？——と、眼をすえて、

「してまた、作州はどこか」

「吉野郷^{よしのごう}」

「えつ。……吉野郷とはなつかしいぞ。わしは、日名倉の番所に、目付役をして詰めていたことがあるで、あの辺のことは相当に知っておるが」

「じゃあ、おぬしは、元姫路藩のお侍か」

「そうじゃ、これでも以前は、武家の端^{はし}くれ、青木……」

名乗りかけたが、今の自分を省みて、人前に身を置いているに耐えなくなったか、
「嘘だ、今のは、嘘じゃよ。どれ……町へながしに行こうか」
ぷいと立って、野へ歩み去った。

幻術めくらまし

一

——金が気になる。費つかつてならない金だと思うにつけて気になるのだ。たんとは悪いが、
少しぐらいは、この中から借りて費つかつたところで罪悪にはなるまいと遂には思う。

「死者の頼みで、その遺物かたみを、郷里へ届けてやるにしても、路銀というものが要いる。当然、
その費用は、この内から費つかつたとて関かまうまい」

又八はそう考えてから、幾分気が軽くなった。——気が軽くなった時には、もう幾分ず
つ、小出しにそれを費い始めていた時なのである。

だが、金のほかに死者から預かっている「中条流印可目録」の巻物のうちにある佐々木

小次郎とは、一体どこがしょうごく生国だろうか。

多分——あの死んだ武者修行がその佐々木小次郎にちがいないと思うが、牢人か、主しゅもち持か、またどういいう経歴の者であるかは、さっぱり分らないし、分ろうとする手がかりもない。

唯一の頼りは、佐々木小次郎に対して、印可目録を授けている鐘巻かねまき自齋じさいという剣術の師匠だ。その自齋がわかれば、小次郎の素姓もすぐ知れよう。それについて、又八も伏見から大坂へ下つて来る道々、茶店、飯屋、旅籠はたごと折のあるごとに、

「鐘巻自齋という剣術のすぐれた人がいるかね」

たず訊ねてみたが、

「聞いたこともないお人ですなあ」

と、誰もいう。

「富田勢源せいげんの流儀をひいている中条流の大家だが」

と、いつてみても、

「はてね？」

まったく知る者がないのである。

——すると、路傍で会った或る侍が、多少、兵法にも心得がある様子で、

「その鐘巻自齋とかいう仁^{じん}は、生きていても、もう非常な老齡のはずだ。たしか、関東に出て、晩年は上州のどこか山里にかくれたきり、世間へ出なかつたように聞いておる。——その人の消息を知りたければ、大坂城へ参つて、富田主水^{もんのしょう}正という人物をたずねてみるとよい」

と、教えてくれた。

富田主水正とは何かと訊くと、秀頼公の兵法師範役のうちの一人で、たしか、越前^{うさか}宇坂^{のしょう}之庄の浄教寺村から出た富田入道勢源の一族の者だつたと思うがという話。

すこし、あいまいな気もしたが、とにかく大坂へ出るつもりだし、又八は、市街へ入るとすぐ、目抜き^{はたじ}の町の旅籠へ泊つて、そんな侍が御城内にいるか否かを訊いてみると、

「はい、富田勢源様のお孫とかで、秀頼公のお師範ではありませんが、御城内の衆に兵法を教えていたお方はございましたが、それはもう古い話で、数年前に越前の国へお帰りになつております」

これは、宿の者のいうところだつた。町人とはいえ、城内の用勤めもしている家の者のいうことであるから、前の侍のことばよりはよほど真実味のある話だつた。

宿の者の意見ではまた、

「——越前の国まで、尋ねておいで遊ばしても、主水もんどのしょう正様が、今も果たしてそこにいるかどうかもしりませんから、そんな頼りのない方を遠国までたずねてゆくよりは、近頃、有名でいらつしやる、伊藤弥五郎先生をおさがしになるのが近道でございましょう。あの方またしか、中条流の鐘巻自齋はじという人のところで修行なされて、後に、一刀流という独自の流儀をお創めになったのですから」

それも一理ある忠告であつた。

だが、その弥五郎一刀齋の居所をさがしてみると、これも近年まで洛外の白河に、一庵をむすんでいたが、近頃はまた、修行に出たのか、杳ようとしてその影を京大坂の附近では見かけたことがないと誰もいう。

「ええ、面倒くせえ」

又八は、匙さじを投げた。——そう急ぐにも当たらないことをと、独り語ひとりごとにつぶやいて。

眠っていた野心的な若さを、又八は、大坂へ来てからたたき起された。

ここではさかんに、人物を需要しているのだった。

伏見城では、新政策や武家制度を組んでいるが、この大坂城では、人材を糾合きゆうごうして、牢人軍を組織しているらしかった。もとよりそれは、公然とではないが。

「後藤又兵衛様や、真田幸村様や、明石掃部様や——また長曾我部盛親様などへも、秀頼公から、そつと、生活のお手当というものが、届いているのだそうな」

町人たちの間でも、もっぱらそういう噂をしている。——で、どこの城下よりも牢人が尊ばれ、牢人の住みよいのが、今では大坂の城下だった。

長曾我部盛親などは、町端れのつまらない小路に借家して、若いのに頭をまるめ、一夢斎と名をかえて、

（浮世のことなど、わしや知らんよ）

といった顔つきして、風雅と遊里の両方に身をやつして暮しているが、その手から、いざという場合には、猛然と起つて、

（太閤御恩顧のため）

という旗じるしの下に集まろうという牢人が、七百や八百は飼ってあって、その生活費

も、秀頼のお手元金から出ているのだということも聞いた。

又八は、ふたつき二月ほど、大坂を見聞しているうちに、

(ここだ。出世のつるをつかむ土地は)

と、まず興奮を抱いた。

からすね空脛に、槍一本かつぎ出して、宮本村の武蔵と、関ヶ原の空をのぞんで飛び出した

時のような壮志が、久しぶりに、近頃、健康になった彼の体にも、よみがえ甦つて来たらしいのである。

ふところの金は、ぼつぼつ減ってゆくが、何かしら、

(おれにも運が向いてきた)

しもとという自覚がして来て、毎日が明るくて、愉快だった。石に蹴つまずいても、そんな足あ下から、不意にいい運の芽が見つかりそうな気がするのである。

(まず、みなり身装だ)

彼はいい大小を買って差した。もう寒さにかかる晩秋なので、それにうつりのよい小袖と羽織も買った。

はたこ旅籠は、不経済と考えて、順慶堀に近い馬具師の家の離れを借り、食事は外でし、見た

いものを見、家へは帰ったり帰らなかったり、好みどおりな生活をしている間に、よい知己を得、手づるを見つけ、扶持ふちの口にあるつこうと心がけていた。

この程度に、生活を持じしていることは、彼としては、かなり自戒を保って、生れ変ったほど、身を修めているつもりなのである。

（あれへ大槍を立たせ、乗換え馬を牽ひかせ、供の侍を、二十人も連れて通りなさる。——
今では大坂城の京橋口に御番頭ごばんがしらとして詰めてござるが、順慶堀の川ざらいには、土をか
ついでござった牢人衆であつたに）

そんなうらやましい噂を、町ではよく聞くが、さて、又八がだんだんに見るところでは、
（世の中というやつは、まるで石垣だ、きつちりと、使われる石は組んであつて、後から
入る隙すきはねえものだ）

すこし疲れて来たが、また、

（なあに、蔓つるの見つからねえうちが、そう見えるんだ、うまく、割り込むまでが、むずかしいが、何かへ取ツついてしまえば）

と思ひ直して、間借している馬具師のおやじへも、就職くちをたのんでおいた。

「旦那がたあ、お若いし、腕もおできなさるじやろうし、御城内の衆へ頼んでおけば、す

ぐお抱えの口はありましようで」

ありそうな口吻くちふりで、その馬具師も安うけあいしたが、就職くちはなかなかかかって来ない。——そのうちに冬も十二月、ふところの金も半分になっていた。

三

繁華な町なかの空地の草にも、朝々霜が真つ白におりる。その霜が消えて、道のぬかるむ頃から、銅鑼どらだの、太鼓だのが、そこでは鳴り出す。

師走しわすの忙せわしない人々が、案外のん気な顔して、冬日の下にいっぱい群れていた。いとも粗雑な矢来を囲つて、外からは見えないようにそれへ筵むしろを張り廻してある人寄せの見世物が、六、七カ所に紙旗や毛槍を立て、その閑人ひまじんの群れへ呼びかけて、客を奪い合う様はなかなか真剣な生活戦だった。

安醬油けずねのにおいが人混みのあいだを這う。串くしにさした煮物をくわえて、馬みたいになにしている毛脛けずねの男たちがあるし、夜は、白粉を塗りこくって袖をひく女たちが、解放された牝羊みたいに、ぼりぼり豆を食べながら繋がって歩いてゆく。野天へ腰かけを出して、

酒を汲んで売っている所では、今、一組の撲りあいがあつて、どっちが勝ったのか負けたのか、後へ血をこぼしたまま、その喧嘩のつむじ風は、わらわらと町の方へ駈け去つてしまつた。

「ありがとうございます。どんな様が、ここにござつたで、器物は壊されずにすみませただ」

酒売りは、何度も、又八の前へきて、礼をくり返した。

その礼どころが、

「こんどのお爛かんは、あんばいよくついたつもりで」

頼まない肴さかなもの物まで添えてくる。

又八は悪い気持でなかった。町人どうしの喧嘩なので、もしこの貧しい露店の物売りに損害をかけたら取ツちめてやろうと睨みつけていたが、何の事もなくすんで、露店のおやじのためにも、自分のためにも、同慶であつたと思う。

「おやじ、よく人が出るな」

「師走なので、人は出ても、人足は止まりませぬでなあ」

「天気がつづくからいい」

鳶とびが一羽、人混みの中から、何か啜くわえて高く上がってゆく。――又八は赤くなっていた、そしてふと、（そうだ、おれは石曳いしひきする時に酒は禁やめると誓ったのだが、いつから飲み始めてしまったろう）

他人事ひとごとのように考えた。

そして自ら、

（まあいい、人間、酒ぐらい飲まねえでは）

と、慰めたり、理由づけたりして、

「おやじ、もう一杯」

と、うしろへいった。

それと一緒に、ずつとそばの床しょうぎ几へ来て、腰かけた男がある。牢人だなどすぐ見てとれる恰好だった。大小だけは人をして避けしめるほど威嚇的な長ながもの刀であるが、襟えり垢あかついた衿あわせに上へ一重ひとえの胴無しも羽織はoriついていない。

「オイオイ亭主、おれにも早いところ一合、熱くだぞ」

腰かけへ、片あぐらを乗せて、じろりと又八のほうを見た。足もとから見上げて、顔のところまで眼がくると、

「やあ」

と、何の事もなく笑う。

又八も、

「やあ」

と、同じことをいつて、

「爛^{かん}のつく間、どうですか一献^{こん}。飲みかけで失礼だが」

「これは——」

すぐ手を出して、

「酒のみという奴、いやしいもので、実は、尊台が、ここで一杯やっているのを見かけると、どうにも、こう……ぷうんと鼻を襲^{にお}ってくる香が堪らん、袂^{たもと}をひいてな」

いかにも美味^{うま}そうに飲む男だ。磊落^{らいらく}で、豪傑肌らしいと、又八はその飲み振りを見ていた。

四

よく飲む。

又八がそれから一合もやるうちに、この男はもう五合を越えて、まだ慥^{しつ}かりしたものだ。
った。

「どのくらい？」

と訊くと、

「ちよつと一升、落ちついてなら、まあ、量がいえぬ」

と、いう。

時局を談じると、この男は、肩の肉をもりあげた。

「家康がなんだ。秀頼公をさしおいて、大御所などと、ばからしい。あのおやじから本多
まさずみ
正純や、帷幕^{いばく}の旧臣をひいたら、何が残る。狡獪^{こうかい}と、冷血と、それと多少の政治的な

——武人が持たぬ才を少し持っているというに過ぎない。石田三成には勝たせたかったが、
惜しいかな、あの男、諸侯を操縦すべく、あまりに潔癖で、また身分が足らなかった」

そんなことをいうかと思うと、

「貴公、たとえば、今にも関東、上方の手切れとなった場合は、どの手につく」
と、訊く。

又八が、ためらいなく、

「大坂方へ」

と答えると、

「ようつ」とばかり、杯を持つて床しやうぎ几から立ち上がり、

「わが党の士か、あらためて一盞さんけん献じ申そう。して、貴君はいずれの藩士」

といつて、

「いや、ゆるされい。まず自身から名乗る。それがしは、蒲生浪人がもうの赤壁八十馬あかかべやそま、という

者。ごぞんじないか、塙ばん団右衛門だんえもん、あれとは、刎ふん頸けいの友で、共に他日を期している仲。

また今、大坂城での銚そう々そうたる一方の将、薄田隼人すすきだはやとかねすけ兼相とは、あの男が、漂泊時代に、

共に、諸国をあるいたこともある。大野修理亮しゆりのすけとも、三、四度会ったことがあるが、あ

れはすこし陰性でいかん。兼相よりは、ずっと勢力はあるが」

喋りすぎたのを気がついたように、後へもどつて、

「ところで、貴公は」

と、訊き直す。

又八は、この男の話を、全部がほんととは信じなかったが、それでも、何か圧倒された

ような怯^ひけ目を感じ、自分も、法螺^{ほら}をふき返してやろうと思った。

「越前宇坂之庄浄教寺村の、富田流の開祖、富田入道勢^{せいげん}源先生をござんじか」
「名だけは聞いておる」

「その道統をうけ、中条流の一流をひらかれた無慾無私の大隠、鐘巻自斎といわるる人は、私の恩師でござる」

男は、そう聞いても、かくべつ驚きもしないのだ。杯を向けて、

「じゃあ、貴公は、剣術を」

「左様」

又八は、嘘がすらすら出るのが愉快だった。

大胆に嘘をいうと、よけいに酔いが顔に咲いて、酒のさかなになる気がするのである。

「——多分、実はさつきから、そうじゃないかと、拙者も見えておったので。やはり鍛えた体はちがうとみえ、どこか出来ているな、……して、鐘巻自斎の御門下で、何と仰せられるか。さしつかえなくば、ご姓名を」

「佐々木小次郎という者で、伊藤弥五郎一刀斎は、私の兄弟子です」

「えっ」

と、相手の男が驚いたらしい声を発したので、又八のほうこそびっくりしてしまった。
あわてて、

(それは冗戯じょうだん)

と、取消そうと思ったが、赤壁八十馬やそまは、とたんに地へ膝をついて頭を下げているので、
今さらもう冗戯ともいえなかった。

五

「お見それ申して」

と、八十馬は何度もあやまる。

「佐々木小次郎殿といえ、とくより耳にしておるその道の達人。知らないというものは、
他愛のないもので、先刻からの失礼は、平ひらに」

又八は、ほつとした。佐々木小次郎をよく知っている者か、面識でもある間がらでもあ
れば、たちまち嘘がばれて、脂あぶらをしぼられるところであつたがと――

「いや、お手を上げて下さい。そう改まられては、私こそ、ご挨拶のしようがない」

「いや、先ほどから、広言のみ吐いてさぞお聞き苦しかったことで」

「なに、私こそ、まだ仕官もせず、世間も知らぬ若輩者で」

「でも、剣においては。——いやよくお名まえは彼方あちら此方こちらで聞きますぞ。……そうだ、やはり佐々木小次郎」

つぶやいて、八十馬は、酔うと目やにの出る性しょうらしい眼を、どろんと据え、

「その上で、まだご仕官もなさらぬのか、惜しいものだ」

「ただ剣一方に、すべてを打ち込んで来たので、世間にはとんと何の知己もないために」

「や、なるほど。——ではまんざら仕官のお望みがないわけでもないのです」

「もとより。いずれは、主人を持たねばならぬと考えていますが」

「ならば、造作もないこと。——実力があるのだからたしかなものだ。もつとも実力があつても、黙つていては容易に見出されるはずはない。こうお目にかかっても、それがしですら、尊名を聞いて初めて驚いたようなもので」

と、さかんに焚たきつけて、

「お世話しよう」

と、いい出した。

「実はそれがしも、友人の薄田兼相すすきだかねすけに身の振り方を依頼してあるところ。大坂城では、禄を問わず、抱え入れようとしている折だし、貴公のような人物を推挙すれば、薄田氏うじも、すぐ買おう。おまかせ下さるまいか」

どうやら赤壁八十馬やそまは乗り気になっていているらしい。又八は、その就職くちへありつきたいことは山々だが、佐々木小次郎であると他人の名を借用してしまったことが、どうもまずい。引っこみのつかない不出来だ。

かりに美作みまさかの郷士本位田又八と名乗って実際の履歴を話したら、この男も乗り気にはなるまい。鼻さきで軽蔑を与えられるぐらいなところが落ちである。やはり佐々木小次郎の名がものをいったのだ。

——待てよ、と又八は胸のうちに考える。何もそう心配したほどのものじゃないかな。なぜならば、佐々木小次郎なる者はもう死んでいる人間だ。伏見城の工事で打ち殺されてしまった人物ではないか。——しかもそれが佐々木小次郎なりとは、おそろく、おれ以外の何者も知っていない。

死者の所持していた唯一の戸籍証明である「印可目録」は自分が彼の臨終いまわの一言によって預かって来ているので、後で、調べのつこうわけではない。また一箇の乱暴人として、打

殺した死者に対して、そんな面倒な調べをいつまでもやっているはずもない。

（分りっこはない！）

又八の頭に大胆な、^{ずる}狡い考えがそう閃めいた。勃^{ぼつ}然^{ぜん}として、彼は、死んだ佐々木小次

郎になり切つてやろうと^{ほぞ}臍を決めた。

「おやじ、勘定」

金入れから金を出して、そこを起ちかけると、赤壁八十馬はあわてて、

「今の話は？」

と、一緒に立つた。

「ぜひ、ご尽力をねがいたいが、この路傍では、十分な話もできぬ。どこか座敷のあるところへでも行つて」

「ああそうか」

と、八十馬は満足そうにうなずいて、自分の飲んだ代まで、又八が払っているのを、当り前のような顔して眺めていた。

怪しげな白粉^{おしろい}の裏町である。又八としては、もっと高等な酒樓へ案内するつもりだったが、赤壁八十馬が、

「そんなところへ揚がつて、つまらぬ金を費^{つか}うよりは、もっとおもしろい土地がある」といって、頻りに裏町遊びを謳歌するので、ともかく引つ張られて来てみると、まんざ

ら又八の肌に合わない情調ではない。

比丘尼横丁^{びくによこちよう}というのだそうである。大袈裟^{おおげさ}に言えば長屋千軒がみな売笑婦の家で、一

夜に百石の油を燈心にともすともいえるほどの繁昌さである。

すぐ近くに、汐^{しお}のさす黒い堀が通っているので、出格子だの、紅燈の下だのには、よく見ると、船虫や河蟹^{かわがに}がごろごろ這っていて、それが生命^{いのち}取りのさそりという妖虫のようにうすきみ悪いが、無数の白粉の女の中には眉目^{みめ}美^よいのも稀にあつて、中には、もう四十にちかい容貌に、鉄漿^{かね}を黒々つけ、比丘尼頭巾^{びくにずきん}にくるまつて、夜寒を唧^{かこ}ち顔でいるなど、なかなかもののあわれも蕩児^{とうじ}の心をそそのるのであつた。

「いるな」

又八が、ため息つくつと、

「いるだろう、へたな茶屋女や歌妓などより、遥かにましだ。——売女というと、いやな気がするが、冬の一夜をここに明かして、その前身なり、氏素姓なりを、寝ものがたりに聞いてみると、みな、生れた時からの売女ではないて」

肩と肩のすれ合つてゆく往来中を、八十馬は、得意になつて、弁じていた。

「室町將軍の奥につかえていたという比丘^{びく}尼^にがあるし、父は武田の臣だったの、松永久秀の縁類の者だのという女が、この中にはずいぶんある。——平家の没落した後もそうだったが、天文、永祿からこつちは、あの時代などから見るともつと激しい盛衰がくり返されたのだから、浮世の下水には、こんなふう^{あくだ}に落花の芥^{あかた}が溜^{たまり}るのだろうな」

それから一軒の家へ上がつて、八十馬に遊びの仕方をまかせると、これはこの道での豪の者とみえ、酒のあつらえ方、女たちのあつかいよう、そつがなくて、なるほど、この裏町はおもしろい。

泊つたことはもちろんである。昼間になつても、飽いたといわない八十馬だった、お甲の「よもぎの寮」では、いつも日蔭者でいた又八も、多年の鬱憤をここに晴らしたか、

「もう、もう。酒はいやだ」

と遂にかぶとを脱いで、

「帰ろう」

いい出すと、

「晩までつきあい給え」

と、八十馬はうごかない。

「晩までつきあつたらどうするんだ」

「今夜、薄田兼相すすきだかねすけのやしきへ行つて兼相と会う約束がしてあるんだ。今から出ても時刻が半端だし……。それに、そうだ、貴公の望みももつとよく聞いて置かなければ、先へ行つて話もできない」

「禄ろくなど、初めからそう望んでも無理だろう」

「いかん、自分からそんな安目売つてはいかん。とにかく中条流の印可を持って、佐々木小次郎ともいわれる侍が、禄はいくらでもいいから、ただ仕官がしたいなどといったらかえつて先から蔑さげすまれるぞ。——五百石もくれといつておこうか、自信のある侍ほど手当や待遇なども大きく出るのが通例だからな、やせ我慢などせぬがいいのだ」

谷間の壁を見上げるように、この辺はもう早い日蔭になっている。大坂城の巨大な影が夕空をおおっているからである。

「あれが、薄田^{すすきた}の邸だぞ」

濠^{ほり}の水に背を向けて、二人は寒そうに佇^{たたず}んだ。昼間から注^つぎこんでいた酒も、この濠端に立つとひとたまりもなく吹き飛んで、鼻の先に水^{みず}洩^{ばな}が凍りつく。

「あの腕木門か」

「いや、その隣の角屋敷」

「ふム……宏壮なものだな」

「出世したもののさ。三十歳前後の頃には、まだ、薄田兼相^{かねすけ}などといっても、世間で知っている奴はなかった、それがいつのまにか……」

赤壁八十馬のことばを、又八はそら耳で聞いていた。疑っているのではない、もう彼のことばの端など注意してみる必要を感じないほど信頼し切っていたのだった。——そしてこの巨城を取巻いている大小名の門をながめて、

「おれも」

と、鬱勃^{うつぼつ}としてくるものを彼も抑えきれない青年だった。

「じゃあ、今夜ひとつ、兼相に会つて、うまく貴公の体売りこんでみせるからな」
八十馬は、そういつて、

「——ところで、例の金だが」
と、催促した。

「そう、そう」

又八は懷^{ふところ}中から、革巾着^{かわぎんちゃく}を取り出した。少しくらいは、と思いながらいつのまにかこの革巾着の金も三分の一になっていた。その残りの底をはたいて、

「ざつと、これだけあるが、これくらいなおくりものでいいのか」

「いいとも、十分だ」

「何かに包んでゆかなければいけないが」

「なあに、仕官の取倣^{とりな}しを頼む時の、御推挙^{ごすいきよりよう}料だの、御献金^{ごけんぎん}だのというやつは、薄田ばかりじゃない、公然と誰でも取っていることだから、何も憚^{はばか}つて差し出す必要はすしもないのだ。——じゃあ預かつておくれ」

持ち金のほとんどあらましを、彼に手渡してしまふと、又八はやや不安をよび起して、

歩み出した八十馬に追いすがり、

「うまく頼むぞ」

「大丈夫だ。先で、渋った顔をしていたら、金をやらずに帰るだけのことじゃないか。何も、兼相^{かねすけ}だけが、大坂方の勢力家じゃなし、大野でも後藤でも、頼みこむ思案はいくらもある」

「返辞は、いつ分るか」

「そうだな、ここで、待っていてくれてもいいが、濠^{あす}ばたの吹きさらしに、立っているわけにもゆくまいし、また、怪しまれるから、明日^{あす}会おう」

「明日——どこで」

「人寄せの懸っているれいの空地へ行ってくれ」

「承知した」

「貴公と初めて会った、あの酒売りのおやじの床^{しょうぎ}几^こで、待っていてくれれば間違いない」時刻も打合せて、赤壁八十馬は、その門内へ、大手を振って入って行った。肩を振って、堂々と通ってゆく態度を見とどけて、

（あれなら、なるほど、薄田兼相とは、貧困時代からの旧友だろう）

又八は、安心に似た気もちを抱いて、その晩は、さまざまな夢に耽^{ふけ}り、あくる日を待ちかねて、定め時刻に、人寄せ場の空地へ、霜解けをふんで行った。

きょうも師走の風が寒かったが、冬日の下にはたくさん集まっていた。

八

どうしたのか、赤壁八十馬は、その日、姿を見せなかった。

次の日。

「何かの都合だろう」

又八は、こう善意に解釈して、れいの野天の酒売りの床几^{しょうぎ}で、

「きょうは」

と、正直に空地の人混みを見廻していたが、その日も遂に八十馬の姿を見ずに暮れてしまった。

少し、てれて、

「おやじ、また来たぞ」

三日目である。こういつて、床几に腰をすえると、酒売りのおやじが、毎日の彼の挙動をひそかに怪しんでいたとみえ、一体、誰を待つのかと訊ねるので、実は云々な仔細で、いつぞやここで知己になった赤壁という牢人と落合う約束になっているのだが——と語ると、

「え？　あの男に」

おやじは呆れたような口吻で、

「では、仕官の口を周旋してやるからといって、あいつ奴に、金を取られたので」

「取られたわけではない。わしから依頼して、薄田殿へわたす口入れ金を預けておいたのだが、その返辞がはやく知りたいので、毎日待っているわけだが」

「おやおや、おまえ様は」

おやじは、気の毒そうに、又八の顔をながめて、

「百年待っていても、あの男が来るはずはありませんぬ」

「げつ。——ど、どうして」

「彼奴は、名うてな悪で、この空地には、ああいうガチャ蠅がたくさんおりましてな、少し甘い顔と見れば、すぐたかつて来るのでございます。よほど、気をつけてあげようかと

思つたが、あとの祟りたたが恐いし、おまえ様も、あの風態を見れば、気がつくだろうと思つていたのに、金を抜かれてしまうなんて……。これやお話にならんわい」

気の毒を通り越して、又八の無智をむしろ慙あわれむような口吻くちぶりなのである。だが又八は、恥を搔いいたとは思わない。突然の損失と希望から抛り出された傷手いたでに、身がふるえ、血が憤いきどおつて、茫然と、空地の人群れを見つめていた。

「むだとは思ふが、念のため幻術めくらましの囲いへ行つて訊いてみなさるがよい。あそこではよく、ガチャ蠅あそびばが集まつて、銭の賭事かけごとをしておりますで、そういう金をつかめば、ことによると、賭場あそびばへ顔を出しているかもわかりませぬ」

「そ、そうか」

又八は、あわてて床几を起ち、

「その幻術めくらましの人寄せというのは、どこの囲いか」

老爺おやじの指さすほうを見ると、この空地のうちでは最も大きな矢来が一つ見える。幻術げんじゆ者の群れが興行しているのだという。見物は、木戸口に蝟集いしゆうしていた。又八が近づいて行つてみると、

「ちよちよんがちよつ平べい」

だとか、

「変^{へん}兵^び童^{どう}子^じ」

とか、

「果^{かしん}心^こ居^こ士^じ之^の一^で弟^し子^し」

とかいう有名な幻術師の名が、木戸口の旗に記してあつて、幕^{むし}と筵^{しろ}でかこんであるその
広い矢来のうちでは、怪しげな音楽に交^まじつて、術者の掛声と、見物の拍手が湧いていた。

九

裏へ廻ると見物の出入りしないべつな口があつた。又八が、そこを覗くと、

「賭^と場^ばへゆくのか」

と、立番の男がいう。

うなずくと、よしというような顔をしたので、彼は入って行つた。幕の中では、青天井
をいただいて、二十人ばかりの浮浪人が、車座になつて、博^{ばく}戯^ちをしている。

又八が立つと、じろつと、すべての白い眼が彼を見上げた。一人がだまって、彼の前に

席を開けたので、あわてて、

「この中に、赤壁八十馬つて男はいないか」

訊くと、

「赤馬か。そういえば赤馬の奴、ちつとも出て来ねえが、どうしたんだろう」

「ここへ来ましようか」

「そんなこと、わかるもんか。まあ、入りねえ」

「いや、おれは博あそびごと戯事しに来たんじやない。その男を捜しに来たのだ」

「おい、ふざけるなよ、博ばくち戯ちもせず、賭場へ何しに来やがったんだ」

「すみません」

「向う脛すねを搔かつ払うぞ」

「すみません」

ほうほうのていで出て来ると、追いかけて来たガチャばえ蠅ばえの一人が、

「野郎待て。ここは、すみませんで済む場所たあ違う。ふてえ奴だ。博ばくち戯ちをしなけれやあ、

場代をおいてゆけ」

「金などない」

「金もねえくせに、賭場のぞきをしやがつて、さては、隙があつたら、錢を攫つて行こうという量見だつたにちげえねえ、この盗つ人め」

「なんだと」

又八が、くわつとして刀の柄つかを示すと、これは面白いと、相手は敢て喧嘩を買ってくる腰だつた。

「べら棒め、そんな脅おどしに、いちいちびくついていちや、この大坂表で、生きちやあいられねえんだ。さ、斬るなら斬ってみろ」

「き！ 斬るぞ」

「斬れつ、何も、断るにや及ばねえや」

「おれを知らんか」

「知つてるもんか」

「越前宇坂之庄、浄教寺村の流祖、富田五郎左衛門が歿後の門人佐々木小次郎とはわしのことだ」

そういつたら逃げるだろうと思いのほか、相手は、ふき出して、又八のほうへ尻を向け、矢来ばえのうちのガチャ蠅ばえを呼び立てた。

「やい、みんな来い、こいつ何とか今、オツな名乗りをあげやがったぜ。おれたちを相手に抜く気らしい。ひとつお腕てのうちを見物としようじゃねえか」

いい終ると、きやツと、その男は尻を斬られて跳び上がった。又八が、不意に抜き打ちをくれたのである。

「畜生っ」

という声。それから、わつと大勢の声がうしろに聞えた。又八は血刀をさげて人混みの中へまぎれ込んだ。

なるべく人間の多いところへと又八は姿をかくして歩いていたが、危険を感じるほど、どの人間の顔もガチャ蠅に見え、とてもうろついておられなくなった。

ふと見ると、眼のまへの矢来に、大きな虎の絵を描いた幕が垂れていて、木戸には、鎌槍と、蛇の目の紋と旗じるしが立ててあり、空箱に乗っている町人が、しゃがれ声をふりしぼって、

「虎だ、虎だつ、千里行つて、千里帰る、これは朝鮮渡りの大虎、加藤清正公が手捕りの虎——」

というような人寄せ文句を、ふしづけて呶鳴っていた。

錢を抛^{ほう}つて、又八は中へとびこんだ。そして、いきさかほつとしながらどこに虎がいるのかと見廻してみると、正面に戸板を二、三枚並べ、それへ洗濯物でも貼りつけてあるように、一枚の虎の皮が貼りつけてあつた。

十

死んだ虎を見せられても、見物は、神妙に眺め入つて、これは生きていないじゃないかと、腹を立てる者はなかつた。

「これが虎かいな」

「大きなものやなあ」

感心して、入口から出口の木戸へ入れ代つてゆく。

又八は、なるべく刻^{とき}を過^とごそうと考^{かん}えていつまでも虎の皮の前に立つていた。——すると、ふと自分の顔の前に、旅^{たび}装^{よそお}いの老夫婦が立つて、

「権^{ごん}叔父よ。この虎は、死んでいるのじやろうが」

と、婆のほうがいふ。

爺侍^{じしぎむらい}は、竹の仕切り越しに手をのばして、虎の毛に触れながら、

「元より、皮じゃもの、死んでおるわさ」

「木戸で呼ばわつてゐる男は、さも生きてゐるやうにいうたがの」

「これも、幻術^{めくらまし}の一つじやろて」

爺侍は苦笑していたが、婆のほうは、忌々^{いまいま}しげに、萎^{しぼ}んでゐる唇を振り向けて、

「やくたいもない、幻術なら幻術と看板にあげておいたがよい。死んだ虎を見るくらいなら絵を見るわさ。木戸へ去^いんで、錢をかやせというて来う」

「婆、婆。人が笑うぞよ、そんなこと、喚^{わめ}かんでもええ」

「なんの、見栄^{みえ}がいろう、おぬしいうが嫌ならわしがいう」

見物の者を押し分けて、戻りかかると、あつ——とその人混みの中に肩を沈めた者があ
る。

権叔父と呼ばれた爺侍が、

「やつ、又八つ」

と、呶鳴った。

お杉隠居は、眼がわるいので、

「な、なんじや、権叔父」

「見えなんだかよ、婆のすぐうしろに、又八めが立っておったぞ」

「げっ、ほんまか」

「逃げたっ」

「どっちやへ？」

二人は、木戸の外へ転び出した。

もう空地の雑沓ざつとくは暮色につつまれていた。又八は、幾たびも人にぶつかつた。そのたびに、くるくる舞まいして、後も見ずに、町中のほうへ逃げてゆく。

「待て、待て、倅せがれっ」

振りかえつてみると、母親のお杉は、まるで狂気のように追つて来るのだつた。

権叔父も、手をふりあげ、

「馬鹿ようつ、なんで逃げるぞい。——又八っ、又八っ」

それでもなお、又八が足を止めないのです、お杉隠居は、皺首しわくびを前に伸ばし、

「泥棒、泥棒、泥棒っ——」

夢中でさげんだ。

暖簾棒のれんぼうだの竹竿を持って、町の者は、先へゆく又八を蝙蝠こうもりを打つようにたたき伏せた。

往来の者も、わいわいと取りかこんで、

「捕まえた」

「ふてえ奴だ」

「どやせ」

「たたつ殺してやれ」

足が出る、手が出る、唾つばを吐きかける。

後から息を喘きつて、権叔父とともに追いついて来たお杉隠居はそのていを見ると、群衆を突きとばし、小脇差のつかに手をかけて齒を剥むいた。

「ええ、むごいことを、おぬしら何しやるのじゃ、この者へ」

弥次馬は、理を弁わきまえずに、

「婆どの。こいつは、泥棒だよ」

「泥棒ではない、わしが子じやわ」

「え、おまえの子か」

「おおさ、ようも足蹴にしやったな。町人の分際で、侍の子を足蹴にしやったな。婆が相手にしてくりよう、もちど、今の無礼を試してみやい」

「冗じょうだん 戯しや じゃない。じゃあ先刻泥棒泥棒と呶鳴つたのは誰だ」

「呶鳴つたのは、この婆じゃが、おぬしら風情に足蹴にしてくれと頼みはせぬ。泥棒とよんだら忝めが、足を止めようかと思うていうた親心じゃわ。それも知らいで、撲つたり蹴つたりは何事じゃ、このあわて者めが！」

おんてき
怨敵

一

町中の森である。おぼろに常夜燈がまたたいていた。

「こう来やい」

お杉隠居は、又八の襟えりがみを抓つまんで、往来からその境内まで引きずつて来た。

婆けんの権けんまくに驚いたとみえ、弥次馬はもう尾ついて来ない。殿しんがりとして、鳥居の下で見張つ

ていた権叔父も、やがて後から来て、

「婆、もう折檻せつかんはせぬものだぞ。又八とて、もう子どもではなし」

母おやこ子の手と襟がみを、もぎ離そうとすると、

「何をいうぞい」

隠居は、権叔父を、肱ひじで突き退けて、

「わしが子を、わしが折檻するに差し出口など、要らぬお世話、おぬしは黙っていやい。

——こ、これつ、又八つ」

泣いて欣よろこんでもいい場合を、この婆は憤怒して、わが子の襟がみを、大地へ小突き廻している。

老人になれば誰も単純で気短かになるという。今の場合の複雑な感情は余りにも枯渴こかつした血には強烈すぎたのであろう。泣いているのか、怒っているのか、狂喜の変態なあらわれか。

「親のすがたを見て、逃げ出すとはなんの芸わざじゃ。汝われは、木の股から生れくさったか、わしが子ではなかったかよ。——こ、これッ、ここな呆とぼけ者め奴が」

と、幼い時に打ちやうちやく擲したように、又八の尻をぴしぴし打って、

「よもやもう、この世に生きておろうとも思わなんだに、のめのめこの大坂に生きていくさるとは憎い憎い、ええもう憎い奴よの。なんで故郷^{くに}へもどつて来て、ご先祖様のまつりをせぬか、この母にちよつとでも、顔見せぬか。親類縁者どもが、あれよこれよと案じているのも、われには弁え^{わきま}がつかぬかよつ」

「——お、おふくろ。かんべんしてくれ、かんべんしてくれ」

又八は、嬰兒^{あかご}みたいのに、母の手の下からさげんだ。

「悪いことは知っている。知っていればこそ、帰れなかつたんだ。今日も、余り不意だったのでびつくりして、逃げる気もなく、おらあ駈け出してしまった。……面目ない、面目ない！ おふくろにも叔父御にも、おらあただ面目ないんで」

と、両手で顔をおおった。

それを見ると、婆も目鼻に皺^{しわ}をあつめて、すすり泣いた。しかし気丈な老婆は、自分が脆^{もろ}くなるのをすぐ自分の心で叱咤しながら、

「ご先祖の恥さらし、面目ないというからには、どうせ碌^{ろく}なことをしていくさつたのではあるまいが」

権叔父は、見るに見かねて、

「もうよかろう、婆、そう打擲しては、かえつて又八を拗^{ねじ}け者にするぞよ」

「また差し出口かよ、おぬしは男のくせに甘うていかぬ。又八には父^{てて}親^{おや}がないゆえ、この婆は母であるとともに、厳しい父親でもなければならぬのじや。それゆえわしは折檻をします。……まだまだこんなことで足ろうかいの。又八ッそれへ直りやい」

自分も大地へ畏^{かしこ}まつて坐りこみ、子へも、大地を指さしていった。

「はい」

又八は、土にまみれた肩を起して、悄^{しょうぜん}然と坐り直した。

二

この母親は怖かった。世間の母親なみ以上の甘さもあつたが、すぐ先祖様を持ち出すので、又八は頭があがらないのであつた。

「つつみ隠しをするときかぬぞよ。関ヶ原の戦^{いくさ}へ出て、おぬし、あれ以来、何していやつた。婆の得心がまいるまで、つぶさに話しやれ」

「……話します」

隠す気は起らない。

又八は、友達の武蔵たけぞうと戦場から落ちのびたこと——そして伊吹のあたりに潜ひそんだこと——お甲という年上の女にかかつて、数年のあいだ同棲して苦い経験をし、今では、悔いていることなど、すっかり話してしまうと、胃の中の腐っている物を吐き尽したように、気が軽くなった。

「ふうむ……」

と、権叔父が呻うめくと、

「あきれた子よの」

と、隠居も舌を鳴らし、

「そして今では、何していやるか。身装みなりは、どうやら飾ってござるが、仕官して、禄の少々も、取つていやるか」

「はい」

うっかり、いい返事をしたが、又八は、露見ろけんをおそれて、

「いや、仕官はいたしませぬが」

「では、何で喰べている」

「劍——劍術などを、教えまして」

「ほう」

婆は、初めて、綻ほころびたように機嫌よく、

「劍術を、おそろいかいの。そういう生活たつきを過ごしながらも、劍術に精出していやつたとは、さすがにわしが子。……のう叔父御よ。やはり婆が子じやの」

この辺で機嫌を直させてしまいたいものだと権叔父は、大きく何度もうなずいて、
「それやあ、ご先祖の血は、どこかにあろうわさ。一時の極道はしようとも、そのたましいだに失わずば」

「して又八」

「はい」

「この上方では、誰について、腕を磨きやった」

「鐘巻自齋先生に」

「ふうむ……あの鐘巻先生にの」

目も鼻も飴あめのようにしてあまり喜ぶので、又八はもっと喜ばせてみたくなり、懐ふところ中の印可の巻を出して巻末の一行——佐々木小次郎殿とあるところだけを隠して、

「御覧^{ごらん}じませ、この通り」

と、常夜燈の明りへ、展^{ひろ}げて見せた。

「どれ、どれ」

手を出したが、渡さずに、

「安心してござれ、おふくろ」

「なるほど」

隠居は、首を振って、

「見たか、権叔父、大したものじゃわ。小さい頃から、あの武蔵^{たけぞう}などより、ぐんと賢く、腕も出来ていただけのことはある」

と、涎^{よだれ}を垂らさないばかりに満足をあらわしたが、ふと、それを巻きかけた又八の手がすべって、終りの一行が眼にうつると、

「これ待て、ここに佐々木小次郎とあるのはなんじゃ」

「あ……これですか……これは仮名^{かめい}です」

「仮名？ 何で仮名などつかいなさる、本位田又八と、立派な名のあるものを」

「でも省^{かえり}みて、自分に恥のある生活^{くらし}をしていたので、先祖の名を汚すまいと」

「オオそうか。その性根たのもしい。——おぬしは何も知るまいがこれから故郷くにもと元のことども聞かせて進ぜるほどに、よう聞きなされ」

隠居は、そう前置きして、この一人息子を、いよいよ鼓舞こぶし、激励するために、その後、宮本村に起った事件やら、本位田家の立場から、また、自分と権叔父とが、たみに出郷することになり、お通と武蔵たけぞうとを討つべく、多年ふたりの行方をさがし歩いていることなど——誇張する気もなく誇張に落ちたが——何度も鼻をかみながら、諄々じゆんじゆんと眼を濡らして語った。

三

じつと首を垂れたまま、又八は老母の烈々と吐くことばに打たれていた。こうしている間は、彼も善良で神妙な息子だった。

けれど、隠居がいわゆる重点は、もっぱら家名の面目とか、侍の意気とかにあったが、この息子の感情を強く打った点は、そこになくて、

（お通がこころ変りした）

と、いう初耳の話だった。

「おふくろ、それは眞実か」

彼の顔いろを知ると、隠居は、自分の鞭撻^{べんたつ}が、彼を奮起させたものと思いこみ、

「嘘と思うなら、叔父御にもただしてみやれ、お通阿女^{あま}はおぬしを見かぎつて、武蔵^{たけぞう}の後を追つて去^いんだわさ。——いやの、もつと悪う考えれば、武蔵はおぬしが、当分は村へ

歸らぬものと知つてじゃほどに、お通をだまして、奪つて逃げたともいえる。のう権叔父」

「そうじゃ、七宝寺の千年杉へ、沢庵坊主のため、縛^くりつけられたのを、あのお通の手をかりて逃げ失せた男女^{ふたり}のことゆえ、どうせ碌^{ろく}な仲じやあるまいての」

こう聞いては又八も、鬼とならずにいられなかつた。それでなくても、彼へは——あの武蔵という人間に對しては、どういふものか反感があつてならなかつたところである。

隠居の激励は、鞭^{むち}に鞭を加えて——

「わかつたかよ又八。この婆や権叔父が、故郷^{こくに}を出て、こうして諸国をあるいている意氣地^{いけぢ}が。——息子の嫁を奪つて逃げた武蔵^{たけぞう}、本位田家に後足で砂をかけて失^うせたお通。——こう二つの首を打たいでは、婆は、ご先祖のお位牌^{いはい}と、故郷^{こくに}の衆にむかつて、会わせる顔がないじやろが」

「わかりました。……よく」

「おぬしにも、それではのめのめと、故郷の土は踏めまいが」

「帰りません、もう、帰りません」

「討つてたも、おんてき怨敵を」

「ええ」

「気のない返辞をするものかな、おぬしには武蔵たけぞうを討つ力がないと思うてか」

「そんなことはありません」

権叔父も、そばから、

「案じるな又八、わしもついているのじやが」

「この婆とても」

「お通と武蔵、二つの首を、晴れて故郷への土産に引さげて戻ろうぞ。のう又八、そうしておぬしにはよい嫁女をさがし、あつぱれ本位田家の跡目をついで貰もらわにやらん。そうした上は、武士の面目も立つ、近郷きんきょうへの評判もようなる、まず、吉野郷よしのきょうで負け目ひめをとる家統いえすじは他ほかにはあるまいてな」

「さあ、その気になつてたも。なるかよ又八」

「はい」

「よい子じや、叔父御、賞^ほめておくりやれ。きつと武蔵とお通を討つと誓うた。……」
と隠居はやつと気がすんだらしく、先刻から^{こら}泳^{こら}えていた氷のような大地から身を動かしかけたが、

「ア……痛^{たた}々々」

「婆、どうしやった」

「冷えてかいの、腰が急に吊つてこう下腹へさしこんで来ましたわい」
「これやいかぬ、また持病を起してか」

又八は、背を向けて、

「おふくろ、すがりなされ」

「何、わしを負うてくれる。……負うてくれるか」

と、子の肩に抱きついて、

「何年ぶりぞいの、叔父御よ、又八がわが身を負うてくれたわいな」
と、^{うれ}欣^{うれ}し泣きに泣くのであった。

母の温い涙が肌にとおつて来ると、又八も何か無性に^{うれ}欣^{うれ}しくなつて、

「叔父御、旅籠^{はたご}はどこか」

「これから探すのじゃ、どこでもいい、歩いてくりやれ」

「合点だ——」

と、又八は老母の体を弾^{はず}ませて歩きながら、

「ほう、軽いなあ、おふくろ。——軽い、軽い、石よりも軽いぞ」

美少年

一

藍^{あい}や紙が積み荷の大部分であった。ほかに禁制の煙草も船底にかくしているらしい。元より秘密だが、おいで知れる。

月に何度か、阿波^{あわ}の国から大坂へ通う便船で、そうした貨物とともに便乗している客には、この年の暮を、大坂へ商用に出るか、戻るかする商人^{あきんど}が八、九分で、
「どうです、儲^{もう}かるでしょう」

「儲かりませんよ、堺はひどく景気がいいというが」

「鉄砲鍛冶など、職人が足らなくて弱っているそうだな」

べつの商人が、また、

「てまえは、その戦道具の、旗差物とか、具足など納めていますが、昔ほど儲かりません」

「そうかなあ」

「お侍方がそろばんに明るくなつて」

「ハハア」

「むかしは、野武士がかついで来る掠め物を、すぐ染めかえ、塗りかえして、御陣場へ納める。するとまた、次の戦があつて、野武士がそいつを集めてくる。また新物にすると、いったふうに、鹽廻しがきいたり、金銀のお支払いなどもおよそ目分量みたいなものでしたがね」

そういう話ばかりが多い。

中には、

「もう内地では、うまい儲けはありっこない。呂宋助左衛門とか、茶屋助次郎といった人

のように、乗るか反るかで海の外へ出かけなければ」

と、海洋をながめて、彼方の国の富を説いている者があるし、或る者はまた、

「それでも、何のかのといつても、むしろ町人は、侍から見れば遥かに割がよく生きていますよ。いったい侍衆なんて、食い物の味ひとつ分るじやなし、大名の贅沢といったところが、町人から見ればお甘いもので、いざといえ、鉄と革を鎧よろつて、死に行かなければならないし、ふだんは面目とか武士道とかにしばられて、好きな真似はできないし、気の毒みたいなものでございますよ」

「すると、景氣がわるいの何のといつても、やはり町人にかぎりますかな」

「かぎりますとも、気ままでね」

「頭さえ下げていればすみすからな。——その鬱憤うつぶんはいくらでもまた、金のほうで埋め合せがつくし」

「ぞんぶんこの世を楽しむにかぎりまさあね」

「何のために生れて来たんだ——といってあげたいのがいますからな」

商人あきんどでもこの辺は、中以上のところとみえる。舶載はくさいの毛氈もうせんをひろく敷きこんで、一階級を示しているのだ。

のぞいてみると、なるほど、桃山の豪奢ごうしゃは今、太閤が亡き後は、武家になくて、町人の中へ移っているかと思われる。酒器のぜいたくさ、旅具旅装の絢爛けんらんなること、持物の凝こっていること、ケチな一商人でも、侍の千石取などは及びもない。

「ちと、飽きましたな」

「退屈しのぎに、始めましょうか」

「やりましょう。その幕とばりをひとつ懸け廻して」

と、小袖幕のうちにかくれると、彼らは、妾めかけや手代に酒をつがせて、南蛮船が近ごろ日本へ齎もたらした「うんすん骨牌かるた」というものを始める。

そこで儲もけている一つかみの黄金があれば、一村の飢餓きがが救われるであろうほどの物を、まるで、冗じようだん戯ぎみみたいに、遣り取りしていた。

こういう階級の中に、ほんの一割ほどだが、乗り合わしている山伏とか、牢人者とか、儒者とか、坊主とか、武芸者などという者は、彼らからいわせるといわゆる、

（いつたいなんのために生きているんだ）

と借問しゃくもんされる部類のほうで、みんな荷棚にこくりの蔭に、ぽつねんと味気ない顔して、冬の海をながめているのだった。

二

それらのあじきない顔つきの組の中に、一人の少年が交^まじっていた。

「これ、じつとしておれ」

荷梱に倚^より懸^かつて、冬日の海に向いながら、膝の上に何やら丸っこい毛だらけな物を抱いている。

「ホ。可愛い小猿を」

と、そばの者がさしのぞいて、

「よく馴^なれてござるの」

「は」

「永くお飼いになつているのであろうな」

「いえ、ついこのごろ、土佐から阿波へ越えてくる山の中で」

「捕まえられたのか」

「その代り、親猿の群れに追いかけて、ひどい目にありました」

話を交わしながらも、少年は、顔を上げない。小猿を膝の間に挟んで、蚤のみを見つけているのだった。

前髪に紫の紐ひもをかけ、派手やかな小袖へ、緋ひらしやの胴羽織を纏まとっているのです、少年とは見えるものの、年齢としのほどは、少年という称呼に当てはまるかどうか、保証のかぎりではない。

煙管きせるにまで、太閤張たいこうばりというのが出来て、一頃は流行はやったように、こういう派手派手しい風俗も、桃山全盛の遺風であつて、二十歳はたちをこえても元服をせず、二十五、六を過ぎても、まだ童子髪を結ゆって金糸をかけ、さながらまだ清童であるかのような見栄を持つ習いが、いまに至つてもかなり遺のこつているからである。

だからこの少年も、一概に身なりをもつて、未成年者と見ることはできない。体つきからしても、堂々たる巨漢であるし、色は小白くて、いわゆる丹唇たんしん明眸であるが、眉毛が濃くて、眉端びたんは眼じりから開いて上へ刎はねている。なかなかきつい顔なのだ。

けれどまた――

「これ、なぜうごく」

と、小猿の頭を打って、猿の蚤のみとりに他念のない様子などは、なかなかあどけなくもあ

る。何もそう年齢としの詮索せんさくばかり気にやむこともないが、あれこれ綜合してその中庸をとって推定すれば、まず十九か、二十歳というところでなかろうかと思われる。

さてまた、この美少年の身分はというと、元より旅いでたちで、革足袋かわたびにわらし穿ばきだし、どこといって抑えどころもないが、歴平れつきとした藩臣でなく、牢人の境界きようがいであることは、こういう船旅において、ほかの山伏だの傀儡師くぐつしだの、乞食のようなボロ侍だの、垢あかくさい庶民の中に交じって、気軽にごろごろしている態ていをみても、およそ想像はつく。

だが、牢人にしては、ちよつと立派なものを一つ身に着けている。それは、緋羽織さへの背なかへ、革紐かわひもで斜めに負っている陣刀づくりの大太刀である。反りそがなくて、竿さおのように長い。

ものが大きいし、拵こしらえが見事なので、その少年のそばへ寄った者は、すぐ少年の肩かたに柄つかの聳そびえているその刀に目がつくのだった。

「——いい刀ものを持っている」

そこから少し離れたところから、祇園藤次ぎわんも、さつきから見慌みとれていた一人であった。「京洛みやこでもちよつと見ない」

と思う。

刀のすぐれた物を見ると、その持ち主から、遠くは、その以前の経歴までが考えられてゆく。

祇園藤次は、機おりがあつたら、その美少年へ、話しかけてみたいと思つていた。

——冬の昼霽ひるもやにうすずいて、よく陽ひのあたっている島の淡路は、艫とものかなたに、だんだん遠くなつてゆく。

はたはたと、大きな百反帆たんぼは、生きもののように、船客たちの頭の上で潮鳴りを切つて鳴つていた。

三

藤次は旅に倦うんでいた。

なま欠伸あくびが出る——

飽きのきた旅ほど他人の世界を感じるものはない。祇園藤次は、その飽き飽きした旅を、もう十四日もつづけて来たあげくのこの船中であつた。

「——飛脚が間にあつたかしらて？ ……間にあえば、大坂の船着場まで、迎えに来てい

るにちがいないが」

と、お甲の顔を思い浮かべて、せめてもの無聊ぶりようをなぐさめてみる。

さしも、室町將軍家の兵法所出仕として、名誉と財と、両方にめぐまれて来た吉岡家も、清十郎の代になって、放縱ほうじゆうな生活をやりぬいたため、すっかり家産は傾いてきた。四條の道場まで、抵当に入っているのです、この年暮くには、町人の手へ取られるかも知れないという内ふところ。

年暮に近づいて、あっちこちから責め立ててくる負債をあわせると、いつのまにか、途方もない数字にのぼっていて、父拳法の遺産をそっくり渡して、編笠一かいで立ち退のいても、なお、足らないくらいな実情に墮おち入いっていた。

(どうしたものか)

という清十郎の相談である。この若先生をおだてて、さんざん費つかわせた責任の一半は藤次にもあるので、

(おまかせなさい、うまく整理をつけてお目にかきましょう)
狡智こうちをしぼって、彼の案出したのが、西洞院にしのだういんの西の空地へ、吉岡流兵法の振武閣しんぶかくというものを建築するという案で——社会の実態を鑑かんみるに、いよいよ武術は旺さかんになり、

諸侯は武術家を要望している。この際、多くの後進を養成するために、従来の道場をさらに拡大して、流祖の遺業をして、もつと天下にあまねからしめなければならぬ——それはまた、われわれ遺弟の当然なさなければならぬ義務でもある。

そんな主旨の廻文を、清十郎に書かせ、これを携えて、中国、九州、四国などに散在している吉岡拳法門下の出身者を、歴訪して来たのである。もちろん振武閣建築の寄附金を勧進かんじんするために。

先代の拳法が育てた弟子は随分各地の藩に奉公していて、みな相当な地位の侍になっている。

けれど、そういう勧説かんぜいを持って行っても、藤次が予算していたように、おいそれと寄進帳へ筆をつけてくれるのはすくない。

（いずれ書面をもって）
とか、

（いずれ、上洛の折に）
とかいうのが多く、現に藤次が携えて帰る金は、予定していた額の何分の一にも当たらない。

だが、自分の財政ではなし、まあ、どうかなろうと多寡^{たか}をくくって、先刻^{さつき}から、師の清十郎の顔より、久しく会わないお甲の顔のほうを、努めて、想像にのぼせていたが、それにも限度があるので、また、生欠伸^{なまあくび}に襲われて、退屈なからだを、船のうえに持てあましていた。

うらやましいのは、先刻から小猿の蚤^{のみ}をとっている美少年だった。いい退屈しのぎを持っている。藤次は、そばへ寄って、とうとう話しかけ出した。

「若衆。——大坂表までお渡りか」

小猿の頭を抑えながら、美少年は大きな眼をじろりと彼の顔へあげた。

「はあ、大坂へ行きます」

「ご家族は大坂にお住まいかの」

「いえ、べつに」

「では阿波のご住人か」

「そうでもありません」

膠^{にべ}のない若衆である。そういつてまた他念なく、小猿の毛を指で掻き分けているのであった。

四

ちよつと話のつぎ穂がない。

藤次は、黙ったが、また、

「よいお刀だな」

と、こんどは彼の背にある大太刀を賞めた。すると美少年は、

「はあ、家に伝来のもので」

急に藤次のほうへ膝を向け、賞められたのを欣うれしそうに、

「これは陣太刀に出来ていますから、大坂の良い刀師へあずけ、差し料に拵こしらえを直そうと思っているのです」

「差し料には、ちと長すぎるようだが」

「されば、三尺です」

「長剣だな」

「これくらいなものが差せなければ——」

自信がある——というように美少年は笑靨えくぼをうごかす。

「それは差せないことはない——三尺が四尺でも。——けれども実際に用うる場合、これが自由にあつかえたら偉いが」

と、藤次は、美少年の銜氣げんきをたしなめるようにいう。

「大太刀を、かんぬきに横たえて、りゅうとして歩くのは、見た眼は伊達でよいが、そういう人物にかぎって、逃げる時には、刀を肩へかつぐやつだ。——失礼だが、貴公は、何流を学ばれたか」

剣術のことになると、自然、藤次はこの乳臭児を見下げずにいられなかった。

美少年は、ちらと、彼のそういう尊大な顔つきへ、瞳をひらめかせ、

「富田流を」

と、いった。

「富田流なら、小太刀のはずだが」

「小太刀です。——けれども何、富田流を学んだから小太刀をつかわなければならぬという法はありません。私は、人真似がきらいです。そこで、師の逆を行って、大太刀を工夫したところ、師に怒られて破門されました」

「若いうちは、えて、そういう叛骨はんこつを誇りたがるものだ。そして」

「それから、越前の浄教寺村をとび出し、やはり富田流から出て、中条流を創たてた鐘巻自齋という先生を訪ねてゆきますと、それは気の毒だと、入門をゆるされ、四年ほど修行するうち、もうよかろうと師にもいわれるまでになりました」

「田舎師匠というものは、すぐ目録や免許を出すからの」

「ところが、自齋先生は容易にゆるしを出しません。先生が印可をゆるしたのは、私の兄弟子である伊藤弥五郎一刀齋ひとりだという話でした。——で私も、何とかして、印可をうけたいものと、臥薪嘗胆がしんしょうたんの苦行をしのんでいるうち、故郷くくにもとの母が死去したので、功を半ばに帰国しました」

「お国は」

「周防岩国すわうの産です。——で私は、帰国した後も、毎日、練磨を怠らずに、錦帯橋ほとりの畔ほとりへ出て、燕を斬り、柳を斬り、独りで工夫をやっていました。——母が亡くなります際に、伝来の家の刀ぞ、大事に持てといわれてくれましたこの長光ながみつの刀をもつて」

「ほ、長光か」

「銘はありませんが、そういう伝えています。国許くにもとでは、知られている刀で、物干竿ものほしざお

という名があるくらいです」

無口だと思いのほか、自分のすきな話題になると、美少年は問わないことまで語りだした。そして口を開き出すとなると、相手の気色などは見ていない。

そういう点や、またさつき自分で話した経歴などから見ても、すがたに似あわない我のつよい性格らしく思われた。

五

ちよつと、言葉をきつて、美少年はその眸に、雲のかけを映し、何か感慨に耽つていたが、

「——けれどその鐘巻先生も、昨年、大寿を全うして、ご病死なされてしまった」
 つぶや
 呟くようにいい、

「私は、周防にあつて、同門の草薙天鬼くさなぎてんきから、その報らせをうけた時、師恩に感泣しました——師の病床についていた草薙天鬼、それは私よりもずっと先輩だし、また、師の自齋とは叔父甥おいの血縁でもあるのですが、その者には、印可を与えずに、遠く離れている私

を思つてくれて、生前に、印可目錄を書き遺して、一目会つて、手ずから私に与えたいと申されたそうであります」

眸がうるんで来て、今にも涙のこぼれそうな眼になる。

祇園藤次は、この多感な美少年の述懐を聞いても、若い彼といつしよになつて、感傷を共にする気には元よりなれない。

だが、退屈に苦しんでいるよりは、ましだと考えて、

「ふム、なるほど」

熱心に聞いている顔つきを装うと、美少年は、鬱懷うつかいをもらすように、

「その時、すぐ行けばよかつたのです。けれど私は周防、師は上州の山間、何百里の道です。折わるく、私の母も、その前後に歿したので、遂に、師の死に目に会えませんでした」

——船がすこし揺れだした。冬雲に陽がかくれると、海は急に灰色を呈し、時々、舷ふなべりに飛沫しぶきが寒く立つ。

美少年はなお話をやめない。多感な語気をもつて語る。——それから先のことを綜合すると、彼の境遇は今、故郷の周防の家屋敷をたたみ、師の甥でもあり同門の友でもある草く薙天鬼さなぎという者と、どこかで落ち合おうというために、この旅行をつづけているものと

見られる。

「師の自齋には、何の身寄りもありません。で、甥の天鬼には、遺産といってもわずかでしようが、金を与え、遠く離れている私には、中条流の印可目録を遺してゆかれました。天鬼は、私のそれを預かって、今諸国を修行にあるいますが、来年の彼岸ひがんの中日には、上州と周防とのちようど中ほどの道程みちのりにあたる三河の鳳来寺山ほうらいじさんへ、双方からのぼって、対面しようという約束を書面で交わしてあります。そこで私は天鬼から師のおかたみを受けることになっているので、それまでは近畿のあたりを悠々ゆるゆると、修行がてら見物して歩こうと思っていますのです」

い、
ようやくいうだけのことをいい終ったように、美少年は改めて、話し相手の藤次にむか

「あなたは、大坂ですか」

「いや京都」

それきり黙って、しばらく、波音に耳をとられていたが、

「すると其そこもと許はやはり、兵法をもつて身を立てて行かれる気か」

藤次はさつきから少し軽蔑した顔つきであつたが、今もうんざりしたようにいう。この

頃のように、こう小生意気な兵法青年がうようよ歩いて、すぐ印可の目録のといつて誇っていることが、彼には、小賢こいじかしく聞えてならない。

そんなに天下に上手や達人が蚊みたいに殖ふえてたまるものか。第一自分などさえ、吉岡門に二十年近くもいて、やっとこれくらいなところであるのに——と身にひきくらべ、

（こんなのが、将来に皆、どういう飯を食ってゆくのか）

と、思うのだった。

膝をかかえて、灰色の海をじつと見ていたと思うと、美少年はまた、

「——京都？」

と、つぶやいて、藤次のほうへ眸を向け直した。

「京都には、吉岡拳法の遺子、吉岡清十郎という人がいるそうですが、今でもやっておりますか？」

六

よいほどに聞いてみれば、だんだん口の幅を広くしてくる。気に食わない前髪めがと藤

次は小癩こしやくに思う。

けれど考え直してみると、こいつはまだ自分が吉岡門の高弟祇園藤次なる者であることを知らないのだ。知ったらさだめし前言に恥じて、びつくりする奴に違いない。

退屈こくのぎが昂かうじて、ひとつ擲から擲かつてやろうと、藤次はそこで、

「——されば、四条の吉岡道場も、相かわらず盛大にやっておるらしいが、其そこ許もとは、あの道場を訪れてみたことがあるか」

「京都へのぼつたら、ぜひ一度はどの程度か、吉岡清十郎と立合ってみたいと存じていますが、まだ訪ねてみたことはありません」

「ふッ……」

笑いたくなつた。藤次は顔を歪ゆがめた後から、輕蔑をみなぎらして、

「あそこへ行つて、片輪にならずに、門を戻つて来る自信が、あるかな？」

「なんの！」

美少年は突つ返すようにいった。——その言葉こそおかしけれ——とばかり笑い出すのだつた。

「大きな門戸を構えているので、世間が買いかぶっているのです、初代の拳法は達人だつた

でしようが、当主の清十郎も、その弟の伝七郎とやらも、たいした者じゃないらしい」

「だが、当ってみなければ、分るまいが」

「もつぱら諸国の武芸者のうわさです。うわさですから、皆が皆、ほんとでもありませんまいが、まず京流吉岡も、あれでおしまいだろうとは、よく聞くことですね」

大概にしろといいたい。藤次は、こちらで名乗ってやろうかと思ったが、ここでけりを着けたのでは、^{からか}揶揄つたのではなく、^か揶揄われたに等しいものになる。船が、大坂へ着くにはまだ大分間もあることだし、

「なるほど、このごろは、諸国にも天狗が多いそうだから、そういう評判もあろうな。ところで、おん身は先ほど、師を離れて、郷里にあるうちは、毎日のように、錦帯橋の畔へ^{ほとり}出て、飛燕^{ひえん}を斬って大太刀のつかいようを工夫されたと仰っしゃったな」

「いいました」

「じゃあ、この船で、時々、ああして飛び来つては掠^{かす}めてゆく海鳥^{うみどり}を、その大太刀で、斬り落すことも容易であらうな」

「……………」

何か悪感情を包んでいる相手のことばを、美少年もようやくさとつたらしく、瞬間、ま

じまじと藤次のそういう浅黒い唇を見つめていたが、やがて、

「出来たって、そんな莫迦^{ばか}な芸を私はやる気になれぬ。——あなたは、それを私にやらせようという肚だろうが」

「でも、京流吉岡を、眼下に見るほどな自信のある腕なら」

「吉岡をくさしたことが、あなたの氣に入らなかったとみえる。あなたは、古岡の門人か、縁者か」

「何でもないが、京都の人間だから、京都の吉岡を悪くいわれれば、やはりおもしろくない」

「ははは、うわさですよ、私がいったわけじゃない」

「若衆」

「なんです」

「生兵法^{なまびようほう}という諺^{ことわざ}を知っているか。将来のため忠言しておくが、世間をそう甘く見すぎると、出世はせんぜ。やれ、中条流の印可目録を取っているの、飛燕を斬って、大太刀の工夫をしたのと、人をみな盲とするような法螺^{ほら}はよせ。よいか、法螺をふくのも相手を
見てふくのだぜ」

七

「私を、法螺ふきと、仰つしやったな」

美少年が、こう念を押すように突つ込むと、

「いったがどうした」

藤次は、反^そらした胸を、わざと相手へ寄せて、

「おまえの将来のためにいつてやったのだ。若い者の衞^{てら}いも、少しは愛嬌だが、あまり過ぎると見るしい」

「……………」

「最前から何事もふむふむと聞いているので、人を舐^なめてつい駄^なぼらが出たのだろうが、実は此^{この}方^{ほう}こそ、吉岡清十郎の高弟、祇園藤次という者だ。以後、京流吉岡の悪評をいふらすと、ただはおかんぞ」

まわ
周りの船客がじろじろ見るので、藤次はそれだけの権威と立場とを明らかにして、

「このごろの若い奴は、生意気でいかん」

つぶやきながら、独り、とも艦のほうへ歩み去った。

——と、黙って美少年もその後について行くのだった。

（何かなくては済まないらしいぞ）

と予感したので、船客たちは、遠方からではあるが、皆、二人のほうへ首を振向けた。
藤次は決して事を好んだわけではない。大坂へ着けば、船着場にはお甲が待っているかもしれないのだ。女と会う前に、年下の者と、喧嘩などをやっては、人目につくし、あとがうるさい。

そしらぬ顔して、彼は、ふなべりらん舷の欄へひじ肱をかけ、ともかじ艦舵の下にうず巻いている青ぐろい瀬を見ていた。

「もし」

美少年は、その背中を軽くたたいた。相当に拗しつこい性質である。だが、感情に激しているような語気ではない、極めて静かなのだ。

「もし……藤次先生」

知らないふうも装よそおえないので、

「なんだ」

顔を向けると、

「あなたは、人中ひとなかにおいて、私を法螺ほらふきと申されたが、それでは私も面目が立たないから、最前、やつて見ろとおおせられた芸を、やむなくここで演じてみようと思存します。

立ち会つてください」

「わしが、何を求めたか」

「お忘れのはずはない。あなたは、私が周防すおうの錦帯橋ほとりの畔で、飛燕を斬つて大太刀の修練をしたといつたら、それを笑つて、然らば、この船を頻りと掠め飛んでいる海鳥うみどりを斬つてみせろといわれたではないか」

「それはいった」

「海鳥を斬つてお目にかけたら、その一事だけでも、私がまるで嘘ばかりいつている人間でないことがおわかりになろう」

「それは——なる！」

「ですから、斬ります」

「ふむ」

と半ば、冷笑して、

「やせ我慢して、もの笑いになつてもつまらんぜ」

「いや、やります」

「止めはしないが」

「しからば、立ち会いますかな」

「よし、見届けよう」

藤次が、張りをこめていうと、美少年は、二十畳も敷ける艫とものまん中に立つて、船板を踏まえ、背に負っている「物干竿ものほしざお」という太太刀のつかへ手をやりながら、

「藤次先生、藤次先生」

と、いった。

藤次は、その構えを白い眼で見すえながら、何用か、と彼方かなたから答えた。

すると、美少年は、真面目くさつて、

「おそれ入るが、海鳥を、私のまえへ呼び降ろしていただきたい。何羽でも、斬つて見せます」

一休和尚おしようの頓智とんちばなしをそのまま用いて、美少年は、藤次へ酬むくいたものとみえる。

藤次はあきらかに愚弄ぐろうされたのだ。人を小馬鹿にするも程があるといつていい。当然、烈火のように怒った。

「だまれ。あのように空を翔かけている海鳥を思いのままに、眼の前へ呼びよせられるものなら、誰でも斬るわ」

すると美少年は、

「海は千里、劍つるぎは三尺、側へ来ないものは、私にも斬れません」

それ見たかといわないばかりに藤次は二、三步出て、

「逃げ口上をいう奴だ。出来ませんなら出来ませんと、素直あやまに謝れ」

「いや、謝るほどなら、こんな身構つかまつえは仕りません。海鳥のかわりに、べつな物を斬ってお目にかける」

「何を？」

「藤次先生、もう五歩こちらへ出て来ませんか」

「なんだ」

「あなたのお首を拝借したい。私が法螺ほらふきか否かを試せといったそのお首だ。罪もない海鳥を斬るよりは、そのお首のほうが恰好ですから」

「ばッ、ばかいえッ」

思わず藤次はその首をすくめた。——とたんに美少年の肱ひじは弦つるの刎はねたように、背の大剣を抜いたのであった。ばつと空氣の斬れる音がした。三尺の長剣が、針ほどな光にしか見えないくらい迅はやかつたのである。

「——な、なにするかッ」

よろめきながら藤次は襟くびへ手をやった。

首はたしかに着いているし、そのほかなんの異状も感じなかった。

「おわかりか」

美少年は、そういつて、荷にこうり梱のあいだへ立ち去った。

土気色になった自分の顔いろを、藤次はいかんとすることが出来なかった。だが、その時はまだ自分の五体のうちの最も重要な部分が斬り落されていることなど気づかなかった。

美少年が去った後で、ふと、冬陽のうすくあたっている船板の上を見ると、変な物が落

ちている。それは、刷毛はけのような小さな毛の束だ、アツと、初めて気づいて、自分の髪へ手をやってみると、鬚まげがない。

「や、や？ ……」

撫なでまわして驚き顔をしている間に、根の元結もとゆいがほぐれて、鬢びんの毛はばらりと顔にちらかった。

「やったな！ 青二才」

棒のように胸へ突つ張つてくる憤怒であつた。美少年が自ら語っていたことのすべてが、嘘ほらでも法螺ほらでもないことが、とたんに分りすぎるほど彼には分つた。年に似合わない怖ろしい技だと思う。若い仲間にも、ああいう若いのもいるのかと今さら思う。

だが、頭脳あたまの驚嘆と、肚はらのその憤怒とは、べつ物である。そこからのぞいて見ると、美少年は先刻さつきの席へもどつて、何か、失くし物でもしたように、自分の足もとを見廻している。藤次は、絶妙な隙をその体に見つけた。——刀の柄糸に唾つばをくれて固く握つたのである。身をかがめて、美少年のうしろへ迫り、こんどは、彼の鬚まげを斬り払つてやろうとするのだつた。

——だが藤次には、その鬚まげ先だけを鮮やかに斬る確信はなかつた。当然、顔にかかる、

頭の鉢を横に割るだろう。勿論、それでさしつかえない。

うむっ！ 満身が赤く膨れあがつて、彼の唇と鼻腔が出る息を結んだ時であつた。

——胴の間の彼方で、小袖幕を囲つて、最前から、「うんすん骨牌」という博戯に千金を賭けて、夢中になっていた阿波、堺、大坂あたりの商人たちが、

「札が足りない」

「どこへ飛んだのじゃ？」

「そつちを見ろ」

「いや、こつちにもない」

敷物を払つて騒いでいたが、そのうちの一人が、ふと、大空を仰いで、

「やつ、小猿めが！ あんなところへ！」

高い帆柱の上を指さして、頓狂なさけびをあげた。

九

——なるほど、猿だ、猿がいる。

三十尺もあろうかと思われる帆ばしらの天つ辺に。

下では、ほかの船客までが、海上の旅に倦み飽いていた折からなので、事こそあれと、みな顔を空へ上げ、

「やあ、何か啜くわえている」

「骨牌かるたのふだですよ」

「ハハア、あそこで、金持ち連がやっていた骨牌を攫さらって行っただですか」

「ごらんなさい、小猿のやつも、帆ばしらの上で骨牌をめくる真似をしている」
ヒラヒラと、そういう顔の中へ一枚の札が落ちて来た。

「畜生」

堺の商人あきんどのひとりが、あわててそれを拾いあげたが、

「まだ足りない。もう三、四枚持っているはずだ」

他の連中も口々に――

「誰か、猿のやつから、札を奪とり返して来いやい。博戯あそびが出来ぬ」

「どうして、登れるものか、あんな高いところへ」

「船頭なら」

「それや登るだろう」

「金をやって、船頭に取って来てもらおうじゃないか」

そこで船頭は、金をもらって、承諾はしたが、海上では司権者である船頭として、一応、この事件の責任を問わなければならないという顔つきで、

「お客衆」

と、荷物の上へ上がって、船客たちを見まわし、

「——あの小猿は、いったい誰の飼い猿じゃ、飼い主はここへ出てもらおう」といった。

どこからも、おれのだといって名乗り出る者が不在。しかし、その辺にいた客はみな知っている。例の美少年のすがたへ期せずして一同の眼が注がれた。

船頭も知っていた筈だ。そこで当然業^{ごう}腹^{はら}が煮えてきたに違いない。船頭声を一段と張りあげて、

「飼い主はねえのか。飼い主がねえならねえように、おらが処分するが、あとで苦情はあんめえな」

いないのではない、美少年は荷物に倚^よりかかって、黙然と、何か考え事でもしている様

子なのだ。

「……なんて図々しい」

と、ささやく者がある。船頭もぎょろりと美少年の頭を見ていた。博戯あそびを邪さまたげられた金持ち階級は、遽にわかにぎわめいて悪口を口走る。——鉄面皮てつめんぴだの、唾おしかの、つんぽかのと。

だが美少年は、ちよつと膝を横に坐り直したきりだった。どこへ吹く風かという姿である。

「海のうえにも、猿が住むとみえて、飼い主のねえ猿が舞いこんだ。飼い主のねえ畜生なら、どうして始末してもかまうめい。——皆の衆、これほど船頭は断っているのに飼い主が名乗って出ねえだ。後で、耳が遠いの、聞かなかつたのと、苦情のねえように、証人になつてくらつせえ」

「いいとも、わしらが証人に立つてやる」

と例の旦那連中が、腹を立てて、呶鳴だんぼしごった。

船頭は、船底へゆく段梯子だんぼしごを下りて行つた。上がつて来た時には、火のついた火縄と、種子島銃たねがしまじゆうを持っていた。

（——怒つたな船頭）

同時に、あの飼い主の若衆がどう出るだろうか、人々はまた、美少年の姿を振りかえつてみた。

十

のん気なのは、上の小猿だ。

潮風の空で、骨牌かるたを見ている。それがいかにも意思があつて人間をからかっているように見えるのである。

だが——突然、白い歯を剥むいて、キツ、キツ、キツと啼き出すと、帆車の横木を走ったり、帆ばしらの突端へ飛びついたり、急に狼狽うろたしはじめた。

「……………」

下では、船頭が、火縄を鼻の先にいぶして種子島の銃つっさき先を空へ向け、じつと、小猿を狙いすましていた。

「ざまを見ろ、あわてやがつて——」

と、だいぶ酒の入っているらしい旦那連のうちの一人がいう。

「しつ……」

と、堺の商人が袂たもとをひいた。それまで唾おしのように他所よそを向いていた美少年がぐつと体を起し、

「船頭」

と、こちらへ声を投げたからである。

こんどは、船頭のほうでそら耳を装っていた。火縄が、チラと関せきがね金の煙えんしょう 硝へ口火を点じかけた。——と、間髪を容れなかつたのである。

「あつ」

ドカアンと弾音はたかく反そツぽへ走つた。銃つは美少年の手に引ひつ奪たくられているのだつた。船客たちは、耳を抑えて俯うつつ伏した。——その頭のうえを越して、ぶうんと、鉄砲は船の外なる渦潮の中へ投げ捨てられていた。

「な！ なにしやがる！」

これは船頭の当然な怒号だった。おどりがつて美少年の胸ぐらにぶら下がったのである。

頑丈な船乗ふなのりの体も、美少年のまえに正当に立つと、ぶら下がったという言葉がおかし

くないほど、背も骨ぐみも、段ちがい美少年のほう^{たくま}が遅しくて立派だったのである。

「おまえこそ、何するのだ、飛び道具で、無心の小猿を撃ち落そうとしたろう」

「そうだ」

「不届きではないか」

「なぜッ。——断つてあるぞ、おらの方では」

「どう断つた？」

「おめえは、眼がねえのか、耳がねえのか」

「だまれ、こう見えても、わしは客だ、わしは武士だ。船頭風情の身をもって、客よりも高い場所に突つ立ち、頭の上からあのように喚^{わめ}いたとて、侍が、答えられるか」

「いい抜けを吐^ほぎくな。そのためにおらは何度も断つてある。その断りかたが気に入わねえにせよ、なぜ、おらが立つ前に、あちらの客衆が迷惑したのを、黙りこくって、知らぬふりしていさらしたのじゃ」

「あちらの客衆とは——おおあ^{とほり}の幕^{さつぎ}の中で先刻から博戯^{ばくち}をしておった町人どもか」

「大口をたたくな、あの客衆は、並の客衆よりは、三倍も高い船賃を出してござらっしゃる」

「いよいよ不埒な町人どもだ、衆人の中で、大びらに金を賭け、酒の座を気ままに占め、わが物顔して、この船中に振舞っている様子、面白くない人間どもかなと眺めていたのじや。小猿が骨牌かるたのふだを取って逃げたからとて、この身がいいつけたわけではなし、あの連中のする悪戯いたずらを、猿が真似したまでのこと、わしから迷惑を詫び出るすじはない」

ことばの半ばから、美少年は、血の気の多いその顔を、彼方あなたの一つどころにかたまっている堺や大坂の旦那連のほうへ向けて、極めて皮肉な笑い方をしていったのであった。

わすれ貝

一

潮騒しおさいの夕闇に、木津川湊みなとの灯は赤く戦そよいでいる。

どこことなく魚臭いものが迫る。陸おかが近づいたのだ。船から呼ばれる声と、陸でわいわいという声が、徐々に、距離をちぢめていた。

どぼーんと、真つ白なしぶきが立つ。錨いかりが抛ほうりこまれたのである。繫綱もやいが投げられる――

―渡り板が架けられる。

「かしわ屋でございますか」

「住吉の社家の息子さまは、この船にござらっしゃらぬか」

「飛脚屋さんはいるかね」

「旦那様あ」

渡海場の埠頭にかたまっていた迎えの提燈は、灯の波を作って船の横へ迫ってゆく。

その中を、例の美少年が、揉まれて降りて行った。肩に小猿を乗せている姿を見て、旅籠の客引きが二、三人、

「もしもし、猿のお泊り賃は、無料にいたしておきますが、私どもへお越しく下さいませぬか」

「てまえどもは住吉の門前で、ご参詣にもよし、座敷の見晴らしも至極よいお部屋がございますが」

それらの者には一顧もせず、そうかといって迎えに来ている知人もないらしく、美少年は小猿をかついで、真つ先にこの湊から姿を消してしまった。

それを見送って、

「何んていう生意気なやつだろう。すこしばかり兵法が出来ると思って」

「まったく、あの若造のために、船の中は半日、みんな面白くなく暮してしまった」

「こつちが町人でなければ、あのままだでこの船を降ろすのじゃないが」

「まあまあ、侍には、たとと威張らせておいてやるがいいさ。肩で風を切っていれば、それで気が済むんだから他愛はない。わしら町人は、花は人にくれても、実を喰おうという流儀だから、今日ぐらいな忌々しさは、仕方があるまいて」

こんなことをいいながら、荷物沢山な旅すがたを揃えて、そろそろ降りて行つたのは例の堺や大坂の商人連であり、そこへは無数の出迎えが、提燈や乗物をあつめ、一人

一人に、幾人かの女の顔も取り巻いていた。

祇園藤次は、誰よりも後から、こつそりと陸へ上がっていた。

形容のできない顔つきである。不愉快といって、きょうほど不愉快な日はなかったに違いない。鬚をちよん切られた頭には、頭巾をかぶせているが、眉にも唇にも、暗澹とただよっている。

と。——その影を見つけ、

「もし……ここですよ、藤次さま」

その女も、頭巾をかぶっていた。渡海場に立つて吹き曝^{さら}されていた顔が、寒さに硬^{こわ}ばつて、年をかくしている皺^{しわ}が、白粉^{おしろい}の上に出ていた。

「お、お甲か。……来ていたのか」

「来ていたのかつて、ここへ迎えに来ているようにと、私へ手紙をよこしたくせに」

「だが、間にあうかどうか、と実は思っていたものだから」

「どうしたんですえ、ぼんやりして——」

「イヤ、すこし、船に暈^よつたとみえる……。とにかく、住吉へでも行つて、よい宿を見つけよう」

「え、あちらに、駕も連れて来ましたから」

「そいつは有難う、じゃあ宿も先に取っておいてくれたか」

「みな様も、待ちかねているでしょう」

「え？」

意外な顔して、藤次は、

「オイお甲、ちょっと待ってくれ。おまえとここで落ちあつたのは、二人ぎりでどこか静かな家で二、三日悠^ゆつくりしようという考えじゃないか。……それを、皆様とは一体、誰

と誰のことをいうのだ」

二

「乗らない。わしは乗らない」

祇園藤次は、迎えの駕を拒^{こば}んでぶんぶん怒りながら、お甲の先へ歩いていった。

お甲が何かいうと、

「ばかつ」

と、ものをいわせない。

彼をして、こう立腹させた原因は、お甲が告げた新しい事情にも因^{もと}づくが、すでに船の中からもやもやしていた鬱憤が、あわせて今、爆発したことは否^{いな}めない。

「おれは、一人で泊るつ。駕なんか追ッ返せ。なんだ。人の気も知らないで、ばかつ、ばかつ！」

と、袂^{たもと}を払う。

河の前の雑魚^{ざこ}市場は、みな戸が閉まって、魚の鱗^{うろこ}が、貝をちらしたように、暗い長屋の

戸に光っていた。

そこまで来ると、人影も少なくなつたので、お甲は、藤次に抱きついた。

「およしなさい、見ツともない」

「離せつ」

「一人で泊つたら、あつちが変なものになりますよ」

「どうにでもなれつ」

「そんなこといわないで」

白粉おしろいと髪かみの香の、冷たい頬が、藤次の頬へ貼りついた。藤次はやや旅の孤独よみがえから甦よみがえつた。

「……ネ、頼みますから」

「がっかりした」

「そうでしょう、だけど、二人にはまたいい機おりがあるでしょう」

「おれは、せめて大坂で二、三日は二人ぎりど、楽しみにして着いたのだ」

「分つてますよ」

「わかつてゐるなら、なぜ他ほかの者を引ツ張つて来たのだ。俺が思つてゐるほど、おまえは

俺を思っていないからだろう」

藤次が責めると、

「また、あんな……」

と、お甲はうらめしげな眼をこらして、泣きたいような顔をして見せる。

彼女のいい訳は、こうだった。

藤次から飛脚を受け取ると、彼女は勿論、自分だけで大坂へ来るつもりだった。ところが折わるく、吉岡清十郎がその日もまた、六、七名の門人を連れて「よもぎの寮」へ飲みに来て、いつのまにか、朱実あけみの口から、そのことを聞いてしまい、

（藤次が大坂へ着くなら、わしらも迎えに行つてやろうじゃないか）

といい出した。それに調子をあわせる取り巻き連も多く、

（朱実も行け）

と、いう騒ぎになってしまい、いやともいえずお甲は一行十人ほどの中に交まじつて住吉の旅館に落着き、一同の遊んでいる間に、自分だけ一人で駕を持ってここへ迎えに来たのだという。

——聞いてみれば、事情はやむを得ないものだったが、藤次は腐りきってしまった。今

日という日に迷信がわき起るほど、何か、後にも先にも、不愉快ばかりが考えられた。
第一、陸を踏むとすぐ、清十郎だの同輩だのに、旅先の首尾を聞かれることが辛い。
いやもつと嫌なことは、この頭巾を脱ぐことである。

(何というおう)

彼は、^{まげ}鬘のない頭を苦に病んだ、彼にも侍というものの面目はある。人に知られない恥なら搔いてもよいが、人にわかる恥を重大に思う。

「……じゃあ仕方がない、住吉へ行くから駕を連れて来い」
「乗ってくださいますか」

お甲はまた、渡海場のほうへ、駈け戻った。

三

この夕方、船で着く藤次を迎えに行くといつて出たお甲は、まだ帰って来ない。その間に、同勢は風呂にはいり、旅舎のどてらに着膨れて、

「やがて、藤次もお甲も見えるだろう、その間、こうしていてもつまらんじゃないか」

飲んで待つていようということになったのは、この同勢として、当然な納まりであつた。藤次の顔が見えるまでのつなぎとして飲んでいたうちはいいが、いつの間にか膝がくずれ、杯がみだれ出すと、もうそんな者はどうでもよくなつてしまい、

「この住吉には、唄い女はいないのか」

「きれいなのを三、四人呼ぼうじやないか。どうだ諸卿」

と、病気が始まる。

（よせ、つまらない）などという顔は、この中には一つもない。ただ師の吉岡清十郎の顔いろを多少憚るのであつたが、

「若先生には、朱実が側についているから、別間のほうへ、お移り願おうじやないか」

横着な奴らかなと清十郎はにが笑う。けれど、それは自分に取つても好ましい。炬燵のある部屋に入つて、朱実とふたりで差し向うほうが、この同勢と飲んでいるより、どれほどいい人生かわからない。

「さあ、これからだ」

とは門人どもが、門人だけになつてからの発声だつた。やがて程なく十三間川の名物という怪しげな唄い女が笛、三味線などのひねこびた楽器を持つて庭にあらわれ、

「いつたい、あんたはん達は、喧嘩するのかいな、酒あがるのかいな」と訊ねる。

すでによほど大トラになっている一人が、

「ばかつ、金を費^{つか}つて喧嘩する奴があるか。おまえたちを呼ぶからには、大いに飲んで遊ぶのだ」

「じゃあ、まちつと、静かにあがりやはつたらどうかいな」

手際よく扱^{てぎわ}われて、

「然らば、歌おう」

抛^{ほう}り出していた毛脛^{けずね}をひつ込めたり、横にしていた体を起して、絃歌^{げんか}ようやく盛んならんとする頃おい、小女が来て、

「あの、お客様が、船からお着きなさいまして、ただ今、お連れ様といっしよに、ここへきやはりまする」

と、告げて行つた。

「なんだ、何が来たと」

「藤次といつた」

「冬至冬至、魚の目か」
とうじ

お甲と祇園藤次は、あきれ顔して部屋の口に立っていた。誰も彼を待ったらしい者是一名もないのだった。藤次は、一体何のために、この年末この同勢が、住吉へなど来ているのかと疑った。お甲にいわせれば自分を迎えに来たのだというが、どこに自分を迎えに来たらしい人間が一人でもいるか、むつとして、

「おい、下婢」
おんな

「はい」

「若先生は、どこにいらつしやるか、若先生のいる部屋へ行こう」

廊下をもどりかけると、

「よう、先輩、ただ今お帰りか。——一同が待つておるのに、お甲などと、途中でよろしくやっているなんて、この先輩、怪けしからんぞ」

大トラが立ち上がって来て首の根にかじりついた。たまらない臭気を放つ。逃げようとしたので、トラは強引に座敷へ引きずり込んだ、そして、膳を踏みつけたから形のごとく杯盤狼藉はいばんろうぜきを作つて、共倒れに仆れた。

「……あつ、頭巾を」

藤次は、あわてて自分のそれへ手をやったが遅かった。こつた拍子に、トラは彼の頭巾をつかんで後ろへ腰をついていた。

四

「あれ？」

と、奇異な感じに打たれたように、一座の眼は、藤次の鬚まげのない頭にあつまつて、頭をどうかなされたので？」

「ホホウ、奇妙なお髪ぐし」

「どうしたわけでござる」

無遠慮な凝視を浴び、藤次は狼狽に顔をどす赤くして、頭巾をかぶり直しながら、

「いや、ちとな、その腫物しゅもつができたので、誤魔化ごまかしたが、

「わははは」

と、皆笑いくずれ、

「旅土産は、腫物でござったか」

「できものに閉じ蓋」

「頭かくして尻かくさず」

「論より証拠」

「犬も歩けば——」

などと駄洒落をいって、誰も藤次のいいわけを真に受けないのである。

その晩は、酒の興で済んだが、次の日になるとこの同勢が、ゆうべとは打って変って、旅舎のすぐ裏の浜辺に出て、天下の大事でも議すように、

「怪しからん沙汰だ」

と、肩を上げ、唾をとばし、肱を突つ張つて、小松の生えている砂地に円く坐っていた。

「——だが慥かか、その話は」

「この耳で、おれが聞いたのだ、おれが嘘をいうと思うのか」

「まあ、そう怒るな、怒ってみたところで仕方がない」

「仕方がないで黙過することはできん。いやしくも天下の兵法所をもって任じる吉岡道場の名折れだ、断じて、これを捨ておくことはできないぞ」

「しからば、どうするのだ」

「これからでも遅くあるまい。その小猿を連れて歩いている前髪の武者修行を捜し出す！
どんなことをしても捜し出す！　そして、彼奴の鬣をちよん切って、祇園藤次ずれの恥
辱じやない、吉岡道場の存在を厳かにする。——異議があるか」

ゆうベトラになった酔っぱらいが、洒落ていえば、今日は龍となって嘯くかのように、
趣をかえて、激昂しているのだ。

その動機をたずねると、こうなのである。——今朝がた、彼らが特に朝風呂を命じて、
宿酔の脂をながしている、そこへ入浴して来た相客の者で、堺の町人というものが、
きのう阿波から大坂へくる便船のうちでは、実におもしろいことがあったといって、例の
小猿を携えている美少年のうわさを語り、祇園藤次が鬣を切り落された由来に及んでは、
手真似、顔つきまでして、

（なんでもその鬣を切られたほうの侍は、京都の吉岡道場の高弟だっていっていたが、あ
んなのが高弟じや吉岡道場もざまはない）

ことおかしげに、湯に入っているうち喋舌って行った。

彼らの憤激はそれから始まったものである。怪しからぬ先輩と、祇園藤次をつかまえて

詰問に及ぼうとすると、藤次は今朝早く、吉岡清十郎と何か話していたが、朝飯をたべるとすぐ、お甲とふたりで、先へ京都へ発^たつてしまったという。

いよいよもつて、うわさは事実がちがいない。そういう腰抜けの先輩を追いかけるのは愚かである、追うならばどの何者かわからないが、自分たちの手で、小猿を携えた前髪を捕まえ、存分に、吉岡道場の汚名をそいでやろうじゃないか。

「——異議があるか」

「勿論、ない」

「しからば——」

と、手筈をしめし合せ、その同勢は、袴^{はかま}の砂を払って立ち上がった。

五

住吉の浦は、眼のおよぶ限り、白薔薇^{しろばら}をつないだような波である。冬とも思えない磯の香が陽に煙っている。

朱実^{あけみ}は、白い脛^{はぎ}を見せて、波に戯れながら何か拾って見ては捨てていた。

何事か起つたように、吉岡の門人たちが思い思いな方角へ向い、刀のこじりを刎ね上げて分れて行くのを眺めて、

「オヤ、何だろう」

朱実はまるい眼をしながら、波打ち際に立つて見送っていた。

いちばん最後になった門人の一人は、彼女のすぐ側を駈けて来たので、

「何処へ行くのです」

声をかけると、

「オ、朱実か」

足を止めて――

「おまえも一緒になつて捜さんか。ほかの者もみな手分けして、捜しに行ったんだ」

「何を捜しに行ったんです」

「小猿を携えている前髪の若い侍さ」

「その人がどうかしたのですか」

「抛ほうつておいては、清十郎先生のお名まえにもかかわるのだ」

祇園藤次の飛んでもない置土産の一件を話して聞かすと、朱実は興もない口吻くちぶりで、

「皆さんは、始終喧嘩ばかり捜しているんですね」

と、たしなめ顔にいう。

「何も喧嘩を好むわけじゃないが、そんな青二才を、黙って捨てておいては天下の兵法所たる京流吉岡の名折れになるじゃないか」

「なつたつていいじゃありませんか」

「ばかいえ」

「男つて、ずいぶんつまらないことばかり捜して、日を暮しているんですね」

「じゃあ、おまえは、さつきからそんなところで何を捜しているんだ」

「わたし——」

朱実は、足もとのきれいな砂へ、眼を落して、

「わたしは、貝殻を見つけているの」

「貝殻？ ……それしろ、女の日の暮し方のほうが、なおくだらないじゃないか。貝殻など何も捜さなくつても、天そらの星ほど、こんなに落ちている」

「わたしの捜しているのは、そんなくだらない貝殻じゃありません。わすれ貝です」

「わすれ貝、そんな貝があるものか」

「ほかの浜にはないが、この住吉の浦にだけはあるんですって」

「ないよ」

「あるんですよ」……いい争って、朱実は、

「嘘だと思えば証拠を見せてあげますからこつちへ来てごらんさい」

と、ほど遠からぬ所の松並木の下へ、無理やりにその門人を引っぱって来て一つの碑を指した。

いとまあらば

ひろひに行かむ住吉の

きしに寄るてふ

恋わすれ貝

新勅撰集のうちにある古歌の一首がそれには刻んである。朱実は誇って、

「どうです、これでもないといえますか」

「伝説だよ、取るにも足らん歌よみの嘘だ」

「住吉にはまだ、わすれ水、わすれ草などという物もあるんです」

「じゃ、あるとおくさ。——だが、それが一体何のお禁^{まじない}厭になるのかい」

「わすれ貝を帶かたもとの中へ秘かくしておく、物事が何でも忘れっぽくなるんですとさ」

「その上、もつと忘れっぽくなりたいのかい」

「ええ、何もかも忘れてしまいたい、忘れられないために、わたしは今、夜も寝られないし、昼間もくるしいんです。……だから捜しているの。あんたも一緒になつて捜してくださいよ」

「それどころじゃない」

思い出したように、その門人は足の向きを変えて、どこかへ駈けていってしまった。

六

——忘れない。

苦しくなると、そう思うほどだったが、また、

「忘れたくない」

朱実は、胸を抱いて、矛盾の境さかいに立った。

もしほんとにわすれ貝という物があるならば、それはあの清十郎の袂へこそ、そつと入

れてやりたい。そしてこの自分という者を彼から忘れてもらいたいと、ため息ついて思う。
「執^{しつ}こい人……」

思うだけでも、朱実^{しゆじ}は心がふさいだ。自分の青春をのろうために、あの清十郎は生活しているような気もちにさえ襲^{おそ}われる。

清十郎のねばり濃い求愛に、心が暗くなる時は、必ずその心のすみで、彼女は武蔵^{むさし}のことを考えた。——武蔵が心にあることは、救いであつたが、また苦しくもなつて来た。なぜならば、遮^さ二無二に今の境遇を切り解^{ほど}いて現在の身から夢の中へ、駆け出してしまったくなるからだつた。

「……だけど？」

彼女は、しかし幾たびもためらつた。自分はそこまでつき詰めているが、武蔵の気もちはわからなかつた。

「……アアいつそのこと忘れてしまいたい」

青い海が、ふと誘惑でさえあつた。朱実^{しゆじ}は、海を見つめていると、自分が怖^{こわ}くなった。何のためらいもなく、真^まっ直にそこへ向つて駆け行かれる気がするのである。

そのくせ自分がこんなつき詰めた考えを抱いているなどということは、およそ彼女の養^は

母のお甲も知らない。清十郎も思わない。誰でも朱実と一つに暮した者は皆、この娘は至つて快活で、お転婆で、そしてまだ、男性の恋愛が受け取れないほど開花の晩い質だと思ひこんでいるらしいのである。

朱実はそんな男たちやまた養母を、心のうちであかの他人に思っていた。どんな冗戯でもいえるのである。そしていつも鈴のついた袂を振って、駄々っ子みたいに振舞っているのだったが、独りになると、春の草いきれのように熱いため息をついていた。

「——お嬢さま、お嬢さま。さつきから先生が呼びでございますよ。どこへ行ったのかと、えらいご心配になつて」

旅舎の男だつた。彼女のすがたを碑のそばに見つけて、こういいながら走つて来た。

朱実がもどつて行つて見ると、清十郎はただひとりで、松かぜの音を静かに閉てこめた冬座敷で、緋の蒲団をかけた炬燵に手を入れてぽつねんとしていた。

彼女のすがたを見ると、

「どこへ行つていたのだ、この寒いのに」

「才才嫌だ、ちつとも寒くなんかありやしない。浜はいっぱいに陽があたっていますもの」
「何していた」

「貝をひろっていたの」

「子どもみたいだな」

「子どもですもの」

「正月が来たら幾歳いくつになると思う」

「幾歳になっても子どもでいたい……いいでしょう」

「よかあない。すこしは、おふくろの案じているのも考えてやれよ」

「おつ母さんなんか、何も私のことなんか考えているものですか。自分がまだ若い気ですもの」

「ま、炬燵こたつへお入り」

「炬燵のぼせなんか、逆上るから大つ嫌い。……私はまだ年寄りじゃありませんからね」

「朱実」……手くびをつかんで、清十郎は膝へ引き寄せた。

「きようは誰もいないらしい。おまえの養母おふくろも、粹をきかして先へ京都へ帰ったし……」

七

ふと清十郎の燃えている眼を見て、朱実はからだ^{こわ}が硬ばってしまった。

「……………」

無意識に身を退き^ひかけたが、彼の手は、彼女の手くびを離さない。痛いほど握りしめ、

「なぜ逃げる？」

とがめるように額^{ひたい}に青すじを立てる。

「逃げやしません」

「きようは皆、留守なのだ、こういう折はまたとない。そうだろう朱実」

「なにがです」

「そう棘^{とげとげ}々しくいうな。もうおまえと馴染^{なじ}んでから小一年、おれの気持もわかったはず、

お甲^おはとうに承知なのだ。おまえがおれに従わないのは、おれに腕がないからだとの養^お

母^{ふくろ}はいつている。……だから今日は」

「いけません！」……突然、朱実は俯^{うつ}ツ伏して、

「——離してください、この手をこの手を」

「どうしても」

「嫌、嫌、嫌ですっ」

手くびは捻じ切れそうに赤くなってくる。それでも清十郎は離さないのである。こういう場合に京八流の兵法が応用されては、いかに彼女が争つても無駄であろう。それにまた、きよ一の清十郎はいつもとやや違っていた。いつも自暴に酒を仰飲^{あお}つて執こくからむのだが、きよ一は酒気はないし、青白い顔をしているのだった。

「——朱実、おれをこうまで意地にさせて、おまえはまだ、おれに恥をかかすのか」
「知らないっ」

朱実は遂に、

「あたし、大きな声を出しますよ。離さないと、みんなを呼ぶからいい」

「呼んでみい！……この棟は母屋^{おもや}から離れているし、誰も来るなど断つてあるのだ」

「わたし帰ります」

「帰さん！」

「あなたの体じゃありません」

「ば、ばかつ。……おまえの養母^{おふくろ}に聞け、おまえの体には、おれの手から身代金ほどの金
が、お甲へやってあるのだ」

「おつかさんが私を売り物にしても、私は売った覚えはない。死んだって、嫌な男なぞに」

「なにつ」

緋の炬燵こたつぶとんが、朱実の顔を押しかぶせた。朱実は心臓のつぶれるような声をあげた。

……呼べど、呼べど、誰も来なかった。

ひんやりと薄陽のあたっている障子には、何事もなげに、松のかげが遠い潮鳴りのように揺れているに過ぎない。外は、あくまで静かな冬の日であった。チチ、チチ、とどこかで、人間の無残な振舞いとはおよそ遠い小鳥の声がしていた。

……ほど経たつて。

その障子のうちで、わつと号泣する朱実の声がもれた。

しいんとして、ややしばらくのあいだ、人の声も気はいもしないでいると思うと、清十郎が青じろい顔を持って、ついと、障子の外へすがたを現わした。

爪で引つ搔かれて血になった左の手の甲を抑えながら――

すると同時に、ぐわらつと突き破るように障子を開けて、朱実が外へ走って行った。

「あつ！……」

清十郎は身伸びをして、手拭てぬぐいで巻いた手を抑えながら、見送ってしまった。――捕まえる間もなかったのである。まるで、発狂したような迅はやさと取乱した彼女の姿であった。

「……………」

ちよつと、不安そうな眼をしたが、清十郎は、追つて行かなかつた。——どこへゆくか
と見ていた朱実の影がやはり旅舎やどのうちの一間ひとまへ、庭のほうから入つてかくれ込んだ様子
なので、ほつとするとともに、或る満足感を皮膚の下へたたえて、薄い笑いをその顔に歪ゆが
めていた。

無常

一

「これよ、権ごん叔父おじ」

「おい、なんじゃあ」

「おぬし、くたびれぬかよ」

「いささか気け懶だるうなっておる」

「そうじやろが、この婆もちと、きようは歩ひ行ろい飽いた。したが、さすがに住吉やしろの社、見

事な結構ではある。……ホホ、これが若宮八幡の秘木とかいう橘の樹かいの」

「そうとみえる」

「神功皇后さまが、三韓へご渡海なされた折に、八十艘の貢ぎ物のうちの第一のみつぎ物がこれじやといういい伝えじやが」

「婆よ、あの神馬小屋にいる馬は、よい馬ぞよ。加茂の競べ馬に出したら、あれこそ第一でなあろうに」

「ムム、月毛じやの」

「何やら立て札があるわ」

「この飼料のおん豆を煎じて飲ますれば、夜泣き、歯ぎしりが止むとある。権叔父、おぬし飲むがええ」

「ばかをいわしやれ」

笑いながら見廻して、

「おや、又八は」

「ほんに、又八はどこへ行つたぞいな」

「ヤア、ヤア、あれなる神楽の殿の下に足をやすめているわ」

「又よう。又ようっ——」

婆は手をあげて、

「そつちやへ行くと、元の大鳥居の方へ出るのであろうが。——高燈籠のほうへ行くのじやがな」

と呼ぶ。

又八は、のそりのそり歩いて来た。この婆ばばとこの爺じいを連れにして、毎日こう歩いてばかりいるのは、彼としてかなりの我慢らしく見える。それが五日や十日の見物というならまだしも、宮本武蔵という敵と巡り会って討ち果すまでの長い旅かと思うと、なんとしても憂鬱にならざるを得ない。

三人つながつて歩いていても無益であるから、各 わかれて、自分は自分で武蔵ありかの所在をさがすから——と提議してみたが、

（もうやがてすぐ正月、久しゆう母子おやこ一緒に屠蘇とそを酌くまぬし、いつ何時、これがこの世の名残りとなろうも知れぬお互いの身、せめて、ことしの正月だけは、ともに過ごこそうではないか）

母がいうので、又八は無下むげにもできなかった。元日か二日が過ぎたらすぐ別れようと思

う。だが、婆も爺も、先の短いせい、ほとけしやう仏性があるというのか、神社仏閣といふちいとお寶さいせん錢を奉つたり、長々と祈願をこめたりばかりして、今日も、この住吉だけで、ほとんど一日暮れてしまいそうだ。

「はよう来ぬか」

鈍どんどん々たる足つきで、顔をふくらませて来る又八をながめて、お杉隠居は、若い者のように焦じれた。

「勝手なことをいつてら」

又八は、口返答して、少しも足を早めないのだ。

「人を待たせる時は、いくらでも待たせておいて」

「何をいうぞ、この息子は。神さまの靈域へ来たら、神さまをおがむのは人間のあたりまえなことじゃ。おぬし、神にも仏にも手を合せたのを見たことがないが、そういう量見では、行く末が思いやらるる」

又八は、横を向いて、

「うるせえな」

それを聞き咎めてまた婆が、

「何がうるさいのじや」

初めの二、三日こそ、母子おやこの愛情は蜜より濃やかであつたが、馴れるにつれ又八が、事ごとにたてを突いたり老母を小馬鹿にしたりするので、旅籠はたごに帰るとお杉隠居は、この息子を前に坐らせ、毎夜のようにお談義ばかりであつた。

それが今、ここで始まりそんな気色なので権叔父は、こんなところで開き直られては閉口と、

「まアまア、まアまア」

と、母子ふたりをなだめて歩み出した。

二

困つた母子おやこだと権叔父は思う。

何とか、隠居のきげんを直し、又八のふくれ面つらもなだめたいものだ、双方に気をつかつて歩いている。

「ホ、よいにおいがすると思つたら、あれなる磯茶屋で、焼き蛤はまぐりをひさいでおる。婆ひよ一

酌としやく やろうではないか」

高燈籠の近くにある海辺の葭簀よしず茶屋であつた。気のすすまない顔つきの二人を誘つて、

「酒あるか」

権叔父は先へ入つて行く。

そして、

「さ、又八もきげん直せ。婆もちとやかまし過ぎるぞよ」

杯を出すと、

「飲みとうない」

お杉隠居は、横を向く。

引つ込みを失つて、権叔父はその杯を、

「じゃあ又八」

と、彼へ酌さした。

むツつりむツつり又八はたちまち二、三本ほど飲みほしてしまう。それが老母の氣に喰われないことは勿論である。

「おい、もう一本」

権叔父をさし措いて、又八が四本目を求めると、

「いい加減にしやれ！」

と、婆は叱った。

「遊山ゆざんや酒のむためのこの旅かよ。権叔父も、ほどにしたがよい。幾歳いくつになつても、又八と同じように、年がいもない人じゃ」

きめつけられた権叔父は、独りで飲んだように真つ赤になつた顔の遣り場ばを失つて、てれ隠しに撫で廻し、

「そうじゃ、ほんに違いない」

のそのそ先に軒先へ出てしまう。

その後で始まつたらしい。又八をつかまえてお杉隠居の諄々じゆんじゆんたる訓戒である。この烈しくて脆い女親の憂いと愛は、わが子にその本能を揺り起すと、とても宿屋へ帰るまで待つていられなかつた。他人ひとがいようといまいと氣にもかけない。——又八はそれに対して憤つとした反抗を顔に示して睨め返かえしている。

いうだけいわせて、

「おふくろ」

こんどは又八からいい出した。

「じゃあ、この俺という人間を、おふくろは結局、意気地なしの腰ぬけの、親不孝者と折紙つけているのだな」

「そうじゃろが、今日まで、汝^われのして来た行状のどこに意気地のあるところがあるかよ」
「俺だって、そう見くびった者じゃない。おふくろなどに分るものか」

「わからないでか、子を見ること親に如^しかずじゃ。汝^われのような子を持ったが、本位田家の不作というもの」

「だまって見ている、まだおれは若いのだ。婆あめ、悪たれいうて、草葉の蔭から後悔するな」

「才、その後悔ならしてみたい。だが恐らくは、百年待っても覚^{おぼ}つかないことじやろう。思えば、嘆かわしい」

「嘆かわしい子なら持つていても仕方があるまい。おれから去つてやる」

憤然と、又八は立った。そして、ぷいとお股に彼^{かなた}方へ歩き出して行くのだった。

婆は、あわてて、

「い、これっ」

と、ふるえ声で呼び止めたが又八は振り向かなかった。――止めてくれてもよきそうな権叔父はまた権叔父で、何を暢気のんきな顔して見ているのか、海のほうに向つて、じつと、大きな眼をすえたきり動かない。

そこで、婆は、いちど上げた腰を床しょうぎ几にもどして、
「権叔父つ、止めるでない。止めるでないぞよつ」

三

その声に、

「婆」

権叔父は答えて振り向いたが、いうことは、隠居の期待とちがっていた。

「あの女子おなご、なんとも、いぶかしいわ、ちよつと、待つてくれい」

いうが早い、権叔父は、蛤茶屋はまぐりの軒先へ笠ぼうしを抛なつて、まるで弦つるから放たれたように、海へ向つて駈け出して行つた。

隠居は、おどろいて、

「阿呆つ、どこへおじやるツ、それところじやないわ！ 又八がつ——」

と、彼につづいて十間ほど駈けて行つたが、磯の藻草もぐさに足をからまれて、勢いよく前へ転んだ。

「ば、ばかつ」

顔も肩も、砂だらけになって、婆は這い起きた。

そして腹立たしげに、権叔父の姿を捜していた眼まなこが、突然、鏡のように大きくなつたと思うと、

「馬鹿つ、馬鹿つ」

と連呼して、

「気が狂うたかつ、どこへ行くのじやつ、権叔父つ」

と彼女までが、発狂したのではあるまいかと疑われるような血相で、権叔父の駈けて行つた海へ向つて、彼女も駈け出して行つたのである。

——見ると。

権叔父はもう海へ入っていた。このあたりは至つて遠浅なので、まだ水は脛すねのあたりまでしか浸つかっていないが、夢中になつて沖へ沖へと駈けてゆくので、その飛沫しぶきは、駈けてゆ

く彼のすがたを包み、真つ白に煙っている。

ところが——その権叔父の前にも、もう一人の若い女が、凄まじい勢いで、海へ駈けこんで行くではないか。

初めに、権叔父がその女を発見した時は、女は松原の蔭にたたずんで、じつと海の碧さあおを見つめていたが、アツ——と思つた時は、黒髪をちらしているその姿は、もう飛沫を蹴つて、真一文字に海へ駈けていたのであつた。

だがこの浦は前にもいったとおり五町六町の沖まで潮が浅いので、先に走つてゆく女の姿も、まだ脚の半分ほどしか隠れていない。

白い水けむりを浴びて、赤い袖裏や金糸の帯が光っている。あたかも平たいらのあつもり敦盛が駒を沈めて行くかのように見えるのだつた。

「女あッ……！ 女ッ……。おういッ！ ……」

やつと、間近まで追いついて、権叔父がこう呶鳴つたとたん——そこから急に底が深くなっているのであらう、ガボと、異様な一声を水面に残して、女のすがたは不意に大きな波紋の下にかくれてしまった。

「やれ不心得者っ、やはり死ぬ気か」

ずぶずぶと、権叔父も同時に、全身まで沈みこんで行った。

岸では、隠居が、波打ち際に沿って横へ駈け廻っていた。

一抹の水けむりと共に、女の影も、権叔父のすがたも見えなくなると、

「あれつ、あれつ、誰ぞ、早く行かねば、間にあいはせぬつ。二人とも死んでしまうわツ」と、まるで他人のせいみたいに喚いて、

「はよう、助けに行けつ、浜の者つ、浜の者つ」

と、転んだり駈けたり、また、手を振り廻したり、自分が溺れるかのように騒いでいた。

四

「心中か」

「まさか……」

と、救つて来た漁師たちは、砂の上へ寝かした二つの体を見てわらった。

権叔父のからだは、慥乎と若い女の帯をつかんでいた。そのふたりとも、息はなかった。

若い女は、髪の毛こそ、根が切れて乱れていたが、まだ生きてるように、化粧の白粉^{おしろい}や口紅^{べに}が浮き立っていた。紫いろになった唇をチラと嚙んで笑っているのである。

「オオ、この女は見たことがあるぜ」

「さつき浜べで、貝殻をひろっていた女じゃないか」

「そうだ、あの宿屋に泊っている女だ」

そこへ報^しらせに行くまでもなかった。むこうから四、五人して駈けて来るのがその宿屋の者らしく、中に、吉岡清十郎の顔も見える。

この人だかりに、さてはと息を喘^せいて来た清十郎は、

「おつ、朱実^{あけみ}だ」

真つ蒼になつて——しかし人前を憚^{はば}るように、棒立ちに恟^{すく}んでしまった。

「お侍、おめえの連れか」

「そ、そうだ」

「はやく、水を吐かしてやんなせえ」

「た、たすかるか」

「そんなことをいつてゐる間に」

と、漁師たちは、権叔父と朱実と、両方のからだに分れて鳩尾みぞおちを押したり、背をたたいたりした。

朱実は、すぐ息をふき甦かえした。清十郎は宿舎やどの者に負わせて、人目から逃げるように旅舎へ帰って行つた。

「権叔父よ……権叔父よ……」

お杉隠居は、さつきから権叔父の耳へ顔をつけたきり泣いていた。

若い朱実は、蘇生したが、権叔父は老体でもあるし、すこし酒気もあつたので、まったく絶息したものとみえる。いくらお杉隠居が呼んでも、ふたたびその眼は開かなかつた。

手をつくした漁師たちも、

「この老人としよりのほうは駄目だ」

と、さじを投げた。

そう聞くと、隠居はもう涙を見せなかつた。せつかく、親切にしてくれる人々へ、

「何がだめじゃ！ 一方の女子おなごが息をふき返したのに、この者ばかり生きぬという法があるのか」

食ツてかかるような権けんまくで、手を出している者たちを突き退のけ、

「この婆が活^いかして見せるわ」

と、必死になつて、あらゆる手当を施すのだった。

その一心不乱な様子は、見るも涙ぐましい程であつたが、そこらに居合^{やといにん}わす者を、まるで雇^{やといにん}人か何ぞのように、やれ押し方が悪いの、そうしては効がないの、火を焚^たけの藥を取つて来いのと、権突^{けんつ}くと顎の先で使うので、縁もゆかりもない浜の者たちは腹を立て、

「なんだ、このくそ婆」

「死んだ者と、氣絶した者とはちがうのだ、活かせるものなら活かしてみろ」

眩きあつて、いつの間にか、皆ちりぢりにそこを去つてしまった。

浜べはもう暮れかかる、うす靄^{もや}の沖に、橙^{だいだいいろ}色の雲がわずかに夕明りを流していた。

婆はまだ思^{あきら}ひ諦めようとしない。そこに火を焚^たいて、焚火のそばへ権叔父を抱き寄せ、

「おういつ、権叔父……権叔父……」

波は暗くなつた。

燃やしても燃やしても、権叔父の体は温かくならなかつた。だが、お杉隠居は、まだ不意に権叔父が口をきき出すもののように信じて疑わないらしく、印籠の藥を噛^{くち}んで唇移し

にふくませたり、体をかかえて揺すぶったりしながら、
「まいちど、眼を開いて下され、ものをいうてたもい。……これ、どうしたものじゃ、この婆を見捨てて先へ逝くという法があるうか。——まだ武蔵も討たずに、お通阿女の成敗も果さぬのに」

旧約

一

海鳴りと松かぜに暮れてゆく障子のうちに、朱実あけみはうつらうつら昏睡こんすいしていた。枕を当てがわれると急に発熱して、頻りとそれから囁言うわごとをいう。

「……………」

枕の上の顔よりも青じろい顔して、清十郎はその側に寂然じやくねんと坐っていた。自分が蹂躪ふみした花の痛々しい苦悶くもんに対して、自責じせきの首を垂れたまま、さすがに彼の良心も苦悶しているらしい。

野獸にもひとしい暴力をふるって、この明朗な処女おとめを本能の餌えにして満足を感じたのも彼という人間だし、また枕まくらもと許につき切つて、精神的にも、肉体的にも、一時人生を失つたその処女の呼吸や脈搏を心配しながら、じつと、厳肅そのものように硬こわばっている良心的な人間も、同じ吉岡清十郎なのである。

一日という短い生活のうちに、そういう矛盾の甚だしい二つの自己を息づかせながら、しかし当の清十郎は、それが必ずしもおかしくはないように、沈痛な眉と、慚愧ざんきの唇を結んでいた。

「……落ちついてくれ、朱実。おればかりじゃない、男とはたいがいこうしたものだ。……今におまえだつて分つてくれる日がある。おれの愛があまりに烈し過ぎたのでおまえは驚いてしまったのだろうが」

こういう繰り言ぐりごを、彼は、朱実へ対しているのか、自己をなぐさめるためにいうのか、纏綿てんめんとさつきから枕許に坐つて呶つぶやいているのであった。

墨をながしたように部屋の中は陰惨としていた。朱実の白い手がばたんと時々夜具の外へ出る。夜具をかけてやるとまた、うるさそうにそれを払う。

「……きようは何日？」

「え？」

「後……幾日で……お正月」

「もう七日なかばかりじゃないか。正月までには癒なおるよ、元日までに、京都へ帰ろう」

清十郎が顔を寄せると、

「嫌あ——ッ」

突然、泣くように、顔の上の顔を平手で打って、

「あつちへ行けつ」

と、罵ののった。

狂わしい声が続けさまになおその唇から走るのだった。

「ばかつ、獣けだものつ」

「……………」

「獣だ、おまえなんか」

「……………」

「見るのも嫌」

「朱実、かんにんしてくれ」

「うるさいっ、うるさいっ、うるさいっ」

必死になって白い手が闇を打つのである。清十郎は苦しげに息を嚙^のんでその狂態を眺めていた。やや落ちついたと思うとまた、

「……きようは幾日？」

「……………」

「お正月はまだ？」

「……………」

「元日の朝から七種^{ななくさ}の日まで、毎朝、五条の橋へ行っていると——武蔵^{むさし}様からの言伝^{ことづて}があつたのよ。待ち遠しいお正月……ああ早く京都へ帰りたい。五条の橋へゆけば、武蔵様が立っている」

「……………え、武蔵？」

「……………」

「武蔵とは、あの宮本武蔵のことか」

驚いて清十郎が顔を差し覗くと、朱実はもう答えもせぬ。青い^{まぶた}瞼^{こんこん}は昏々と眠っているのである。

ハラハラと枯れ松葉が波明りの障子を打つ。どこかで馬のいななきが聞えたと思うと、その障子に外から燈火が映し、旅舎の女を先に立てて、一人の客が案内されて来た。「若先生は、こちらですか」

二

「おう誰だ？——清十郎はこれにおるが」

あわてて境のふすまを閉め、何気ない態をつくっていると、

「植田良平でござる」

物々しい旅いでたちの男が、埃を浴びた姿のまま、障子を開けてその端へ腰かけた。

「あ、植田か」

何しにここへ来たのだろうかと清十郎はまず疑った。植田良平というのは、祇園藤次、南保余一兵衛、御池十郎左衛門、小橋蔵人、太田黒兵助などという古参門下とともに、吉岡の十剣と自称している高弟のうちの一名だった。

こんどの小旅行には、勿論そういう股肱の弟子は連れて来ていない。植田良平も四条道

場に残っていた方である。——それが、みれば旅装も騎馬支度で、かなり急用らしい血相でもある。留守中、気がかりはたくさんあるが、ここまで良平が鞭打って来るほどの急用は、まさか年暮^{くれ}に迫^{おそ}つての負債とか遣^やり繰^くり相談とも思われない。

「何だ。何かわしの留守中に起ったのか」

「すぐ若先生にも、お立ち帰り願わなければなりません、このままで申しあげます」

「ム……」

「はてな」

植田良平は、内懷^{うちぶとこ}中へ両手を入れて、何か自分の肌をあたふた探っていた。

——と、ふすま越しに、

「嫌アつ——畜生つ——あつちへゆけつ」

うつつにまで、昼の悪夢におびやかされているのであろう、朱実の、さけびが、囁^{うわごと}言とも思えないほど、生々しい呪^{のろ}いをおびて響いた。

良平はびつくりして、

「あつ……何です、あれは」

「いや……朱実が……ここへ来てからちと体をわるくし、熱のせい、時折、うわ言をい

うのだ」

「朱実ですか」

「それよりは急用のほう、心ばかりじや早く聞こう」

「これです」

腹帯の底からやつと取り出した一通の書面をそこへ差し出す。

女の置いて行つた燭台を、良平はずつと清十郎のそばへ送つた。

何気なく眼を落して、

「あつ……武蔵^{むさし}からだの」

良平は声に力をこめて、

「そうです！」

「開封したか」

「急展とありますので、留守居の者が計^{はか}りあつて、一読いたしました」

「な、なんと申して参つたのか」

清十郎はすぐそれを手にとれなかつた。——他人^{ひと}に問うまでもなく彼自身の胸になければならない宮本武蔵だったが、おそらくは、二度とはあの男が、自分へ対して書面をよこ

すことなどはあり得まいと多寡たかをくくっていたのである。その気持が今裏切られて、愕がくぜ然と、彼の骨ぼねの髓ずいを氷のように突き抜けて行つたので、全身の肌が何とはなく粟あわを生じ、にわかに、清十郎はそれを抜ひらいてみる心地も出ず、しばらくただそこに措おいて見ていたのであつた。

憤いきどおつた唇を噛みしめて、良平はこういつた。

「——遂にやつてきました。この春、ああは豪語して去つたものの、よもや二度とは京都へ足ぶみ致すまいと思つていたのに——よくよくな慢心者——約束とあつて——御覧なさい、吉岡清十郎どの他御一門ほかと、名宛ても不敵に、新免宮本武蔵と、ただ一人名前前で、打ぶつけてよこしたその果し状を」

三

武蔵は今、どこにいるのか、居いどころ所は認したためてないので、その書面からは知り得べくもない。

どこからにしても、彼が忘れずに、吉岡一門の師弟へ対してこう約束の履行を迫つて来

たからには、もう彼と吉岡家との間は、討つか討たれるかの交戦状態に入つたものと思わなければならない。

試合は——果し合いだ——果し合いは生命いのちを遣やるか奪とるかの大事を、侍の剣と面目に賭としてなすことだ、口先や小手先の技見せではない。生命をそこへ出してすることなのだ。それを、当面の吉岡清十郎が知らないでいるのは危険の限りである。また安閑とその日の迫るまで遊び暮していいものではない。

京都にある硬骨な弟子のうちには、清十郎の行状にあいそをつかして、

（この場合、沙汰の限りだ）

と怒っている者があるし、

（拳法先生が世におわせば）

と、悲涙をふるって、一介の武者修行から与えられた侮辱に対して齒がみをしている者もあつた。

で、取りあえず、

（ともかくお耳に入れて、すぐさま京都へ引つ張つて来い）

という人々の意見を帯びて、植田良平はここへ馬で飛んで来たわけであるが、そのかん

じんな武蔵からの書面を、どうした理^{わけ}か、清十郎は膝のまえに置いて眺めているだけで、容易に披^{ひら}いて見ようとはしない。

「とにかく、御一覽を」

やや焦^しれて、良平がいうと、

「む……これか」

やつと手に取つて、清十郎は読み出した。

読んでゆくうちに彼の指先にかすかな顫^{ふる}えが隠されなかった。——それは武蔵の文字や文面がさまでに烈しいからではなかった。彼自身の心が今ほど脆^{もろ}く弱りきっている時はなかったのである。襖^{ふすま}ごしに聞える朱実の囁^{うわごと}言は、彼にも多少は平常^{ふだん}にあつた侍の心がまあえというものを、まったく泥舟が水へ浸^{ひた}つたように覆^{くつがえ}していた。

武蔵からのその内容はまた、至つて簡明なもので、こう書いてある——

以来御健在ナリヤ

約二依^{ヨツテ}而、茲^{ココ}二書ヲ呈ス

貴劍サダメシ御鍛養ト被^{ソンゼラレソウロウ}存^ゾ候、貧生マタ些^{イササ}力鍛腕ヲ撫^{タンワン}シテ罷^ブリアリ候
御見ニ入ル場所ハ何^{ギョケン}処、日ハ何^{イヌコ}日、時ハ如何ニ。

当方構エテ望ミナシ、タダ尊示ニ從ツテ旧約ノ勝敗ヲ決セント存ズルアルノミ。
ハバカ
憚リナガラ正月中七日マデノ間、五条橋キョウウハン畔マデ、御返答高札下サルベク候

月 日

新免宮本武蔵政名

「すぐ帰る」

清十郎は文ふみ殻がらをたもとへ突つ込むとそういつて立ち上がった。——さまざまにもつ纏れる
気持が、もう少しでも彼をそこへじつとして置かせなかつた。

あわただしく旅舎やどの者を呼ぶ。金を与えて、朱実の身体からだを預かっておいてくれと頼むと、
旅舎では迷惑顔であつたが、嫌ともいい切れないで遂にひきうける。

——この家を、このいやな晩を、遁のがれ出してしまいたいのが、清十郎の気持にはいつぱ
いだった。

「そちの馬を借りるぞ」

あわただしい旅支度は、やがて逃げるように、馬の鞍へ取ツついた。植田良平も馬の尾
を追つて、暗い住吉の並木を駈け出していた。

物干竿

一

——ハハア見かけました。猿えてを肩に乗せた派手やかな若衆ですね、そういう扮装よそおいの若衆ならばさつき通りましたよ、という者がある。

どこで、どこで。

なに高津こうづの真言坂しんごんざかを降りて農人橋のほうへ行つたと。そして橋は越えずに東堀の刀屋の店頭でも見たというか。

さてこそ、手がかりはついたぞ、それだそれだ、そいつに違いない。

「それ行け」

とばかり、雲をつかむような相手を追つて、夕方の往来の者の眼をそばだたしめて行く一ひとむれ群の男どもがここにある。

もう東堀の片側町は戸の下りていた頃なのである。一人が中へ入って、そこの刀師に何やら厳めいしく詮議せんぎだてしていたが、やがてのこと、戸外へ出て来て、

「天満へ行け、天満へ行け」

と先に立つてまた急ぎ出す。

駆けながら他の者が、

「わかつたのか」

きつそう　ただ、
吉左右を糺すと、

「突きとめた」

とその者は力みかえる。

いうまでもなくこの一群は、今朝から住吉を中心として、渡海場から小猿を携えて市中へ入ったれいの美少年の後を捜し廻っている吉岡門下の者たちだった。

今その刀剣師の店で訊くと、真言坂から手繰ってきた手がかりはどうやら間違いないらしい。たしかに店の戸を下ろす黄昏れごろ、肩の小猿を店頭に抛つて、腰をおろした前髪の侍があつたという。

あるじ
(主はいるか)

と訊かれたが、生憎不在なのでその由を職人が答えると、

(頼みたい研物を持って来たのだが、比類のない名刀だから主がいなくてはちと不安心

だ。いったいお前とぎの家では、研や装剣の仕事にかけて、どれほどの腕があるのか確かめてからのことにしたい。——なにかこの主の研といだ物があるなら見せろ)

ということなので、畏まって、然るべき刀を幾いくふり口か出して見せると、それぞれ無造作に一見して後、

(つまらぬ鈍なまくら刀ばかりをお前とぎの家では手がけていると見えるな。そういう研師とぎしの手にかけるのは心もとない。わしが頼もうという刀は肩に負っているこの物干竿ものほしざおという名称のある伝来の逸品、無銘だがかくの通り摺すりあげ上もない備前物の名作だ)

とてそれをギリりと抜いて示しながら、さんざん自分の刀の自慢を述べたてるので、職人もやや片腹とりえいたく思つて、なるほど物干竿とはよく銘つけましたな、曲もなくてただ長いだけが取柄とりえだとつぶやくと、すこし機嫌を悪くして、遽にわかに腰を上げ、天満から京都へのぼる船はどこから出るのかと道を訊いた上、

(ひとつ、京都で研とがせよう。大坂はこの刀屋を覗いても、雑兵の持つ数物かずものばかり荒あ砥らとにかけておる、イヤ邪魔をいたした)

と、涼しい顔して、さつさと立ち去ってしまったというのである。

いかさま聞けば聞くほど生意気な青年らしい。祇園藤次の髻まげをチョン斬つていよいよ思

い上がっているに相違ない。こうして後からあの世への迎えが宙を飛んで自分の背に迫って行きつつあるのも知らずに、得々^{とくとく}と大手を振って歩いているものと思われる。

「みろ、青二才」

「もう首根ツこを押えたのも同じこと。急ぐにも及ばん」

朝から歩きづめである。くたびれたのがこういった。すると先に駆けているのが、
「いやいや、急がねば駄目だぞ。淀の溯^{のぼ}りは、今ごろ出るのがたしか仕舞い船の筈」
と喘^{あえ}いでいった。

二

天満の川波を見ると、

「やつ、いかん」

真つ先のが叫んだので、

「どうした？」

次のがいうと、

「もう船ふなつき着茶屋が床しょうぎ几を重ねておる。川にも船が見えぬ」

「出てしまつたか」

弾はずみあう息を揃えて、どやどやそこに佇たたずんで、しばしは出し抜かれたように川面かわもを見ていたが、店をしまいかけた茶屋の者に訊ねると、たしかに小猿と前髪は乗つたとある。そしてまた、その仕舞い船がここを離れたのはつい今し方で、まだこの先の船着場である豊崎までは、遡さかのぼつていまいともいう。

それに下りは速いが、上り船は遅々たるものである。陸おかを走つても追いつきましようという言葉に、

「そうだ、何もがつかりすることはない。ここで間に合わなかつたとすれば、もう急がずともよい、一息入れて行こう」

茶をのんだり、餅や駄菓子などを頬張つた上、さてまた、川に沿って暗い道を急ぎに急いで行つた。

ひろい暗の彼方あなたに、銀蛇に似た河のすがたが二一ふたまた股に裂けていた。一すじの淀川が中津川と天満川とに岐わかれるところである。その辺りにチラと灯が見えた。

「船だつ」

「追いついたぞ」

七名は色めき立つ。

枯れ蘆はみな刃もののように光っていた。一草の青いものすらない田や畑であった。霜をふくむかと思われるような風だったが、寒いなどということは考え出されない。

「しめた」

距離は、いよいよ縮まる。

明らかにそれと分ると、つい思慮もなく、一人が呶鳴ってしまった。

「おおウいつ。——その船待てつ」

すると船から、

「なんじゃあ……」

と半間な声^{はんま}がひびいてくる。

陸^{おか}では今、お先走って呶鳴った男を、ほかの仲間が叱っていた。——何も今、ここで呶鳴るにはあたらない。これから何十町か先まで行けば、嫌でも船^{ふなつき}着があつて、乗る客も降りる客もあるにちがいない。それをここから呶鳴っては船中にある敵に心支度をさせるようなものではないか、というのだった。

「まあ、どっちにせよ、先は多寡の知れた一人。呶鳴ったからには、明らさまに名乗りかけて、川の中へ逃げ込まない用心をしろ」

「そうだ、そのことだ」

と程よく捌く者があつて、仲間割れは救われた。

そこでこの七名は、気をそろえて、淀を溯る夜船の船脚とおよそ足の早さを共にしながら、

「おうーいつ」

とまた呼び直した。

「なんじゃあ」

客ではない、船頭らしい。

「その船を岸へ寄せろ」

こういうと、

「阿呆吐かせ」

これはどつと誰彼なく、船の中から揚つた笑い声だった。

「着けぬかつ」

威嚇^{いかく}すると、こんどは客の声らしく、

「着けぬわい」

と、口吻^{くちぶり}を真似^{まね}している。

七名の陸^{おか}の顔は、湯氣を立てているかと思うように、白い息を吐いて、

「よしつ、着けぬとあれば、先の船着場で待つが、その船の中に、小猿を連れた前髪の青二才がいるであろう。恥を知るならば、舷^{ふなべり}へ立てといえつ。もしまた、其奴^{そやつ}を逃がした場合は、乗合いの者残らず、関^かり合いとして陸^{おか}へ引きずり上げるから左様心得ろ」

三

三十石船の中の騒^{さわ}めきが、陸^{おか}から眺めていても手にとるようにわかった。さあことだぞと色を失った様子なのである。

岸へ着けたら何か始まるにちがいない。陸を歩いている七名の侍は、そういえば皆^は、袴^{はかま}をくくりあげ襷^{たすき}をかけ、刀に反^そりを打たせている。

「船頭、返事をするな」

「なにをいうても黙っておれ」

「守口^{もりぐち}までは着けぬがよい、守口へ行けば川番所のお役人があるで」

客は口々にこう囁^{ささや}いて生唾^{なまつば}をのんでいた。先に減^へらず口をたたいた男などは唾^{おし}みたいに眼をすくめた。陸^{おか}と川の中との隔てがなによりの頼りであった。

陸^{おか}の七名は、船脚と並行してどこまでもついて来た。しばらく黙って見ているのは、こつちでどう出て来るかを待っているらしい。しかしいつまでも答えがないので、

「――聞えたか。小猿を連れた湊^{はなた}垂れ武士、舷^{ふなべり}へ出ろ、舷へ」

すると、船のうちに、

「わしのことか」

何を先でいっても答えるなどいいあつていた客のうちから、突然、こう答えて舷に立つた若者があつた。

「おうつ」

「いたな」

「小僧め」

その影を認めて、陸の七名は眼を剥^むいたり、指さしたり、近ければ水を渡つてもやつて

来そんな氣勢を示している。

物干竿ものほしざおとよぶ大太刀を背中へ負つて、前髪の人影はじつと立っていた。すぐ足もとの舷を打つ水明りが、尖とがつている齒を白く見せた。

「小猿を連れている前髪の青二才とあれば、わしより他ほかにないが、各は何者だ。稼ぎのない野武士たちか、それとも、腹の減へつた旅芸人か」

声が川を渡つて来ると、

「なにつ」

七名は岸へ顔を揃えて各 齒ぎしりを嚙みながら、

「吐ぬかしたな、猿えつかい奴め」

悪罵あくばは、順々に、その口々から飛び出して、川面かわもを打った。

「身のほど知らずが、今に吠え面搔づらいて、謝るなよ」

「われわれをなんだと思う。今の口は、吉岡清十郎門下のわれわれと知ってか、知らずにか」

「ちようどよい、手をのばして、その細首を洗つておけ」

船は毛馬堤けまづつみへかかつていた。

ここには繋もやい杭ぐいとホツ立てて小屋がある。毛馬村の船着と見て、七名は、ばらばらとそこへ先廻りして降おり口ぐちを扼やくして待つていた。

——だが船は遠く河心に止まつていて、ぐるぐる廻まわっているのだった。客も船頭も、事態の容易ならぬものを案じて、着けないほうが無事であると主張しているらしいのである。吉岡門下の七名はそれと見て、

「こらッ、なぜ着けぬ」

「明日あすも明後日あさつても着けずにいられるか。後で後悔するな」

「その船を寄せぬと、乗りおうている奴ばら、一人あまさず打ぶち斬るぞ」

「小舟で行つて、斬り込むがよいかつ」

あらゆる脅おどし文句をそこから放はなつていると、やがて、三十石船の舳へさきが此方こなたの岸へ向き直ると共に、

「やかましいっ！」

冱寒ごかんの大河を裂くような一声が彼方あなたにあつて——

「望みにまかせて、今それへ参まゐつてやるから、腰のつがえを定めて待つておれ」

見れば前髪の若者自身が、水馴みなれ棹ざおを取つて、頻りと止める船頭や客を尻目に、ぐいぐ

いと棹の水を切つてこなたの岸へ船を突き進めて来るのであつた。

四

「——来るぞ」

「命知らずめが」

柄に手をかけて、七名は、船のぶつかつて来る岸の辺りの岸边を囲んでいた。

川を横に、真つ直に流紋を切つて来る船の剣舳けんさきであつた。不動の身を取つて、そこに突つ立っている前髪の美少年の姿が、息を撓ためて岸で待ちかまえている七名の者の眸へ、ぐうつと迫るに従つて、いつばいな大きさに映つた——と、思う途端にある。

ざ、ざ、ざつ、船は枯れ蘆あしの泥へ舳へさきを突ツこんで、自分たちの胸へどんと来たように、七名の踵かかとが無意識にズズツと後へ退つた。それと共に、船の舳から丸っこい動物の影が、四、五間ほども幅のある船と岸との間の枯れ蘆の沼をぽーんと跳んで、七名のうちの誰か一人の首つ玉へ躍りかかったのである。

「ひやつツ」

一人が叫ぶと、七名の手から七本の白光が、鞘さやを脱して、空へ噴ふいた。

「猿だっ」

と気がついたのは、すでに空を一撃してからで、それを当の敵である前髪の飛躍と錯さつ覚かくしてあわてたのは、彼ら自身も不覚を認めたらしく、

「あわてるな！」

と、お互いを戒め合った。

関かり合かいになるまいと、船の一隅ひとすみへかたまつて縮み上がっていた乗合客は、彼らの狼狽こわぶりに、硬こわばつていた神経のどこかを擦くすぐられたが、誰もくすりとも声を出さなかった。

ただ、あれっ——といった者がある。見ると、自分で水馴れ棹はすを突いていた前髪の美少年が、その棹を、蘆の中にとんと突いたと思うと、先に跳んだ小猿よりも軽く、弾はみを与えた自分の体を、岸の彼方あなへ難なく送つていたのであった。

「やつ？」

すこし方角が違ったので、七名は一斉にそっちへ向き直った。さんざん待ちかまえていたことではあるが、咄嗟の場合と差のない焦心あせりがどの顔にも引ツつれていた。円を作つて相手へ迫る違いがなく、そのまま、岸に沿つてだつと向つて行つたので、当然、彼らの陣形

は縦隊になり、それを受けるところの前髪の少年をして、十分な気構えを持たせる余地を
敢て与えてしまった。

真つ先になつてしまった縦隊の者の頭は、もう怯んでも退けない位置である。途端に眼
は充血し耳は聞えなくなつていた。平常の剣法の修練などはてんで意識にものぼらないの
である。カツと齒を剥きだして、食いつくように前髪の影へ刀を差し出して行つた。

「……………」

たださえ巨きい美少年の体軀は、その時、つま先で伸び上がるように胸を張り、右手を
ぐつと肩の上にやつた。背に負っている大刀の柄を握つたのである。

「吉岡の門人どもだといったな。望むところだ。先には、髷だけで許してくれたが、思う
に、それでは物足らないのであらう、わしもすこし物足らぬ」

「ほ、ほざいたなつ」

「どうせ手入れにやるこの物干竿、手荒につかうぞつ」

こう宣言をうけながら、その前に硬ばつていた人間は、逃げることでできなかつた。ま
るで据物同然に、物干竿の長剣は梨割りにその者を死骸にしてしまった。

五

前の者の背が後ろの者の肩を押し返した。出鼻に先頭の一人が、敵の太刀の一颯に、無造作な死を目前に遂げたのを見ると、後六名の者は、途端に脳中枢の正確を欠いて、行動の統一を全然失ってしまった。

衆はこうなると一より脆い。それに反して凶に乗った前髪の美少年は、竿とよぶほど伸びの利く長剣で、次の者を横に撲った。

腰ぐるまは斬れなかった。しかし撲られただけでも十分にこたえたに違いない。何か一声吠えてその一人は、横ツ飛びに蘆の中へ飛びこんでしまう。

（――次つ）

と睨め廻した時は、さしも戦い下手の同勢も、非を覚つて形を変え、五弁の花が芯をつつむように、この敵ひとりを囲み込んでいた。

「退くな」

「退くなよ」

味方同士が、こう励ましあうのだった。そこで多少勝ち目を見出した勢いを駆って、

「小童めが！」

勇氣というよりはもう無自覺の忘恐がなす仕業である。この際、多言の必要はないのに、
「おmoi知れつ」

叫びを重ねて一人は飛びかかつて行つた。振り下ろした刀はかなり深く入つたつもりであるのに、前髪の敵の胸へはまだ二尺ほども手前の空間を斬り下げていたのである。

当然、自信を持ちすぎたその刀の先は、カチツと石を打った。刀の持主はすでに自分から死の穴へ逆さに首を突つ込んで行つたかのような姿勢になり、鎚こじりと足の裏を高く上げて、敵の前に身を曝さらしてしまつた。

だが、易々やすやすと斬り得る足もとの敗者を斬らずに前髪の美少年は、身をかわした機はずみに弾はずみを加えて、ぶうんと横側の敵へ当つて来た。

「ぐわツ」

明らかな末期まつごのさけびがまた一つそこで揚つた。するともう二度と陣形を立て直す氣力も失つて、後の三名はわらわらとつながつて逃げ出した。

逃げる姿へ、人間は最も殺伐な猛氣がおこる。物干竿を両手に持つて、
「それが吉岡の兵法かつ」

前髪は追いかけた。

「きたないぞ、返せつ」

のし
罵りを浴びせかけながら、彼は足を止めなかった。

「待てつ、待てつ、わざわざ人を船から呼び上げておいて、捨てて逃げる侍がどこにあるかつ。このまま逃げるにおいては、京八流の吉岡を天下に笑ってやるがよいか」

笑ってやるぞということばは、侍が侍に投げる場合の最大の侮辱なのだ。唾^{つば}以上の恥かしめなのだ。——だがもう逃げてゆく者の耳へはそれもこたえない。

その頃ちようど毛馬堤^{けまづつみ}を、寒々と、馬の鈴が鳴って来た。霜明りと淀の水明りは、提^ち灯^{ようちん}も必要としないほどだった。馬上の人影も、馬の尻について来る徒歩^{かち}の人影も、白息を吐いて、寒さを忘れていたかのように先を急いでいる様子である。

「あつ」

「御免つ」

追われて来た三名は、馬の鼻づらへ打^ぶつかりそうになって、きりきり舞をしながら後ろを振向いた。

六

あわてて手綱を絞ったので、馬は足搔きしていなないた。馬上の者は、馬の前で戸惑いしている三名をのぞいて、

「やつ、門下ども」

意外な顔したが、すぐ腹をたてて、叱りつけた。

「たわけめ、どこに終ひねもす日うろついていたのだっ」

「ア、若先生ですか」

するとまた、馬の陰から前へ出て来た植田良平が、

「何事だその態さまは。若先生のお供をして来ながら、若先生が帰るのも知らず、また、酒の上の喧嘩か。馬鹿もいい加減にして歩け」

いつものでんでまた酒の上の喧嘩かと見られたのでは堪らない。三名は不平に満ちた語気で、それどころか自分たちは、当流の権威と師匠の名誉のために戦って、かくかくの始末と、舌も渴かわいているし、狼狽もしているので、怖ろしい早口をもって一息に告げ、

「あれ、あれへ、や、やって来ました」

と、ここへ近づいて来る蹠音を振顧^{ふりかえ}つて、恟々^{きようきよう}たる眼いろになる。

その弱腰をながめて、植田良平は、愛想をつかし、

「なにを躁^{さわ}ぐか、口ほどもない。それでは当流の汚名をそそぐつもりでしたことも、却つて泥の上塗りだわ。——よしつ、おれが会つてやろう」

と、馬上の清十郎もその三名も後に立たせて、独りだけ十歩ほど前にすすみ、

(御座んなれ、前髪)

身構え取つて、近づく蹠音を待つていた。

——とは知ろうはずもなく前髪は、れいの長剣を舞わせながら、脚に風を起して、

「やアいつ、待てつ。逃げるのが吉岡流の極意か。わしは殺生したくないが、この物干竿が、まだまだと鏑^{つば}鳴りして承知せぬ。返せ、返せ、逃げてもいいが、その首置いて行けつ」

毛馬堤の上をこう呼ばわりながら、今しもその影はここへ宙を飛んで来る。

植田良平は手に唾^{つば}して刀の柄を握り直した。疾風の勢いにある前髪の美少年は、そこに身を屈していた良平が眼に入らないのか、頭の上を踏ンづけるような足幅であつた。

「——わッしょつ」

撓^ため切^きつていた良平の腕は唸^うつて、こう大喝をくれながら地摺りに大刀で払い上げた。

縋り合せた両手に伸びて行つた切つ先は、星を斬つたように高く揚つたに過ぎない。美少年の体は片脚立ちに止まって、ぎりつと反対のほうへ廻つて振向いたと思うと、

「オヤ、新手か」

た、た、た、とのめつて行く良平へ物干竿をぶんと薙ぎ返した。

烈しいの何のといつて、植田良平はまだかつてこんな剣気に吹かれた例を知らない。その殺風から身を交^かわした代りに、彼は毛馬堤から田圃^{たんぼ}のほうへ転がっていた。幸いに、堤^{どて}は低いし、凍っている田圃であつたが、戦機^{はす}を外してしまったことは勿論である。ふたたび堤の上へ出て見た時には、敵の影は獅子奮^{ふんじん}迅に見えた。長剣物干竿の光が、門下の三名を刎ね飛ばし、さらに進んで、馬上の吉岡清十郎へ迫ろうとしている。

七

自分の身まで来る間に解決するものと、清十郎は安心していたのである。ところが、その危険は、すぐ迫つて来た。

ひどい暴剣振りである。物干竿は突進して来た。いきなり清十郎の乗っている馬の脾腹^{ひばら}

を突こうとする。

「岸柳、待てつ」

こう清十郎は高く叫んだ。そして鎧あぶみにかけていた片足をすばやく鞍の上へ移し、その鞍を蹴るがごとく突ツ立つたと思うと、馬は前髪の美少年を躍り越えて、弦つるを離れた矢のよう
に彼方へ駈け出し、清十郎の体は反対に、三間も後ろへぼんと飛び降りていた。

「——鮮やかッ」

と、賞ほめたのは、味方ではなくて、敵の前髪の美少年だった。

物干竿を持ち直して、清十郎のほうへ一躍しながら、

「今の所作、敵ながら見よい嗜たしなみ、察するところ吉岡清十郎その人と見た。よい折だ——
いざッ」

向けて来る物干竿の切っ先は炎々たる鬪志かたまりの塊であつた。清十郎の体にはさすが拳法の嫡子ちやくし、それを受けるだけの余裕と鍛えたものが十分に見える。

「岩国の佐々木小次郎、さすがに目が高い。いかにも自分こそは清十郎であるが、理由もなく、其許そこもとと刃交はまぜをする意思は持たぬ。——勝負はいつでも決しられる。なんの意趣でこの始末か、まず退ひき給えその刀を」

最初に清十郎が、岸柳と呼んだ時には、耳にも入らなかったらしいが、二度目には明らかに岩国の佐々木と名をさしたので、前髪は、

「や！……わしを、岸柳佐々木小次郎とは、どうしてご存じあるのか」と驚きに打たれた。

清十郎は、膝を打って、

「やはり、小次郎殿であつたか」

と、いいながら前へ進んで来た。

「——お目にかかるのは、もとより初めてだが、おうわさは常々詳しく聞いていた」

「誰に？」

と、すこし茫然としたように小次郎はいう。

「其そこもと許の兄弟子、伊藤弥五郎どのから」

「お、一刀斎どののご懇意か」

「ついこの秋頃まで、一刀斎どの、白河の神樂かぐらヶ岡の辺に一庵をむすんでおいであつた。屢《しばしば》、こちらよりも訪れ、先生も時折、四条の拙宅へ立ち寄って下されたりなどして」

「ホウ！……」

小次郎は笑えくぼ鬚を作つて、

「では満ざら、貴公ともただの初対面ではない」

「一刀斎どのは何かというと、よく其許の噂をなされていた。——岩国に、岸柳佐々木と称する者がある。自分と同様に、富田五郎左衛門のながれを汲み、鐘巻自斎先生に師事した者で、同門の中では一番の年下ではあるが、行く末天下に自分と名を争う者は彼より他ほかにはあるまいと——」

「だがそれだけで、この咄嗟にわしを佐々木小次郎とは、どうしてお分りあつたか」

「まだ年ばえもお若いことや、人柄はこうこうなどと一刀斎どのから伺つていたし、また其許が、岸柳と号されている謂いわれも詳しく承知しているので、その長剣を自由になさるさまを見た時すぐ、もしやと胸に泛うかんだので、当て推量にいつてみたのが測はからずもほんをいいあててしまったわけ」

「奇だ！これは奇遇」

小次郎は快かいさい哉をさげんだがふと、血ぬられた物干竿を自分の手にながめると、この始末は一体どうしたものかと思ひ惑つた。

八

話しあえばお互いに解け合うものがあつたのであろう。それから時経て、毛馬堤の上を、佐々木小次郎と吉岡清十郎の二人が先に立つて、旧知のように肩を並べ、その後から植田良平と三名の門人が、寒そうに従^ついて、京都の方角へ夜をかけて歩いて行く姿が見出される。

「いや、初めからこっちは、妙に売られた喧嘩なので、何もことを好んだわけではちつともない」

と、これは小次郎のいい分。

清十郎は小次郎の口から親しく祇園藤次が阿波通いの船中でした振舞や、後の彼の行動^{のち}など思いあわせ、

「怪^けしからぬ男だ、帰つたら糾^{きゆうめい}明^{めい}せねばならぬ。——其^{そこ}許^{もと}を怨むどころか、此^{この}方^{ほう}こそ、門下どもの統御の不行届き何とも面目ない」

そういわれると、小次郎も謙讓を示さねばならなくなつて、

「いやいや、わしもこのような性質の者でございますゆえ、ずいぶん大言を吐くし、喧嘩なら退かぬ構えで誰へでも応対するから、あながち門人衆ばかりが悪いわけではありません。——むしろ吉岡流の名と師の体面を思つてやつた今夜の者たちは、生憎腕のほうはどれもこれも貧弱ですが、その心根に至つては、むしろ不憚なものがある」

「拙者が悪い」

清十郎は、自責しながら、沈痛な顔をして歩いていた。

そちらに含むところがなければ一切を水に流そう——と小次郎がいうと、

「願つてもないことだ。却つて、これをご縁に、将来はご交誼をねがいたい」

と、清十郎も応じていう。

二人の打ちとけた様子を前に見ながら、弟子たちはほつとした気持で後から続いていた。

——一見、体の巨きな坊ンちみたいな前髪の美少年が、伊藤弥五郎一刀斎が常に、

(岩国の麒麟児)

と、口を極めて称えていた岸柳佐々木であろうと誰がちよつと思ひ当ろうか。祇園藤次が軽く舐めて舐め損なつたのも、あながち無理はない気がするのである。

それと分つて、今さら、胆を寒うしているのは、その小次郎の愛剣物干竿の先から命び

ろいをした植田良平やほかの者どもで、

(これが、岸柳か)

と、眼まなこを改めて、その人間の幅広い背中を見直して、なるほどそう知ってから見れば、どこかに非凡なところがあると、今さら、自己の眼識の浅さをもあわせて認めている。

やがて、以前の毛馬村の船着場へ来ると、そこには物干竿の犠牲になった幾つかの死骸がもう寒天に凍っていた。死骸の後始末は三名にいつけて置き、植田良平は先に逃げて行つた馬を見つけて曳いて来る。――また、佐々木小次郎は頻りと口笛をふいて、懐ふところ中に飼ひ馴れたれいの小猿を呼んでいた。

口笛を聞くと、小猿はどこからか現われて、彼の肩へとびついた。――ぜひぜひ四条の道場へ来て逗とまり留ゆうしてもらいたいというので、吉岡清十郎は自分の乗馬を小次郎へすすめたが、小次郎はかぶりを振って、

「それはいけない。私はまだ青くさい一介の若輩だし、貴公はいやしくも平安の名家吉岡拳法の嫡ちやくなん男、門人数百を持つ一流の御宗家だ」

と、馬の口輪を取って、

「遠慮なくお召なされ、ただ歩くより口輪を取って歩いたほうが歩きよい。おことばに甘

えて、しばらくのあいだお世話にあずかるとして、京都までこうして話しながらお供いたそう」

傲慢不遜かと思うと、礼儀もわきまえている小次郎だった。——やがて今年も暮れて初春を迎えるとすぐ、宮本武蔵なる人間と出会わなければならない宿題を持つ清十郎は、折からこの小次郎という人物をわが家へ迎える機縁をひろって、何かに心づよい気がして来るのだった。

「ではお先に失礼して、足の疲れたところには代るといたそう」
彼もまた、そう礼儀をして、鞍の上へ移った。

山川無限

一

東国での名人として、塚原ト伝ぼくでんや上泉伊勢守の名が代表されていた永祿の頃には、上方では京都の吉岡と大和やまとの柳生の二家が、まずそれに対立したものと見られている。

だがほかにもう一家、伊勢桑名の太守北畠具教（このり）がある。この具教もその道においてかくれない達人であり、またよい国司でもあつたらしく、

「太（ふと）の御所」

といえ、彼の歿後までも伊勢の領民はなつかしいお方として、そのころの桑名の繁昌や善政を慕っている。

北畠具教は、ト伝から一の太刀というものを授けられて、ト伝の正流は東国にひろまらずに伊勢へ残った。

ト伝の子、塚原彦四郎は、父から家督はうけたが、一の太刀の秘伝を遂にゆるされなかった。そこで父の死後、彦四郎は郷里（ひたち）の常陸から伊勢へ赴き、具教に会つてこういった。

「私も父のト伝より、かねて一の太刀を授かつていますが、生前父がいうには、あなた様へもご伝授してある由、同じものか、違いのあるものか、異同を較べて、お互いに極秘の道を究明してみたいと思いますが、思し召はいかがですか」

すると具教は、師の遺子である彦四郎が、技（わざ）を撮りに来たものとすぐ察してはいたが、

「よろしい、お目にかきましょう」

と快諾して、一の太刀の秘術を見せた。

彦四郎はそれによつて、一の太刀を写しとることができたが、要するにそれは型の真似事ではなく、元々その器でなかつたから、ト伝流はやはり伊勢のほうに広く行われ、従つてその余風からこの地方には兵法の達人上手が今でもたくさん輩出している――

といったような土地自慢は、その国へ足を入れると必ず聞かされるところであるが、變なてめえ自慢から比べればよほど耳ざわりがよいし、また見物の参考にもなるので、今も、桑名の城下から垂坂山へかかつて来る道中馬の上にある旅人は、

「なるほど、なるほど」

と、馬子のそうしたお国ばなしをあえて遮らずに、頷いて聞いていた。

時は十二月の中旬で、伊勢は暖いにしても、那古の浦からこの峠へくる風は相当に肌寒いが、駄賃馬に乗っている客は、奈良晒のじゅばんに袷一重、その上に袖無羽織をかけてはいるが、怖ろしく薄着であるし、うす汚い。

笠をかぶる必要もないほど陽焦けのしている真ツ黒顔に、これもまた、往来へ捨てても拾い人がありそうもない古笠をかぶっているのだ。髪は幾日洗わないのか鳥の巣みたいにもじやもじやしていて、ただ束ねてあるというだけに過ぎない。

（駄賃がもらえるかしらて？）

と馬子は内心で、心配しながら乗せた客だった。それに行く先がちと辺鄙^{へんぴ}な、帰り客のきかない山間ではあるし……と。

「旦那」

「む？ ……」

「四日市で早めの午^{ひる}、亀山で夕方、あれから雲林院^{うんじん}村へ行くと、もうとつぷり夜になりま
すだが」

「ムム」

「ようがすかね」

「ウム」

何をいつても領^{うなず}いてばかりいるのだ、無口な客は馬の背から那古の浦に氣を奪^とられてい
る。

それは、武蔵だった。

春の末つ方からこの冬の暮まで、どこを足にまかせて歩いて来たのか、皮膚は渋紙のよ
うに風雨に染まり、ただ二つの眼だけがいよいよ白く鋭く見える。

二

馬子はまた訊ねて、

「旦那、安濃郷あのごうの雲林院村というと、鈴鹿山の尾根の二里も奥だが、そんな辺鄙へんぴなところへ、何しに行かつしやるのじゃ」

「人を訪ねに」

「あの村には、木樵きせりか百姓しかいねえはずだに」

「くさり鎌の上手がいると桑名で聞いたが」

「ははあ、穴戸ししど様のことかね」

「うむ、穴戸何とかいったな」

「穴戸梅軒ばいけん」

「そう、そう」

「あれは鎌鍛冶かまかじじゃ、そして鎖鎌くさりがまをつかうそうじや。すると旦那は武者修行だの」

「うむ」

「それなら鎌鍛冶の梅軒を訪ねて行かつしやるより、松坂へ行けばこの伊勢で聞え渡って

いる上手がおりますがな」

「誰か」

「みこがみてんぜん神子上典膳というお人で」

「ははあ、神子上か」

武蔵は頷いた。その名は夙く知っていたように多くを問わない。黙々と馬の背に揺られながら脚下に近づいて来る四日市の宿場の屋根を眺め、やがて町に入ると屋台の端を借りて弁当をつかう。

——ふとその時、彼の片方の足を見ると、足の甲を布で縛っていた。歩むには少し跛行をひいている形である。

足の裏の傷が膿んでいるのだった。それゆえにきようは馬の背を借りて歩いているものとみえる。

彼は今、自分の体というものに対して、日々、細心ないたわりを施していた。そうした注意を抱いていたに関わらず、鳴海港の混雑の中で、釘の立っている荷箱の板を踏みつけてしまったのである。昨日から傷に熱を持って、足の甲は樽柿のように地腫れがしていた。（これは、不可抗力な敵だろうか？）

武蔵は、釘に対しても、勝敗を考えるのだった。——釘といえども兵法者として、こういう不覺をうけたことを恥辱に思うのだった。

（釘は明らかに、上を向いて落ちていたのだ。それを踏みつけたのは、自分の眼が、虚であつて、心が常に全身に行き届いていない証拠だ。——また、足の裏へ突きとおるまで踏んでしまったことは、五体に早速の自由を欠いていたからで、ほんとの無碍自在な体ならば、草鞋わらじの裏に釘の先が触れた瞬間に、体は自らそれを察知しているはずである）

自問自答にこの結論を下して、

（こんなことでは）

と、自己の未熟が反省され、剣と体とがまだまだ一致しない——腕ばかりが伸びてほかの体や精神は合致しない——一種の不具を感じて忌々いまいましくなるのだった。

だが、この年の晩春、あの大和柳生の庄を慕まっしぐらに去ってから——今日までのおよそ半年の間を、決して、無駄には送っていなかったと、武蔵は光陰に対して恥なく思った。

あれから伊賀へ出、近江路へ下り、美濃、尾州と歩いてここへ来たのであるが、行く先々の城下や山沢さんたくに彼は剣の真理を血まなこで搜した。

（何が極意か？）

ようやく彼もそこへ突き当って来たのである。しかし、

（これが剣の真理だ）

というようなものは、決して町にも山沢にも埋^{うも}れていなかった。この半年、各地で出会った兵法者は幾十人か知れなかったし、その中には、聞いた達人も幾名かあったが、要するにそれは皆、技^{わざ}の上手であり、刀づかいに巧者な大家ばかりだった。

三

会い難いものは人である。この世は人間が殖^ふえすぎているくらいなものだが、ほとんどの人らしい人には実に会い難い。

武蔵は世間を歩いて痛感するのだった。そういう嘆きをもつたびに、彼の胸には沢^{たく}庵^{あん}が思い出された。——あの人間らしい人間を。

（会い難い人におれはかつて出会っているのだ、めぐまれた者といわなければならない、そして、その機縁を無にしてはならない）

彼のことを思うと、武蔵は今でも両手の腕くびから五体がずきずきと痛んで来る。ふし

ぎなこの痛みは、千年杉の梢に曝さらされたあの時の神経が、まだそのまま生理的な記憶の中に生きている証拠であつた。

（今にみろ、おれが沢庵を千年杉に縛りあげて、地上から悟道を説いてくれるぞ）

彼はいつもそう思った。恨みではない、報復ではない、そんな感情の上からではなく、武蔵は、禅によつて人生の最高へ住もうとする沢庵に対して、自分は剣によつて、どこまで沢庵の上に到ることができるかということを、実にすばらしい宿望の一つとして胸の底に抱いているのだつた。

もしああいふ形はとらなくても、自分の道境がめざましい進歩を遂げて、沢庵をかりに千年杉のこずえに縛くつて、地上から彼に向つて、彼の蒙をひらいてやるような叱咤を与える日があつたら、沢庵は梢の上から何というだろうか。

武蔵はそれを聞きたいと思う。

おそらく沢庵は、

（善哉よいかな！ 満足満足）

と欣ぶにちがいない。

いや、あの男のことだから、そう素直にはいわないだろう。からからと打ち笑つて、

(豎子！ やりおる)

というか。——何でもよい、武蔵は彼へ対する恩義として、どういう形でもよいから沢庵のあたまで一度、ぐわんと自己の優越を示してみたい。

だがそれは他愛のない武蔵の空想だった。彼自身、今や一つの道へ入りかけているだけに、いかに人間があるところへ到達しようとする道の永遠で至難なものであるかを、事ごとくに知り初めていたのである。——それだけに、

(沢庵ほどには)

と、空想の腰が折れる。

まして、遂に会わなかったけれど、柳生谷の劍宗石舟斎あたりの高さを思いくらべると、口惜しくても、悲しくても、自分などのまだ青ツぽいことが余りにもわかってくるのだった。兵法だの、道だのと、口にするのも気恥かしくなつて、くだらない人間ばかりに見えた世間が、急に広くなり恐ろしくなり、そして遽に、

(今から小理窟は早い、剣は理窟じやない、人生も論議じやない、やることだ、実践だ)
慕しぐらに武蔵は山沢へ入りこむ。彼が山の中に籠つてどういう生活をやっているか、それは彼が山から里へ出て来るすがたを見るとほぼ察しがつく。

そんな時彼の面は鹿みたいに頬が削そげている。五体のあらゆるところに、摺すり傷だの打ち傷を作っていた。滝に打たれるので油けのなくなった髪はパサパサに縮れ、土の上に眠るので歯だけが不思議な白さを持っていた。そして人間の住む里へ向って、おそろしく傲岸な信念を燃やししながら、相手とするに足る者を捜しに降りて来るのだった。

——今がちょうど、桑名で聞き出したそういう一人の相手を、これから尋ねてゆく途中であつた。聞き及ぶ鎖くさり鎌がまの達人穴戸梅軒ししどばいけんなる者が、この世で会い難いほうの人間か、それともさらにある米喰い虫か、まだ初春はるまでには十日あまりの余日があるので、これから京都へ出向く旅のつれづれに、ひとつ試してみようという気持で。

四

武蔵が目的の地へ着いたのは、もう夜も深い時刻だった。

馬子の労を犒ねぎらって、

「帰ってもよい」

駄賃を与えて去ろうとすると、馬子のいうには、今さらこんな山奥から帰りようもない。

朝がたまで、旦那がこれから訪ねてゆく家の軒下でも借りてやすみ、朝になってから鈴鹿峠を下つて来る客を拾つて帰つたほうが歩ふがいいし、それにまた、なんともこう寒くてはもう一里も歩くのは辛いという。

そういわれてみればこの辺りは伊賀、鈴鹿、安濃あのの山々のふところ、どっちを向いても山ばかりだし、その山のいただきには、真つ白な雪がある。

「では拙者のさがす家をおまえも一緒に尋ねてくれるか」

「穴戸梅軒様のお家で」

「そうだ」

「さがしましょう」

その梅軒というのは、この辺の百姓鍛冶かじということであるから、昼間ならすぐ分ろうが、もうこの部落では起きている燈火ともしび一つ見あたらない。

ただどこかで先程から、こーん、こーん、と凍っている夜空にひびく砧きぬたの音がある。それを的あてに二人は歩いて、ようやく一つの明りを見た。

さらに欣うれしかったことには、その砧の音のしている家が、百姓鍛冶の梅軒の家だった。軒に古金ふるがねがたくさん積んであるのでもわかつたし、真つ黒にいぶっている廂ひさしは、どうあ

つても鍛冶屋の家でなければならない。

「訪れてくれ」

「へい」

馬子が先に戸を開けて入って行つた。中は広い土間であつた。仕事はしていないが鞆ふいごの囲いには赤い火が燃えさかつていた。そして、一人の女房が焰よなべに背を向けて夜業に布を打っているのだつた。

「こん晩は、ごめんなすつて。——アア火だ、これはたまらぬ」

見知らない男が入つて来て、いきなり鞆ふいごのそばの火にしがみついたので、女房は砧きぬたの手を止め、

「どこの衆だえ、おめえは」

「へい、今話しますよ。……実はお内儀、おめえ様のうちの旦那を遠方から尋ねて来たお客を乗せて今着いたのじゃ。わしは桑名の馬子だがね」

「へエ？ ……」

女房は武蔵のすがたを無愛想に見上げた。ちよつと、小うるさい眉をして見せたのは、ここへも屡 《しばしば》 やってくる武者修行が多いのだろう。そういう旅行者と厄介者

をこの女房は扱い馴れていることが様子に見える。三十がらみでちよつと美麗な女であったが、どこか横柄に、武蔵へ向つて、子供へものをいいつけるように、

「うしろをお閉め、寒い風がふきこむと、子どもが風邪をひくがな」といった。

武蔵は頭を下げ、

「はい」

と素直にうしろの板戸を閉めた。そしてきて——鞆のそばの切株に腰かけて、この真つ黒な細工場と、そこからすぐ筵の敷いてある三間ほどなこの家の中を見まわしてみると、なるほど、壁の一端に、かねて噂に聞くとこの鎖鎌という見つけない武器が、およそ十挺ほど、板に打ちつけてある角掛に懸けてある。

（あれだな？）

こういう武器と、こういう一種の武術に出あつて置くことも、修行の一つと武蔵は考えて来たのであるから、それを見るとすぐ彼の眼の光は違つていたに相違ない。

砧の木槌を下へおくと女房はぷいと起つて筵の上へあがった。茶でも沸かしてくれるのかと思うと、そこに敷いてある乳のみ児の蒲団の中へ手枕で横になって、児に乳ぶさをふ

くませながら、

「その若いお侍、おめえつちはまた、うちの良人^{ひと}にぶつかって、物ずきに、血へどを吐きにやって来なしたのかよ。だが生憎^{あいにく}うちの良人^{ひと}は旅へ出ているので、生命^{いのち}びろいしたようなものだけな」

と、笑っているのであった。

五

憤^むつとなる気持をどうしようもない。はるばるこの山里まで鍛冶屋の女房に笑われに来たようなものである。どこの女房も亭主の社会的位置というものはみな誤認しているらしいが、この女房の如きは、自分の持ち者ほど世に偉い人はないときめているらしいから怖^{こわ}い。

喧嘩もできず、武蔵は、

「お留守か、それは残念な。旅へと仰つしやったが、旅はどこまで？」

「荒木田様へ」

「荒木田様とは」

「伊勢へ来て荒木田様を知らねえでか。ホ、ホ、ホ、ホ」とまた笑う。

乳ぶさを頬ばつていた嬰兒^{あかご}がむずかると、女房は、土間の客などは打ち忘れたさまで、

ねんねしようとして

ねる子はかわいい

起きてなく子は

つらやな

つらやな、母^{かか}なかせ

誑^{なま}りのある子守歌を節さえつけて謡^{うた}っている。

ふいご場に火のあるのがせめて見つけものである。誰に頼まれて来たわけでもなし、諦^{あきら}めるほかはないのだが、

「ご内儀、その壁にかけてあるのが、ご使用の鎖^{くさり}鎌^{がま}ですか」

それを一見しておくのも後学のためであると考えて、手に取って見てもさしつかえないかという、女房はうつらうつら手枕の居眠りと子守歌のあいだに、ふム………といつてあ

いまいにうなず頷く。

「よろしいか」

武蔵は手をのぼして、その一挺を壁の角つのかけ掛から外はずし、手に取って仔細に見た。

「——なるほど、これが近頃だいぶ用いられている鎖鎌か」

ただ握ってみれば、腰にも差せる一尺四寸ほどの棒に過ぎない。棒の先の環かんから長い鎖くさりが垂れていて、その鎖の端には、ぶんと振れば、人間の頭蓋骨を砕くに足る鉄の球がついている。

「ははあ、ここから鎌が出るのか」

棒の横にミゾが彫つてあつて、中に潜ひそんでいる鎌の背が光っている。爪をかけて引き出すと、鎌の刃はは横に身を起して、これは優に人間の首を搔くことのできる刃渡りを備えているのだった。

「ム……こう使うのだな」

左に鎌を持ち、右の手にくさりのついた鉄球をつかんで、武蔵は仮の敵をそこに想像しながら、構えを作つて、独り考えていた。

するとふと、手枕を外してこつちへ眼をくれた女房が、

「なんじやあ、まあ、そのかたちは」

と、乳ぶさをしまいながら土間へ下りて来て、

「そんな形していたら、すぐ太刀を持った相手に斬られてしまう。鎖鎌というのはこう構えるのじゃ」

武蔵の手から引つ奪^たくると、そのつまらない百姓鍛冶屋の女房がひたと鎖鎌を持って、体の仕型^{しかた}を見せた。

「あつ……」

武蔵は思わず眼をみはった。

乳ぶさを出して寝そべっているところを見たのでは、牝牛^{めうし}のような女にしか見えなかったが、鎖鎌を持つて構えると、立派で、端嚴で、その姿は美でさえあつた。

また、鯖^{さば}の背のように青ぐろい鎌の刃渡りには、宍戸^{ししど}八重垣流と彫^ほつてある文字もあざやかに読まれるのだった。

あつ見事など、武蔵が眼を吸いよせられた途端に、鍛冶の女房はもうすぐ仕型の構えを、体から消して、

「ま、こんなものじゃ」

鎖鎌をがらりと一本の棒にまとめて、元の壁へかけてしまった。

武蔵は彼女のした型を、記憶する間がなかったのを、ひそかに遺憾にして、

（もういちど見たいが）

と思つたが、女房はさしたる顔もなく、砧きぬたを片づけたり、朝の炊かしぎの仕掛をしたり、台所のほうでガチャガチャ水仕事に忙せわしない。

（あの女房ですら、あれほどな心得があるとすれば、亭主の宍戸梅軒という男の腕はどれほどか？）

武蔵は病氣のように、急にその梅軒という男にあいたくなつて来た。——だがあの女房のいうには、良人の梅軒は、伊勢の荒木田とかいう人の家へ行つていて留守だという。

伊勢へ来て、荒木田様を知らないのか、ときつきも笑われたことだが、恥をしのんで、馬子にそつと聞いてみると、

「大神宮さまのお守もりゆうど人じゃ」

と、馬子は、韃ふいごのそばの壁へ倚りかかつて、いいあんばいに温ぬくもりながら、もう半分眠つていながらいう。

（伊勢神宮の神官か、そこへ行つたのならすぐ分る、よし……）

勿論その夜は、筵むしろのうえにごろ寝である、それも、鍛冶の小僧が起きて、土間の戸をあけるともう寝ていられない。

「馬子、ことのついでに、山田までのせてゆくか」

「山田へ」

馬子は眼をみはる。

だが、きのうの分の駄賃は無事にもらつたので、その方の不安はない、行こうというところになって今日もまた、武蔵を馬の背にのせて、松坂へ出、やがて伊勢大神宮への何里とつづく参道並木を暮れ方に見た。

冬であるにしても、街道の茶屋はひどくさびれていた。並木の大木が、風雨に仆れたまま、幾つも横たわっていた。旅客の影も馬の鈴も稀れである。

禰宜ねぎの荒木田家へ、武蔵は山田の旅籠はたごから問いあわせてみた。——宍戸梅軒ししどばいけんという者が逗留しているか否かを。

すると、荒木田家の執事からの返辞には、そういう者は泊っていない、何かの間ちがいであろう——とある。

武蔵は、失望と同時に、足の傷の痛みを思い出した。釘を踏んだ傷口はおとといころよりひどく腫^はれている。

豆腐^{とうふ}粕^{かす}を搾^{しぼ}った温湯^{ぬるゆ}で洗うとよいと教えられて、武蔵は翌^{あした}の日、旅籠で一日それを繰り返していた。

（もう今年も師走^{なかば}の中旬）

そう考えると、武蔵は、豆腐くさい湯に焦^{いらいら}々してきた。すでに吉岡家へ宛てての決戦状は、名古屋から飛脚に託して出しているのだ。まさか、その期^ごになつて、足を傷めているからなどとは意地でもないえない。

その期日も、敵の都合まかせといつてやつてある。なお他の約束もあるし、正月の一日までには、どうしても五条の橋だもとまで行つていなければならない。

「伊勢路へまわらず一すじに行けばよかった」

軽い悔^いいを抱^{いだ}きながら、湯だらいに浸^{ひた}している足の甲を見てみると、足は豆腐のように膨^{ふく}れて来る気持がする。

七

こういう家伝の薬がありますとか、この油薬をつけてごろうじませとか、旅籠の者はいろいろ療法を講じてくれるが、武蔵の足は、日の経つほど腫^はれを増して、片足はまるで材木のような重さを感じ、夜具の下に入れると熱と激痛に耐えなくなる。

つくづく考えてみると――

彼はまだ物心ついてから、病氣というもので三日と寝たことの覚えがない。幼少の時、頭の脳天に――ちようど月^{さかやき}代の辺^{ちよう}に疔^{できもの}という腫物を患^{わず}つて、今でも痣^{あざ}のような黒い痕^{あと}を残しているの、彼は常に月代を剃らないことにきめているが――そのほかに病氣らしい病氣はしたことがなかった。

^{やまい}（病もまた人間にとっては強敵だ。こいつを調伏する剣は何か？）

彼の敵は、常に、彼の外にばかりはいなかった。四日ばかり仰向けに寝たままでいる瞑想の課題に、そんなことを考えたりしたが、

（あと幾日）

と、年暮^くに迫る暦を見、吉岡道場との約束に思い及ぼすと、

(こんなことはしてられない)

肋骨^{あばら}は、旺^{さかん}な心臓を抑えるため、鎧^{よろい}のように張つて来て、思わず、材木のように腫れている足で、がばと蒲団を刎^はね退^のけてしまう。

(この敵にすら克^かてないで、吉岡一門に勝てるか)

病魔を組み敷くつもりで、無理に畏^{かしこま}つて坐つてみる。――痛い。気が絶え入るほど痛いのだ。

窓へ向つて、武蔵は眼をつぶっている。かつかと赤くなった顔がやがて醒^さめてくる。彼の頑固な信念に、病魔も負けて、幾分か頭がすずやかになったらしい。

眼をひらくと、窓から真つ直に、外宮内宮の神林^{ひぐら}が展^{ひら}げている。その上に前山^{まえやま}、すこし東に方^{あた}つて朝熊山^{あさま}が見え、それを繋ぐ山と山との肩の間から、群山^{ぐんざん}を睥睨^{へいげい}するように、突兀^{とっこつ}として、剣のような一峰が望まれた。

「驚嶺^{わし}だな」

武蔵は、その山と睨みあつた。仰向けに寝ながら毎日見ていた驚^{わし}ヶ岳^{たけ}である。彼は何となくこの山を見ると闘志を感じるのだった。征服慾を駆り立てられるのであつた。四斗樽

のように腫れた脚をかかえて寝ていると、なんとなく気に喰わない気がしてならない山の傲岸さである。

衆山を抜いて、白雲のうえに、超然としてゐる鷲嶺わしの頭の尖さきを見てみると、武蔵は、柳生石舟斎のすがたが思い出されてならない。石舟斎という人物は、おそらくあんな感じの老人ではないかと思う。——いやいつのまにか彼は、鷲ヶ岳という山が石舟斎そのもののうな気がして来て、遙か雲表うんぴょうから、自分の意気地なさを、嘲り笑われているかのような気がするのだった。

「……………」

山と睨めっこしている間は忘れていたが、ふとわれに返ると、彼はまた鍛冶の鞆ふいごの中に突っこんでゐるような足を持てあまし、

「ウウム、痛い」

思わず膝の下から横へ投げ出して、自分の物でないような太くて丸い足くびに眉をしかめた。

「——おいっ、おいっ」

武蔵はその激痛を吐くような語勢で、旅籠はたごの女中を、不意に呼び立てた。

なかなか来ないので、彼はまた拳固で二つ三つ畳をたたいた。

「おいつ、誰かいなか。……すぐ出立するから、勘定をして来てくれい。それと弁当、焼米、丈夫な草鞋わらじ三ぞくほど、支度をたのむぞ」

神泉

一

保元物語に見える伊勢武者の平忠清たいらのは、この古市ふるいちの出生とあるが、今は、並木の茶汲み女が、慶長の古市を代表していた。

竹の柱を結いゆい、筵むしろあ編みの揚あげ蔀じとみに、色褪いろあせた帳とばりなど繞めぐらして、並木の松の数ほど白お粉しろういの女たちが出ていて、

「寄って行かつしやれ」

「茶など、あがりやんせ」

「そこな若衆」

「旅の衆」

往來の旅客をつかまえて、真昼も夜もけじめがなかった。

内宮へ行くには、いやでも口さがない女の群れの眼を浴びたり、袂たもとの用心をしながら歩かなければ行かない。山田を出た武蔵もまた恐こわい眉と唇を持って、痛む足をひきずりながら、鈍どんどん々と、跛行びつこをひいてここを通った。

「あれ、武者修行さん」

「足をどうなされた」

「癒してあげよ」

「さすつてあげよ」

女たちは、通せんぼして、武蔵の袂をとらえ、笠をつかまえ、腕くびをとり、

「そんな恐い顔したらよい男が、だいなしになるがな」

といった。

武蔵は顔をあからめて、物もい得ずただうろたえた。彼は、こういう敵には何の備えもないようだった。しきりと謝つてばかりいる。その生真面目きまじめないわけを、女たちはまた、豹ひょうの子みたいで可愛らしいといって笑う。そして白い手の暴力はやまないのである。

武蔵はいよいよ狼狽ろうばいして、見栄みえもなく、奪とられた笠を捨てたまま逃げ出した。

女たちの笑い声が、並木の空をどこまでも尾ついて来るような気がした。武蔵はあの白い手の群れに掻き荒された血が容易に鎮しずまらないで困った。

彼も女性というものに決して無感覚ではいられない。彼は永い旅のあいだに、何処でもそういう困る目に遭あった。ある夜は、そのために、寝ぐるしくなることさえあった。白おしろ粉いのにおいを思つて暴れる血を縊しめころすように抑えて眠る努力は、剣の前に見る敵とはちがつて彼も、どうすることもできないのである。この性の心しん焰えんが体じゅうを焼いて、寝がえりばかり打つて明かす夜には、お通のおもかげさえ醜みにくい欲情の対象に、想い出してみるのがあった。

——倅さいわいにも、彼は今、片方の脚が痛かった。少し無理に駈けたので、その脚は、まるで熔鉄ようてつの中へ踏みこんだように、かつかと熱を持つて、一步ごとに、激痛が足の裏から眼へ突き抜けて来る。

こう痛むのは、覚悟の前で出て来たことである。風呂敷ふろしきづつみのように大きく縛ねった片足は、持ち上げるたびに、全身の力を要した。——そのため紅い唇や、蜂蜜のように粘ねばる手や、甘酢あま酢い髪の毛のにおいやらが、すぐ頭から去つて、彼は、常の彼の身に回かえっていた。

(くそ！ くそ！)

一歩一歩、火の粘土ねんどを踏むようだった。汗あせが額ひたいににじんで来る。全身の骨が、ばらばらになるかと思う。

だが、五十鈴川いすずがわの流れを越え、内宮へ、一歩入ると、何か人心地がまるで変っていた。草を見ても樹を見ても、ここには神のけはいを感じるのであった。——何なにごとの在おしますかは知らねども——鳥の羽音までが人の世のものではなかった。

「ウムム……」

武蔵は遂に、苦痛に耐えかねたのであろう、風かぜ宮のみやの前まで来ると、大杉の根へ、呻うめきながら、仆ふれて、自分の脚をじつと抱えた。

二

死んで石と化なってしまったかのように、武蔵はいつまでも動かなかった。体の内からは膿うぐんで膨ふくれ上がった患部が火のような脈を打ち、体の外からは十二月の夜の寒気がひしひしと肌を刺した。

「……………」

武蔵はやがて知覚を失っていた。一体、どういう考えのもとに、突然、旅籠はたごの寢床を蹴つて飛び出してしまったのだろうか。こういう苦しみをするのは当然わかつていたことがある。

蒲団の中で自然に足の癒るのを待つていては果てしがないから——という病人の癪かんしや癪かんしやからとすれば、無茶も甚だしい沙汰だ、あまりといえは乱暴である、苦しむだけで、その後のよけいに悪くなるのは知れきっている。

だが、精神だけは恐ろしく張りつめているらしい。そのうちに彼は、はツと首を擡もたげた。鋭い眼で、虚空をにらんだ。

虚空には、神苑の杉の巨木が、ごうつと絶え間なく暗い風に鳴っていた。——が今、武蔵の耳をいたく刺戟したのは、その風の間に流れて来た——笙しょうと筆ひちりき筆ひちりきと笛とを合奏あわせた古楽の調べであつた。

さらになお、耳をすますと、その奏かなでのうちに、やさしい童女わらべたちの唱歌が聞き取れる。

シダラ ウテト

テテガノタマエバ

ウチハンベリ

ナラビハンベリ

アコメノソデ

ヤレテハンベリ

オビニヤセン

タスキニヤセン

イザセンイザセン

——くそっ！ とまたしても武蔵は唇を噛んで、無理に立ちあがった。自分の体が、にかわ膠のようにままにならないらしい。風宮の土塀へ、両手をかけ、手で蟹かにのように横へ歩いてゆく。

彼方あなたの燈ひの洩れる葎しとみから、天界の音楽は聞えるのだった。そこは、子等こらのたち之館のたてといつて、大神宮に仕える可憐な清女たちが住む家だった。おおかた、天てん平びやうの昔のように笙しょうや簞ひ篳ちりきの楽器をならべて、その清女たちが、神樂かぐらの稽古きこをしているのであろう。

虫が歩むように、武蔵が近づいて行ったのは、その子等こらのたち之館のたての裏口うしろぐちらしかった。中を覗いてみたが、誰もいないのである。——で彼は、かえってそれを気易きやすく思ったように、帯

の大小を取り外して、背の武者修行風呂敷とともに一つに絡からげ、塀の内の蓑掛みのかけの釘へ、預けるようにかけておいた。

丸腰の空身になると、武蔵は両の手を、腰の骨に当てて、すぐ跛行びつこをひいてどこかへ立ち去った。

ほど経てからである。

そこから五、六町ほど離れている五十鈴川いすずがわの岩のほとりに、一人の裸形らぎようの男が、氷を割って、ざぶざぶと水を浴びていた。

倅きりかいに神官が気づかないからよいようなものの、もし見咎みとがめられたら、

(氣狂ききちがいつ)

と、叱り飛ばすに違いない。

それほどに、裸の男の水浴みずあびは、傍はたから見ると氣狂いじみて見えた。太平記という書ほんによれば、その昔、この伊勢地方には、仁木義長につきよしながという弓矢の大馬鹿者がいて、神領三郡に打ち入って、ここを占領し、五十鈴川の魚を漁とって食らったりし、神路山へ鷹を放って小鳥の肉を炙あぶったりして、大いに武威を謳うたっているうちに氣が変になったという男の話があるが——今夜の裸男に、その悪あく霊りようが憑のり移ったのではあるまいか。

やがて彼は水禽みずどりのように、岩の上にあがって体を拭き着物を着こんだ。——それは武蔵であつた。

鬢びんの毛は、そそけ立つて、一すじ一すじ、針のように凍つていた。

三

このくらいな肉体の苦痛に勝てないで、生涯の敵に勝てるか、と武蔵は自分を叱咤するのであつた。生涯はおろかなこと、やがて近い日には、吉岡清十郎とその一門という大敵に当らなければならない。

吉岡方と自分との事情は、かなり險悪でまた複雑な事情にある。今度という今度こそは、先は一門の実力と体面を挙げて自分へかかつて来るにちがいない、必殺の陣を布しいて、来るべき日を、

(今やおそし)

と彼らは、手ぐすね引いて、待ちかまえているに相違ないのだ。

よく強がつた侍が、念仏のようという、必死とか、覚悟などという言葉も、武蔵の考え

からすると、取るに足らないたわ言（じごと）のように思える。

およそ人なみの侍が、こういう場合に立ち至った時、必死になることなどは、当然な動物性である。覚悟のほうは、やや高等な心がまえであるが、それとても、死ぬ覚悟ならば、そう難しいことではない。どうしても死なねばならぬ事態に迎えられてする死ぬ覚悟だとすれば、なおさら、誰もすることである。

彼がなやむのは、必死の覚悟が持てないことではなく、勝つことなのだ。絶対に勝つ信条をつかむことである。

道は遠くない――

ここから京都まで、四十里とはあるまい、すこし踵を飛ばせば、三日を費（つ）やさずに行き着くことが出来る――だが、心の備えは、幾日かかったら出来るというものではない。

すでに名古屋から吉岡方へ、決戦状は出してあるが、その後で、武蔵は、

（肚はできているか。きつと勝ちきることができるか）

と、自分で自分に向って糺（ただ）してみると、遺憾ながら、心の隅に一脈の脆（もろ）い層を認めないわけに行かなかった。

それはなにかという、やはり自身の未熟を自身知っていることだった。彼は、自分が

まだ決して達人の域にも名人の境地にも到っていない、未完成の人間であることをよく知っている。

奥蔵院の日観にあい、柳生石舟斎を思い、また、沢庵坊主の出来ていることを考えても——いかに自分の価値を高く置こうとしても、

（未熟だ）

と、自分の粗質をばらばらに解^{ほぐ}して、その弱点や虚を多分に見出さずにいられない。

そういう未熟な——まだ出来あがっていない自分を押しすすめて行つて、必殺の士^しを占めている多数の敵の中へ入ってゆくのだ。しかも勝とうというのだ。——兵法者たるものの根本的な本義として、いかによく戦つても、戦つただけではよい兵法者とはいわれない、飽くまで勝つ！ 飽くまで天寿を全うするまで勝ち抜いて、この世に見事に生命の太い線を描いて見せなければ、兵法者として一人前に生きた者とはいわれないのである。

武蔵は、身ぶるいして、

「おれは勝つ！」

声を出して、神林をさけびながら歩き出した。

五十鈴川の上流へ向つて——

磊々^{らいらい}と重なっている岩のあいだを、彼は、原始人のように、這いすすんで行くのだつた。斧^{おの}を入れた例^{ため}しのない太古の溪谷林には、音のしない滝がかかっていた。滝水も皆、氷柱^{つらら}になつて凍っているのである。

四

いったい、どこへ、何を目的にして、武蔵はそんな努力を賭^として行くのか。裸で、神泉に浴した罰があたつて、ほんとに気でも狂つたのではなからうか。

「何を。何を」

鬼のような血相なのである。岩に攀^よじ、藤づるにつかまって、巨岩大石を、足の下に征服してゆく一步一步の努力というものは、到底、生やさしい意志でやれる仕事でない。それに大なる目的がかかつていなければ、正気の沙汰^{あやふ}ということはできない。

五十鈴川の一之瀬から、約十五、六町の溪谷は、鮎^{あゆ}すらも上^のれないといわれている岩石と奔湍^{ほんたん}である。それから先は、猿か天狗のほかは、行けそうもない断崖だった。

「ウム、あれだな驚嶺^{わし}は」

彼の精神状態のまえには、不可能という壁は見えないらしい。

大小や持物を、子等こらのたち之館に置いて来たのはこの辺の用意であつたとみえる。武蔵は断崖の藤づるへ取ツついた。一尺一尺と宙へよじ登つてゆくのであつた。人間の力とは見えな
い。何か宇宙の引力が一箇の地上の物体を徐々と引き上げているように見える。

「ようしつ」

征服した断崖の上で、武蔵は大声を張つていった。五十鈴川の白いながれの末から二見
ヶ浦なぎさの渚まで、もうそこからは遥かに下に見えたのだ。

きつと、彼が眼をやつた前方には、夜気に煙っている疎林の中へ、嶮けんしゅん峻な驚ヶ岳すそが
裾をひいていた。——痛む足をかかえて寝ていた旅籠はたごの一室から、毎日のように仰いでい
た、氣に喰わない驚嶺わしのすがたへ、彼は今、こうして肉薄して来たのである。

（石舟斎だ、この山は）

武蔵は、そう思つて、ここまで来た。——あの腫はれ上がっている脚を立てて、勃然と、
旅籠を飛び出し、神泉を浴びて、ここへ攀よじて来た彼の目的は、初めてそのらんらし
た眼に明らかになつている。——要するに、彼のおそろしい負けん氣の底には、いまだに、
柳生石舟斎という巨人が、頭へ暈かきをかぶせられているようで、氣になつてならないらしい

のである。

ために、この山のすがたが、なんとなく石舟斎のように見え、足の患わづらいに悩んでいる自分を、毎日、嘲あざけるかのように睥睨へいげいしている山の容かたちが、忌々いまいましくて、

（気に喰わない山だ）

と、数日、思い積っていたので、その鬱憤をかかえて、一気に、頂へよじ登り、

（これでもか、石舟斎め）

と、土足にかけて、踏みにじってやったら、さだめし、さばさばするだろう。またそれくらいな、自信がつかめなければ、京都の土を踏んで、吉岡方との試合に、どうして勝目があるか。

踏み敷く草も木も氷も、武蔵の足にかかるもの、敵でない物はない。——勝つか負けるか！ 一歩一歩が勝敗への呼吸であった。神泉の中で氷化した五体の血が、今は熱泉のように毛穴から湯気を立てていた。

行者ものぼらないという驚ヶ岳の赤肌へ、武蔵は、抱きついていた。足がかりを捜して、足が岩へかかると、崩れてゆく砂岩が、ふもとの疎林の中で轟いた。

百尺——二百尺——三百尺——武蔵の影はだんだん空へ小さくなって行く。白雲が来て

つつみ、白雲が去るたびに、その影は空のものとなっていた。
驚嶺は巨人のように、彼のすることを冷然と視ていた。

五

蟹が岩へ抱きついたように、武蔵は山の九合目にしがみついていた。

その手でも足でもが、少しでも弛んだせつなには、彼の体は、崩れてゆく岩とともに、墜ちるところまで墜ちて行かなければ止まるまい。

「ふーッ……」

満身の毛穴が呼吸をする。ここまで来ると、心臓が口の外へ出てしまうかと思うほど苦しかった。少し登っては、すぐ休む。——そして思わず攀じのぼって来た脚下を見おろすのであった。

神苑の太古の森も、五十鈴川の白い帯水も、神路山、朝熊、前山の諸峰も、鳥羽の漁村も伊勢の大海ばらも、すべてが自分の下にあった。

「九合目だ！」

温い汗が、内ぶところからむつと顔へにおう。武蔵はふと、母の胸に首を突っ込んでい
るような陶醉をおぼえた。この荒い山の肌と自分の肌との差別がつかなくなって、そのま
ま眠ってしまいたくなつた。

ざざざと、足の^{おやゆび}指をかけている岩がくずれた。彼の生命がピクと脈を打って、無意
識に、次の足がかりを捜す。——もう一息というところの苦しさは言語に絶したものだっ
た。それはちやうど、斬るか斬られるか、力の互角している剣と剣との^{たいじ}対峙に似ている。

「ここだ。寸前だ」

武蔵はまた、山を引つ掻くように、手足をすすめた。

ここでへたばるような弱い意力や体力であるとすれば、兵法者として、ゆくすえ何日か、
他の兵法者のために、敗れを取るにきまつている。

「畜生」

汗が岩を濡らすのであつた。自分の汗で幾たびも滑りかける程になる。武蔵の体は、一
朶^だの雲みたい^{もつもつ}に、濛々と汗にけむっていた。

「石舟斎め」

呪文^{じゆもん}のようにいいつつける。

「——日觀め、沢庵坊め」

一足一足、彼は日頃自分より高い人間であると思っっている者の頭を踏み越すつもりで踏みのぼって行つた。山と彼とはもう二つの物ではない。こういう人間にしがみつかれたことを山霊も驚いているにちがいない。——突然、大砂利や砂を飛ばして、ぴゅうつと、山がうなつた。

手で口を塞がれたように、武蔵は息が止まつた。岩につかまっけていても体をズズズと持つて行かれそんな風圧をおぼえた。……しばらく目をつぶつたままじつと俯つ伏してゐるのである。

しかし、彼の心には、凱歌がみちていた。俯つ伏したせつなに、十方無限の天空を見たのである。しかも、うツすらと夜の白みかけた雲の海には、曙色が映してゐた。

「かつ、克つた！」

頂上を踏んだと思う途端に、彼は意志の弦もぷつんと切れたように倒れてしまったのだ。山顛の風はたえまもなく彼の背へ小石を浴びせた。

——そうして刻々、無我無性のさかいに俯つ伏しているうちに、武蔵は何ともいえない快感に全身がかるくなつて来るのを覚えた。汗でビシヨ濡れになつてゐる体は頂上の大地

へ慥^{しつ}乎と貼りついていて、山の性と、人間の性とが、この黎明^{れいめい}の大自然の間に、莊嚴な生殖をいとなんでいるかのように、彼はふしぎな恍惚に打たれていつまでも眠っていた。はつと、頭を擡^{もた}げてみると、頭は水晶のように透明な気がする。体を、小魚のようにピチピチと動かしてみたい。

「おおうつ、おれの上にはなにももない。おれは鷲嶺^{わし}を踏んでいる！」

鮮麗な朝陽^{ちやうよう}が、彼と山頂を染めていた。彼の原始人のような太い両腕は空へ突ツ張っていた。そしてたしかにこの山頂を踏みしめているところのわが二つの足をじつと見た。ふと気がついたのである。見ればその足の甲から、青い膿汁^{うみ}が一升もあふれ出ているではないか。それは、またこの清澄な天界に、異^いな人間のおいと、噴^ふつ切れた万鬱^{ばんうつ}の香氣とを放っていた。

冬かげろう

子等之館に起き臥ししている妙齡の巫女たちは、もちろんみな清女であつた。幼いのは十三、四歳から大きいのは二十歳ごろの処女もいた。

白絹の小袖に緋の袴は、神樂をする時の正装であつて、平常、ここの館で勉強したり掃除をしている時は、大口に似た木綿の袴を穿き、袂の短い着物を着て、朝のお奉仕がすむと、めいめいが一冊ずつの書をかかえて、禰宜の荒木田様の学問所へ、国語や和歌のお稽古にゆくことが日課であつた。

「あら、なんじやろ？」

ぞろぞろと裏門から今、それへ出かけてゆく清女たちの群れの中で、一人が見つけ出したのである。

夜のうちに、武蔵がその蓑掛の釘へかけて行つた大小と武者修行風呂敷。

「誰のやろ？」

「知らんがな」

「お侍さまの物や」

「それは分っているが、どこのお侍様やら？」

「きつと、泥棒が忘れて行つたのじやろが」

「ま！ さわらぬがよい」

まるい眼を^{みは}睜り合つて、牛の皮をかぶった盗人の昼寝でも見つけたように、取り囲んで固唾^{かたず}をのむ。

そのうちに、一人が、

「お通様^{つう}にいうて来よか」

と、奥へ走つて行つて、

「お師匠さまお師匠さま、たいへんですよ、来てごらんなさい」

欄^{らん}の下から呼ぶと、寮舎の端にある一室から、お通は机へ筆をおいて、

「なんですか」

窓を開けて顔を出した。

小さい巫女^{みこ}は指さして、

「あそこへ、盗人が、刀と風呂敷を置いてゆきました」

「荒木田様へお届けしておいたらよいでしょう」

「だけど、みんな触るのを、怖がつているから、持つて行かれません」

「まア、たいした騒ぎようですね。じゃあ後から私がお届けしに行きますから、皆さんは、

そんなことに道草をしないで、はやく学問所へお出でなさい」

程経て、お通が外へ出て来たころには、もう誰もいなかった。炊事をする老婆と、病人の巫女みこが一室にしんと留守しているだけだった。

「お婆さん、これは誰の物か、心あたりがないのですか」

お通は、そう糺ただしてみた上で、武者修行風呂敷でくりつけてある大小を下ろしてみた。うっかり持つと、手から落ちそうに重かった。どうしてこんな重量のあるものを男は平気で腰にさして歩かれるかと疑った。

「ちよつと、荒木田様まで、行つて来ますから」

留守の婆やにいつて彼女は、その重い物を両手にかかえて出て行つた。

お通と城太郎の二人が、この伊勢の大神宮の社家へ身を寄せたのは、もう二月ほど前のことで、伊賀路、近江路、美濃路と、あれから後、武蔵のあとを捜しに捜しぬいた揚句、冬にかかる、さすがに女の山越えや雪の中の旅には耐えかねて、鳥羽の辺りで、れいの笛の指南をして逗留ねぎしているうち、禰宜ねぎの荒木田家で伝え聞いて、子等之館の清女たちへ、笛の手ほどきをしてくれまいかという話であつた。

そこで指南することより、彼女はここに伝わっている古楽を知りたかつたし、また、神

林の中の清女たちと幾日でも暮してみること好ましくて、乞われるままに身を寄せたのであった。

その際、都合のわるいのは連れの城太郎であつて、少年だからといつてこの清女の寮と一緒に住むことは当然許されないもので、やむなく彼は、昼間は神苑の庭掃き^{にわは}を命じられ、夜になると、荒木田様の薪小屋^{まき}へ歸つて眠つていた。

二

蕭々^{しょうしょう}と、落葉樹の冬木立は、この世とも思えない、神苑のそよ風に鳴つていた。

一すじの煙が——その煙さえ何となく神代のもののように——疎林の中からあがつていく。その煙の下には、竹箒^{たけほうき}を持つてゐる城太郎の姿がすぐ聯想された。

お通は足を止めて、

（あそこで、働いている）

と思うた。そう思うだけでも、微笑^{ほほえ}みが頬へのぼつて来るのである。

あの腕白が。

あの、きかん坊が。

この頃はよく素直に、自分のいうことをきき、また、遊びたい盛りを、ああやって働いてくれると思う。

パーン、パーンと木を折るような音が響いて来る。お通は、重い大小を両の手にかけ、ていたが、つい林の小道へ入って、

「城太さアーン」

すると、

やがて遥か彼方^{あなた}で、

「おおウいつ」

相変らず元気にみちた城太郎の返辞が聞え、間もあらずそれは駈けて来る跫音となつて、

「お通さんか」

と、眼のまえに立った。

「まア、お掃除をしているのかと思つたら、その恰好は何ですか。——^{はくちよう}白丁を着ているくせに、木剣など持つて」

「稽古をしていたんだよ。立木を相手に、剣術の独稽古^{ひとりげいこ}を」

「お稽古は結構ですけど、このお苑を、何と心得ているんですか。清浄と平和をあらわすためのわたくしたち日本人のこのころのお苑にわですよ。民くさの母とおまつり申しあげである女神さまの神域です。——ですから、また、ごらんなさい。神苑のうちの樹木折るべからず、鳥獸殺生禁断のことという禁札が立ててあるではありませんか。その中で、お掃除役を奉仕する者が、木剣で木など折ってはいけませんでしょう」

「知ってらい」

城太郎はそういつて、お通のお談義へ、ばかにするなというような顔つきをした。

「知っているなら、なぜそんな物で、樹を折るんですか。荒木田様に見つかると、叱られますよ」

「だって、枯れている樹を打つならいいだろう。枯れ樹でもいけないかい？」

「いけません」

「何いつてやがるんだい。——じゃあおれは、お通さんに聞きたいことがあるよ」

「なあに」

「そんなに、大切な苑にわならば、なぜもつと、今の人たちが、みなして大事にしないのだい」
「恥ですね、ちょうど、それは自分たちのところに、雑草を生やして置くのも同じですか」

ら

「雑草ぐらいならよいが、雷で裂けた樹は裂かれたまま朽ちているし、暴風雨でふき仆された大木は、根を出したまま方々で枯れている。彼方此方のお社は、鳥が来て、屋根を突ツつくものだから、雨が漏^もっているようだし、廂^{ひさし}の壊れているところだの、曲っている燈籠だの——どうしてこれがそんなに大切な所と見えるかい？ え、お通さん、おれは聞きたいね——大坂城は摂津^{せつ}の海から見ても燦爛^{さんらん}と光っているじゃないか。徳川家康は今、伏見城を始め諸国に十幾つも巨^{おお}きな城を築かせているというじゃないか。京都、大坂、どこの大名や金持の邸^{やしき}をのぞいても、住居はぴかぴかしているし、庭は利休だの遠州だのつて、塵^{ちり}一つさえ茶の味に触るなんていつているのに——ここがこんなでいいものかね。この広い神領に箒^{ほうき}を持っているのは、おれと、白丁を着たつんぼの爺さまと、三、四人しかないんだぜ」

三

お通は、くすりと白い顎^{あご}を掬^{すく}つて、

「城太郎さん、それはお前、いつか荒木田様が仰つしやった講義の時のおはなしと、そっくりじゃないの」

「あ、お通さんもあの時、聞いてた？」

「聞いていましたとも」

「じゃ駄目だ」

「そんな請売り^{うけう}りは、通用しませんよ。——だけれど、荒木田様がそういつて嘆くのはほんとだと思います。城太郎さんの請売りには感心しないけれど」

「まったくだ。……荒木田様にいわれてみると信長も、秀吉も、みんな偉くない気がしちまう。偉いには違いないんだろうけれどさ、天下を取っても、その天下で、自分だけが偉い頂上だと考えていることが、偉くないや」

「でも、まだまだ信長や秀吉は、ましな方なんです。世間と自分への言い訳だけにでも、京都の御所をしつらえたり、人民をよろこばしたりもしていますからね。——ところが足利氏の幕府だった永享^{えいきやう}から文明年間なんて、たいしたものでした」

「へ？ どういう風に」

「その間には応仁の乱なんていう年があつたでしょう」

「ウム」

「室町幕府が無能だったので、内乱ばかり起って、力のある者と力のある者が、自分たちの権力ばかり通そうとし、人民たちは一日とて、安き日もなかったほどですから、国のことなんか、まじめに考えてみる人もありません」

「山名、細川なんかの喧嘩だろう」

「そうそう、戦を、自我のためにばかりしていました、手のつけられない私闘時代。――

その頃、荒木田様の遠い先は、荒木田氏^{うじつね}経^ねといつて、やはり代々、この伊勢の神主さまを勤めていたんですが、世の中の我利我利武者^がが、わたくしの喧嘩ばかりしているために、応仁の乱の頃からは、たれもこんな所をかえりみる者がなく、古式も御神事もすっかり^{すた}廃れてしまったのです。それを前後二十七度も、政府に嘆願して、ここの荒廃をおこそうとしたのですが、朝廷には費用がなく、幕府には誠意がなく、我利我利武者は、自分たちの地盤争いに血まなこで、捨てて省みる者もなかったということです。――氏経様は、その中を、時の権力や貧苦とたたかい、諸人を説きあるいて、やっと明応の六年ころ、^{かりみや}仮宮の御遷宮をすることができたというのです。――ずいぶん呆れるじやありませんか。――

だけど、考えてみると、私たちも、大きくなると、この体の中に、母の乳がながれて赤く

なっていることは忘れてしまっていますからね」

すっかりお通に熱心に喋舌しゃべらせてしまつてから、城太郎は手をたたいて飛び退き、

「アハハハ。あははの、あははだ。おれが黙つて聞いていれば知らないと思つて、お通さんのもみんな、請売りじゃないか」

「あら、知つてたの、——人が悪い！」

と打つ真似をしたが、両の手にかかえている大小の重さに、ただ一足追つて、笑いながら睨んだ。

「オヤ」と、城太郎は寄つて来て、

「お通さん、その刀誰のだい？……」

「いけませんよ、手を出しても、これは他人ひとの物ですから」

「奪とりやしないから、見せてごらんよ。——重そうだね。大きな刀だね」

「それごらん、すぐほしそうな眼をするくせに」

四

ばたばたと小走りに草履の音が後ろへ来ていた。先刻、子等之館から出て行つた稚い巫女の一人で、

「お師匠さま、お師匠さま。あちらで、禰宜様が呼んでいらつしやいますよ。何か、お頼みがあるんですつて」

と、お通へ呼びかけ、お通が振向くとすぐにまた、元のほうへ走つて行つた。

城太郎は、何か、びくつとしたように、四辺の樹々を見まわした。

冬の樹洩れ陽は、さざ波のように、戦ぐ梢から大地へこぼれていた。城太郎はその光の斑の中に、じつと、何か幻想でも描くような眼をしていた。

「——城太さん、どうしたんです。何をきよろきよろ見まわしているの」

「……なんでもない」

さびしげに城太郎は指を噛んだ、そしてこういった。

「今、あっちへ行つた娘が、いきなりお師匠様と呼んだらう。……だから、おいらは、自分のお師匠さまかと思つてさ——。どきつとしたんだよ」

「武蔵さまのこと？」

「あ、あ」

唾おしのように、城太郎が空虚うつろな返辞をすると、お通はさなきだに悲しくなってしまうて、途端おえつに、嗚咽おえつしたいようなものが、眼とも鼻ともわからない感情の線をつき上げて来るのだった。

——そんなこと、いい出してくれないければよいのに、と城太郎の無心にいったことばが辛くて恨めしくなってしまう。

一日として、武蔵をわすれ得ないことが、お通には苦しい重荷だった。なぜそんな重荷は捨ててしまわないのか——そして平和な郷さとで、よい女房になりよい子を生もうとしないのか——とあの無情な沢庵はいうが、お通の耳には、恋を知らない禪坊主を憐れむ心こそ起るが、抱きしめている今のものを、心から捨てたいなどは夢にも思われないのである。恋は、虫歯のように、どうにもならない傷いたみを持つ。ふとまぎれている間こそ、お通も何気なくしているが、思い出すと、矢もたてもなくなつて、酌あてがないまでも、諸国諸街道を足にまかせて捜し歩き、武蔵の胸へ顔を当てて泣きたい。

「……ああ」

お通は、黙つて歩きだした。——何処に、何処に、何処に？——およそ生きとし生ける者の数多あまたな悩みのうちでも、焦じれたくて、やるせなくて、どうにもならない悶もだえは、会

えない人に会わんとする人間の焦躁であろう。

ポロリと、涙をこぼしながら、お通は自分の胸を抱きしめて、黙々と足を運んでいた。

——その手とその胸との間には、汗くさい武者修行風呂敷と、柄糸つかいとの腐っているような重い大小がかかえられている。

だがお通は、知らなかった。

うす汚いその汗のにおいが、武蔵の体の物であるなどどうして考えられようか。重いという感じのほか、お通は持っていることさえうつかりしていた。心のすべてを武蔵のことに占められて。

「……お通さん」

城太郎は、彼女の後から済まない顔して従したがって来た。禰宜ねぎの荒木田様の門の内へ、彼女のさびしそうな背が隠れかけると、たもとへ飛びついて、

「怒ったの？ 怒ったの？」

「……いいえ、なにも」

「ごめん。——お通さん、ごめんね」

「城太郎さんのせいじゃありませんよ、またわたしの泣きたい虫が起ったんでしよう。わ

たしは、荒木田様の御用を伺つて来ますから、おまえは、あちらへ戻つて、一生懸命にお掃除をなさいね」

五

荒木田氏うじとみ富は、自分の邸をまなびのや学之舎と名づけて、学校に当てていた。そこに集まる生徒は、この可愛らしい巫女みこのみに限らない。神領三郡のさまざまな階級の子が四、五十人ほど通つて来る。

氏富は、今の社会ではあまりはやらない学問をここで幼い者たちに教えていた。それは文化のたかいという都会地ほど軽んじられている古学であつた。

ここの子女が、その学問を知ることが、この伊勢の森がある郷土としても、ゆかりがあるし、国総体の上からも、今のように、武家の盛大が、国体の盛大かのように見えて、地方のさびれかたが、国のさびれとは誰も思わないような世の中に、せめて、神領の民の中にだけでもこころの苗なえを植えておけば、いつかは生々とこの森のように、精神の文化が茂る日もあろうか——という、これは彼の悲壮な孤業なのであつた。

むつかしい古事記や、中華の経書なども、氏富は、子どもの耳になじむように、愛と根気をもって毎日話した。

氏富が、そんなふうに、十数年、倦むことなく、教育しているせいかな、この伊勢では、豊臣秀吉が関白として天下を掌握しようが、徳川家康が征夷大將軍となつて、威をふるつて見せようが、世間一般のように、英雄星を太陽とまちがえるような錯誤は三歳の童児も持っていない。

——今、氏富は、その学之舎まなびのやのひろい床ゆかから、すこし汗ばんだ顔をして出て来た。

生徒たちは、そこを出ると、蜂の子のように帰つて行つた。すると一人の巫女みこが、

「禰宜ねぎさま。お通さまが、あちらで待つておりますよ」と告げた。

「そうそう」

氏富は思い出して、

「呼びにやつておきながら、すっかり、忘れていた。どこへ来ているか」

お通は、学問所の外に立つて、あの大小をまだ抱えたまま、先刻さつきから氏富が子供たちへ熱心に行っている話を、そこで聞いていたのであつた。

「――荒木田様、ここにおります。お通でございしますが、何か、御用でございましょうか」

六

「お通さんか、待たせて済まなかったの。まあお上がり」

氏富は、自分の居間へ彼女を導いて行つたが、坐らぬ前に、

「なんじや？」

と、彼女の抱えている大小へ目をみはつた。

今朝、子等こらのたち之館の内堀みのかけの蓑掛みかけに、持主の知れないこの大小がかけてあつて、ほかの品物しなとちがい、巫女みこたちが気味悪がるので、自分が届けに持つて来たのですと話すと、荒木田氏富も、

「ホ？……」

白い眉を顰ひそめ、いぶかしげに眺めていたが、

「参拝人のものでないのう」

「ただの参拝人が、あんなところへ入つて来るわけはありません。それに、ゆうべは見え

なかったのに、今朝がた稚児たちが見つけたのですから、堀の内へ入って来たのも夜半か夜明けらしいのです」

「ふうむ……」

嫌な顔して、氏富は、口のうちで呟いた。

「ことによるとわしへ思い当るように、神領郷士の者が、嫌がらせにした悪戯かも知れぬな」

「そんな悪戯をしそうな者のお心当りがあるのですか」

「ある！……実はお汝に来てもらうたのもその相談じゃが」

「では何か、私に関りのあることで」

「気持を悪くなさるまいぞ——こういうわけじゃ。お汝の身を、あの子等之館へ置いておくのがよろしくないというて、わしの身を思うてくれるあまり、わしに喰ってかかる神領郷士の者がある」

「ま、私のために」

「なんの、お汝がそう済まん顔をする理由はちつともない。しかし、世間眼というもので見ると——怒りなさるなよ……お汝はもう男を知らぬ清女ではない——清女でもない女

を子等之館へ置くのは神地を穢けがすものだ——まアこういうのじゃな」

氏富は淡々と話しているが、お通の眼のうちには、口惜しげな涙がいっぱいに光った。誰に向つて怒りようもないそれは無念さだった。しかしまた、旅に馴れ、人に馴れ、そして垢あかのように年月古い恋を心につけて世間をさまよっている女を——世間がそう見るのは、当り前かも知れないと思う。だが、それにせよ、処女が処女でないといわれることは、忍び難い恥辱をあびたように身が顫おのくのだった。

氏富は、それほどの問題とは考えていないらしい。けれど、人の口がとかくうるさいし、もう数日のうちには初春はるともなるのだから、この辺で、巫女みこたちの笛の指南は打切りにしてもらいたい——つまり子等之館を出てくれまいかという相談であつた。

元より最初から長居をするつもりはないし——氏富にそういう迷惑がかかつては猶さらのこととも考え、お通はすぐ承知して、ふた月余りの恩を謝して、今日にも先の旅へ立ちます——と答えると、

「いや、そう急がいでもよいのじゃが」

氏富は、いい出したものの、薄々聞いていた彼女の身の上に、ひどく気の毒な心地もして、どう慰めたものかと案じるように、貧しげな手文庫を寄せて、何かつつんでいた。

お通の影のように、いつのまにか後ろの縁へ来ていた城太郎は、その時、そつと首を伸ささやべて囁いた。

「お通さん、伊勢を立つの。おらも一緒に行こうね。——もうこの掃除は飽き飽きしていたところだ、ちようどいいや、ネ……ちようどいいよ、お通さん」

七

「わしの寸志じや……まことに薄謝だが、お通さん、路銀のたしに納めてくだされ」

手文庫の貧しい中から、氏富は、いくらかの金をつつんでそこへ出した。

お通は、滅相もないという顔つきで、手も触れない。子等之館の巫女たちへ笛を指南したといつても、自分もふた月ほどの間、多分なお世話になっている。謝礼をいただくくらいならばこちらからも宿料を置いてゆかねばなりませんと断ると、氏富は、

「いやその代りに、お通さんがこれから先、京都の方へ立ち廻られた時、ついでに頼み申したい用事もあるのじやから、それも承知してもらったり、これも納めて置いてもらわねばならん」

「お頼みのことは、何でもいたしますが、これはお志だけでたくさんです」

強^たつて、さし戻すと、氏富は彼女のうしろにいる城太郎を見つけて、

「才^たこれ。それでは、これはお前にあげるから、道中、何ぞ買物でもするがいい」

「ありがとうございます」

城太郎はすぐ手を出して、自分の手に納めてしまつて後、

「お通さん、もらつて置いてもいい？」

と事後承諾を求めたので、お通もせんかたなく、

「すみませぬ」

と礼をいう。

氏富は満足して、さて、

「頼みというのは、お汝^{こと}たちが、京都へ行つた折に、これを堀川の烏^{からすまる}丸^{きよう}光広卿のお手

許まで届けてほしいのじゃが」

と、壁のちがい棚から、ふた巻の絵巻物を取り下ろして、

「おとしの頃、光広卿から頼まれて、ようようこのほど描きあげたわたしの拙^{つたな}い絵巻

やが、詞^{ことばがき}書を光広卿が遊ばして、献上するお心と聞いておる。ただの使いや、飛脚の

者の手に託しては、それゆえに、心もとないのじや。雨にもよぐれぬよう、不浄なこともないように、お汝^{こと}たちが、大事にとどけてくれまいか」

これはまた、思いがけない大役と、お通はちよつと当惑顔であつた。しかし、否^{いな}むわけにもゆかず承知すると、氏富は、べつに作つて置いたらしい箱と油紙などを取り寄せ、それを包んで封にする前に、いささか自慢でもあり、また自分の作品を人手に渡す名残も惜しまれるらしく、

「どれ、ちよつと、お汝^{こと}たちにも、見せてやろうかの」

と、二人の膝のまえに、その絵巻を繰^{ひろ}り展^{ひら}げた。

「まー！」

思わずさうお通は声を放つてしまった。城太郎も大きな眼をして、絵の上へのしかかるように首をつき出した。

まだ詞^{ことば}書^{がき}がついていないので、何の物語を絵にしたものかわからないが、そこに描かれてある平安朝の頃の風俗や生活が土佐流のこまかい筆と、華麗な絵具だの砂子^{いろど}に彩られて、次から次へと、眼も飽かさず展^{ひろ}げられて行くのであつた。

絵のわからない城太郎でさえ、

「ああ、この火はいいな。この火は、ほんとに燃え上がっているようだ……」

「手でさわらずに見ておいで」

息をひそめて、二人がそれへ心を奪われているところへ、庭口から廻って来た社家の雑ざ掌しょうが、何か、氏富へ向って話していた。

氏富は、雑掌のいうことを聞いて、うなずきながら、

「ム……そうか、疑わしい者ではあるまい。だが念のためじゃ、当人から一札取って渡してやるがよいぞ」

そういつて、お通がさつきここへ抱えて来た大小と、汗くさい武者修行風呂敷とを、その雑掌の手へ持たせてやった。

八

笛の先生が急に旅立つと聞いて、子等こらのたち之館のたての清女たちは、ひとしく寂しい顔をして、

「ほんと?」

「ほんと?」

お通の旅姿を取り巻き、

「もうここへは帰らないんですか」

と、姉に別れるように悲しんでいる。そこへ城太郎が、

「お通さん、支度出来たよ」

と裏の土堀の外で呶鳴る。

見れば、白丁はくちようを脱いで、いつもの裾の短い着物に、腰には木刀を横たえ、荒木田氏

富から大事にといわれて、二重三重に包んだ例の絵巻物の入っている箱を風呂敷で背中へ斜めに背負いこんでいる。

「まあ、早いですね」

お通が窓から答えると、

「早いき。——お通さんはまだかい、女と歩くとお支度が長いからなあ」

その門から内へは、男と名のつく者は一步も入れない規則なので、城太郎はしばしの間、陽ひなたぼっこをしながら、霞む神路山の方へ欠伸あくびをしていた。

ちよつとの間でも、彼の澹刺はつらつとした神経は、すぐ退屈をおぼえるらしく、じっとして
いられないらしい。

「——お通さん、まだ？」

たち
館の内では、

「今すぐに行きますよ」

そのお通も、すっかり支度はすんでいたのであるが、わずかふた月でも起臥おきふしをともし、しかもよい姉様ねえさまのように親しんでいた人を、旅に奪われるとなると、生徒の巫女みこたちは、一抹の哀愁にとらわれて、なかなかお通を離さないのである。

「——また参りますからね、皆さんもご機嫌よう」

果たして、もういちど来る日があるだろうか、お通は、嘘をついている気がする。

巫女みこたちのうちには、すすり泣く者さえあつて、一人が、五十鈴川の神橋みはしのたもとまで送って行こうという、一も二もなく気が揃つて、お通を囲みながら外へ出て来た。

「あれ？」

見ると、あんなに急せいでいた城太郎がいないのである。小さい唇へ手をかざして、巫女たちが、

「城太さあん」

「城太さあん」

お通は、彼の習性をよく知っているので、そう心配はせず、

「きつと焦れ^じったがって、神橋^{みはし}のほうへ、独りで先に行つてしまつたんでしよう」

「意地悪ツ子ね」

そして一人が彼女の顔をのぞき上げながら、

「あの子、お師匠さまの子？」

と、訊いた。

お通は笑えなかった。思わず真面目になつて、

「何ですつて、あの城太さんが私の子かというんですか。私はまだ、初春^{はる}を迎えて、やつと二十歳^{はたち}を一つ越すんです。そんなに年を老^とつて見えますか」

「でも、誰かがいいましたよ」

お通は、氏富が話した世間の噂を思い出して、ふとまた腹が立った。けれど、世間のすべてがどういおうと、自分を信じてくれる者は一人でいい、あの人さえ信じてくれたらそれでいいと思う。

「ひどいや！ ひどいや！ お通さんは」

先へ行つたと思つた城太郎が、その時、後ろのほうから駈けて来て、

「人を待たせておいて、黙って先へ行ってしまうなんて。ひどいじゃないか」

と、口を尖^{とが}らす。

「だっていないんだもの」

「いなかったら、捜してくれる親切ぐらいあってもいいだろう。おれは、鳥羽街道のほうへ、武蔵様に似た人が行つたので、オヤツと思つて、見に行つたんだ」

「えつ、武蔵様に似た人？」

「ところが、人違いさ、——並木まで出て、後ろ姿を見ると、遠方からでも分るほどな跛^び行^{つこ}と来ていやがる。……がっかりしまつた」

九

こう二人が旅を歩いていれば、城太郎が今舐^なめたような苦い幻^{げんめつ}滅^{めつ}は、毎日経験するこ
とであつて、ふと摺^すれちがう袂^{たもと}にも、もしや？　と思ひ、後ろ姿が似ていると見ては前へ
駈^{かけ}け抜けて振返り、町の二階家にチラと見た人影にも、先に出た渡舟のうちに見える似た
人などにも——馬の上、駕^{かじ}の中の人間、およそすこしでも武蔵の姿をどこかで想わせる者

を見れば、

(おやつ?)

と、動悸を打たせて、それを確かめるまでの努力と、はかない後の落胆に、さびしい顔を見あわせたことが、何十遍かわからない。

それゆえに、お通も今——城太郎がひどくがっかりしている程には、彼の話に執着を持たなかった。

殊に、跛行びっこの侍と聞いたので、こともなげに笑ってしまい、

「それは、ご苦労様でしたね。旅の首途かどから機嫌わるくすると、しまいまで不機嫌がつづくというから、仲をよくして出かけましょう」

「この娘こたちは？」

と、城太郎は、そろそろ従ついて来る巫女みこたちをぶしつけに見まわして、

「——何だって、一緒に来るんだろう」

「そんなことをいうものじゃありません、名残を惜しんで、五十鈴川の宇治橋まで、見送って下さるんです」

「それは、ご苦労でしたね」

お通の口真似をして、城太郎はみんなを笑わせる。

彼を加えてから、それまでは離愁につつまれて、しめツぽい顔して歩いていた巫女^{みこ}たちの群れも、急に華やいで、

「お通さま、お師匠さま、そっちへ曲がつては道がちがいますよ」

「いいえ」

お通は承知らしく、玉串^{たまぐし}御門^{ごもん}のほうへ廻つて、遙かな内宮正殿のほうへ向い、かしわ手を鳴らして、しばらく頭を下げていた。

それを見て、城太郎は、

「ア、なるほど、神さまへお暇乞いをしてゆくのか」

と、つぶやいたが、遠くから見ているだけなので、巫女たちは、彼の背中や肩を指で突いて、

「城太さんは、なぜ拜んで来ないの」

「いやだ、おれは」

「いやだなんて勿体ない、口が曲がりますよ」

「きまりが悪いや」

「神様を拜むのがなぜまりが悪いんですか。町中にあるあだし神や流行り神とはちがつて、自分たちの遠いお母さんも同じ神さまとおもえば何でもないではありませんか」

「分つてるよ、そんなこと」

「じゃあ、拜んでらっしゃい」

「いやだよ」

「強情ね」

「お茶ツぴい！ お杓子！ 黙つてろい」

「まあ！」

それにつれて、同じお下げ髪がみんな、眼をまろくして、

「まあ——」

「まあ——」

「ずいぶん怖い子ね」

そこへ、お通が、遙拝をすまして戻つて来て、

「どうしたの？ 皆さん」

問われるのを待ちかまえて、

「城太さんが、私たちをお杓子しゃもじですって。——そして、神様なんて拝むのは嫌なこったっていうんですよ」

「いけませんね、城太さん」

「なにさ」

「いつかお前の話には、大和やまとの般若はんにや野で、武蔵様が宝蔵院衆と戦いになろうとした時は、思わず、神様と大声をあげて空へ掌てを合わせたというじやありませんか。あそこへ行つて拜んでいらつしやい」

「だって……。みんなが見てるんだもの」

「じゃ皆さん、後ろを向いていてお上げなさい、私も、後ろを向いているから——」
と一列に揃つて、城太郎のほうへ背中を向けた。

「……いいでしょう、これなら」

お通がいったが、返辞をしないので、そつと背うしろの方をのぞいてみると、城太郎は駈け足で玉串御門の前まで行き、そこに立つて、ぴよこんとお辞儀をしていた。

風車

一

冬の海へ向つて、つば焼やの縁台へ腰かけ、足拵えを直しているのは武蔵であつた。

「旦那、島巡りの相客があるがのう、まだ二人ほど足らんのじゃ、乗ってくださいさるか」

と、船頭がそこへ突つ立つてすすめていた。

貝を入れた籠を腕にかけて、ふたりの海女も先刻から、

「旦那はん、お土産に、貝を持つて行かしやれ」

「貝をかうておくれなされ」

「……………」

武蔵は、血膿ちうみによごれた足のボロを解いていた。あれほど悩ませた患部は、すっかり熱も腫れもひいて、平べったくなっていた。白くふやけた皮に、ちりめん皺しわが寄っているだけだった。

「いらない、いらない」

手を振つて、海女あまや船頭しりぞを退けながら、彼は、ふやけたその足で砂を踏みしめ、波打なみうち際ぎわへ行つてザブザブと潮の中へ足を浸ひたした。

この日の朝から、彼は足の苦痛をほとんど忘れたばかりでなく、体についても、健康を考えないほど健康な氣力に充みちていた。それに伴う心の据わり方が違つて来たことももちろんであるが、彼自身は、一本の脚の苦熱が癒つた事実よりも、今朝抱けさいだいている心境が、昨日よりたしかに一日育つてゐることのほうを、自分でも認め、また、自分へ対しての限りなき欣びとしていた。

つば焼やの娘に、革足袋かわを買わせにやり、新しい草鞋わらじをつけ、彼は足で大地を踏みしめてみた。まだ跛行びっこをひく癖がどこか、抜けないし、多少痛む氣もするが、いうに足らない程度である。

「渡舟わたしの者が、呶鳴なうっておりますがの。旦那は大大おおみなと湊へお越しになるのではございませぬか」

さざえを焼いている老爺おやじに注意されて、

「そうだ。大湊へ渡れば、あれから津へ行く便船が出るはずだな」

「はあ、四日市へでも、桑名へでも」

「おやじ、今日はいつたい、年暮くの幾日であつたかなあ」

「はははは、よいご身分でござらっしゃるの、年暮くの日をお忘れか、きようはもう師走の二十四日でござりますわい」

「まだそんなものか」

「お若い方はうらやましいことを仰つしやる」

高城の浜の渡船場まで、武蔵は駈けるように歩いた、もつと駈けてみたい気がするのである。

すぐ対岸の大湊おおみなとへ行く船はいっぱいだった。——その頃ちようど、巫女みこたちに見送

られて、お通と城太郎とは五十鈴川の宇治橋を、手を振り笠を振り、たがいに別れを惜しみつつ越えていたかも知れない。

その五十鈴川の水は、大湊おおみなとの口へながれ入っているが、武蔵を乗せてゆく渡舟の櫓ろ音おとは、ただ無心な諧音かいおんの波を漕いで行く。

大湊からすぐ便船に乗り換えるのだった。尾張まで行くその船には、旅客が大部分で、左手ゆんでに古市や山田や松坂街道の並木を見ながら、やんわりと大きな帆が風をつつんで、伊勢の海のうちでも穏やかな海岸線を悠長にすすんでいた。

陸路をとつて、同じ方角へ、街道を歩いているお通や城太郎の足どりと、どっちが早く、どっちが遅いともいえない。

二

松坂まで行けば、この伊勢の出身者で、近ごろの鬼才と称^{うた}われる神子上典膳^{みこがみ}のいることは分っているが、武蔵は思い止まって、津で降りる。

この津の港で降りる時に、ふと前を歩いてゆく男の腰に、二尺ほどの棒が武蔵の眼についた。

鎖^{くさり}が巻きつけてあるのである。鎖の先には分銅がついている。そのほかに一本の革^{かわ}巻^{まき}の野太刀を差し、年頃四十二、三はたしかなところ。武蔵にも劣らぬ色の黒さの上にあばたがあり、髪の毛は赤くてしかも縮^{ちぢ}れている。

「親方、親方」

後ろから彼をそう呼ぶ者がなければ、誰がどう見ても、野武士としか見えなかったが、船から一足おくれて追いついて来た者を見ると、十六、七歳の鍛^{かじ}冶^や屋の小僧で、鼻の両わ

きに煤^{すす}をつけ、肩に、柄の長い鉄槌^{つち}をかついでいた。

「待ツとくんない、親方」

「はやく来い」

「船へ、鉄槌^{つち}を忘れちまったんで」

「商売道具を忘れたのか」

「かついで来ましたよ」

「あたり前だ、もし忘れなんぞしたら、頭の鉢を割ってやる」

「親方」

「うるせえな」

「今夜は、津へ泊るんじゃねえんですか」

「まだ、たつぷり陽があるから、泊らずに歩いちまおう」

「泊りてえな、旅仕事に出た時ぐらいは、樂をしたいな」

「ふざけるなよ」

船から町へ入る旅客の通り道に、ここでも抜け目なく宿引き^{やどひ}や土産物屋^{せき}が関を作っている。

鉄槌つちを担かついでいる鍛冶屋の徒弟は、そこでまた、親方の姿を見失ってしまい、人混ひとごみの
中でキョロキョロしていたが、やがて親方はそこの店で眼についた弄具おもちゃの風車を買っ
て来て彼の前に現われ、

「岩公」

「ヘイ」

「これを持って行け」

「風車ですね」

「手に持っている、人にぶつかって壊されるから、襟えりくびに挿さして歩け」

「おみやげですか」

「ム……」

子どもがあると見える。幾日かの旅仕事を終えてこれから帰る家に、何よりの楽しみが、
その子どもの笑顔を見ることなのであろう。

岩公の襟くびで廻っている風車が心配と見え、親方は、時折それを振向いて先へ歩いて
行った。

偶然にも、武蔵の行こうとする方角へ方角へと、同じ道を先へ踏んで行く。

(ははあ……)

そこで武蔵はうなずくところがあった。——この男にちがいないと。

けれどまた、世間には、鍛冶屋も多いし、くさりがま鎖鎌を帯びている者も少なくはないので、なお念のため、後になり先になりして、それとなく注意していると、道は、津の城下を横切つて、鈴鹿の山街道へ次第にかかつて行くし、断片的に耳に入る二人の会話でも、武蔵はもう疑いなしと思ひ、

「梅畑までお帰りか」

と、話しかけてみた。にべ膠のないくちぶり口吻で、

「あ。梅畑へ帰るが」

「ではもしや、ししどばいけん穴戸梅軒殿ではないか」

「ふうむ……よく知っているのう。おれは梅軒だが、おめえは？」

三

鈴鹿を越えて水口みなぐちから江州草津へ——この道筋は、京都に上るには当然な順路である

ので、武蔵はつい先頃、通ったばかりのところであるが、年暮いっぱいに目的地へ着き、初春はそこで屠蘇も酌みたし——という気持もあつて、真つ直に來たのであつた。

この間、尋ねて行つて、留守を食つた穴戸梅軒には、他日の折があればとにかく、強いて出会おうという執着も失せていたが——ここで計らずも会つてみると、これはどうしても梅軒の鎖鎌なるものを一見する宿縁の深いものといわなければならない。

「よほど、ご縁があるとみえる。実は、過日お留守に、雲林院村の尊宅へうかがつて御内儀とお会い申した——宮本武蔵という修行中の者ですが」

「ああそうか」

梅軒は、どういうわけか、心得顔で——

「山田の旅籠に泊つて、おれと試合をしたいといつていた者か」

「お聞きですか」

「荒木田様の処へ、おれが行っているかと問い合せを出したろう」

「出しました」

「おれは、荒木田様の仕事で行つたには違ひないが、荒木田様の家になどいるわけはない。神社町の仲間の仕事場を借りて、おれでなければ出来ない仕事を片づけていたのだ」

「あ……それで」

「山田の旅籠はたごに泊っている武者修行が、おれをさがしていると聞いたが、面倒くさいので抛ほうつておいた——それはおめえだったのか」

「そうです。鎖鎌の達人とか、噂を聞いて」

「はははは、女房と会ったかい」

「御内儀が、ちよつと、八重垣流の仕型をお見せくだされたが」

「じゃあ、それでいいじゃないか。なにも、おれの後を追っかけて、試合してみるにも及ぶまい。おれがしてみせても、あの通りだ。——それ以上を見せてもいいが、見た途端に、おめえは冥途めいどに行つていなければならねえしな」

留守をしていた女房もさる者であつたが、この亭主も傲慢ごうまんな天狗である。兵法と傲慢とは、どこへ行つてもつき物のように鼻につくが、それ程な自尊心もなくしては、刃物はものと天狗の上に住んでいられない理由もある。

武蔵にしても、もうそういう梅軒を、心のすみでは呑んでいる気概が十分にある。けれど、彼には見境いのない鶺鴒うの呑みは出来なかつた。それは、人生への出発の第一歩に、世間には幾らも上手うわてがいるぞという実例を、グワンと喰らわせてくれた沢庵たくあんの訓えおしがあるし、

また、宝蔵院や小柳生城を踏んであるいた賜たまものである。

気概と自尊心をもって、先ず相手を呑んでかかる前に武蔵は、細心な眼と、あらゆる角度から、相手の価値を計ってみる。時には臆病なほど、卑屈なほど、応対の態度には下段の構えをとつておいて、

（この人間はこのくらい）

と、見極めのついた後でなければ、滅多に、先の言葉や物腰の不遜に対して、自分の感情をみだすようなことはなかった。

「はい」

と、青年らしい下段の返辞をして、

「仰つしやる通り、御内儀から拝見しただけで、十分、勉強にはなりましたなれど、なお、ここでお目にかかったご縁をもって、鎖鎌についてのご意見でも伺えれば、有難いとぞんじまするが」

「話か。——話だけならしてやつてもいい。今夜は、関の宿へ泊るのか」

「そう思いましたが、おさしつかえなければ、ついでのことに、尊宅へ、もう一宿、お許しくださるまいか」

「旅籠じゃねえから、夜具はないぜ。その岩公と寝る気なら、泊ってゆくさ」

四

そこへ着いたのは夕刻。

紅い夕雲の下に、鈴鹿山の山ふところの部落は、湖のように明るく沈んでいた。

岩公が先へ駈け出して告げたので、鍛冶が家の軒端には、見覚えのあるいつぞやの女房が子を抱いて出て、父のみやげの風車を子とともに差し上げ、

「ほら、ほら、ほら。父が彼地から帰って見えた。父が見えたら、父が——」

傲慢の化け物みたいな穴戸梅軒も遠くから子を見て、飴のように相好をくずし、

「ホイ、ホイ。——坊やか」

手をあげて、五本の指を踊らせて見せる。旅帰りだから仕方がないが、この夫婦は、やがて家の中に坐ると、その嬰ン坊と、べつな話で持ち切つて、共に着いて今夜の一泊をたのんだ武蔵などは眼中にない。

やつと、飯時になつて、

「そうそうあの武者修行にも、飯をやれ」

と梅軒は思い出したように、仕事場の土間にまだ草鞋も解かず、ふいご 韃の火にあたっている武蔵を見て、女房にいいつけた。

女房もまた、愛想がなく、

「あの衆は、この間も留守に来て、泊って行つたのだに」

「岩公と一緒に寝かせてやれ」

「いつぞやは、韃むしろのそばに、筵むしろを敷いて寝てもらたのじゃ、今夜もそうしてもらたがいい」

「おい、若いの」

梅軒の向っている炉には、酒が暖めてあつた。杯を、土間へ向けて、

「酒をのむか」

「嫌いではありません」

「一杯のめ」

「はい」

武蔵は、土間と部屋のさかいに腰かけ、

「頂戴いたします」

と、杯に礼をして唇^{くち}へ入れた、酔^すみたいな地酒だった。

「ご返杯を」

「まあ、それは持つていねえ、おれはこつちの杯^{やつ}で飲むから——時に武者修行」

「はっ」

「幾歳だい、若いようだが」

「明けて、二十二歳を迎えます」

「故郷は」

「美^み作^{まさ}です」

——というと穴戸梅軒の外^それていた眼が、武蔵の全姿をきびしく見直した。

「……さつき、なんとかいったな……名だ……名だ……おめえの名だ」

「宮本武蔵」

「武蔵とは」

「たけぞうと書きまする」

そこへ女房が、汁の椀^{わん}、漬物、箸と飯茶碗を持つて来て、

「おあがり」

と、筵むしろの上へ直じかに置く。

「そうか……」

穴戸梅軒は、ふた息も間を措おいてから、独り語ごとのように頷いて、

「さ、熱くなつた」

と、武蔵の杯へ酌つぎ、唐突にこうたずねた。

「じゃあおめえは、たけぞうが幼名だったのか」

「そうです」

「十七歳頃にも、そう呼んでいたか」

「はい」

「十七の時に、おめえ、又八という男と、関ヶ原の戦いくさへ出やしなかったか？」

武蔵は、ちよつと驚いて、

「御主人には、ようご存じでございますな」

五

「——知っているさ、おれも関ヶ原では働いた人間だ」

そう聞いてから、武蔵も親しみを覚え、梅軒も急に態度を変え、

「どこかで見たように思っていたが、じゃあ、戦場で会っているんだ」と、いった。

「すると、御主人には、やはり浮田家の陣所に」

「おれはその頃、江州野洲川やすがわにいて、野洲川郷土の一まきと、御陣借をして合戦の先手になっていたのさ」

「そうですか、じゃあ、顔ぐらいいは合せていたでしょう」

「おめえの連れの又八はどうしたい？」

「その後、会いません」

「その後とは、どこからのその後？ ……」

「合戦の後、しばらく伊吹のある家に匿かくまわれて、傷の治療をしていましたが、その家で別れて以来のことです」

「……おい」

子を抱いて、もう寢床へ入っている女房へ、

「酒がなくなつた」

「もう、おしまいでしょう」

「ほしい、もう今ほど」

「今夜にかぎつて、どうしてそんなに」

「話が、だいぶおもしろくなつて来たのだ」

「もうありません」

「岩公」

土間の隅へ向つて呼ぶと、その板壁の向う側で、犬でも起きるようにガサカサわらの音をさせ、

「親方、なんだえ」

と、潜くぐつて出られるほどの戸を押し開けて顔を出した。

「おのさく斧作んとこへ行つて、酒一升借りて来う」

武蔵は、飯茶碗を持って、

「お先にいただきます」

すると、

「待ちねえ」

あわてて、梅軒は、箸を持っている彼の腕くびをつかんだ。

「せっかく、酒を取りにやったものを——」

「拙者のためなら、どうぞお止してください。これ以上は、飲めません」

「まあいいわさ」

と強いて、

「そうそう、鎖鎌くさりがまについて、おれに聞きたいといったが、おれの知る限りは、何なと

話そう。それにしても、酒でも飲みながらでなくっちゃあ」

岩公はすぐ戻って来た。

壺から、銚子ちようしへ移して、炉の火にあたためながら、梅軒はもう自分の知識を傾けて、

鎖鎌の戦に利のあることを力説していた。

——この鎖鎌を持つて敵に当たる場合、何より強味の多い点は、剣とちがって、敵に防禦いさまの違いとまを与えないことである。また直接に敵へ当たるまえに、敵の所持している武器を鎖で絡からんで奪い飛ばしてしまう利もある。

「こう、左に鎌、右に分銅を持つとする——」

梅軒は、坐ったまま、型をして見せ、

「——来れば、鎌をもって受け、受けたせつなに、敵の面へ、分銅を返す。それも一手」とまた、構えを違えて、

「こうなる場合——こう敵と自分と間まをおいて立つ時は——相手の得物えものを巻き取るのがこっちの目的、太刀、槍、棒、何へ向つてもそれは出来る」

そんな話をしたりまた分銅の投げ方について、十幾通りの口伝くでんのあることや、それによつて、鎖が蛇のからだのように自由な線を描き、鎌と鎖と、こもごもに使つて、敵を完全なる錯覚さつかくの光線に縛りつけ、敵の防ぎをもつて、かえつて敵の致命とさせてしまうところ、この武器の玄妙げんみょうなどところがあるなどともいった。

——武蔵は熱心に聞き入っていた。

こういう話を聞く時の彼は、全身を耳にし、全身を知識慾の袋にし、話す者のことばの中に自分を置き切っていた。

鎖と——鎌と——

双つの手。

先の話を聞きながら、彼は彼ひとりの考えをひろげて、

(劍は隻手^{せきしゆ}、人間は両手)
胸の裡でつぶやいていた。

六

二度めの壺の酒も、いつの間にか底を干していた。梅軒も飲むには飲んだが、武蔵へ強いたほうが多かった。武蔵は自分の酒量を思わず越えて、例のないほど酔った。

「女房、おれたちは、奥へ寝よう。ここの夜具を客人にあげて、奥へ寢床^{とこ}を敷いてくれ」
彼の女房は、いつもここで眠る掟^{おきて}とみえ、梅軒と武蔵が飲んでいる間に、客に関わらずぐそばへ夜具をのべて、嬰兒^{あかご}と共にめぐり込んでいた。

「客人も、つかれが出たらしい、早く寝む^{やす}ようにして上げねえか」

先刻^{さつき}から梅軒は客に対して急に親切に変わっていたが、なぜ、ここへ武蔵を寝せて、自分たちの寢床は奥へしけというのか、女房は良人のいいつけが解きかねたし、また、折角足の暖まったところを起きるのが嫌さに、

「お客は、岩公と一緒に、道具小屋へ寝てもらうことになっているがな」

「ばか」

寢床からいう女房を睨んで、

「それは、客にもよりけりだ。黙って、奥へ支度して来い」

「……………」

寝衣ねまぎすがたで、女房は奥へぷいとい入って行つた。梅軒は眠っている嬰兒あかごを抱き取って、

「お客、穢むさい夜具だが、ここなら炬ろうもあるし、夜半よなかに喉のどが渴かわけば、湯茶も沸いている。ゆつくりと、この蒲団ふとんへ手足をのばしたがいい」

彼が隠れるとしばらくして後、女房が来て枕を取り換えて行つた。女房もその時はふくれ顔を改めて、

「良人うちのひとも、えろう酔うたし、旅づかれもあるうほどに、あしたの朝は寢坊するというておりますでの、あなたも悠々ゆるゆると眠って、朝立ちには、暖かい御飯など食べて行きなされ」

といつてくれる。

「は。……………」

武蔵はそれしかいえなかつた。草鞋わらじを解いて上衣うわぎを脱との間さえもどかしいほど酔いが廻

つていた。

「では、ご厄介になります」

いうや否、今までこの内儀と嬰^{あか}ン坊の添寝していた夜具の中へもぐりこんだ。夜具の中には、母子^{おやこ}の温^{ぬく}みがまだあった。武蔵の体はしかしそれよりも熱かった。奥との境に立つて、その様子をじつと眺めていた女房は、

「……おやすみ」

静かにいつて、燈火^{あかり}を吹き消して行つた。

しいんと頭のはちを鉄^{かね}の輪でしめつけられるような悪^{わる}酔^よいのぼつて来る。こめかみの脈がずきずきと聞えるほど高く搏^うつ。

はてな、どうしておれは今夜に限つて、こう量を超えて飲んでしまったのか？——武蔵は苦しいので軽い悔いを胸先へ呼びおこした。——梅軒がしきりとすすめたからではないかと思う。だが、あの人を人とも思わない梅軒が急に酒を買い足したり、あの無愛想な女房がやさしくなったり、ここの暖かい寝場所を譲ってくれたり——何で急に態度が打つて変つたのか？

武蔵はふと、おかしいと思つたが、思索のまともらないうちに、昏睡のもやが頭にかか

っていた。——そして^{まぶた}瞼を重くあわせると、大きな息を二つほどして、夜具の襟^{えり}を眼元までかぶった、こんどは少し、寒気がするらしく。

燃え残っている^ろ炬の薪^{まき}が、時折小さい焰を立てて、武蔵の額^{ひたい}に明滅した、深い寝息がその次に聞える。

「……………」

白い顔が、その頃まで、そこと奥との境に^{たたず}佇んでいた。梅軒の女房であつた。びた、びた、と^{むしろ}筵へ^{ねぼ}粘りつく^{ねぼ}跽音が、忍びやかに良人のいる部屋へ歸つて行つた。

七

武蔵は夢をみていた。夢の切れ端みたいな同じ夢を何遍もみた。夢というほど^{まと}纏まっている夢ではないから、幼少の頃の記憶が、何かの作用で、眠っている^{のうまく}脳細胞の上へ虫みたくいにムズムズ這い出し、神経の足の足痕^{あしあと}が、^{りんいろ}燐色に光る文字を^{のうまく}脳膜へ描いているかのような^{げんかく}幻覚^{げんかく}だった。

……とにかく、こういう子守唄を、彼は夢の中で聞いている。

ねんねしようとして

ねる子はいかい

起きてなく子は

つらやな

つらやな

母なかせ

この子守唄は、この前ここへ立ち寄った時、良人の留守をまもって添乳そえちしていた梅軒の妻が唄っていたものであるのに、その伊勢訛なまりのある節がそのまま、美作みまさかの国吉野郷よしのこうの、武蔵の生れた故郷ふるさとで聞える。

——そして。

武蔵はまだ嬰兒あかごで色の白い三十ぐらいな女の人に抱かれているのだった。——その女の人が自分の母であると嬰兒あかごの武蔵には分っていて、乳ぶさにすがりながらその人の白い顔をふところから幼い眼が見上げている——

つらやな

つらやな

母なかせ……

自分を揺りながら母は唄っているのである。面やつれしている品のよい母の顔は、梨の花みたいにほのあお灰青かつた。長い石垣には、苔の花がポチポチ見え、土塀のうえの梢はこずえ黄昏れかけていて、邸のうちからあかり燈火がもれている。

母の二つの眸から、ぼろぼろと涙がこぼれ、その涙を、あかご嬰兒の武蔵は不思議そうに見ているのである。

——出てゆけつ。

——さと郷家へ帰れつ。

父の無二斎のきびしい声が家のうちからひびいて来るのだったが、その姿は見あたらない。ただ母はおろおろと、邸の長い石垣を逃げまわり、果てはあいだがわ英田川の河原へ出て、泣き泣き河の中へぎぶぎぶ歩いてゆく。

あかご嬰兒の武蔵が、

(あぶない、あぶない)

と、母にその危険を教えようとして、ふとこころで頻りにもがくのであったが、母はだんだん深い淵へ入って行き、暴れる児を、痛いほどひしと抱きしめて、濡れている頬をぺた

りと児の頬へつけて、

（——たけぞう、たけぞう、お前はお父さんの子？ お母さんの子？）

すると、岸のほうで、父の無二斎の怒る声がした。母はそれを聞くと、英田川の波紋の下に影をかくしてしまった。——嬰兒^{あかご}の武蔵は石ころの多い河原に抛^{ほう}り出されていて、月見草の中でワンワン泣いている、ありツたけな声を出して泣いている。

「……あつ？」

夢と知って、武蔵は眼をさましたが、とろりとするとまた、母か他人か、その女の人の顔が、彼の夢をのぞいて、彼をさました。

武蔵は自分を産んだ人の顔を知らなかった。母は憶^{おも}うが、母の面影は描けない、ただ他人の母を見て、自分の母もあんな人ではなかったろうかなどと思ってみるに過ぎない。

「……なぜ今夜は？」

酒もさめ、気も醒^さめて、武蔵はふと天井へ眼をひらいた。煤^{すす}けた天井に、赤い光が明滅していた。——燃え残りの炉の焰がそこへ映って。

見ると、ちょうど彼の寝顔の上の辺りに、天井から吊るした風車が、宙にふわりと下がっていた。

子の土産にと、梅軒が買つて来たあの風車だった。そればかりでなく、ふと気づくと、武蔵が顔までかぶっていた夜具の襟えりにも、母乳ちちのにおいが深くしみこんでいたのである。――武蔵は気がついて、こういう周囲の物の気配に、思いもしなかった亡母ははの夢を見たのであろうと思った。そして、懐かしいものと会ったように、その風車へ見入っていた。

八

醒さめてもいない、眠ってもいない、そうしたうつつの間に、うす眼を開いて、仰向えいこうしていると、武蔵はふと、そこに吊り下げたある風車に、不審を抱いた。

「……？」

風車が廻りだしたのである。

元々、廻るように出てくる風車が、廻り出したのだ、なんの不思議もないはずであるが、武蔵はギクとしたように、夜具の中から身を起しかけ、

「……はてな？」

耳を澄ました。

どこかで、そーと戸の^{すべ}にる音がする、戸が閉まると、廻っていた風車は、翼をしずめて、またぴたと止まる。

この家の裏口を、先刻^{さつぎ}から頻りと人が出入りしていた。足の運びにも注意して、ミシリともせぬほど、それは密^{ひそ}かなものだだったが、戸の開^あけ閉^たてに入って来るかすかな風は、暖^の簾^{れん}をかけてある板の間を通つて、ここの風車の糸へすぐひびき、鉋^{かんなくず}屑で出来ている五色の造花が、途端に蝶の感覚のように、揺れたり、顫^{おの}いたり、廻ったり、止まったりするのであつた。

——起しかけた頭をそつと枕へもどして、武蔵は、この家のうちの空気をじつと体で知ろうとした。一枚の木の葉をかぶつて、天地の氣象^{ことごと}を、悉く知っている昆虫のように、澄み徹^{とよ}つた神経が、武蔵の体に行きわたっていた。

自分が今——どういう危険の中にあるか、武蔵はほぼ分つてきた。——しかし、分らないのは、なんのために、自分の生命を他人が——ここの主^{あるじ}の穴戸^{ししどばいけん}梅軒が、奪おうとしているのか、その理由が見つからない。

「盗賊の家か？」

最初は、そう考えた。

けれど、盗賊ならば、およそ人態にんていと所持品の多寡たかを一見して知る明めいは持っているはずである。自分を害して、なんの所得があるか。

「恨みか？」

それも中あたらない。

武蔵は、結局、思い当たるものを得なかった。しかし自分の生命には刻々と或るものが迫つて来つつあることが益 皮膚に感じられた。——こうしてその或るものの到来を待っているのがよいか、逆に、機先を取つて起つたほうがよいか、早速、ふたつに一つの策を選ぶ必要にまで、それはすぐ側まで来ているものと見做みなされた。

武蔵は、土間へ手を下ろした——手の先が草鞋わらじを探っている——その草鞋は片方ずつするすると夜具のすそへ入ってしまう。

——急に、風車が烈しく旋回し出した。明滅する炉の光をうけて、クルクルと魔法の花みたいに廻った。

明らかな登音が、家の外にも家の奥にも聞えた。武蔵の寢床をつつんで、忍びやかにそれは一つの囲みを作っていた。——やがて、暖簾のすそから、ぬっと、二つの眼が光った。膝について這つて来る男は抜刀ぬきみを持ち、一人は素槍を持って、そつと壁を撫でながら蒲団

のすそのほうへ廻った。

「……………」

寢息を聞き澄ますように、ふたりの男は、ふくれている夜具を見ていた。するとまた、暖簾の蔭から、煙のように一人の者が出て来て突つ立っていた。宍戸梅軒である。左の手に鎖鎌くさりがまを持ち、右の手に分銅をつかんでいた。

「……………」

「……………」

「……………」

眼と、眼と、眼と。

三人が機微な息をあわせると、まず頭のほうにいた者が、ぽんと枕を蹴とばした、すそのほうにいた男はすぐ土間へとび降りて、槍を蒲団へ向けた。

「起きろつ、武蔵」

梅軒は、分銅の鎖と拳こぶしを、後ろへ引いていった。

——だが、蒲団は答えなかった。

鎖鎌でつめ寄つても、槍をしごいても、呶鳴つても、蒲団はあくまで蒲団であつた。——
—その中に寝ているはずの武蔵はもういなかったのである。

槍で、それを剥く^めつた男が、

「あつ……失^うせたつ」

狼狽の眼を、急に、あたりへ配^{くば}ると、梅軒は、顔のまえで強くカラカラ廻っている風車に、初めて気づいて、

「どこかの戸が開いているぞ」

と、土間へ飛び降りた。

しまった——という声が、すぐもう一人の男の口から走っていた。その仕事場から土間づたいに裏の台所へ通じている露地出入りの戸が一枚——三尺ほど開け放しになっている。月夜のように、戸外は霜^{そと}が冴えていた。風車の急な旋舞は、そこから吹き込んで来る針のように身を刺す風だった。

「野郎、ここからだ」

「戸外そとの者は、何していたのか——戸外の者は」

梅軒は、あわてて、

「やいつ、やいつ」

呶鳴つて、家の外を見まわすと、軒下や、そこらの物蔭に、黒い影が、のろりと膝でうごいて、

「……親方……親方うまく行きやしたか」

と、声ひそを密ませる。

腹立たしげに、

「何をいつてやがるんだ、てめえ達は、なんのために、そこで眼を光らせていたんだ。野郎はもう、風を食らつて、ここから外へ突つ走ッてしまった」

「えっ、逃げたつて？ ……いつの間に」

「人に訊く奴があるか」

「はてな」

「どじめッ」

梅軒は、その戸口を、踏み出したり、中へ戻ったり、じりじりしていたが、

「鈴鹿越えか、津の街道へ戻るか、道は二筋しかねえ、まだそう遠くへも行くめえ、追ッてみる」

「どっちへ」

「鈴鹿のほうへは、おれが行つてみる、てめえたちは、下道へ急げ」

屋内の者と、戸外の者とが固まると、十人ほどの人数だった。中には、鉄砲を抱えている男もある。

風態は、一様でなかった。鉄砲を持っている男は獵師らしいし、野差刀を横たえているのは木樵と見てさしつかえない。その他の者もまず、大体そんな階級であるが、すべてが、穴戸梅軒の顎でうごいているところや、どこか兇猛な眼ざしを備えている点から見て、誰よりも、梅軒その者が第一、決して、凡の百姓鍛冶だけの男とは受け取れなかった。

ふた手になって、

「見つけたら、鉄砲をぶつ放すのだ、それを聞いたら、一〇所へ駆けて来い」
いきまいて追つて行つた。

しかし、その迅い足で、半刻も追うと、皆氣が抜けてしまったらしい。やがて、がっかりした言葉を投げ合つて、そろそろと戻つて来た。

親方の梅軒のしに罵られはしないかと恐れていたことも取り越し苦労に過ぎない。その梅軒がすでに皆より先に帰って、鍛冶小屋の土間に腰かけたまま、ぼんやり俯向うつむいていたからである。

「だめだ、親方」

「惜しいことをした」

なぐさめ顔にいうと、梅軒は、

「しかたがねえ」

忌々いまいましさの遣り場やを見つけるように、その櫓ぼたをつかんで、膝がしらでポキポキ折り、

「女房、酒はねえか、酒でも出せ」

炉の残り火を掻き立てて、自暴やけに薪まきを投げこんだ。

十

この夜半よなかの騒々しさに、乳呑児も眼をさまして泣きぬいている。梅軒の女房がそこから寝たままで、酒はもうないと答えると、一人の男が、それなら自宅にあるのを取って来よ

うといつて戸外へ出て行つた。

皆、近所に住んでゐるらしいのである。酒の来るのも早かつた。暖める^{いとま}違もなくそれを茶碗で酌^くみ交わして、

「どうも、業^{ごうばら}腹でならねえ」

とか、

「忌々しい若造だぞ」

とか、

「命^{いのちみようが}冥^{めい}加^かな野郎だ」

などと、後のまつりに過ぎない繰^くり言^ごを肴^{さかな}にして、

「親方、腹をすえておくんなさい、戸外^{そと}を見張つていた奴がどじだつたんで」

と、彼を酔わせて、先へ寝かすことにみな努めた。

「おれも悪かつた」

梅軒は、そう他を咎めようとはしない。ただ酒は舌に苦い顔つきで――

「何も、あんな青二才一匹、皆の手を借りて大げさな構え立てをしなくても、おれ一人でやればよかつたかも知れねえのだ。……だが、今から四年前、あいつが十七歳の時に、お

れの兄貴の辻風典馬てんまでさえ、打ち殺された相手だと考えると——下手へたに手出しは出来ねえと考えたものだから」

「だが親方、ほんとに今夜泊ったあの武者修行が、四年前に、伊吹のもぐさ屋のお甲の家に匿かくまれていた小僧でしうか」

「死んだ兄貴の典馬のひき合わせだろうよ——おれも初手しよてはそんな気はみじんも抱いていなかったのだ。一、二杯酒をのんでいるうちになにかの話から、野郎はまさか、おれが辻風典馬の弟で、野洲川野武士の辻風黄平だとは知らねえもんだから、関ヶ原の役へ出たことから、そのころはたけぞうと呼んでいたが今では宮本武蔵と名乗っているなどと、問わず語りにしゃべってしまった。……年頃も、面つらだましいも、兄貴を木剣で打ち殺した、あの時のたけぞうに相違ねえ」

「返す返す、惜しいことをしたなあ」

「この頃は、世間が穏やかになり過ぎたんで、たとえ兄貴の典馬が生きていても、おれ同様、住居すまいや飯にも困って、百姓鍛冶に化けるか山賊にでもなるよりほか途みちはなかったろうが——名もねえ関ヶ原くずれの足軽小僧に、木剣でたたき殺された兄貴の死にざまは、思ひ出すたびに、こう胸の元でむらむらとするのだ」

「あの時、たけぞうといった今夜の青二才のほかに、もう一人、若えのがいましたね」
「又八」

「そうそう、その又八つてえ方の野郎は、もぐさ屋のお甲と朱実あけみを連れて、すぐあの晩、夜逃げしてしまった。……今頃、どうしていやがるか」

「兄貴の典馬は、お甲に迷わされていたので、一つは、あんな不覚もとの因になったのだ。これから先も、またいつどこで今夜のようにお甲を見かける折がないともいえねえから、てめえ達も、気をつけていてくれ」

酒がまわって来たらしく、梅軒は居坐ったまま、榾火ほたびへ向って、眠そうに首を垂れた。

「親方、横におんなせえ」

「親方、寝たほうがいい」

武蔵が脱け出した蒲団の後へ、一同して親切にかかえ入れ、土間に落ちていた枕をひろって当てがってやると、途端に、穴戸ししど梅軒は眼をあいている間の怨念を離れて大きな鼾いびきをかいている。

「帰ろうぜ」

「寝ようぜ」

元は皆戰場かせぎの野武士を^{なりわい}生業にして伊吹の辻風典馬や野洲川の辻風黄平の手下と、
^{おおび}公らに名乗って働いていた人間たちの成れの果てなのである。時代に追われて百姓や獵師
になつても、まだ人を咬む^か牙は^{きば}決して抜かれていない。どこか鋭い眼を備えたのが、やが
て、そろそろと鍛冶小屋から霜の夜更けへ散つて行つた。

十一

その後は何事もなかつた夜のように、この家の中は、人の寢息と、野鼠の齒の音がどこ
かでするだけであつた。

時折、まだ寝つかないらしい乳呑み子が、奥でクスクスむずかっていたが、それもいつ
か、寝ぐさい闇が暖まるに従つて、やんでしまう。

すると。

台所と仕事場との土間つづきの隅に、薪が積^{たきぎ}んであつて、そのわきには土泥竈^{どべつつい}があり、
荒壁^みには、蓑や笠などがかけてあつたが——その壁に寄つた泥竈^{へつつい}の蔭から、ごそりと蓑
がうごいた。

蓑はひとりでに持ち上がったてゆくように、元の釘へもどつて壁にかけられ、その壁の中から煙のように出て来たかとも思える人影が、ぬつと立った。

武蔵なのである。

彼は、この家から外へ、一足も出ていなかった。

先刻、寢床を抜け出すとすぐ、その雨戸を開けておいてから、蓑をかぶつて、薪と一緒に身を伏せていたのである。

「……………」

彼は土間を歩み出した。穴戸梅軒の寢息は天国を遊んでいた。梅軒はまた、鼻に病があらとみえて、その鼾声も凡ならぬものだった。——武蔵はすこしおかしくなつたとみえ、闇の中で思わず苦笑をゆがめる。

「……………」

さて——と武蔵はその鼾声を聞きながら一考してみるのがだった。

穴戸梅軒との試合はすでにおれが勝った。完全に勝つたと思う。

だが、先刻からの話を聞いていれば、この男の穴戸梅軒というのは後の名で、以前には野洲川の野武士で辻風黄平と称えていた者だとある。そして、自分がかつて打ち殺した辻

風典馬とは、兄弟である関係からして、自分をこよい殺して兄の怨^{おんりよう}霊^{りよう}をなぐさめようという、野武士ずれの男としては、殊^{しゆしやう}勝^{しょう}な心がけを持っている。

生かしておけば、この後もまた、折あるごとに、自分を死^{はか}へ謀^{はか}るにちがいない。一身の安全からいえば、殺してしまふに限るが、殺すほどの値打があるかどうか。

「……？」

それを武蔵は考えてみるのであったが、やがて決するところが着いたのであろう、彼は梅軒が寝ている裾のほうへ廻つて、その壁の角掛^{つのかけ}から、一挺の鎖鎌^{はす}を外して、手に取つた。

——梅軒は醒^さめない。

顔をのぞいて、武蔵は、鎌の刃^はを、爪でひき出した。青じろい刃と柄^えが、鉤^{かぎ}形^{がた}になつた。

武蔵はその刃へ、濡れ紙を巻いて、そして梅軒のちようど首の輪のところへ鎌をそつと載せた。

(……よし！)

天井から下がっている風車も眠っていた。もし、鎌の刃に濡れ紙を巻かずにおいて、あ

したの朝、この父親てておやの首が枕から落ちていたりなどしたら、この風車は気が狂って廻ら
だろうと思う。

辻風典馬を殺したのは、殺す理由もあつたし、こちらいも戦いくさあげくの血氣一途でやったの
である。しかし、穴戸梅軒の生命いのちを奪つても何らの益はない。ないのみならず、この風車
の因果がやがてまた、父のかたきと自分を呼んで、世に廻つて来ることは怖ろしい。

さなきだに武蔵は今夜、なんだか死んだ母や父が憶おもい出されてならなかった。この家族
たちの寝ぐさい闇に、甘い乳の香のただよっているのも羨うらやましくて、なんだか去るに忍び
ない氣持すらするのであつた。心のうちで、武蔵は、

（お世話になりました。……では、あしたの朝まで、ごゆっくりお寝やすみなさい）

そう祈りながら、静かに、雨戸を開けて、そっと閉めて、この家から先の旅へと、まだ
明けぬ夜を出て行つた。

奔馬ほんば

旅も初めのうちの数日は清新だった。脚のつかれなど苦にもならない。

ゆうべおそく、関せきの追分で泊った二人なのに、その二人は今朝もまた、まだ朝靄あさもやのふかいうちに、筆捨山ふですてやまから四軒茶屋の前へかかり、やっとその頃、自分たちの背中から昇りかけた日の出を振向いて、

「ああ、きれい——」

しばし日輪の莊嚴しょうおんに衝うたれて足を止めていた。

お通の顔も、紅あかく燃えて、その一瞬は晴れ晴れしていた。いや植物も生物も、一切のものが、自己の生命に充実と誇りをもつて地上を飾っていた。

「まだ誰も登って来ないぜ、お通さん。今朝は、この街道では、おれたち二人が、一番先に通るんだ」

「おかしな自慢をするんですね。道なんか、先に通ったって、後から通ったって、同じことじゃありませんか」

「ちがうさ」

「じゃあ、早く通れば、十里の道が七里になる」

「そんな違いじゃないよ、歩く道でも、一番は気持ちがいいだろ。――馬のお尻や、雲助の後から行くよりも」

「それはそうだけれど、城太さんみたいに、威張って、自慢するのは変ですよ」

「でも、誰も通っていない街道を歩いていると、自分の領分を歩いているような気がするんだよ」

「じゃあ私が、お馬の先を、露ばらいしてあげるから、今のうちに、たくさん威張って歩くといい」

お通は、道に落ちていた竹をひろって、歌をうたうような気持で戯れた。

「下にいませエー。下にいませエー」

戸が閉まっているとばかり思っていた四軒茶屋から、人が顔を出したので、

「まー いやだ」

お通は顔を赧くして駈け出した。

「お通さんお通さん」

追いかけて、

「殿様を置いて逃げちゃいけないよ、お手討だぞ」

「もうふざけては、嫌」

「自分がひとりでふざけているくせに」

「おまえにつり込まれてしまうんじゃないやありませんか。あら、四軒茶屋の人が、まだこつちを見ている。きつと氣狂^{きちが}いだと思つたかもしれませんよ」

「あそこへ戻ろう」

「何しに」

「お腹^{なか}が減^へツちやつた」

「まあ、もう?」

「お昼のお握飯^{にぎり}を、ここで半分喰^くべておこう」

「いいかげんにおしなさい。まだ二里とは歩いていないんですよ。城太さんと来たら黙つていて、日に五度ぐらい喰^くべるんですもの」

「そのかわりおらは、お通さんみたいに、山駕籠^{かご}に乗ったり、駄^だちん馬に乗ったりしないからね」

「きのうは、関へ泊ろうと思つて、無理に暮れ方をいそいだからですよ。そんなこというなら、きようはもう乗らない」

「きようはおらが乗る番だ」

「子どものくせに、なアに」

「馬に乗ってみたいんだよ、ねえお通さんいいだろ」

「きよう限りきですよ」

「四軒茶屋に、駄ちゃん馬がつないであつたから、あれを借りて来よう」

「いけません、いけませんよ、まだ」

「嘘いつたのかい」

「だって、くたびれもしないうちに馬に乗るなんて、贅ぜいたく沢たくすぎます」

「そんなこといったら、おらなんか、百日千里歩いて、くたびれることなんてないんだから、乗る時はありやしないぜ。……人がたくさん歩き出すとあぶないから、今のうちに乗せておくれよ」

これでは早立ちしても道程みちのりは捗はかどるまい。お通がうなずきもせぬうちに、城太郎はもう通り越した四軒茶屋のほうへ、大元気で駆け戻っていた。

四軒茶屋というのは字義どおり四軒の茶屋をさす名であるが、その四軒が古着屋のように軒をならべているわけではない。筆捨ふですて、沓掛くっかけなどの山坂へかけて四つの休み茶屋があるところから、この辺を総称して、地名的にそう呼ぶのである。

「おじさんっ——」

そこへ立つて城太郎、

「馬、出しとくれ」

と、呶鳴った。

戸を開けたばかりのことである。茶屋のおやじは、この元気者にしぶい眼を醒さまして、
「なんじゃあ、でかい声を出しくさって」

「馬だよ。はやく馬を出しておくれよ。水口みなぐちまでいくらい。安ければ、草津まで乗つてやつてもいいぞ」

「汝われ、どこの子だ」

「人間の子だ」

「かみなりの子かと思うた」

「かみなりは、おじさんのことだろう」

「よく口をたたく子だの」

「馬出しとくれよ」

「あの馬を、駄ちん馬と見たのけ。あれは駄ちん馬ではねえだによって、おん貸し申すことはできねえ」

「おん借り申すことはできないのけ？」

「こんつら小僧め」

饅頭まんじゅうを蒸ふかしていた泥竈へつついの下から、おやじが、火のついてゐる薪まきを一本抛ほうりつけると、それは城太郎にはあたらないで、軒下につないであつた老馬の脚にぶつかつた。

馬の子と生れてからこの年になるまで、毎日、人間の生活たつきの手つだいに、関の峠を俵はだの味噌だのを背負つて通いながら、不平もなく、睫毛まつげに白髪を生はやしかけてゐるその年より馬は、久しぶりで驚いたようにいなくて、背で軒を打つほど暴れ出した。

「この野郎」

馬を叱るのか、城太郎を叱つたのか分らない。おやじは飛び出して来て、

「どうツ、どうツ」

手綱を解いて、家の横にある樹へ持つて行こうとすると、

「おじさん、貸しとくれよ」

「いかねえつてに」

「いいじゃないか」

「馬子がいねえだよ」

その時、お通も側へ来ていて、馬子がいなければ、駄ちゃんは先に払い、馬は水口みなぐちからこつちへ帰る旅人か馬子に託してもよいからと頼むと、おやじはお通の物腰に信用を改めて、それなら水口の宿場までも、草津までもかまわないから、馬は、ついでのある土地の者に頼んでくれといって、手綱を彼女の手に渡した。

城太郎は舌うちして、

「ばかにしてやがら、お通さんが、きれいなもんだから」

「城太さん、おじいさんの悪口いうと、この馬が聞いているから、怒って、途中で振り落すかもしれませんよ」

「こんな耄碌馬もうろくうまに振り落されてたまるもんか」

「乗れますか」

「乗れるさ。……ただ、背がとどかねえや」

「そんなふうに、馬のお尻をかかえてもだめですよ」

「抱いて、乗せとくれよ」

「やっかい坊ね」

脇の下へ両手をさし入れて、彼女が馬の背へ乗せてやると、城太郎は、にわかに地上を
睥睨^{へいげい}してみたくなつて、

「お通さん、歩いておくれよ」

「あぶない腰つき」

「だいじょうぶだよ」

「じゃあ、出かけますよ」

お通は手綱をとつて、

「おじいさん、それでは」

と茶屋の軒へ、後ろ向きにいいながら歩み出した。

すると、百歩も行かないうちに、姿は見えないが朝靄^{あさもや}の中から、オーイツと高く呼ば
わつて、忽ち追い着いて来そうな迅^{はや}い蹀音^{はや}が聞えた。

三

「誰だろ」

「私たちのことかしら」

駒を止めてふり顧かえると、煙のような白い霧もやのうちから、一個の人間がだんだんその影を濃くあらわし、やがて輪廓にんていだの色だの、年頃や人態まで見えるほどに、距離を縮めて来た。

夜だったら近づかぬ間に、二人は逃げ足をおどらせたかも知れない。長い野太刀をこじり高だかに差し込み、鎖くさり鎌がまを前差まえざしに帯びている眼の怖い男だった。

風がふいて来たようにその男の体から烈しい空気がうごいていた。いきなりお通のそばへ来て足を止めたのである。そしてお通の持つている手綱とづなを咄嗟とつさに引ッ奪たくり、

「降りろっ」

顔は、城太郎へ向けて、命令するのだった。

かつ、かつ、かつ、と年より馬がまた脅おびえて後退あとすりするので、城太郎は鬣たてがみにしがみつ

きながら、

「な、なにさ！ 無茶なことすんないつ、……この馬、おらが借りてる馬だぞ」

「やかましい」

鎖鎌は、耳も貸さない。

「これ女」

「はい」

「おれは、関の宿しゆくからちよつと引つ込んだところの雲林院村うんじいにいる宍戸梅軒ししどという者だが、すこしわけがあつて、この街道を、今朝暗いうちに逃げていった宮本武蔵という者を追いかけて来たのだ。もう相手はどうに水口の宿場も越えているだろう、どうしても、江州ごうしゆ口うぐちの野洲川やすがわあたりで彼奴きやつを捕まえないければならねえ。……その馬を、おれに譲れ」

ことばの早いのみで、肋骨あはらに波を打つていうのだった。靄もやが樹々のこずえに絡からんで氷の花になるといふ寒さなのに、見れば梅軒の喉のどくびは、爬虫類はちゆうるいの肌のように汗光あせびかりがして太い血管がさらにふくれている。

——立ち竦すくんだまま体の血液をみな大地へ吸いこまれてしまったように、お通の顔は見てゐるまに異様に白くなつてしまった。もいちど、耳をよく聴そばだてて聞き直したいように紫

ばんだ唇がわななきかけたが、にわかに、ものもいえない面持ちなのである。

「……む、武蔵だつて」

馬の背から城太郎はこう口走つた。たてがみ鬣にしがみついたまま、ぶるぶる手も脚もふるわしていた。

先を急ぐことに焦心あせりきつてゐる梅軒の眼には、凡ただではあり得なそうな二人の驚きも眼にはとまらないらしく、

「さ、小僧つ。――降りろ、降りろ。ぐずぐずしていると、ひっぱたくぞ」

手綱の端を鞭むちにして脅おどすと、城太郎は、つよく首を横に振つて、

「嫌だつ！」

「イヤだと」

「おれの馬だ、この馬で、先へ行つた人へ追いつこうたつてそうはゆかない」

「女子供と思つて理由ことをわけていうのに、童わっぱめ、つけ上がつて何をいうか」

「なあ、お通さん」

と、梅軒の頭越しに、

「この馬は、渡せないね、この馬を渡しちやいけないね」

お通は、城太郎のそのことばを、健気^{けなげ}と賞^ほめてやりたかった。もとより、この馬はおろか、この人間をも、先へやつてはならないと思つて、

「そうです、そちらもお急ぎか知りませんが、私たちも先を急ぐ体です。もう少し経てば、峠^{かど}がよいの馬も駕籠^{かご}もいくらもありましょう。人の乗っているものを奪つてお出でになろうとしても、今もその子がいうとおり、理不尽です、そうはなりません」

「おれも、降らない。死んだつて、この馬を離すものか」

二人は、しかと、氣持を結び合つて、梅軒の求めを突つ刎^ばねた。

四

お通と城太郎のふたりが心を協^{あわ}せて、敢然とそうした態度に出たのは、梅軒にもやや意外ではあつたろうが、もとよりこの男の眼から見れば、そんな反抗は、おかしくなるくらいなものだつた。

「じゃあどうしても、この馬はおれに譲らねえというのか」

「知れたことだ！」

城太郎の語気はまるで大人のいい草だった。

「野郎っ」と、梅軒が大人げなく喚いたのも、あながち無理ではない。

馬の背へとび上がって、鬣へしがみついている蚤みたいな城太郎を掴んで捨てようとしたのである。いきなり馬の腹にある彼の片足を引っ張った。

こんな時こそ抜くべき物である腰の木剣を城太郎はすっかり忘れていらしい。自分以上の強敵と分っている敵に、脚くびをつかまれると、ただ逆上してしまつて、

「かッ！ 畜生っ」

梅軒の顔へ向つて、続けさまに唾を吐きつけた。

生涯の大変はいつ降つて湧いてくるかわからない。たった今、日の出に向つて、生きている歓びを思つた生命が、真つ黒な戦慄に包まれているのである。お通はこんな所で、こんな男のために、怪我をするのは嫌だし、死ぬのはなお嫌だと思った。恐ろしさに口の中が酔くなつて渴いてしまった。

——だが謝りを入れて、この男に、馬を渡す気にはどうしてもなれない。この男の凶暴な害意は、この道を先へ通つて行つたという武蔵の背後へ迫るものである。何か大きな危険が、武蔵を追っていることにちがいないのである。この男を、一時ここで遅らせれば、

武蔵は一時だけ先へ危険を遁^{のが}れて行くことができる。

たといその距離は、折角、一すじの道にかかつている自分と武蔵との間をまた忽ち遠くしてしまうものであるにせよ——この男に奔馬^{ほんば}の脚を与えることは断じて出来ない、朱^し唇^{ゆしん}を嚙^{くは}んで意思するのであった。

「なにするんです!」

自分の勇氣と無謀に驚きながらお通は、梅軒の胸を強く突いた。顔の唾^{つば}をこすっているところへまた、弱いと思つた女のその強い手だったので梅軒もちよつとたじろいだ恰好であつた。それのみでなく、女の度胸というものは、いつも男の意表外に出るもので、梅軒の胸^{むな}いたを突いたお通の手は、すぐ次の瞬間に、梅軒の帯びている野太刀のつかを握つていた。

「あま
阿女ツ」

伏えて、その手くびを、梅軒が抑えようとして握ると、そこはもう鯉口を走りかけていた白刃^{しらば}の部分だったので、手を触れたとたんに、梅軒の右手の小指と薬指の二本が弾^{はじ}けるように斬れて血と共に地上へこぼれた。

「——ア痛^つ!」

思わず後の指を抑えて飛び退いたので、自ら鞆さやを引いたことにもなつて、お通の手には水もたまらぬような光が地を曳いてさつと後ろへかくされた。

いやしくも一道に達している穴戸ししど梅軒として、これはゆうべの不覚以上な不覚であつた。のツけから女子供と見て呑んでかかったことが重大な原因だつたことはいうまでもない。

——しまったと自己の不覚を叱りながら、立直ろうとしたところへ、もうなにも怖くなつているお通の手から、野太刀が横へ撲つて来たのであつた。けれどそれは三尺に近いもので、いわゆる胴田貫どうたぬきという分厚い刃金はがねである。一人前の男でも、そうたやすくは振れない物なので、梅軒に身を交わされると、当然、お通の手は波を描いて、自分の振つた刀で自分の体を蹠よろめかせてしまった。

——そして、ごつんと木を斬つたようなひびきを腕に感じると、赤黒い血しおが、顔へかぶつて来るようにパツと見えて、彼女は眼が眩くらむような心地がした。城太郎のしがみついている馬の尻やいばへ刃を入れてしまったのである。

五

驚き癖がついている馬である。そう深く入った刃ではないが、馬の悲鳴に似たいなきは非常なものであった。臀しりの傷口から血を撒いて暴れるのだった。

梅軒は、なにか意味の分らない大声をあげ、お通から自分の刀を撈もぎ取ろうとして、彼女の手頸てくびをつかまえたが、狂った馬の後脚は、その二人を刎ね飛ばして、竿立さおたてちの姿勢になると、鼻をふるわしてまた高いなき、そのまま弦つるをきって放ったように、風を起して驀まっしぐらに駈け出してしまふ。

「わつ、や、やいつ」

馬の揚げてゆく砂塵へ向つて、梅軒は突シのめつた。憤怒ふんぬの勢いは駆りたてられたが、追いつけるはずは勿論ない。

そこで血眼ちまなことなつたすごい眸を、お通のほうへ振り向けたのであるが、お通のすがたも、途端にどこにも見あたらない。

「あつ？」

こうなると、梅軒の青すじはいよいよ、こめかみに膨ふくれあがつた。——見ると、自分の刀は道ばたの赤松の根かたに抛ほうり出している。飛びつくように拾いあげて、そこを覗のぞくと、低い崖の下に農家の茅かやの屋根が見える。

馬に、刎ねとばされた機はずみに、お通はそこへ転げ落ちたものと見える。もうその時は梅軒にも、彼女が武蔵と何らかの交渉のある人間に違いないということとは考えられていた。武蔵を追う方にも気が急せかれるが、お通を見のがして行くことも忌々いまいましい。崖を駈け下りて、

「どこへ？」

うめきながら、梅軒は、その百姓家のまわりを大股に廻って歩いた。

「どこへ失せやがったか」

縁の下をのぞいたり、納屋の戸を開けたりしている彼の狂人みたいな態さまを、せむしのよ
うな農家の老人が糸車の蔭から恐怖にすくんで見ているだけだった。

「ア！ ……あんな方に」

やがて彼は見つけた。

ふかい檜ひのきの沢には、まだ谷の雪が残っている。その溪谷へ向ってお通は、檜林の急な傾
斜さじを、雉きみたい逃げ下りていた。

「いたなッ」

梅軒が上からこういかぶせると、お通は思わず振りかえった。土の崩れて行くよりも

早く彼の姿は、お通のうしろへ接近していた。彼の右手には拾いあげた白刃がそのまま持たれていたが、相手をそれで斬り倒す意思はなかった。武蔵の道づれでもあれば、武蔵をつかまえるおとり囀にもなろうし、武蔵の行く先を訊けるかとも考えたのであろう。

「阿女あまつ」

左の手をのばして、その指先は、お通の黒髪に触れた。

お通は身をすくめて、木の根にしがみついた。足をふみすべ込らすと体は振りふりこのように崖へ伸び、烈しく左右へ振り廻された。顔のうえ胸の中へ、土や小石がざらざらと崩れてくる。梅軒の巨おおきな眼と、白刃が絶えずその上にあつた。

「ばか、ばか、逃げる気か。——もうそこから下は、溪たにがわ川の絶壁きつたてだぞ」

ひよいと、前をのぞくと何丈か真下に、残雪の間を裂いて走っている水が青く見えるのだった。——お通はそれに救いを感じても恐い気はしなかった。ひらりとすぐ身をその宙へまかせはずみる機を持つていた。

死を感じると、死の恐さよりもおそろしい速さで、彼女は、武蔵がどこにいるかを考えた。いや自分の記憶と想像力のおよぶかぎりの武蔵の幻像が、総毛立あたまツた頭脳あたまのうちで、暴風雨の空の月みたいに描かれた。

「——親方ア、親方あ」

どこで呼ぶのか、谷間のこだまが、その時、梅軒を、横へ反そらせた。

六

崖の上に人間の顔が見えた。二、三人の男どもである。

「親方あ」

と、その顔が、てんでに呼ばれるのだった。

「なにをしてるんで。——はやく先へ急いでおくんない、今、四軒茶屋のおやじに訊くと、夜明け前の暗いうちに、そこで弁当をこさえさせて、甲賀谷のほうへ走って行った侍があつたてえことですぜ」

「甲賀谷の方へ？」

「そうです、だが、甲賀谷へ抜けようが、土山を越えて水口へ出ようが、石部の宿場まで行きやあ道はみな一つになるから、早く野洲川で手配しておけば、野郎はきつと捕まるはずだ」

遠方からのそういう声を、耳の裏で聞きながら、梅軒の眼は、眼の光で縛りつけているように、自分の前に立ち竦すくんでいるお通を睨みつけていた。

「おういつ、てめえ達も、ちよつとここへ降りて来い」

「降りて行くんですか」

「はやく来い」

「でも、愚図愚図しているうちに、武蔵のやつが、野洲川を通つてしまふと」

「いいから、降りて来い」

「へい」

梅軒と共にゆうべ無駄骨を折つた彼かの手輩てあいなのである。山歩きには馴れきっているとみえ、猪ししのように真つ直に傾斜を駈け下りて来て、お通の姿に、そこで初めて気づいたらしく眼を見あわせた。

梅軒は早口にわけを話して、三人の手したにお通をあずけ、後から野洲川へ曳ツぱつて来るように命じた。手下どもは合点して、お通のからだへ縄をまわしたが、縛るには痛々しい気もするらしく、頻りと、彼女のうつ向いている蒼白な横顔を、さもしい眼で偷ぬすみ見ている。

「いいか、てめえ達も、おくれちやならねえぞ」

いいすてて、梅軒は猿ましらのように山の腹を横に駈け、やがてどこから降りて行ったものか、甲賀谷の溪流へ降りて、遙かからこちらの崖を振り向いていた。

その小さい影が彼方かなたに立ちどまつて、口元へ手をかざし、

「野洲川で落ち合うのだぞ、おれは間道を追つてゆくから、てめえ達は、街道のほうを、なお入念に、見てゆけよう」

こつちの手輩てあいが、

「わかつたあ」

と、餌こだまを返すと、梅軒は、雪の斑まだらな谷間を、雷鳥が歩くようにびよいびよいと岩間づたいに遠く去つてしまった。

よぼよぼな老馬といえども、死にもの狂いに狂い出すと、下手へたな手綱ではもう止まらな
い。

いわんや乗手は城太郎。

臀しりに松火たいまつをつけられているように、真つ赤な傷口を持つている例の奔馬ほんばは、あれから

盲滅法に駈けだして、八百八谷はつびやくやだにという鈴鹿の山坂を、またたく間に駈け通し、蟹坂かにさかを突破し、土山の立場たてばを突つ切り、松尾村から布引山ぬのびきやまのすそを横にして、まるで一陣のつむじ風が通つて行くかのような勢いで止まるところを知らなかった。

よく落ちないでいるのはその背の上の城太郎で、

「あぶないっ、あぶないっ、あぶないっ」

を、呪文じゆもんのように叫びつづけながら、もうたてがみへつかまっているのでは間に合わなくなつて、馬の平頸ひらくびへ、眼をつぶつて、抱きついていた。

当然、馬の尻がおどる時は、彼のお尻も馬の背を離れて高くおどるので、その危険極まることは、乗っている彼よりも、それを見送つた村や立場の人たちの方が遙かに胆きもを寒くした。

乗る術すべを知らない彼であるから降りる術すべももとより知らないし、駒足を止めることなどは、なおさら思いもよらない。

「——あぶないよッ、あぶないよッ、あぶないッ」

かねてからお通にせがんで、いちど馬に乗つてみたい、馬に乗つて思うさま飛んでみたいと、駄々をこねて宿望にしていた城太郎も、今日はすっかりたんのうしたことであろう。

声はだんだん半泣きになって来て、呪文じゆもんのききめも頼みなく見えて来た。

七

もう街道には往来の者がぼつぼつ通りはじめていたのである。誰か身を挺ていして、この盲滅法めくはうに走ってゆく馬と乗手を食い止めてやればよいのに、誰もいらざることには手を出して怪我けがでもしてはというように、

「なんだい、あれは？」

と、見送ったり、

「阿呆ツ」

と道ばたへかわして、城太郎のうしろへ、叱言こごことを浴びせたりするものしかなかった。

またたく間に三雲村みつぐも、夏身なつみの立場たてば。

舳斗雲きんとんに乗った孫悟空ならば、小手をかざして、そのあたりから見渡せる伊賀甲賀の

峰々谷々の朝げしきを俯瞰ふかんし、布引ぬのびきの山や、横田川の絶景を賞しながら、はるか行く手にはまた、一面の鏡か、一朵いちだの紫雲かとまごう琵琶びわの湖を見出していたろうに——迅はやさは

舳斗雲に劣らないまでも、そんな他見^{よそみ}などは、城太郎にはちつとも出来ない。

「――止めてくれッ、止めてくれッ、止めてくれえッ」

あぶないあぶないが、いつのまにか止めてくれに変わっていた。そのうちに柑子坂^{こうじざか}の急^き勾配^{ゆうこうばい}へ上からかかると、俄然、

「助けてくれえッ」

とまた変つて、逆落しに駈けてゆく馬の背中で、彼の体は鞠^{まり}みたい^{はす}に弾み出し、いよいよここらで、大地へたたき捨てられてゆくのがオチであろうと思われた。

ところが、坂の七合目あたりに、崖の横から出ている棕^{むく}か柏^{かしわ}の木か、何しろ喬木の一枝が、わざと道の邪魔しているように横へ出ていた。その枝がバサツと顔へ触ると、城太郎は、この樹こそ自分の声が天に通じて手を伸ばしてくれた救いの神と思つたのか、途端に馬の背から蛙のように梢^{こずえ}へかじりついてしまった。

馬は、空身^{からみ}になると、なおさら勢いを加えて坂の下へ素ツ飛んで行つてしまふし、城太郎は当然、梢に両手をかけて、宙にぶらんこをしているほかはない。

宙といつても、地面からものの一丈とはない空間であるから、すぐ手を離してしまえば、なんのこともなく地上へ帰れるのに、そこは人間が猿でない証拠である。愛すべきご愛嬌

というもので、さすがの城太郎も頭脳あたまがすこしどうかになっているにちがいない。落ちては生命いのちがないように、必死になって、足をからんだり、しびれる手を持ちかえたり、自分の体をもてあましている。

そのうちに、ぽきツと生木が裂ける響きがしたので——彼は、しまったと思つたらしいが、難なく体は大地に坐っているの、城太郎はかえって、ぽかんとしてしまった。

「アふツ……」

馬はもう見えない。見えたつて二度と乗る気もあるまい。

ややしばらく、そこで腰を抜かしていたが、抛ほうり上げられたように、立ち上がって、

「——お通さあん？」

と、坂の上へ向つて叫ぶ。

「お通さあん——」

道をもどつて、急に駈け出した彼は、容易ならぬ大事へ駈けつけて行くかのような血相で、こんどは木剣をにぎりしめた。

「どうしたろう？ お通さんは。——お通さあんつ、お通さあん！」

出合いがしらに柑子坂こうじざかの上から降りてきた編笠の人があつた。五倍子染ふしぞめの着物を着て

おり、羽織はまとわず、かわばかま革袴に草履という身ごしらえ——もちろん大小は横たえている。

八

「これ、子供子供」

すれちが擦違いに、その五倍子染の小袖を着た男が手をあげ、小粒な城太郎を丁寧足元から見上げて、

「どうかしたのか？」

と、たずねた。

城太郎は戻つて来て、

「おじさん、あつち彼方から来たんだろ？」

「いかにも」

「はたち二十歳ぐらいなきれいな女の人を見なかったかい」

「ウム見かけた」

「え、どこで」

「この先の夏身の立場で若い女を縄つきにして歩いていた野武士がある。おれも不審に思つたが、^{ただ}糺す理由はないから黙つて見過ごして来たが、おおかた鈴鹿谷へ部落を移した辻風黄平の仲間だろうと思うが」

「そ、それだ」

「待て」

駆け出そうとする城太郎をまたよび止めて、

「あれは、おまえの連れの者か」

「お通さんという人だ」

「下手なまねをすると、おまえの命がないぞ。それよりも、やがてあの連中がここを通るのは分りきつてゐるのだから、おれに仔細を話してみないか。いい智恵をかしてやらないでもないぞ」

城太郎は、すぐその人間に信頼をおいた。今朝からの始末をつぶさに話して聞かせた。^{ふしぞめ}五倍子染の男は、編笠のうちで幾たびも^{うなず}頷いて、

「なるほど、よく分つた。だが、あの^{ししど}穴戸梅軒と変名している辻風黄平の仲間をあいてに

して、女子供のおまえ達が、いくら齒がみをしたところでとても無益だ。よし、おれがお通さんとやらをあの仲間からもらつてやろう」

「くれる？」

「ただではくれないかも知れぬ。その時にはまた、考えがあるから、おまえは声を出さずに、そこらの藪やぶの中へ沈んでおれ」

城太郎がかくれると、その男は坂の下へすたすたと行つてしまうのだ。あんなことをいつて、人を欣よろこばせておきながら、逃げてしまうのではなからうか。城太郎は、不安になつて、藪の中から首を出した。

坂のうえから人声が聞えてきたので、彼はあわてて首をひつ込めた。——お通の声が耳へひびいて来る。両手をうしろに縛しばられて、三人の野武士にかこまれながら歩いて来る彼女のすがたも、やがて眼のまえに見えたのだつた。

「何をキョロキョロしているのだ、はやく歩け」

「歩かねえかつ」

一人の男が、お通の肩を突いて罵ののつた。お通は坂道を斜めによろめいて、
「わたしの連れをさがしているんです。あの子は、どうしたろ。城太きアン」

「やかましい」

お通の白い素足から血が出ていた。城太郎は、ここにいると呶鳴って飛び出そうと思つたが、その時、先刻さつきの五倍子染の侍が、こんどは編笠をどこかへ捨てて、二十六、七歳かと見える色の浅黒い面ざしおもに、わき眼もふらない血相をたたえて、

「たいへんだつ——」

独り語ごとをもらしながら坂の下から駆け上がつて来た。耳にとめて、三名のほうは坂の途中で足をとめた。——御免といつてすれちがつて行く五倍子染をふりかえつて、

「おいつ、渡辺の甥おいじやないか。——なにが大変なのだ？ なにが？ ……」

九

渡辺の甥と呼ばれたところから想像すると、その五倍子染の小袖を着ている男は、この附近の伊賀谷や甲賀村で尊敬されている忍者の旧家渡辺半蔵の甥なのであろう。

「知らないのか」

と、彼がいう。

「知らぬが？ ……」

と三名は寄って来る。

渡辺の甥は、指さして、

「この柑子坂こうじざかの下で宮本武蔵という男が今物々しい身支度をして、太刀のさやを払い、往來に突つ立って、通行の者をいちいちすごい眼で調べている」

「えつ、武蔵が」

「おれが通るとおれの前へずかずか来て、名を訊くから、おれは伊賀者の渡辺半蔵の甥で、柘植三之丞つげさんのしょうという者だと答えると、急に詫びて、イヤ失礼いたしました、鈴鹿谷の辻風黄平の手下でなければお通りくださいと落ちついていうのだ」

「ほ……」

「何かあるのです？ ——と、おれから今度は質問すると、されば、野洲川やすがわ野武士の果てで、穴戸梅軒ししどと化名けみようしている辻風黄平とその手下の者が、この道すじで、自分を殺害しようたくらと企んでいることを往來の風聞によつて知つたゆえ、その分なれば、むぎむぎ彼らの陥かんせに落ちるよりも、この附近に足場をとり最期まで闘つて、斬り死にする覚悟だといひ放つていた」

「ほんとか、三之丞」

「誰が嘘をいおう、さもなく、宮本武蔵などという旅の者をおれが知ろうはずはない」
明らかに三名の顔いろが動揺しはじめた。

どうしよう？

と謀^{はか}り合うように臆^{ひとみ}した眸^{ひとみ}がお互いを見ている。

「——気をつけて行つたがいいぞ」

いいすてて、三之丞がすぐ去ろうとすると、

「渡辺^{おい}の甥^{おい}」

あわてて呼んだ。

「なんだ」

「弱つたなあ、あれは途方もなく強い奴だと、親方すらいつていた」

「かなり出来ている男にはちがいない。坂の下で、こう拔^{ぬき}刀^さを提^さげて、ぐつと前へ寄つて
来られた時は、おれですら嫌な氣持がしたからな」

「なんとしたものだろう？ ……実は親方のいいつけで、野洲川までこの女をしょッ曳い
てゆく途中だが」

「おれの知ったことか」

「そういわないで、手を貸してくれ」

「真つ平^{びら}だ、お前たちの仕事に、腕を貸してやったなどと知れたら、伯父の半蔵^{おおこ}から大叱言^{ごこと}が出るにちがいない。——だが、智恵^{ちえ}だけなら貸してやらないものでもない」

「聞かせてくれ、それだけでも有難い」

「縄付にして連れているその女を、どこかこの近く^{やぶ}の藪の中に——そうだ木の根へでも一時縛りつけておいて——身軽になつておくことが先だ」

「ウム、そして」

「この坂は通れない。すこし廻りになるが、谷道をわたつて、はやく野洲川へこのことを告げ、なるべく遠巻きにしておいてから手を下すのだな」

「なるほど」

「よほど、大事をとらないと、相手は死にもの狂いだ、ずいぶん死出の道づれが出来るだろう。そうしたくないものだな」

三名は、にわかに、

「そうだ、そうしよう」

お通の体を、藪へ引きずりこんで、木の根へくくりつけた上、一度去りかけたが、またもどつて来て、彼女の顔へ猿ぐつわを噛ませ、

「これでよからう」

「よしっ」

そのまま道のないところを歩いて、姿をかくしてしまった。

枯れ木や枯れ葉の保護色の中にじつと屈みこんでいた城太郎は、もうよい時分——と藪の中からそつと首を出して見まわした。

十

誰もいない——往来の者も——渡辺の甥おいの三之丞さんのじょうももう見えない。

「お通さん」

城太郎は、藪の中を、おどつて来た。彼女の縄目を解いてやると、その手を引っぱって、坂の途中へ、ころげ出した。

「逃げよう」

「城太郎さん……どうしておまえは、そんなところに」

「どうだっていいじゃないか。今のうちだ、はやく行こう」

「ま、待つて」

みだれた黒髪や、襟^{えり}もとや、腰紐^{こしひも}などを直して、容姿^{すがた}をつくろっていると、城太郎は舌うちして、

「お洒落^{しゃれ}なんかしている時じゃないぜ、髪なんか後におしよ」

「……でも、この坂の下へ行けば武蔵様がいると、今ここを通った人がいったでしょう」

「だから、お洒落をするの」

「いいえ、いいえ」

お通は、おかしいほど真面目になつて、それに対して弁明する。

「武蔵様にお会いできさえすれば、もう怖いものはないからですよ。私達の難儀もすでに去つたものと、安心して来たものだから……私は落着いているんです」

「だけど、この坂の下で、武蔵様に会つたというのは、ほんとのことかしら？」

「そういつて、あの三人と、ここで話していたお方は、どこへ行ってしまったのでしょうか」
「いないや」

見まわして――

「変な人だなあ」

と、城太郎はつぶやいた。

しかし、とにかく二人がこうして虎の口から助かったのは、あの渡辺の甥とかいう柘植つげ三之丞のおかげであつたことに間違いはない。

――この上でまた、武蔵に会えたならば、なんとその人へ礼をいってよいかなどと、お通の心はもうそんなことまで考える。

「さ、行きましょう」

「お洒落はもういいの」

「そんなことをいうものではありませんよ、城太さん」

「だって、うれしそうなもの」

「自分だって」

「それは、うれしいさ、うれしいからおれは、お通さんみたいに隠したりなんかしないさ。――大きな声でいってみようか、おらア嬉しいっ！」

そして、手足を踊らせて、

「でも、もしかして、お師匠様がいなかったらつまらねえな。先へ行つて見つけてみるよ、ネ、お通さん」

と駈け出した。

柑子坂を、お通は後から降りて行つた。先へ駈けて行つた城太郎以上に、心は坂の下へ飛んでいたが、かえつて足が急がないのである。

（——こんな姿で）

お通は血の出ている自分の足へ眼を落し、土や木の葉によごれている袂をながめた。

その袂にたかつていた枯れ葉を取つて、指先に弄びながら歩いてゆくと、葉に巻かれていた白い綿の中から、不気味な虫が出て来て手の甲を這つた。

山の中で育つたくせに、お通は虫が嫌いだつた。ぎよつとして手を振り払つた。

「おいでようつ、はやく。——なにをのそのそ歩いているのさあ」

坂の下から城太郎の勢いのいい声だった。あの元気のいい声の様子では、さては、武蔵が見つかつたものとみえる。——お通は彼の声こえうらない占うらなからすぐ察して、

「アア、とうとう」

きようまで自分というものを、ふと心のうちでなぐさめ、遂に届いた一心に対して、我

へともなく、神へともなく、誇りたかった。歓びに胸おどらさずにいられなかった。

——だが、それは、女性の自分だけが前奏している歓びにすぎないことをお通はよく知っている。会ったにせよ、武蔵が、自分の一心を、どの程度までうけ容れてくれるだろうか。彼女は、武蔵に会うよろこびとともに、武蔵に会ってのかなしみにも、胸が傷んで来るのであった。

十一

坂の日蔭は土まで氷っていたが、柑子坂こうじざかを降ると、冬でも蠅はえがいるほど陽あたりのよい立場茶屋が、山ふところの田圃たんぼへ向って、牛のわらじや、駄菓子などをひさいでいる。城太郎は、その前に立ってお通を待っていた。

お通が、

「武蔵様は」

と、訊ねながら、立場茶屋の前にがやがや群れている人々のほうを、じつと見ると、
「いないんだよ」

と、城太郎は、気拔けしたようにいい放って、

「どうしたんだろ？」

「え……」

お通は、信じないように、

「そんなこと、ないでしょう」

「だって、どこにも、いないもの。——立場茶屋の人に聞いても、そんなお侍は見かけないというし……きつとなにかの間違いだよ」

と城太郎は、そう落胆もしない顔つきなのである。

独りぎめに、思い過ぎた飲ようごびにはちがいないが、そう無造作に片づけられると、

お通は、

（何ていう子だろう）

と、城太郎の平気でいるのが、憎らしくなってくる。

「もつと彼方あっちへ行ってみましたか」

「見たよ」

「その庚申塚こうしんづかの裏は」

「いない」

「立場茶屋の裏は」

「いないッてば」

城太郎が、うるさくなったようにそういうと、お通は、ふいと顔を横に向けてしまった。

「お通さん、泣いているね」

「……知らない」

「ずいぶん理^{わけ}のわからない人だなあ、お通さんはもつと賢い人かと思ったら、まるで嬰^{あか}ンぼみたいなどころもあるぜ。最初から、嘘^{うそ}だかほんとだか、的^{あて}にはならないことだったんだろ。それを、独りで決めこんで、武蔵様がいないからって、ベソを搔^かいているなんて、どうかしてらあ」

一片の同情も持たないように、城太郎はかえってゲラゲラ笑うのだった。

お通は、そこへ坐^まつてしまいたくなくなった。急に世の中のすべてのものに光がなくなつて、元のような——いや今までにない滅^{めつしつ}失^{しつ}に心が囚^{とら}われた。笑っている城太郎の味噌ッ歯^しが、憎く見えて、腹が立つて、こんな子をなんで自分が連れてあるいているのか、捨てられるものなら捨てて、たった独りぼつちで、泣いて歩いていたほうが遥かにましだと思つたり

する。

考えてみると、同じ武蔵という人を捜している身の上であっても、城太郎のは、ただ師匠として慕っているのだし、彼女の求めているのは、生涯の生命として、武蔵をさがしているのである。そしてまた、こんな場合に際しても、城太郎はいつでもケロリとして、すぐ快活にかえってしまうし、お通はその反対に幾日も次の力を失ってしまう、それは、城太郎少年の心のどこかに、なアに、そのうちにきつとどこかで行き会えるにきまつていることだからという定義が据わっているからであつて、お通には、そう楽天的に末を見とおしてられないのである。

（もう生涯、このまま、あの人とは、会うことも話すことも、出来ない運命なのではないかしら？）

と、悪いほうへも、やはり思い過ぎをしてしまう。

恋は相思を求めているながら、恋をする者はまた、ひどく孤独を愛したがる。それだけでなく、お通には、生れながらの孤児性がある。他へ対して、他人を感じることに、どうしても人よりは鋭敏だった。

すこし拗ねて、怒ったふりを見せて、黙つて先へぐんぐん歩き出して行くと、

「お通さん」

と、後ろで呼ぶ者があつた。

城太郎が呼んだのではない。庚申塚こうしんづかの碑の裏から、枯れ草を踏みわけて来る人の大小の鞆さやが濡れて見えた。

十二

それは柘植三之丞つげさんのしょうであつた。

さつき、あのまま坂の上へ登つて行つたものとのみ思っていたのにふいに——また、往來でもないところから出て来たのである。お通にも城太郎にも、不思議な行動に見えた。それに馴々しく、お通さんなどと呼びかけるのも、変な男だ。城太郎は、すぐ突つかかつて、

「おじさん、嘘いったね」

「なぜ」

「武蔵様がこの坂下で、刀をさげて待つているなんていつて、どこに武蔵様がいるかい、

嘘じゃないか」

「ばか」

三之丞は、叱つて、

「その嘘のために、おまえの連れのお通さんは、あの三名から遁^{のが}れたのではないか。理窟をこねる奴がどこにある、またおれに対しても、一言^{ごん}、礼ぐらいは申すのがほんとうではないか」

「じゃあ、あれは、おじさんがあの三人を計略に乗せるためにいったでたらめかい」

「知れたこと」

「なアんだ、だからおらもないことじゃないのに——」

と、お通へ向つて、

「やつぱり、でたらめだとき」

聞いてみれば城太郎へわがままに怒つたのはいいとしても、あかの他人の柘植^{つげ}三之丞へ怨み顔する理由は毛頭ないので、お通は幾重にも膝を折つて、助けてもらった好意を感謝した。

三之丞は、満足のでいで、

「野洲川の野武士といえば、あれでもこの頃は、ずいぶんおとなしくなった方だ。あれに狙われては、この山街道から無難に出ることは恐らくできまい。——だが、最前この小僧から話をきけば、おまえたちの案じている宮本武蔵という者、心得のある者らしいから、むぎむぎその綱にかかるようなドジも踏むまい」

「この街道のほかにも、まだ江州路ごうしゅうじへ出る道が、幾すじもありましょうか」
「あるとも」

三之丞は、真昼の空に澄んでいる冬山の嶺を仰ぎまわして、

「伊賀谷へ出れば、伊賀の上野から来る道へ。——また安濃谷あのだにへ行けば、桑名や四日市から来る道へ。——そまみち杣道や間道が、三つぐらいあるだろう。わしの考えでいえば、その宮本武蔵とかいう男は、逸いよはやく、道をかえて危難を脱していると思うが」

「それならば、安心でございますが」

「むしろ、あぶないのは、おまえ達二人のほうだ。折角、山犬の群れから救ってやったのに、この街道を、ぶらぶら歩いていれば、いやでも野洲川ですぐまた捕まってしまう。——すこし道は嶮けわしいがおれについて来るがいい、誰も知らぬ抜け道を案内してやろう」

三之丞は、それから甲賀村かみの上を通して、大津の瀬戸へ出る馬門峠まかどとうげの途中まで一緒に

来て、つぶさに道を教え、

「ここまで来れば、もう安心なものだ。夜は早目に泊って、気をつけて行くがいい」と、いった。

かさねて、札をのべて、別れようすると、

「お通さん、別れるのだぜ」

三之丞は、意味ありげに、改めて彼女をじつと見た。そして、やや怨み顔に、

「ここまで来る間に、今に訊いてくれるか、今に訊いてくれるかと思っていたが、とうとう、訊いてくれないな」

「なにをですか」

「おれの姓名を」

「でも、柑子坂こうじで聞いておりましたもの」

「おぼえているか」

「渡辺半蔵様の甥おい、柘植三之丞さまつげ」

「ありがたい。恩着せがましくいうのじゃないが、いつまでも、覚えていてくれるだろうな」

「ええ、ご恩は」

「そんなことじゃない、おれがまだ独り者だということをさ。……伯父の半蔵がやかまし屋でなければ、邸へ連れて行きたいところだが……まあいい、小さな旅籠はたごがある、その主人も、おれのことはよく知っているから、おれの名を告げて泊るといい。……じゃあ、おさらば」

十三

先の好意はわかるし、親切な人とも思いながら、その親切に少しも欣よろこべないばかりか、親切を示されれば示されるほど、かえって厭いとわしくなる人間というものはよくある。

柘植三之丞に対するお通の気もちがそれだった。

（底のわからない人）

という最初の印象が妨さまたげるせいかな、わかれに臨んでも、狼から離れたように、ほつとはしたが、心から礼をいう気にもなれない。

かなり人みしりをしない城太郎さえが、その三之丞とわかれて峠を隔てると、

「いやな奴だね」

と、いった。

きょうの難儀を救われたてまえにも、そういう蔭口はいえない義理であつたけれど、お通もつい、

「ほんとにね」

と頷^{うなず}いてしまい、

「いったいなんの意味なんでしょう、おれはまだ独り者だということを覚えていてくれなんて……」

「きつと、お通さんを今に、お嫁にもらいに行くよという謎なんだろう」

「オオいやだ」

それからの二人の旅は至つて無事だった。ただ恨みは、近江^{おうみ}の湖畔へ出ても、瀬田の唐橋を渡つても、また逢坂^{おうさか}の関を越えても、とうとう武蔵の消息はわからないでしまったことである。

年暮^{くれ}の京都にはもう門松が立っていた。

待つ春の町^{まち}飾^{かざ}りを見ると、お通は先に逸^{いつ}した機会をかなしむよりも、次の機会に希望^{のぞみ}

をもった。

五条橋のたもと。

一月一日の朝。

もし、その朝でなければ、二日——三日——四日と七種ななくさまでの朝ごとに。

あの人は必ずそこへ来ているというのである。城太郎からお通はそれを聞いている。ただ、それは武蔵が自分を待つてくれるためでないだけがさびしいといえさびしい。しかし、なんであろうと、武蔵に会えることだけで、自分の希望は八分も九分も遂げられるようにお通は思うのだった。

（だけど、もしやそこへ？）

ふと彼女は、また、その希望を暗くするものに襲われた。本位田又八の影である。武蔵が、元日の朝から七日のあいだ、朝な朝なそこへ来ていようというのは、本位田又八を待っためなのだ。

城太郎に訊けば、その約束は、朱実ことづに言伝ことづけしてあるだけで、当人の、又八の耳には、入っているかわからないという。

（どうか、又八が来ないで、武蔵様だけがいてくれればよいが——）

お通は、祈らずにいられなかった。そんなことばかり考えながら、蹴上^{けあげ}から三条口の目まぐるしい年の瀬の雑^{ざつ}鬧^{とう}へ入ってゆくと、ふとそこらに、又八が歩いていそうな気がする。武蔵も歩いていそうな気がする。彼女にとつては誰よりも怖い^{こわ}気のする又八の母のお杉隠居も、うしろから来はしまいかなどと思う。

なんの屈託もないのは城太郎で、久しぶりに戻って見る都会の色や騒音が、無性に彼を
はしやがせてしまい、

「もう泊るの？」

「いえ、まだ」

「こんなに明るいうちから旅宿^{やどや}屋へついてもつまらないから、もつと歩こうよ。あつちへ
行くと、市が立っているらしいよ」

「市よりも、大事な御用が先じやありませんか」

「御用って、何の御用」

「城太さんは、伊勢から自分の背中につけて来たものを忘れたんですか」

「あ、これか」

「とにかく、烏丸光広様のお館^{やかた}へうかがって荒木田様からおあずかりの品をお届けしてし

まわないうちは、身軽にはなれません」

「じゃあ今夜は、その家で泊つてもいいね」

「とんでもない——」

お通は、加茂川を見やりながら、笑った。

「やんごとない大納言様のお館、どうして虱^{しらみ}たかりの城太さんなんど、泊めてくれるもんですか」

冬の蝶

一

預かり中の病人が、寢床を藻^も抜^ぬけの空^{から}にして、紛失したとあつては、これは責任上、かなり驚いていい事件である。

けれど、住吉の浜の旅籠^{はたご}では、病人が病氣を作った原因をうすうす知っていたし、無断で出て行った病人も二度と、海へ駈^{おそ}け込む惧^{おそ}れはないものとして、ただ一片の知らせを、

京都の吉岡清十郎へ飛脚で出しておいたまま、追手のなんのと、いらざる苦労はしなかった。

——さて、そこで。

朱実^{あけみ}は、籠^{あおぞら}から蒼空へ出た小禽^{ことり}のような自由を持ったが、なんといっても、いちど海で仮死の状態になった体である。そうぴちぴち飛んでも行けないし、殊には、憎い男性のために、処女^{おとめ}のほこりに消えようもない烙印^{やきいん}を与えられた傷手^{いたで}と——それに伴うて起るさまざまな精神的また生理上の動揺というものは、そう三日や四日で、易々^{やすやす}と癒^いえるものではない。

「くやしい……」

朱実^{あけみ}は、三十石船^{こくぶね}のうちでも、淀川^{よどがわ}の水をみな自分の涙としても足らないほど嘆いた。

その口惜しいはまた、単なる口惜しいではない。——この身体のうちに、べつな男性を恋しているがために——その人との永久^{のぞみ}の希望を、あの清十郎の暴力のために破壊されたと思うがために、——さらに複雑だった。

淀のながれには、門松の輪飾りや、初春^{はる}のものを乗せた小舟^{せわ}が忙しげに棹^{さお}さしていた。

それを見ると、朱実は、

「……武蔵様に会つても？」

と、惑いの下から、ポロポロとなみだがこぼれてくる。

五条大橋のたもとに、武蔵が来て、本位田又八を待つという正月の朝を、朱実は、どんなに心待ちだったか知れないのである。

——あの人は何だか好きだ。

こう思い初めてから、朱実は、都会のどんな男性を見ても、心をうごかしたことはない。殊にいつも、養母のお甲と戯れていた又八と思い較べていただけに、思慕の糸が、この年月まで、切れもせずに胸につながつて来た。

思慕というものを、糸にたとえれば、恋はだんだんそれを胸のうちで巻いてゆく鞠のようなものだ。何年も会わないでいても、独りで思慕の糸をつくり、遠い思い出も、近い人づての消息も、みな糸にして、鞠を巻いて大きくしてゆく。

朱実も、きのうまでは、そういう処女らしい情操では、伊吹山の下にいた頃から、可憐な野百合のおいを持つていた。——だが今はもうそれも心のうちで、微塵に碎けている気がするのだった。

誰も知るはずのないことであるのに、世間の眼がみな自分に対して変った気がしてならない。

「おい、娘や、娘や」

こう誰かに呼ばれて、朱実は、たそがれかかる五条に近い寺町を冬の蝶のように、寒々と歩いている自分の影と、辺りの枯れ柳や塔を見出した。

「帯かい、紐かい、なんだか解けて引き摺^ずって歩いているじゃあねえか。結んでやろうか」
ひどく下等なことばをつかうが、身なりは痩せても枯れても、二本差している牢人で、朱実は初めて見る男にちがいないが、盛り場や冬日の裏町を、何の用もなくよくぶらついている赤壁八十馬^{やそま}と名乗る人間。

すり切れたわら草履をばたつかせて、朱実^{あけみ}のうしろへ寄って来た、そして地に曳き摺^ずっていた彼女の帯紐の端をひろって、

「まさか娘^{ねえ}やは、謡曲^{うたい}狂言によく出てくる狂女じゃあるめえ。……人が笑うわな。……美しい顔をしているのに、髪だつて、もすこしどうかして歩いたらどうだい」

うるさいと思うのであろう。朱実^{しゆじつ}は耳がないような顔をして歩いてゆく。それを赤壁八十馬は、単に、若い女のはにかみと呑みこんで、

「娘^{ねえ}やは、都ものらしいが、家出でもしたのか？ それとも、主人の家でも飛び出して来たのか」

「……………」

「気をつけなよ。おめえみたいな容^{きりよう}貌^{ぼう}よしが、そんな……誰^{たれ}が見^みたつて、事情^{わけ}のありそうな、ぼんやり顔でうろうろ歩いていてみな、今の都には、羅^{らし}生^{しょう}門^{もん}や大^{おお}江^え山^{やま}はないが、そのかわり、女とみたらすぐ喉^{のど}を鳴らす野武士がいる、浮浪人^{ひとかい}がいる、人^{ひと}買^{かい}がいるぜ……」

「……………」

ふんとも、すんとも、朱実^{しゆじつ}は答えないのに八十馬は独^{ひとり}りで喋^{しゃべ}って尾^おいて行きながら、

「まったく」

と、返辞^{へんじ}まで自分でして、

「この頃、江戸の方へ盛んに京女^{きやうにょ}がいい値で売られてゆくそうだ。むかし奥^{おく}州^{しゅう}の平泉^{へいせん}に

藤原三代の都が開かれた頃には、やはり京女がたくさんに奥州へ売られて行つたものだが、今ではそのはけ口が江戸表になつてゐる。徳川の二代將軍秀忠が、江戸の開府に、今一生懸命のところだからな。——だから京女がぞくぞく江戸へ売られて、すみちよう角町だの、伏見町だの、境町だの、住吉町だのと、こつちの色街の出店が二百里も先にできてしまつた」

「……………」

「娘さんねえなどは、誰にでもすぐ目につくから、そんなほうへ売り飛ばされないように、また変な野武士などに引ツかからねえようにずいぶん氣をつけないと物騒しだぜ」

「……………叱しつ！」

朱実はふいに、犬でも追うように、袂たもとを肩へ振り上げて、後ろを睨ねめつけた。

「——叱しつ、叱しつ」

げらげらと八十馬は笑つて、

「おや、こいつあ、ほんとのキ印じるしだな」

「うるさい」

「……………それでもねえのか」

「お馬鹿」

「なんだと」

「おまえこそ氣狂いだ」

「ハハハハ、これやあいよいよ間違いなしのキ印だ。かあいそうに」

「大きなお世話だよ」

つんとして――

「石をぶつつけるよ」

「おいおい」

八十馬は離れない。

「^{ねえ}娘や、待ちな」

「知らない、犬つ、犬つ」

実は朱実^{あけみ}は恐かつたのである。そう罵^{ののし}ると、彼の手を払って、驀^まつしぐらに走つてしまつた。そのむかし燈籠^{とうろう}の大臣^{おとど}といわれた小松殿の館^{やかた}があつた跡だという萱原^{かやはら}を、彼女は、泳ぐように逃げてゆく。

「おういつ、娘や」

八十馬は、獵犬のように、萱の波を躍つて追う。

裂けたる鬼女の口に似ている夕月が、ちようど鳥部ノ山の辺りに見える。折から生憎、
陽も落ちかけて、この辺りは人も通らない。もつとも、そこから二町ほど彼方を、一群れ
の人間が、とぼとぼ山の方から降りて来るのはあつたが、朱実の悲鳴を聞いても、こつち
へ救いに駆けつけて来ようとはしなかった。——なぜならばその人々は皆、白い袴を着、
白い緒の編笠をかぶり、手に数珠じゆずを持つて、まだ野辺の送りをすまして来た涙が干かない
でいる人たちであつたから。

三

背なかを、どんと、突きとばされたのだ。朱実は勢いよく、萱の中へ仆たおれてしまう。

「あつ、御免御免」

ふざけた男もある。自分で突きとばしておいて、八十馬やそまはこう謝りながら、朱実の体へ
のしかかり、

「痛かつたろ」

と、抱きすくめた。

その髻^{ひげ}づらを、朱実は、くやしまぎれに平手で打った。ピシャピシャと二つも三つも打った。けれど八十馬は平気なものなのだ。かえって、この男はそれを歓ぶかのように、眼をほそめて打たれているのだから始末にこまる。

従って、彼女を抱きしめている手は離しッこない。執拗^{しつよう}に、頬をこすりつけてくる。それが無数の針のように痛くて、朱実は顔を苦しめられた。

——息ができない。

朱実は、ただ爪を立てる。

その指の爪が、争ううちに、赤壁八十馬の鼻の穴を搔きむしった。鼻は獅子頭^{しがしら}のそれみたいに朱に染まる。けれど八十馬は手を離さない。

鳥部ノ山の阿弥陀堂^{あみだどう}から、夕闇の鐘は諸行無常と告げわたっている。けれど、こうすさまじく生き過ぎている人間の耳には、色^{しき}即是空^{そくぜくう}の梵音^{ぼんおん}も、馬の耳に念仏というものである。男女^{ふたり}を埋めている枯れ萱^かの穂^{がや}は、大きな波をゆり立てるばかりだった。

「おとなしくしな」

「……………」

「なにも、恐^{こわ}いことはないさ」

「……………」

「おれの女房にしてやろう。——いやじゃあるまい」

「……死にたいッ！」

さけんだ朱実の声の余りにも悲痛で強かったので、

「えっ？」

八十馬は、思わずいった。

「……どうして、どうして」

手と膝と胸とで、朱実は体を山茶花さざんかの蕾つぼみみたいに固くむすんでいた。八十馬はどうかしてこの筋肉の抵抗をことばで解ほぐさせようとするのだった。この男はまた、こういうことに幾たびか経験をもっているらしい上に、こういう時間のあいだをも楽しむことにしているらしい。凄い面つらがまえにも似もやらず、捕まえた餌物えものをむしろ飜なぶるかのように気が長いのである。

「——泣くことはないじゃないか。何も、泣くことは」

そんなことを、耳みみへ唇くちをつけていつてみたり、

「娘ねえやは、男を知らないのか、嘘だろう、もうおめえぐらいな年頃で……」

朱実は、いつぞやの吉岡清十郎を思いだした。その時の苦しかった呼吸が考え出された。でも、あの時とは比較にならないほど、心のどこかに落着いたものがある。……あの時のせつなこそは、部屋のまわりの障子の棧さんも見えない心地がしたほどだったが――。

「待つてくださいッてば！」

蝸かたつむり牛

のようになったまま、朱実はいった。なんの意もなくいったのである。病後の体が火みたいだった。その熱すら、八十馬は病気の熱とは思っていない。

「待つてくれって？ ……よしよし、待つてやるとも。……だが、逃げるとこんどは手荒になるぜ」

「――ちいッ」

肩をつよく振って、八十馬の執拗な手をふり退けたの。やっと少し離れた彼の顔を、睨ねめつけながら起ち上がって、

「――何するんですっ」

「わかつてるじゃねえか」

「女と思って、ばかにすると、わたしにだって、女のたましいというものがあるんだから……」

草の葉で切れた唇に血がにじんでいた。その唇を噛みしめると、ほろほろと涙がながれ、血といっしょに白い頤あごをこぼれた。

「ほ……おつなことをいうな。こいつはまんざらキ印でもねえとみえる」

「あたりまえさ！」

ふいに相手の胸いたを突くと、朱実は、そこを転まろび出して、見えるかぎり夕月にそよぐ萱かやの波へ、

「人殺しつ、人殺しイっ……」

四

その時の精神状態からいえば、朱実より八十馬のほうが、一時的ではあるが、完全な狂き人ちがいであった。

昂たかぶりきつた彼は、もう、技巧をこらしてなどいられない。人間の皮をかなぐりすてて、情痴けものの獣になりきってしまう。

——たすけてえっ！

青い宵月の光を、十間とは走らないまに、朱実は獣に噛みつかれた。

白い脛が、無残にも鬭い仆れ、自分の黒髪を自分の顔へ巻きつけて、朱実は頬を大地へこすつた。

春が近いといつても、まだ花頂山から落ちてくる風は、蕭々と、この野を霜にするかと思われた。悲鳴に喘ぎたてる真白な胸が、乳ぶさが、露わに冬風に曝され、八十馬の眼を、さながら炎の窓にしてしまう。

するとその耳の辺りを、何者か突然、ごつんとおそろしく堅い物で撲つた。

八十馬の血液は、そのため、一時五体の循環を休止して、打撃をうけた箇所へ集まり、神経の火がそこから噴いたように、

「——ア痛！」

とさげんだ。

さげびながらまた、後ろを向いたのもこの男の戸惑いである。その真つ向へまた、

「この馬鹿者っ」

びゅっ——と空気に鳴りながら、節のある尺八が、脳天を打ち下ろした。

これは痛くなかつたろう、痛いと感じる間がなかつたからである。八十馬は、へなへな

と肩も眼じりも下げてしまい、張子はりこの虎のように首を左右へぶると振って後ろへ引つくりかえってしまった。

「他愛ないものだ」

尺八を手にはぶら下げながら、撲なぐった方の虚無僧は、八十馬の顔をのぞきこんでいる。――ぽかんと口を大きく開いて気絶しているのだ。打ったのが二度とも脳であつたから、氣がついてもこの男は痴呆性ちほうしょうになるのではないかと考え、ひと思いに殺したよりも罪な業わざをしたものだ、つらつら眺め入っている。

「……?」

朱実はまだ、その虚無僧の顔を、茫然と見ていた。唐蜀黍とうもろこしの毛をすこし植えたように、鼻の下にうす髭ひげが生えている、尺八を持っているから虚無僧と人も見ようが、うす汚い着物に、一腰ひとこしの太刀を帯び、乞食か侍か、よく見ないと判断のつかないような五十男である。

「もういい」

青木丹左衛門は、そういつて、唇の下へブラ下がっている大きな前歯でわらった。

「――もう安心おし」

朱実 は初めて、

「ありがとうございます」

髪のみだれや、着物のみだれを直して、まだ脅^{おび}えている眼が、夜を見まわした。

「どこじやの、おぬし」

「家ですか。……家はあの……家はあの……」

朱実 は、にわかにすすり泣きして、両手で顔を蔽^{おお}つてしまう。

わけを訊かれても、彼女は正直にみな話せなかった。半分は嘘をいい、半分はほんとのことをいい、そしてまたすすり泣いた。

母親がちがうことだの、その母親が自分の体を金に換えようとしたことだの——住吉からここまで逃げて来た途中であるということだの——その程度は打ち明けて、

「わたしもう、死んだって家へ帰らないつもりです。……ずいぶん我慢して来たんですもの。恥をいえば、小さい時には、戦^{いくさ}の後の死骸から、剥^{はぎと}盗^とりまでさせられたことがあるんです」

憎い清十郎よりも、さっきの赤壁八十馬より、朱実 は、養母^{はは}のお甲が憎くなった。急にその憎さが骨をふるわして来て、また、よよと両手の裡^{うち}で泣くのだった。

心猿

一

ちようど阿弥陀^{あみだ}ヶ峰の真下にあたるところで、清水寺の鐘も近く聞え、歌ノ中山と鳥部ノ山にかこまれて、ここの小さい谷間は静かでもあり、またから風の当たる寒さもよほどちがう。

その小松谷まで来ると、

「——ここじやよ、わしの仮住居^{かりずまい}は、なんと暢気^{のんき}なものだろうが」

青木丹左は、連れて来た朱実^{あけみ}をふり顧^{かえ}つて、うす髭^{ひげ}の生えている上唇^{かみ}を剥いて、にやりと笑う。

「ここですか」

失礼とは思いながら、朱実はつい問い返した。

ひどく荒れている一字の阿弥陀堂なのである。これが住居^{すまい}というならば、この附近には、

堂塔伽藍がらんの空家がずいぶん少くない。この辺から黒谷や吉水よしみずのあたりは、念仏門発祥の地であるので、祖師親鸞しんらんの遺跡が多いし、念仏行者の法然房が讃岐さぬきへ流されるその前夜は、たしかこの小松谷の御堂とやらにあつて、随身の諸弟子や帰依きえの公卿くげや善男女ぜんなんによたちと、わかれの涙をしぼられたものである。

それは承元の昔の春だったが、今夜は、散る花もない冬の末、

「……おはいり」

丹左は先へ御堂の縁へ上がつて、格子扉こうしどを押しあけ、そこから手招きをしたが朱実はためらつて、彼の好意に従つたものか、ほかへ行つて独りで寝場所をさがしたのか、迷っている様子に見える。

「この中は、思ひのほか暖かいのだ。藁わらござだが、敷物もあるしな……。それとも、このわしまで、さっきの悪者のように、恐い人間と、疑っているのか」

「……………」

朱実は顔を横に振つた。

青木丹左が人のよい人間らしいことには、彼女も安心してゐるのである。それに年配も五十を越えているし——。だが、彼女がためらっているのは、彼の住居と称するお堂の汚

なさと、彼の衣服や皮膚の垢あかからにおう不潔さであつた。

——だが、ほかに泊るところのあてはないし、また、赤壁八十馬にでも見つかればこんどはどんな目にあうか知れないし——それになお朱実は、身体が熱ッぽくて、氣けだる懶くつて、はやく横にでもなりたい気がしきりとするので、

「……いいんですか」

階段から上がりかけると、

「いいとも、幾十日住んでいようが、ここなら、誰も怒つて来はせんのだ」

中は真つ暗である。蝙蝠こうもりでも飛びだして来はしまいかしらと思われるほど暗い。

「お待ち」

丹左は隅で、火打ち石をカチカチ磨すツているのだ。どこで拾つて来たか、短檠たんけいに灯あかりがつく。

見れば、鍋、瀬戸物、木枕むしろ、筵むしろなど、ひと通りのものは拾い集められてある。湯を沸かして、これから蕎麦そば掻かきを馳走してやろうといい、七輪の欠けたようなものへ木炭すみをつぎ、付火つけぎ木をくべ、火だねを作つてフウフウと火を吹きはじめる。

（親切な人）

すこし落着いてくると、朱実は、不潔も気にならなくなり、彼の生活に、彼と同じ気安さが持てて来るのだった。

「そうそう熱があつて、身体がだるいといつていたの、おおかた風邪かぜだろう。蕎麦搔そばがきのできる間、そこに寝ていさつしやれ」

むしろだの、米俵だので、隅へ寝どこができてゐる。朱実はそこにある木枕へ、自分の持つてゐる紙を当てて、すぐ横になつた。

上からかぶる衾ふすまのかわりに、それへ備えてあるのは、これもどこかで拾つて来たものらしい、破れた紙衣蚊帳かみこがや。

「じゃあ、お先に」

「さあ、さあ、なにも心配しないがいいぞよ」

「……すみません」

と、手をつかえる。そして、渋紙の蒲団ふとんを引き被かつごうとすると、その下から、なにか電光のような眼をした生き物が飛びだし、自分の頭を越えたので、彼女は、きやつといつて俯伏うつぶした。

二

だが、驚いたのは、朱実あけみよりは、むしろ青木丹左のほうで、鍋へ空あけかけていた蕎麦粉そばこの袋を取り落して、

「アツ、なんじやつ？」

膝をまっ白にしてしまった。

朱実あけみは打ち伏したまま、

「なにか——なんだか知れませんが、鼠ねずみより、もっと大きな獣けものが、隅から飛び出して……」
いうと、丹左は、

「栗鼠りすじゃろ」

と見廻して、

「栗鼠のやつめが、よう食い物を嗅かいで来おるでな。……だが、どこにも、何もいはずが？」

朱実あけみは、そうつと顔をあげ、

「あれっ、そこに」

「どこに」

浮き腰を巡^{めぐ}らして丹左がふとうしろを見ると、なるほど一匹の動物が、仏具も本尊仏もない内陣の欄^{らん}のうちに、ちよこなんと乗つて、丹左の眼が向くと、びくとしたように尻をすくめる。

栗鼠^{りす}ではない、小猿なのだ。

「……？」

丹左が不審顔すると、小猿は、この人間くみしやすしと見てとったか、内陣の朱の欄^{らん}をするすると二、三度往復をしてからまた、元のところへ坐つて、毛の生えた桃に似ている面^{つら}がまえをケロリと上げ、パチパチ眼^まばたきをしながら何か物でもいいいたげな風情^{ふぜい}。

「こいつ……どこから入つて来たのじやろう、……ははあ、だいぶ飯^いつぶがこぼれていると思うたら、さては」

さては、ということばが、わかるように、小猿は彼が近づく先に逃げ出して、内陣^{うち}の裡へぴよんと隠れてしまう。

「……はははは、とんだ愛嬌^{あきやう}者じやわ、たべ物でもくれてやれば、悪戯^{わるさ}はすまい。放^ほつと
「い」

膝の白い粉をはたいて、鍋のまえに坐り直しながら、

「朱実、^{あけみ}なにも怖いことはない。——おやすみ」

「だいじょうぶでしようか」

「山猿ではない、どこかの飼猿が逃げて来たのじやろ、なに心配があるものか。——夜具はそれで寒くはないか」

「……いいえ」

「寝たがよい、寝たがよい、風邪^{かぜ}は静かに寝ていさえすれば、なおる」

鍋へ、粉を入れ、水を入れ、そしてぐるぐる箸の先で掻きまわす。

欠け七輪に、炭火はかつかつとおこっている。鍋をかけておいて、その間に、丹左は葱^{ねぎ}を刻^きみはじめた。

まな板は、この御堂にあった古机、庖^{ほう}丁^{ちよう}は小柄^{こづか}の錆^{さび}びたものらしい。刻んだ葱は、手も洗わずに木皿へうつし、その後を拭けばそのまま、次には膳にかわるのである。

クツクツと鍋の湯の沸^{たぎ}る音が、だんだんこの中を暖めて来た。枯れ木のような膝をかかえ込み、丹左の飢えた眼が、湯の泡を見ていた。人間の至樂はこの鍋の中に尽きるといえないばかりに、その煮えるのが楽しみらしく見える。

いつもの晩のように、清水寺のほうで鐘が聞える。もう寒行はすんで初春もちかいが、師走が押しつまると、人の心の患いわづらが多いとみえ、夜もすがら鰐口わにぐちをふる音だの、お籠こもりをする者の詠歌のあわれな声が絶えない。

(……わしは、わし自身の科とがをうけ、こうして、罪障ざいしょうの償つぐないをしているようなものだ
が、城太郎はどうしているかなあ？ ……。子にはなんの科とがもないはず、親の罪は親にこそ酬むくえ、南無なむかんぜおん菩薩ぼさつ、城太郎のうえに大慈の御眸みひとみありたまえ)

——蕎麦掻きを焦げつかないように、そつと箸で浮かしながら、親と名のつく者の弱い心の底から祈りをこめていると、

「——嫌あッ！」

突然、寝ている朱実が縊しめ殺されでもするようにさけんで、

「ち、ち、ちくしょう……」

見れば、寝息のうちに眼をふさいでいながら、木枕に顔押しつけて、さめざめと泣いているのであった。

自分のうわ言に、朱実は、眼をさまして、

「おじさん、わたしいま、寝ているうちに何かいいましたか」

「びっくりしたわさ」

丹左は、枕元へ寄って来て、彼女の額を拭いてやりながら、

「熱のあるせいじやろう、ひどい汗だ……」

「何を……いったでしょう」

「いろいろ」

「いろいろって？」

朱実は熱っぽい顔をよけいに赧らめて恥じるように、紙蚊帳の衾を、その顔へかぶった。

「……朱実、おまえは、心で呪っている男があるのじやな」

「そんなこと、いいまして」

「ウム。……どうしたのだ、男に捨てられたのか」

「いいえ」

「だまされたのか」

「いいえ」

「わかった」

丹左が独り合点すると、朱実は急に身を起こして、

「おじさん、わ、わたし……どうしたらいいんでしょう」

人には話すまいと思って独り悩んでいた住吉での恥かしいことを、朱実のからだ中の怒りと悲しみは、どうしても、彼女の口からそれをいわせずにおかないのである。突然、丹左の膝にすがりつくと、まだうわ言の続きのように、嗚咽しながらあのことを喋ってしまった。

「……ふ、ム……」

丹左は熱い息を鼻の穴から洩らした。絶えてひさしい女性のおいというものが、彼の鼻にも眼にも沁みる。このごろは、人間の灰汁あくというものが抜けきって、寒巖枯木にひとしい余生の肉体とばかり自分でも思っていた官能に、急に、熱い血でも注ぎこまれたような膨らみを覚え、自分の肋骨あばらの下にも、肺と心臓がまだ生きていることをめずらしく思いだした。

「……ふーむ、吉岡清十郎というのは、そのような怪しからぬことをする奴かの」

問い返しながら、丹左も心のうちで、清十郎という人間を憎んでもあきたらぬ人間のよ
うに憎んだ。けれど、丹左の老いたる血を、それほど興奮させているものは義憤ばかりで
はなかった。ふしぎな嫉妬心のはたらきが、あたかも自分の娘が冒おかされてもしたかのよう
に、彼の肩を怒らせるのだった。

朱実にはそれが、たのもしき人にみえ、この人ならもう何をいつても安心と思ひこんで、
「おじさん、……わたし、死んでしまいたい、死んでしまいたい」

彼の膝へ、泣き顔を当ててもがくと、丹左は、あらぬ心地に、すこし当惑顔にさえなつ
て、

「泣くな、泣くな、おまえが心からゆるしたわけではないから、おまえの心までは決して、
けがされておりはせぬ。女性のいのちは、肉体よりは、心のものじやろう。さすれば、貞
操とは、心のことだ。体をまかせないまでも、心でほかの男を想うとすれば、その瞬間だ
けでも、女のみさおは穢けがらわしく汚けがれたものになっている」

朱実には、そんな観念的な氣やすめに安心はしていられないらしく、丹左の衣ころもとおを透すほ
ど熱い涙をながしぬいて、なお、

（死にたい、死にたい）

をいいつづける。

「これ、泣くな、泣くな……」

丹左は、その背なかを撫でてやっていた。だが、白い頸うなじのおののきを、同情しては見られなかった。このきめのいい肌の香も、もう他の男性に盗まれた後のものかと思いうのだった。

さつきの小猿が、鍋の近くへいつのまにか来て、なにか食べ物にくわえて逃げた。その物音に、丹左は、朱実の顔を膝から落して、

「こいつめ！」

と、拳こぶしを振りあげた。

丹左にはやはり、食べ物の方が、女の涙よりは、重大に心を打つらしい。

四

夜が明けた。

朝になると、丹左は、

「町へ托鉢たくはつに行つて来るでの、留守をたのむぞよ。——歸りには、そちの藥、暖かい食べ物、それから、油や米なども求めて来ねばならぬでな」

雑巾ぞうきんのような袈裟けさをかけ、尺八と笠をかかえて、阿弥陀堂あみだから出て行つた。

笠は、天蓋てんがいではない、当りまえの竹の子笠である、尻切れ草履をびたびた摺すつて、雨さえ降らなければ、町へ行ぎようこつ乞こに出かけるのだつた。案山子かかしが歩いているように、鼻下の髭ひげまでがみすばらしい。

殊に、今朝の丹左は、しよぼしよぼしていた。ゆうべは一晚じゆう、よく眠れなかつたのである、あんなに悶もだえたり泣き悲しんでいた朱実のほうは、暖かい蕎麦湯そばゆをすすると、一汗かいて、深々と眠りに落ちてしまったが、丹左のほうは、明け方まで、まんじりともしなかつた。

その眠れない原因が、今朝もまだ——うらうらと澄んでいる陽の下へ出て来ても——まだ頭のしんに残つていて、とつこうつ、それが心にこだわつて離れない。

（ちようど、お通ぐらいな年ごろだ……）

と、思う。

（お通とは、気だてがまるでちがうが、お通よりは、愛くるしい。お通には、氣品がある

が、冷たい美だ。朱実のは、泣いても、笑つても、怒つても、みんなそれが蠱惑こわくになる……

その蠱惑が強力な光線のように丹左のすがれた細胞をゆうべから活潑に若やがせているのだつた。しかし、なんといつても争えないのは年齢としである。寝返りを打つたびに、朱実の寝すがたを気にしながら、すぐべつな心が、

（あさましや、おれという人間はいつたいどうしたものだ。池田家の譜代として、歴れつき乎とした家禄のついていた家がらをつぶし、姫路の藩地からこのように流浪三界の落魄おちぶれの身となり終つたのも、元はといえ、女のためではないか。お通という女に、ふと、今のような煩惱もとを起したのが因ではないか）

そう誠いましめて、みずから、

（まだ性懲りしょうごもつかないのか）

と叱つてみたり、また、

（ああ、尺八を持ち、袈裟けさはかけているが、まだまだ、おれは普化ふけの澄明な悟道には遠いものだ。露身風体のさとりにはいつなれるのやら？）

慚愧ざんきの眼をつぶつて、むりに眠ろうとして明け方にいたつたのである。そのつかれが、

彼の今朝の影に、よろよるとこびりついていた。

（——そんな邪心は捨てよう。

しかし、愛くるしい娘だ。また不愍な傷手ふびんいたでを負っている。なぐさめてやろう。世間の男性は、そう色情の鬼ばかりでないことも知らせてやろう。

帰りには、葉と、何を求めて来てやろうか。きょう一日の行乞ぎょうこつが、朱実のよろこびになると思えば、これは張合いのあることじや。——それ以上の慾望はつつしもう）

やつと、心がそこへ落着いて、いくらか顔いろがよくなった時である。彼の歩いていた崖の上で、ばたツと、大きく翼を搏うつて、一羽の鷹の影が、陽をかすめた。

「……？」

丹左が、顔を上げると、葉の落ちている櫟くぬぎばやしの梢こずえから、その顔の上へ、灰色の小禽ことりの毛が、綿を舞わしたように飛んで来た。

鷹は、捕えた小禽を爪にかけて、その時空へ真つすぐに揚がっていた——翼の裏を下へ見せて。

「あつ、捕とつたつ」

と、どこかで、人声がひびき、つづいて、鷹の持主の口笛がながれた。

五

間もなく、延念寺の裏坂のほうから、ここへ降りて来る狩支度の二人づれが見える。

ひとり、左の拳こぶしに放鷹たかを据え、獲物を入れる網ぶくろを、大小と反対のほうへ提さげ、うしろに、敏はしこそうな茶いろの狛犬をつれていた。

四条道場の吉岡清十郎なのである。

もう一名は、清十郎よりずっと若くて、体つきはかえって剛健にできているが、派手やかな若衆小袖に、背なかへは、三尺余の太刀を斜めに負い、髪は前髪だち——といえども、後は説明するまでもなくあの岸がなり柳ゆう佐々木小次郎のほかの何人なんびとでもない。

「そうだ、この辺だった」

小次郎は、立ちどまって、あたりを眺めまわしながらいう。

「きのうの夕方、わしの小猿めが、その狛犬かりいぬと争って、尻尾を咬かみつかれ、それに懲こりたか、この辺で隠れこんだまま、とうとう姿を見せなかったが……どこかそこらの木の上にでもいはせまいか」

「いるものか、猿にも脚がある」

と清十郎は、興のない顔つきで、

「いったい、放鷹たかをつかうのに、猿など連れて歩くという法はない」

と、その辺の石へ腰かける。

小次郎も、木の根にかけて、

「なにも連れて歩くわけではないが、あの小猿めが尾ついて来るので仕方がない。けれども、なんとなく可愛い奴で、そばにいないと肌さびしいのです」

「猫だの狎ちんだのという動物を愛撫するのは、女子か閑人ひまじんだけだと思っていたら、おん身のような武者修行が、小猿を愛しているところを見ると、一概にいないものだな」

毛馬堤けまつつみで、実際に見ている小次郎の剣に対しては、十分、尊敬を払ってはいいるが、ほ

かの趣味とか処世のほうとかにおいては、やはり乳くさい点が多分に見える小次郎だった。やはり年齢としは年齢だけのものだという半面が、あれから後、たとえ三、四日の間でも一つ邸やしきに住んでみるとよくわかった。

——で、清十郎は、彼に対して、人間的な尊敬は大して払わないかわりに、交際つきあいは、かえって仕よい気持がして、この数日ですっかり親しみを加えていた。

「はははは」

小次郎は笑って、

「それは拙者がまだ、幼稚だからですよ、今に女のほうでも覚えれば、猿などは捨てて顧みなくなるでしょう」

といった。

それから小次郎が、暢気のんきな雑談をはじめると、清十郎は反対に、なにか落着かない顔いろが濃くなってゆく。自分の拳こぶしにすえている放鷹たかの眼のように、たえず焦々いらいらするふうが眸の底に光るのである。

「なんだ、あの虚無僧めは。……さつきから、吾々のほうをじっと見て、立ちどまつておる」

ふいに、咎とがめるように清十郎がつぶやくので、小次郎も振り顧かえって見たのである。清十郎が、うさん臭い眼をやって睨ねめつけたのは、もちろん、その時まで、ぼんやりと彼方あなたに佇たたずんでいた青木丹左で、丹左はそれと共に、背を向けて、とぼとぼと向うへ歩き出した。

「岸柳どの」

そういうと、清十郎は何を思いだしたのか、突然、腰をあげていった。

「帰ろう。——どう考えても鷹狩などしている場合でない。きようはもう年暮くの二十九日、帰ろう、道場へ」

しかし小次郎のほうは、その焦しょうそう躁そうを、また始まったといわなばかり冷笑して、

「折角、鷹をすえて来たのに、まだ山鳩一羽に、つぐみ二、三羽しか獲とっていない。もすこし、山へ登ってみようじゃないか」

「よそう、気のすすまぬ時には、鷹も思うように飛ばぬものだ。……それよりは、道場へもどつて、稽古だ、稽古だ」

独り語ごのようにいい捨てた語尾には、ふだんの清十郎とは違った熱があつた。小次郎がいやなら、自分ひとりでも先へ帰りそうな様子であつた。

六

「帰るなら一緒に帰る」

小次郎も、共に歩みだしたが、愉快ではない顔いろだった。

「清十郎どの、むりにおすすめして、悪かったな」

「なにを」

「きのうも、きょうも、鷹狩をすすめてあなたを連れ出したのは、この小次郎ですから」
「いや……ご好意は、よく分っている。……だが年暮^{くれ}ではあるし、貴公にも話した如く、
宮本武蔵というものの大事な試合も、

目^{もく} 睫^{しょう}

のまに近づいている場合ゆえ」

「わたくしは、それゆえに、あなたへ、鷹でも放つて、悠々と、気を養うことをおすす
め申したわけだが、あなたのご気質では、それができないとみえる」

「だんだん噂をきくと、武蔵というものは、そう見くびれない敵らしいのじゃ」

「しからば、なおさらこちらは、迫らず、慌^{あわ}てず、心を練っておかねばなりませんまい」

「なにも慌^{あわ}てているわけではないが、敵を侮^{あなづ}めするということは、兵法のもっとも誠^{いまし}めるところだ。試合までに十分、練磨をしておくのは当然じやと拙者は思う。その上で、万一にも、
敗れを取るようなことがあったとすれば、これは、最善を尽しての負けだ、実力の差だ、
どうも致し方はないが……」

小次郎は、清十郎の正直さには好意を持てるが、氣宇^{きう}の小さなところが同時に見え透^す
いて、これではとても、吉岡拳^{けんぼう}法の名声と、あの大きな道場とを、永くうけ継いで行ける

器量ではない——と秘かに氣の毒に感じるのだった。

（まだ、弟の伝七郎のほうが、ずっと線が太い）

と、思う。

だが、その弟と来ては、これは手のつけられない放縦で、腕は兄の清十郎よりも強いそうであるが、家名もへちまもない、いわゆる責任なしの次男坊にでき上っている。

小次郎は、その弟にも紹介はされたが、てんで肌合がぴったりしないし、かえってお互いに最初から妙な反感さえ抱いてしまった。

（この人は、正直だ、だが小心だ、助けてやろう）

こう考えたから小次郎は、わざと、鷹を持ち出して、武蔵との試合などは、念頭から忘れるように、わざと側から仕向けているのに、当の清十郎の身になると、そう悠然とは、構えていられないらしいのである。

——これから帰って大いに練磨するのだという。その真面目さはいいが、いったい、武蔵と会うまでに、これから幾日その練磨ができるのかと、小次郎は、訊きたい気がする。

（しかし、性分だ……）

こういうことは、助太刀にならないことを小次郎は痛感した。——で、黙々と帰り途に

つきかけると、今し方まで足もとにいた茶色の狩犬かりいぬがいつのまにか見えない。

——わん、わんつ、わんつ。

遠くのほうで猛々たけだけしい啼き声がしているのだった。

「ア、なにか獲物を知らせているらしい」

小次郎は、そういつて、ひとみを輝かしたが、清十郎は、いらざる犬の働きといわなばかりに、

「捨ててゆこう、捨ててゆけば、後から追いかけて来るだろうから」

「でも……」

惜しむように、小次郎は、

「ちよつと見て参るから、あなたはそこで待つていて下さい」

犬の声を目あてに、小次郎は駈けて行つた。——見ると、七間四面の古びた阿弥陀堂あみだどうの縁がわへ、狩犬かりいぬは駈け上がったいるのだった。そして、破れ果てた窓口しとみの蔭へ向つて、吠えては飛びかかり、躍つては転げ落ちたりして、そのあたりの丹塗にぬりの柱や壁ぶちを、めちやめちやに爪で搔きたてていてではないか。

七

なにを嗅ぎつけてこう吠えついているのだろうか。小次郎は、リようけん獵犬の飛びかかっている窓とはべつな入口へ立った。

みどう御堂の格子扉こうしどへ、彼は顔をよせてみた。中は漆うるし壺つぼをのぞくようになにも見えない。ガラリツと、彼の手から扉を引く音がひびくと、犬は、尾を振って、小次郎の足もとへ跳おどつて来た。

「——叱しつ」

蹴とばしたが、犬は、気が立っていて、怯ひるみもしない。

彼が御堂の中へ入ると、さツと、袂たもとをくぐって、先へ駈けこんで行った。

と——すぐに。

小次郎の耳へつんざいて来たのは、思いもうけてもいなかった女の叫びである。それも凡なみなみ々ならぬ驚きかたであって、精いっぱいの金切り声が、いきり立つ犬の声と、途端に、すさまじい闘いを捲き起し、御堂の梁はりもために裂けるかのように、人獣ふたいろの音響が、ぐわんぐわんと籠こもって鳴る。

「やつ？」

小次郎は、駈け寄った。その一瞬に、犬の猛^{たけ}つている目標のなんであつたかも分つたし、また、必死に声をもつて拒^{きよ}闘^{とう}している女性のすがたも眼に映った。

紙衣蚊帳^{かみこがや}をかぶつて、朱実は今も寝ていたのである。そこへ、獵犬の眼に見つけられた

小猿が、窓から飛びこんで来て彼女のうしろへ隠れた。

犬は、小猿を追いつめて来て、朱実へ咬^かみつきそうにした。

——きやッ。

と朱実が仰向けに転んだのと、もっと強い獣の悲鳴が、小次郎の足の先から発したのと、殆ど一緒に、間髪の差もなかった。

「——痛いッ、痛いッ」

泣くように、朱実はもがいた。犬の口は、大きく開いて、彼女の左の二の腕を咥^{くわ}えていた。

「くッ、これかッ」

小次郎が、二度目の足で、また犬の脾腹^{ひばら}を蹴とばした。けれども、犬は彼の初めの一蹴りでもう死んでいたのであつて、さらにまた蹴つても、朱実の腕をくわえている大きな口

は離れなかった。

「——離してつ、離してえつ」

もがいている彼女の体の下から、小猿がぴよと飛び出した。小次郎は、犬の上顎と下顎へ両の手をかけて、

「こいつめ」

ぱりつと、^{にかわ}膠を剥ぐような音がした。犬の顔は、もう少しで二つになるところでぶらついていた。それを、ぶーんと扉口から外へ投げやって、

「もういい」

と、朱実のそばへ坐つたが、彼女の二の腕は、決して、もういいどころの状態ではなかった。

真つ白な腕が、^{ひぼたん}緋牡丹みたいに血しおを噴いている。——その白さと^{あか}紅さに、小次郎はぶるると自分にまで、痛みと^{ふる}慄えを感じた。

「酒はないか、傷を洗う酒は。……いや、あるまいな、こんなところに、あるはずはない。ハテ、どうしたもの」

ぎゅつと、彼女の腕を抑えていると、熱い液体が、自分の手顎へも、さらさらとあふれ

て来るのだった。

「もしかして、犬の齒の毒でも受けたら、氣狂きちがいになってしまう。この間うちから、氣狂いじみていた犬だ」

咄嗟の処置に迷いながら、小次郎がそう呟つぶやくと、朱実しゆじは、痛そうに眉をしかめ、白い頸うなじを、うつつに反そらしながら、

「えっ、氣狂い。……いつそのこともう、氣狂いになりたい、氣狂いに」

「ば、ばかな」

小次郎はいきなり顔をよせて、彼女の二の腕の血を口ですすった。口の中へ血がいつぱいになると吐きすてて、また、白い肌を頬張った。

八

たそがれになると、青木丹左は一日の托鉢たくはつからとぼとぼ帰って来た。もう薄暗くなっている阿弥陀堂の扉を開けて、

「朱実、さびしかったろう。今もどつて来たぞよ」

途中で求めて来た彼女の葉だの食べ物だの、油の壺などを隅へおいて、

「お待ち、今、明りを灯^つけてやるからの……」

しかし……明りが燈^{とも}ると、彼の心は暗くなった。

「おや？ ……どこへ行つたのじや、朱実、朱実」

彼女の姿は見えないのであった。

冷たいものに拒まれた自分だけの情愛が、むっと、やりばのない憤^{いきどお}りに変つて、彼は、眼のまえも世の中も暗くなった。その怒りがさめると、なんともいえない淋しきにとらわれて、丹左は、この先とも若くなりようはないし、榮譽も野心も持てないと決まっている、わが老いの身一つを見出して、泣きたいように顔をしかめた。

「ひとに助けられた上、あんなに世話になつておきながら、黙つて出てゆくとは……アアやっぱり、それが世間なのかなあ……今の若い女はそうなのかなあ。……それとも、わしをまだ疑つて？」

丹左は、愚痴ツぽくつぶやいて、彼女の寝ていた後を、猜疑^{さいぎ}な眼で見まわした。——見るとそこに、帯の端でも裂いたような小布^{こぎれ}が捨ててあった。その布^{ぬの}にはすこし血がついている。丹左はよけいに邪推が働いて、ふしぎな嫉妬に駆られるのであった。

忌々^{いまいま}しげに、彼は、藁^{わら}の寢床を蹴とばした。買って来た薬も外へ打ち捨ててしまふ。

そして一日の行^{ぎようこつ}乞^ぎに胃は飢えぬいたのであつたが、晩の食べ物を作りにかかる気力も失せたように、尺八を持つて、

「あ、あ」

阿弥陀堂の縁へ出てゆく。

それからおよそ半刻^{とき}ぐらいの間というものの、取り止めもなく、彼のふく尺八は、彼の煩^ぼ悩^{んのう}を虚空へ遊ばせていた。人間の情慾は、墓場に入ってしまうまでは、形を変えても人体のどこかに、燐^{りん}のように元素^{げんそてき}的な潜在をもっていることを、丹左のふく尺八は、虚空へ自白していた。

（どうせ、他の男性^{ほか}に、勝手にされてしまうあの娘の宿命なら、なにも自分だけが、姑息^{こそく}な道德の通念にしばられて、一晚じゅう、寝ぐるしい思いなどしている必要はなかったのだ）

後悔に似たもののだの、それを自分でいやしむ気持だの、雑多な感情が、帰着するところなく、血管のなかを、いたずらに駆けまわっているのが、いわゆる煩惱なのである。――
丹左のふく尺八は、ひたすら、その感情の濁りから澄もうとする必死な反省であるらしい

が、よくよく業ごうのふかいこの男の生れ性とみえて、彼がむきになってかかる程には、その吹すい禪ぜんの竹は澄んで来なかつた。

「虚無僧さん、なにが面白くて、今夜は独りで尺八をふいているのだえ？ 町で、もらいが多くあつて、酒でも買って来たなら、わしにもすこし、酔わせておくれぬか」

御堂の床下から、首を出してこういったお菰こもがある、そのいざりのお菰こもは、常に床下に住んでいて、自分の上で暮している丹左の生活を、王侯のように下から見、羨うらやましがっている人間だつた。

「お……おまえは知っているじやろう。わしがゆうべ、ここへ連れて来ておいた女子おなごは、どこへ行つた？」

「あんな玉を、逃すなんて法があるものか。今朝、おめえが出てゆくと、大きな刀を背に負つた前髪の若衆が小猿といつしよに、女子まで肩にかけて、連れて行つたわ」

「え、あの前髪が？」

「悪くない男ぶりだもの。……おめえや、おれよりは」

床下のいざりは、なにがおかしいのか、ひとりで笑っていた。

公開状

一

四条道場へ帰るとすぐ、

「おい、これを鷹部屋たかべやの止り木へ架かけておけ」

門人の手へ、鷹をわたして、清十郎は草鞋わらじを解いた。

はつきりと不機嫌な顔つきである。剃刀かみそりのように、体から刃はが立っている。

門人たちは、お笠を、洗足水すすぎをと、その神経へ気をつかいながら、

「ご一緒に行つた小次郎殿は？」

「後から帰るだろう」

「野駈けのうちに、迷はぐれておしまいになつたので」

「ひとを待たせておいて、いつまでも戻つて来ぬゆえ、わし一人で、先へ帰つて来たまでのことだ」

衣服をかえて、清十郎は居間へ坐つた。

その居間の中庭を隔てて宏大な道場はあつた。年暮くの二十五日を稽古仕舞じまいとして、春の道場開きまで、そこは閉つていた。

千人ぢかい門人が、年中、出入りしている道場なので、そこに木剣のひびきがきこえな
いと、急に空家になつたような感じだつた。

「まだ帰らんか」

清十郎は幾度も、居間の中から門人へたずねた。

「まだお帰りになりませぬが」

小次郎が戻つて見えたら、きようは彼を稽古台として、またやがて出会う武蔵とも見倣みな
して、みっちり鍛錬しておこう。——そう考えて、清十郎は待つていたが、夕方になつて
も、夜になつても、遂に小次郎は姿を見せなかつた。

翌る日も帰らない。

年暮くの日は、最後まで押しつまつて来た。今年も、きよう一日しかないという大晦日おおみそか
の昼。

「どうしてくれるんだ」

吉岡家の表部屋へは、掛取かけとりが市いちをなして、押しかけていた。頭のひくい町人が、堪忍

をやぶつて、呶鳴っているのである。

「用人が留守だ、主人が留守だといえ、それで済むと思うてござるのか」

「何十遍、足を通わせるつもりなのだ」

「この半期の勘定だけなら、先代のごひいきもあつたお屋敷ゆえ、黙つても退きさがらうが、この盆の勘定も、前の年の分も、この通りじゃわ」

と、帳面をたたいて突きつける男もある。

出入りの大工、左官、日用品の米屋、酒屋、呉服屋、それからあちこちと、清十郎が、遊興して歩きちらした茶屋小屋の勘定取。

そんなのは、まだまだ小口のほうで、弟の伝七郎が兄に計らず、勝手に現金で借りた利のたかい借財もあつた。

「清十郎殿に会わせてもらいましょう。門人衆では、埒があかん」

坐りこんで、動かないものだけでも、四、五名はある。

平常、道場の会計や、また奥向きの経済のやりくりは、祇園藤次が用人役として、切り盛りしていたのであるが、そのかんじんな藤次は数日前に、旅先で寄せた金を持つたまま、「よもぎの寮」のお甲と逐電してしまつた。

門人達にはどうしていいかわからない。

清十郎はただ、

「留守と申せ」

の一点張りで、奥にかくれたままでいるし、弟の伝七郎は、勿論、大晦日おおみそかなどという物騒な日に、家へ寄りつくはずもなかった。

どやどやと、そこへ六、七名の肩で風を切って歩く連中が入って来た。吉岡門の十傑と自称している植田良平やその門人達である。

掛取かけとりたちを睨めまわして、

「なんだ？　おい」

良平が、そこへ突つ立つて、頭からいうのである。

断りに当たっていた門人が、説明するまでもない顔つきで、簡単にわけを告げると、
「なアんだ、借金取か。借金ならば、払えばよいのだろう。ご当家の都合のよろしくなる時まで待て。待てないやつは、おれが別に話の仕方があるから、道場のほうへ来い」

植田良平の乱暴ないぐさに、掛取の町人も、むっと色をなした。

ご当家の都合よくなるまで待てとはなんだ。なおその上、待てない奴はべつに話をつけてやるから道場のほうへ来いとはなんだ。かりそめにも、室町將軍家の兵法所出仕という先代の信用があればこそ、頭を下げ、ご機嫌を取り、品物も貸し、何も貸し、あした参れといわれればへい、あさつて来いといわれればへい、なんでもへいへいして、先はお屋敷と奉つていれば、つけ上がるにも程がある。そんな文句に恐れて、掛取が引き退^さがつていた日には、町人は生きてはゆかれない、町人がなくて、侍だけでこの世の中が持つてゆけるものなら持つてみる、という反感が、当然、掛取たちの頭を燃やした。

良平は、がやがや首をあつめている町人たちを、木偶坊^{でくのぼう}のように見て、

「さあ、帰れ帰れ、いつまでいても、無駄だぞ」

町人たちは、黙ったが、動こうとはしなかった。

すると、良平が、

「おい、つまみ出せ」

門人の一人へいったので、忪^{こら}えていた掛取も、もう我慢ができないといったふうに、

「旦那、それじゃ余りひどいじゃありませんか」

「なにがひどい」

「なにがつて、そんな無茶な」

「だれが無茶をいった」

「つまみ出せとはなんぼなんでも」

「しからば、なぜ神妙に帰らんか、きようは大晦日おおみそかだぞ」

「ですから、手前どもだって、年の瀬が越えられるかどうかというところで、一生懸命
にお願い申しているんで」

「ご当家もいそがしい」

「そんな断り方があるものか」

「貴様、不服か」

「勘定をお下げくださりさえすれば、なにも文句はありません」

「ちよつと来い」

「ど、どこで」

「不埒ふらちなやつだ」

「そ、そんな馬鹿な」

「馬鹿といったな」

「旦那へいったわけじゃありません、無法だといったんで」

「だまれっ」

襟がみつかんで良平は、その男を側玄関の外へ抛り出した。そこに立っていた掛取たちは、あわてて飛び退いたが、逃げおくれで、二人ほど折り重なって仆れた。

「誰だ、ほかに苦情のいいたい奴は。些細な勘定をたてにとり、吉岡家の表へ坐りこむなどとは沙汰の限り。おれがゆるさん、若先生が払うといつても、おれは払わさん。さ一人、頭を出せ」

町人たちは、彼の拳を見て、われがちに腰を上げた。しかし門の外へ逃げ出ると、腕に力を持たないだけに、口を極めて、罵った。

「今に——この門へ、売家の札が貼られたら、手をたたいて、嘲ってくれようぞ」

「遠くないうちだろうて」

「わしらの思いだけでも」

そんな怨嗟を、門の外に聞きながら、良平は屋敷の中で、腹をかかえて笑っていた。そ

して、他の連中と共に、奥の清十郎の居間へ入って行つた。

清十郎は、沈ちんめん湊として、独りで火桶をかかえていた。

「若先生、ひどくお静かですな。どうかいたしたので」

良平が訊ねると、

「いや、どうもせぬ」

股肱ここうとたのむ門人中の門人が、六、七名もそろつて来たので、清十郎はやや顔いろを直して、

「いよいよ、日が迫つたの」

「迫りました。その儀につき、一同して参りましたが、武蔵へいい渡す試合の場所、日時、あれは、どういうことに決めますかな」

「さよう？ ……」

清十郎は考え込む。

かねて、武蔵から来ている書面には、試合の場所や日どりは、そちらに一任するから、その旨を、一月の初めまでに、五条大橋のほとりへ高札しておいてもらいたいとある。

「場所だな、まず」

清十郎はつぶやくようにいつて――

「洛北の蓮台寺野^{れんたいじの}はどうだろう」

と、一同へ計った。

「いいでしょう。して、日どりと時刻は」

「松の内か、松の内を過ぎてとするか……だが」

「はいがよいと思います。武蔵めが、卑怯な策をめぐらさぬ間に」

「では、八日は」

「八日ですか。八日はよいでしょう。先師の御命日ですから」

「あ、父の命日になるか、それは止そう。……九日の朝――卯^うの下刻^{げく}、そうきめる、そういたそう」

「では、その通りに、高札に認め^{したた}、こよい除夜のうちに、五条大橋のたもとへ打ち立てますか」

「うむ……」

「お覺悟は、よろしゅうございましょうな」

「もとよりのこと」

そういわざるを得ない清十郎の立場となった。

だが、武蔵に負けようなどとは、思いもよらない。父拳法に手を取って教えこまれた幼少からの技倆は、ここにいる高弟の誰と一つ試合つても、劣つた例は^{ためし}ない。ましてや、まだ駆け出しの田舎兵法者である武蔵如きに——と、彼は自負しているのであった。

——にも^{かか}関わらず、なんとなく、先頃からふと^{ひる}怯みを感じたり、心の^{ととの}整いがつかないのは、自分が、兵法の研磨を怠っているためではなく、身の^{わづら}雑事に煩わされているためと、彼自身も解釈している。

朱実のことが、その一つの原因というよりは最も多く、あの後では、彼の氣もちを不愉快にしていたし、武蔵からの挑戦状で、あわてて京都へ帰ってみれば、祇園藤次が^{ちくてん}逐電してしまふやら、また家政の^{がん}癌はこの年暮^{くれ}へ来ていよいよ重体なもようとなり、日々、掛取に押しかけられるようで——清十郎の心は、心構えを持つ^{いとま}つ違がない。

ひそかに、頼みにしていた佐々木小次郎も、ここへ来て、顔を見せなくなってしまった。

弟の伝七郎も寄りつかないのである。彼は、もとより武蔵との試合に、自分以外の助太刀を必要とするほど敵を大きく見てはいないが、それにしても、今年の年暮^{くれ}はさびしい気がしないでいられた。なかつた。

「ご覧ください。これでよかろうと思いますが」

植田良平たちが、別室から、新しく削った白木の板へ、高札に立てる文言を書いて来て、彼の前へ示した。——見ると、まだ水々と墨は濡れていて、

答示

一つ、望みに依り試合申す事

場所、洛北蓮台寺野

日時、正月九日卯^うの下刻

右神文にかけて誓約候事

万一、相手方の者、違^{たが}えあるに於ては、世間へ向つてわらい申す可^{べく}、当方に違えある時は、即ち、神罰をうくるものなり

慶長九年除夜

作州牢人宮本武藏殿

「ム、よからう」

初めて肚がすわったのであろう、清十郎は大きくうなずいた。

その高札を小脇に持つて、植田良平は、二、三の者を後に連れ宵の
大晦日おおみそかを、五条大
橋のほうへ、大股に歩いて行つた。

孤行八寒

一

吉田山の下である。ここらの横には小扶持こぶちを取つて、生涯変哲もなく暮している公卿くげぎむ
侍らいの住居が多かつた。

ちまちました屋造りや、素朴な小門などが、外から見てもすぐそれと分るほど極めて保守的な階級色を持つて、ただ無事に並んでいた。

武蔵は、

(ここでもない。ここでも……)

と次から次の家の門札の名を見てゆきながら、

(もう住んでいないのかもしれない?)

と、捜す力を失ったように佇^{たたず}んでしまった。

父の無二斎^{むにさい}が死んだ時に会ったきりの叔母であるから、彼の記憶は少年の頃の遠いうろ覚えにすぎなかった。——でも、姉のお吟^{ぎん}のほかに血縁といえ、その叔母ぐらいな者しかないのです、きのうこの京都へ足を入れると、ふと思い出して訪ねてみたのである。

叔母の良人^{おつと}は、近衛家^{このえけ}に勤めていて、禄^{ろく}のひくい小侍だと覚えている。吉田山の下でよく知れるかと思つて来たところが、来てみると、同じような家構えがたくさんあつて、家の小さい割にみな木立の奥に、蝸牛^{かたつむり}のように門を閉め、門札も出ている家もあり、ない家もあるという有様なので、知れ難^{にく}いし、訊くにも訊き難い。

(もう、変つてゐるに違いない。よそう)

武蔵は、あきらめて、町のほうへ戻りかけた。町の空には、夕靄^{ゆうもや}がこめて、その靄が、年の市の灯りでうす赤く見えるのだつた。

大晦日^{おおみそか}の夕ぐれである。どこことなく騒音のある洛内だった、すこし人通りの多い往来へ出ると、人間の眼も、蹙^{あし}どりも、違っている。

「あ……？」

武蔵は、すれ違った一人の婦人へ振り顧^{かえ}っていた。もう七年も八年も見ない叔母であるが、たしかに、母方^{ぼんしゅうさよう}の播州佐用郷から都へ嫁^{かた}づいたというその女^{ひと}にちがいない。

「似ている」

とはすぐ思ったが、でも念のため、しばらく後へ尾^ついて行きながら注意していると、四十ぢかい小^こがらなその婦人は、年の市の買物を胸にかかえ、先刻^{さつき}、武蔵がさんざん家をさがして歩いた淋しい横道へ曲ってゆく。

「叔母御」

武蔵が呼ぶと、その婦人は、怪訝^{けげん}な顔して、しばらく彼の顔やすがたをまじまじ眺めていたが、やがて非常な驚きを、常々の無事と小さな家計に狎^なれて年のわりに萎^{しな}びているその眼もとへ現わし、

「あつ、そなたは、無二斎の子の武蔵^{むさし}じゃないか」

少年の頃から初めて会うこの叔母に、たけぞうと呼ばれないで武蔵^{むさし}といわれたのは、案

外でもあったが、それよりはなにかしらさびしい気がして、

「はい、新免家のたけぞうでございます」

武蔵のほうからいうと、叔母は彼のそういう姿を、ながめ廻すだけで、まあ大きくなつたことだとも、見ちがえるほど變つたとも、いわなかつた。

ただ冷やかに、

「そして、そなたは、なにしにここへ来やつたのか」

と、むしろ難詰なじするようなことばでいう。武蔵は、はやく別れた生みの母になんの記憶もなかつた。だがこの叔母と、こうして話していると、自分の母も、生きていた頃は、このくらいな背丈せたけの人であつたろうか、こういう声の人であつたろうか——と目もとや髪かみの先にまで、亡き母なの面影をこころの裡うちで求めていた。

「べつに、なんの用事があつてという次第ではございませぬが、京都へ参りましたことゆえ、ふとおなつかしゅう存じまして」

「うちを訪ねて来やつたのか」

「はい、突然ながら」

すると叔母は、

「やめたがよい、もうここで会えば、用がすんだであろ。帰りや、帰りや」と、手を振るのだった。

二

これが、何年ぶりかで会った叔母の、血につながる者へのことばか。

武蔵は、他人以上の冷たさを、心へ浴びた。亡母^{はは}の次の人みたいに甘えて来た世間知らずが、はっと、悔いられるとともに、思わずいった。

「叔母御、それはまた、なぜですか。帰れとなら、帰りもしましょうが。道ばたで会った途端に、帰れとは、解^げせぬ仰せ。私に何かお叱りがあるならば、打ちつけにいつて下さい」
そう突つ込まれると叔母は困ったように、

「では、ちよつと上がつて、叔父様に会つて行きやれ。ただ……叔父様は、あのようなおひとゆえ、久しぶりに訪ねて来たそなたがまた、落胆^{がっかり}しても折角と思うての老婆心じや。気を悪うしやんな」

そういわれると、武蔵はいくらか慰められ、叔母について、家へ入った。

ふすま越しに、やがて叔父の松尾要人の声がする。喘息病みらしい咳声と、感激のない呟きを聞くと、武蔵はまた、ここの家庭の持つ冷たい壁を感じて、隣の部屋でもじもじしていた。

「なに、無二斎の息子の武蔵が来たと？ ……やれ、到頭来おったか。……して、どうした、なんじゃ、上がっておると。なぜわしに黙って上へ通しなすったか、ふつつか者め」
武蔵は耐えかねて、叔母をよび、早々、暇を告げようとする、

「そこにいるのか」

要人は、そこを開けて、闕ごしに眉をひそめた。畳の上へ牛の草鞋でも上げたように、穢い田舎者と、見ている眼だった。

「おまえ、なにしに来た」

「ついでありましたゆえ、ご機嫌をうかがいにしました」

「うそをいいなさい」

「え？」

「うそをいっても、こちらには、分っている。おまえは、郷里を荒らし抜いて、多くの人に恨みをうけ、家名にも、泥をぬつて、逐電している身じやろうが」

「……………」

「どの面^{つら}下げて、親類などへ、のめのめと」

「恐れ入りました、今に、祖先へも郷土へも、詫^わびをするつもりではおりますなれど」

「……なれど、今さら、国^{くに}許^{もと}へも帰れぬのであろうが、悪因悪果というもの、無二齋^{むにさい}どものも、地下で泣いておろうわい」

「……長座いたしました。叔母御、お暇^{いとま}いたします」

「待たぬか、これ」

要人^{かなめ}は、叱^{しか}つて、

「この辺をうろうろしていると、おまえは飛んでもない目に遭うぞ。なぜなれば、あの本位田家の隠居——お杉とやという肯^きかぬ氣^きの婆^ばどのが——半年ほど前に一度見え、また、先頃からも度々やって来て、わしら夫婦へ、武蔵の居どころを教えろの、武蔵が訪ねて来たろうのと、恐ろしい権^{けん}まくで坐^まりこむのじゃ」

「あつ、あの婆が、ここへも参りましたか」

「わしは、あの隠居から、すべてを聞いておる。血縁^{けつえん}の者でなければ、ひッ縛^{くく}つて、婆の手へわたしてくれるのじゃが、それもなるまい。……わしら夫婦にまで、迷惑^{めいわく}をかけぬよ

う、すこし足でも休めたら、こよいのうちに、立つたがよい」

心外である。この叔父叔母は、お杉の認識をそのままうけて自分を見ているのだ。武蔵は、いい知れない淋しさと、生来の口重い気質に暗くなつて、ただうつ向いていた。

さすがに気の毒になつたとみえ、叔母は、あちらの部屋へ行つてすこし休めという。それが最大の好意らしくあつた。武蔵は黙つてそこを立ち、一間へ入ると、数日来のつかれもあるし、また、夜が明けてあしたの元日には——五条大橋の誓いもあるので、すぐごろりと横になつて、刀を抱いた。——いや飽くまでこの世は自分の身ひとつと思う孤独を抱きしめている姿だつた。

三

世辞もなく、わざと辛く、ずけずけとものをいうのも、血縁の叔母なればこそ叔父なればこそ——そう考えられぬこともない。

一時は、憤^むつとして、門に唾^{つばき}して去ろうとまで思ったが、武蔵は、そう解釈して、寝ころんでいた。かぞえても幾人もない親類である。努めて、その人達をば、善意に解して、

他人よりも濃く血のつながっている縁者として、生涯、なんぞの時には、助けたり助けられたりして行きたいものと、彼のみは、思うのだった。

だが武蔵のそんな考え方は、実世間を知らない彼の感傷に過ぎない。若いというよりも、幼稚なほど彼はまだ、人間を観る^み目も、世の中を観る目も、そういう方にかけては、知ることの浅い青年に過ぎなかった。

彼のような考えは、彼が大いに名を成すか、富を得るかした後に考えるならば、少しも不当にはならないが、この寒空を、垢^{あか}じみた旅着一枚で、しかも大晦日^{おおみそか}——辿^{たど}りついた親戚の家で考えたりすることではない。

その考えの間違っていた反証はやがてすぐ現われた。

(すこし休んでゆけ)

と、叔母がいつてくれたことばを力にして、彼は、空腹をかかえて待っていたが、宵から勝手元で煮物のおい^うつ^つわ^{もの}の音がしていたにもかかわらず、彼の部屋にはなんの訪れもないのである。

火桶の中には、蛸^{ほたる}ほどの火の気しかなかった。だが、飢えも寒さも第二のものだった。彼は手枕のまま二^{ふた}刻^{とき}あまり、昏^{こん}々と眠^{こん}っていた。

「……あ、除夜の鐘だ」

無意識に、がばと身を起した時、数日來の疲れは洗われていて、彼の頭脳あたまは冴え切っていた。

洛内洛外の寺院の鐘が、いんいんと、無明むみょうから有明うみょうのさかいへ鳴っていた。

諸行煩悩しよぎようぼんのうの百八つの鐘は、人をして一年のあらゆる諸行へ反省を呼び起させる。

——おれは正しかった。

——おれは為すなことを為した。

——おれは悔いない。

そういう人間が何人あるだろうかと武蔵は思った。

一鐘しやうの鳴るごとに、武蔵は、悔いのみを揺すぶられた。ひしひしと後悔されることばかりへ追憶がゆくのである。

今年ばかりではない。——去年、おとし、先おとし、いつの年自分自身で恥じない月日を一年送った例ためしがあるだろうか。悔いない一日があつたろうか。

なにか、やるそばから、人間はすぐ悔いる者らしい。生涯の妻を持つことにおいてさえ、男の大多数は悔いて及ばない悔いを皆ひきずっている。女が悔いるのはまだ恕ゆるせる、とこ

ろが、女の愚痴はあまり聞えないが、男の愚痴がしばしば聞える。勇壮活潑なことばをもつて、うちの女房を穿き捨て下駄のようになっているのである。泣いていうよりも悲壮で醜い。

まだ妻はないが、武蔵にも通有性の悔いがある、煩惱がある、彼はすでに、この家を訪ねて来たことを後悔するのだった。

（おれにはまだ、縁を恃む^{たの}氣持が失せない。自力だ、一人だと、常に誠め^{いまし}ながら、ふと人に依りかかる。……馬鹿だ、浅慮^{あさはか}だ、おれはまだ成っていない）

慚愧^{ざんき}すると、その慚愧している自分のすがたがまた、いとど醜^{みにく}しく思われて、武蔵はよけいに自分への恥に打たれた。

「そうだ、書いておこう」

なにを思いついたか、彼は常住坐臥、肌身を離さずに持ち歩いている武者修行風呂敷を解きはじめた。

——その頃、この家の門の外に立つて、ほとほと、そこを叩いている旅扮装^{たびよそお}いの老^と婆^{しより}があつた。

四

半紙を四つ折にかさねて綴じた彼の雑記帖なのである。武蔵はそれを、旅包みの中から出して、早速、硯箱^{すずりばこ}をひきよせた。

それには、彼が漂泊のあいだに拾った感想だの、禅語だの、地理の覚えだの、自誠^{じかい}のこ
とばだの、また、ところどころには幼稚な写生画なども書いてあった。

「……………」

筆を持つて、彼は余白を見つめていた。百八つの鐘はまだ遠く近く鳴りつづけている。

われ何事にも悔いまじ

武蔵は、そう書いた。

自己の弱点を見出すごとに、彼は自誠のことばを一つ書いた。だが、書いただけではな
んの意味もなさない。朝暮に経^{きようもん}文のように唱えて胸へ刻みこむのでなければならない。
従つて、辞句も詩のように口で唱え易いことが必要であつた。

そのためか、彼は、苦吟して、

われ何事にも……

という修辞を、

われ事において

と書き改めた。

「われ事において悔いまじ——」

口のうちに呟いてみたが、武蔵は、まだ自分の心にぴったりしないものか、終りの文字もまた消してしまい、こう改めて、筆を投じた。

われ事において後悔せず

最初のは「悔いまじ」であつたが、それではまだ弱いと考えられたのである。「——せず」でなければならぬ——われ事において後悔せず！

「よし」

武蔵は、満足した、そして胸に誓つた。何事にも自分の為^なしたことに後悔はしないというような高い境地へまで到達するには、まだまだこの身を、この心を、不断に鍛え抜かなければ及びもない望みとは思ふのであつたが、

（必ずそこまで行き着いてみせる）

と、彼は自分の胸の遠いところへ、理想の杭^くを打って、堅く信念するのだつた。

——折ふし、うしろの障子が開いて、寒げな叔母の顔がそこを覗^{のぞ}き、

「武蔵……」

と、齒の根で呟くようにふるえを帯びた声でいう。

「虫の知らせじゃ、なんとうのう、そなたを止めておくのは気がかりと思うていたら、案のじよう、時も時、今、本位田家のお杉隠居が門をたたき、玄関に脱いであるそなたの草鞋（わらじ）を見つけて、武蔵が訪うて来たであろう、武蔵をこれへ出しやれといひ猛（たけ）つて……才才こへも聞えてくるわ、あの通りな嚴談じゃ。——武蔵、なんとしやるぞ」

「……え、お杉婆が」

耳を澄ますと、なるほど、いつも変らない切口（きりこうじょう）上と、きかない氣の隠居（しむ）の皺（しわ）がれ声が、木枯らしの洩る（も）ように響いてくる。

叔母は、もう除夜の鐘もすんで、これから若水でも汲もうという元日早々、もし忌（いま）わしい血でも見るようなことになってはと、いかにも迷惑（めいわく）そうな顔を、露骨に武蔵へ見せつけながら、

「逃げておくれ、武蔵、逃げるのがなにより無事。今——叔父様（おじさま）が応対（おうたい）して、左様な者は立ち寄った覚えはないと、ああして婆（はば）を阻（さ）んでおいでなさる程に、その間に、裏口からでも——」

追い立てて、彼の荷物や笠を自分で持ち、叔父の革足袋と、一そくの草鞋を裏口へ置いてくれた。

武蔵は、急せかれるままに、それを穿はいたが、いい難にくそうに、

「叔母御、まことにご無心ですが、茶漬を一膳食べさせてくれませんか。——実は、宵から空腹なので」

すると叔母は、

「何をいいやる、それどころの場合かいの、さ、さ、これでも持って早よう行きやれ」

白紙にのせて持つて来たのは、五つほどの切餅だった。武蔵は押しいただいて、

「ご機嫌よう……」

凍いてついている氷の道を踏んで、もう元日ではあるが、まだ真つ暗な天地の中へ、毛を撈むしられた寒鳥かんどりのように、悄しお々と出て行つた。

五

髪の毛も、指の爪も、みな凍ってしまうかと思われた。ただ自分の吐く息のみが白く見

え、その息もまた、口のまわりの生ぶ毛にたかるとすぐ霜に化ると疑われるほど冷たいのである。

「寒い」

彼は思わず口に出していった。八寒の地獄といえどもかほどではあるまいに、どうしてこう寒く感じるのか——今朝に限って。

（身よりも、心がさむいせいだろう）

武蔵は、自分の間に自分で答えてみる。

そしてなお思うには、

（そもそもおれは未練者だ。ともすると、人肌を恋う嬰兒あかごのような、乳くさい感傷に恋々と心を揺すられ、孤独をさびしがり、暖かそうな人の家庭の灯が羨ましくなる。なんたるさもしい心だろう。なぜ、自分に与えられたこの孤独と漂泊に、感謝を持ち、理想を持ち、誇りを持たないか）

痛いほど凍こえていた彼の足は、指先まで熱くなっていた。闇に吐く白い息も、湯気のよ
うな迫力で寒さを押し退のけている。

（——理想のない漂泊者、感謝のない孤独、それは乞食の生涯だ。西さいぎょう行法師と乞食と

のちがいは、心にそれがあるかないかの違いでしかない)

みしつと、足の裏から白い光が走った。見ると、薄^{うす}氷^{こおり}を踏んでいるのだった。いつの間にか、彼は河原に降り、加^{かも}茂川の東岸を歩いていたのである。

水も空も、まだ暗澹として、夜明けの気ぶりも見えない。流れのふちだと気がつく、急に足が出なくなった。今までは鼻を^{つま}抓まれても分らないような厚ぼったい闇を、吉田山の下からここまでなんの苦もなく歩いて来たのであったが――

「そうだ、火でも焚^たいて」

堤^{どて}の蔭へ寄つて、武蔵は、そこらの枯れ枝や木片^{きぎ}れや、燃えそうな物をあつめた。燧^{ひうち}打石^{いし}を磨^すつて、小さな炎とするまでには、実に克明な丹精と辛抱^いが要^いるのだつた。

やつと、枯れ草に炎がついた。その上へ、積木細工のように、大事に燃える物を組んでゆく。或る火力にまで達すると、急に育ち上がった炎は、こんどは風を呼び、火を作った人間へ向つて、ぐわうつと顔でも焼きそうに背伸びしてかかってくる。

ふところから餅を出して、武蔵は、それを焚^{たき}火であぶった。焦^{ふく}げて、ぷーと膨らむ餅を見ていると、またしても、彼は少年の頃の正月を思い出し、家なき子の感傷が、泡つづみたいに、心のうえで明滅する。

「……………」

塩気もない、甘味もない、ただ餅だけの味だった。しかしこの餅の中に、彼は世間というものの味を噛みしめるのだった。

「……おれの正月だ」

焚火の炎に面を焼きながら、餅を頬張っている彼の顔には、何か急に独りでおかしくなったような笑靨えくぼが二つ浮いていた。

「いい正月だな、おれのような者にも、五つ切れの餅を授さずかったところを見ると、天は誰へも、正月だけはさせてくれるものとみえる。——屠蘇とそは満々と流れている加茂の水、門か

松どまつは東山三十六峰。どれ、身を淨きよめて、初日の出を待とうか」

流れの瀬へ寄つて、彼は帯を解いた。衣服も肌着も、すべて脱ぎすてて、どぼつと水の中へ体を沈め込んだのである。

水禽みずとりが暴れているように飛沫しぶきを立てて全身を洗い、やがて皮膚をぎゅつぎゅつと拭いているうちに、彼の背なかへ、雲を破つた暁の光がかすかに映さして来た。

——と、その時、河原に燃え残っている焚火の明りを見て、堤どてのうえに立った人影がある。これも、すがたこそ、年齢としこそ、まるでちがうが、やはり輪廻りんねにうごかされる旅の人、

本位田家のお杉隠居であつた。

針

一

いたわ、小僧めが。

お杉婆は、胸のうちで、こう高く喚わめいた。

欣うれしさやら、恐おそしさやら、張りつめていた心がみだれて、

「おのれつ」

と、焦あせ心りたがる気持と、がくがくわななく体力とが、とたんに一致を欠いてしまつて、思おもわず堤どての小松の蔭へ、ぺたつと坐つてしまつたのである。

「欣めぐしや、やつと巡めぐり会あうたぞやい。これも、つい先のころ、住吉の浦で不慮の死を遂げなされた権ごん叔父の霊のひきあわせでがなあろう」

婆は、その権叔父の骨の一片と髪かみの毛とを、今も、腰ゆわに結ゆいつけてある旅包みの中へ納

め、常に肌身につけて歩きながら、

（権叔父よ、たといおぬしは死のうとも、わし一人とは思わぬぞよ、武蔵とお通を成敗せぬうちは、故郷くにの土は誓つて踏まぬと、ともども、旅へ出た二人じゃほどの。——おぬしは死んでも、おぬしの魂魄こんぱくはこの婆の肩から離れはなさるまい。婆もまた、いつもおぬしと二人連れで歩いているものと思うて、きつと、武蔵を討たいでは措おかぬから、見ていなされや、草葉の蔭から——）

婆は、朝念暮念、そのことばをいい暮して——といつてもまだ——権叔父が骨になつてから七日ほどにしかないが、その一心を自分も骨になるまでは、失うことではないと胆きもえに抉えぐつて、さて、この数日というものを、まるで鬼子母神きしもじんのような血相になり、遂に、武蔵のすがたを突き止めて来たのであつた。

——ちらつと、最初に耳にした手がかりは、吉岡清十郎と武蔵との間に、近日、試合があるらしいという巷ちまたのうわさ。

次にはきのうの夕方——五条大橋の大晦日おおみそかの人だかりのなかで、その吉岡門の者が、三、四名して打ち建てて去つた高札の表である。

あの文字を、お杉は、どんなに興奮した眼をもつて何度も読んだことか。

(大それた武蔵めがよ、身のほど知らずも、ここまで来ればよい愛嬌。吉岡に討たれることは知れているが、それでは、国許へ公言して出て来たこの婆が面目がないわいの。どうあろうと、吉岡に討たるる前に、武蔵は、婆が手につけ、あの洩たれ首の髻つかんで、故郷の衆に見せにやならぬ)

躍起となった。

心には祖先神仏の加護をいのり、身には権叔父の白骨を結いつけて、

(やわか草木を分けても捜し出さずにおこうか)

と、またぞろ、松尾要人の門を叩き、そこでさんざん毒づいたり詮議立てした結果が、却つて、がっかりしたものを負わされて、今——この二条河原の堤まで戻りかけて来たところであつた。

ボウと河原の下が明るいので、お菰が火でも焚いているのかと思ひながら、なんの気もなく堤に立つて見たのである。すると、燃え残っている焚火から十間ほど先の水際に、素裸の男が、この寒さも知らないように、水浴びから上がった。逞しい筋肉を拭いている。

(武蔵！)

と見極めると、婆は、腰をついたきりしばらく立てなかつた。相手は今、素裸でいるの

だ。駈け寄つて行つて斬りつけるにはまたとない機会であるのに、この老婆のしなびている心臓は、それをなし得ないで、年齢とともに複雑になつてゐる感情の昂^{たか}ぶりが先に立ち、もう武蔵の首でも取つたように、

「うれしや、神の御加護か、御^{みほ}仏のひきあわせか、ここで武蔵めに会うとは、よも凡^{ただご}事^とであらうはずはない。日頃の信心が通じて、婆の手で、神仏が仇を討たせてたものじゃ」

と、掌^てをあわせて、幾度も、空を拝しているというような、いとも悠々たる老婆らしいところも、この老婆にはあるのだつた。

二

河原の石の一つ一つが、暁の光に濡れて浮きあがってくる。

沐浴^{もくよく}した五体に、衣服を着、かたく締めた帯に、大小をたばさむと、武蔵は、膝まずいて、天地へ黙然^{かしら}と頭を下げていた。

お杉婆は、

「今つ」

と、気は逸^{はや}つたが、武蔵がその時、河原の水溜^{みずたま}りを跳びこえ、急にかなたへあゆみ出したため、遠方から声をかけては逃がすおそれがあると、あわてて同じ方角に向つて堤の上を歩み出した。

白々と、元日の町の屋根や橋は、初霞の底から和やかな線^{なご}をぼかしはじめたが、まだ空には星がよく見えるし、東山一帯のふところは、墨のような暁^{ぎようあん}闇^{あん}だった。

三条飯橋の下をくぐると、武蔵は河原から堤^{どて}の上へ姿を現わし、大股に歩き出している。婆は、

(武蔵待とう)

何度か、呼ぼうとしては、相手の隙とか、距離とか、さまざまな条件を老婆^{としより}らしく緻^ち密^{みつ}に考え、数町の間、引き摺^{ひず}られるように歩いてしまった。

武蔵は知っていた。

先ほどから疾^とくそれと知っていたので、彼はわざと振向かなかった。振向いて、眼と眼が、かち合ったら、その途端、お杉が選ぶ行動は分っているし、老婆^{としより}とはいえ、切れ物と死に物狂いで来る以上、こちらが怪我^{けが}をしない程度のあしらいは酬^{むく}いなければならない。

（恐い相手だ）

と、武蔵は心から思うのだった。

村にいたころのたけぞうなら、すぐ撲り倒して撃退するか、血へどを吐かせて伸ばしてしまふであらう。だが今では、そういう気にはなれない。

恨みはこちらの方にこそあるので、婆が自分を七生までの仇かのように狙っているのは、まったく、感情と誤解のこぐらかりに因つくので、それを解けばわかるのだ。しかし、自分の口からいったのでは、百万遍説いたにせよ、

（そうか、そうじゃったか）

と、あの婆が、あれほど瘤にして持つている宿怨をわすれて、水にながすはずはない。

——だが、いかなお杉婆でも、息子の又八自身の口から、関ヶ原へ出かけた前後の二人の事情と、すべてのいきさつを懇ろに諭されたら、それでもなお、自分を本位田家の仇とはよいきれまい、また息子の嫁を横奪りして逃げた曲者ともまさか怨むまい。

（よい折りだ、その又八に、会わせてやろう。——五条まで行けば、今朝は、彼が先へ来て待つているかも知れない）

武蔵は、自分の言伝てした約束が、彼に通じているものと信じていた。従って、五条大

橋まで行けば、この老婆とあの息子とが会って、その間に誤解されている自分の立場も、そこで初めて、じゅんじゅん諄々と説いて氷解させることが出来ようと考えている。

その五条大橋のたもとは、もうすぐそこに近づいていた。小松殿のしょうびえん薔薇園だの平相へいしよ国入道うごくにゆうどうの館だのが、いらか藁をならべていた平家繁昌の頃から、このあたりは民家も人通りも

多い中心で、戦国以後もその旧態を残しているが、まだどこの家も戸は開いていなかった。

おおみそか大晦日の宵のうちに、きれいに掃いたほうきめ箒目が、まだ眠っている家々の門口に、その

まま浮いて、ほのかに白んでくる元日の光を徐々に迎えている。

武蔵の大きな足痕あしあとを、お杉婆は後から見た。

足痕さえ憎かった。

もう橋の袂たもとまでは、一町か、半町。

「——武蔵っ！」

お杉はさげんだ。喉の痰たんを切ったような声である。両手に拳をこしらえて、首を前へ突き出しながら駈け寄って行った。

「そこへ行く人^{ひと}非人^{でなし}よツ、耳は持たぬのかッ」

当然、武蔵にそれが聞えていないわけではない。

老いさらばうた老^{としより}婆とはいえ、死を覚悟した聲音もすさまじい。

背を向けたまま、武蔵は歩いていたが、

(はて、困ったもの)

どうしたものかの思案が咄嗟に出なかつたのである。

その間に、

「やれ、お待ちやれ」

婆は、武蔵の前へ廻つた。

前へ廻つてからお杉婆は、尖^{とが}つた肩や薄い肋骨^{あばら}を波のように喘^{あえ}がせて、喘息^{ぜんそく}でも起つ

た時のように、しばらく、口に唾^{つば}を溜^ためて息を休ませているのだつた。

やむを得ない顔して、武蔵も遂にことばをかけた。

「おお、本位田のお婆ば殿か、めずらしいところで」

「ても、厚^{あつ}顔^かましい。めずらしやとは、わしの方でいうことば。清^{きよ}水^{みづ}の三^{さん}年^{ねん}坂^{ざか}では、

まんまと、討ち洩らしたが、きようこそ、その素首すこうべは、この婆がもううたぞ」

軍鶏しやものように細ツこい皺首しわくびが、背の高い武蔵へ向つて伸び上がっていうのだった。逞しい豪傑が憤怒ふんどするよりも、この婆が根の剥むけている前歯を吹き飛ばしそうにして叫ぶ声のほうが、武蔵は、怖い気持がした。

その恐い気持のうちには、少年時分の先入主が多分にあつた。又八も青洩あおはなを垂らし、武蔵もまだ八ツか九ツ頃の悪戯いたずらざかりの当時、村の桑畑や本位田家の台所などで、この老婆としよりに、

(童ツわっぱ)と一声呶鳴へそてられると臍へそがもんどり打つたように、縮み上がって逃げたものである。

その雷声かみなりごえが、武蔵の頭のしんに今もどこかに沁しみこんでいるらしいのである。もとより子供の頃から、好かない婆、つむじ曲りな婆、また、関ヶ原から村へ帰つた後にうけた仕打しうちの憎さは、いちいち骨髓こつずいに徹しているが、由来この婆には、勝てないものという幼い時からの癖がついているので、時経ときたてば、あの時の無念さも、さほどではなくなつていた。

それに反して、お杉は、幼少の時から見ている悪戯いたずら小僧のたけぞうがどうしても頭から離れない。しらくも頭で洩垂れはなたの畸形児きけいじみたいに手脚ばかりヒョロ長かつた嬰兒あかごの時か

ら知っている武蔵である。——自分が老いて、彼が成長した事実は認めても、昔から餓鬼あつかいに見ていた観念は毫も取れない。

その餓鬼に、こうされると思うと、お杉は、郷土の者に対する大義名分ばかりでなく、感情だけでも、このまま土に化ることではできなかった。武蔵を墓場へ抱きこんで行こうということは、生きている今の最大な望みとなった。

「もう、改めて、何もいうことはないぞえ。尋常に、首渡すか、婆が一念の刃を、受けてみるか、武蔵ツ、支度しやいつ」

婆は、そういつて、手に唾するの^{つば}か、左手の指を唇へちよつと当て、短い脇差の柄へその手をかけてつめ寄つた。

四

龍車^{りゆうしゃ}にむかう蠅螂^{とうろう}の斧^{おの}ということばがある。お杉隠居のように痩せこけているかまきりという秋の虫が、鎌に似た細い脛^{すね}をカチャカチャ鳴らして、人間へ斬つてかかる態^{さま}を嘲^{わら}つていうことばなのである。

お杉の眼つきは、そのかまきりの血相に似ていた。いや、皮膚の色、姿までが、そっくりだった。

ぬつと突き立つて、婆のつめ寄る足もとを、児戯のように見ている武蔵の肩や胸は、さながらそれを嘲^{わら}う鉄の龍車^{がね}とっていい。

おかしさを感じてくるところであるが、しかし武蔵は、笑えなかった。

ふと、慄^{あわ}れになったのである。かえって、この敵に、^{いたわ}労りたいようないい知れぬ同情を持たせられて、

「お婆、お婆、まあ待ちなさい」

かろく隠居の肱^{ひじ}を抑えた。

「な、なんじやと」

お杉は、持った刀の柄^{つか}を、唇の外へ出ている前歯とともに、わなわなさせて、

「ひ、卑怯者めが、この隠居は、おぬしなどより、四十もよけいに門松を迎えているのじやぞ。青くさい口先で騙^{たばか}ろうとて、なんで騙られよう。むだ口は聞く要もない。討たれてしまわれ」

もう、婆の皮膚は、土気いろをして、語氣に必死なものがこもっている。

武蔵は、うなずいて、

「わかる、わかる、おばばの気持はよくわかる。さすがは、新免宗貫しんめんむねつらの家中かちゆうで重きをなした本位田家の後家ごけ殿だけのものはある」

「ひかえなされ、小伴こせがれ。孫のようなおぬしなどからおだてられて、欣ぶよろこ婆ではないわいの」

「そうひがむのが老婆としよりの瑕きず、武蔵のことばもすこし聞いてほしい」

「遺言か」

「いや、いい訳じや」

「未練なっ」

燃えあがつて、お杉は低い体をつま先で伸び出すように、

「聞かぬ聞かぬ、この期ごになって、いい訳など聞く耳は持たぬ」

「では、しばしの間、その刃を、武蔵にあずけておきなさい。さすれば、やがて五条大橋たもとの袂たもとへ、又八が来合あわそうほどに、すべてのことおのずかも自らわかつてまいろう」

「又八が？ ……」

「されば、去年の春ごろから、又八へ言伝ことづてがしてあるのです」

「何と？——」

「今朝、ここで会おうと」

「嘘をいやいつ」

お杉は一喝^{かつ}して首を振った。又八とそんな約束があるくらいなら、当然、この間うち大坂表で彼と会った時に、自分へ話しておくはずである。又八は武蔵の言伝てなどを受けてはいない。お杉は、その一言だけで、武蔵のことばを皆嘘と決めてかかった。

「みぐるしいぞ、武蔵、おぬしも無二斎の子であるが、死ぬ時は、潔^{いさぎよ}う死ぬものと、おぬしの父^{てておや}親は子に教えてはおかなんだか。ことば遊びは、無用。婆が一念、神仏も御加護の刃^{やいば}、受けらるるものなら受けてみやい」

肱^{ひじ}をちぢめて、武蔵の手を外^{はず}すと、お杉隠居は、ふいに、

「南無っ」

と、小太刀を抜いて両手に持ち、武蔵の胸もとへ向つてまっすぐに突いてきた。

武蔵が、空^{くう}を与えて、

「おばば、落着け」

平手でかろく背を打つと、

「大慈、大悲」

お杉は、躍起となつて、振向きざま、ふた声三声、
「南無、かんぜおん菩薩ぼさつ、南無、かんぜおん菩薩ッ」

烈しい太刀を打ち振つた。

その手頸てくびをつかんで、武蔵は、外身そとみにひき寄せ、

「お婆おばば、後でくたびれるぞ。……サ、すぐそこじゃ、五条大橋まで、ともかく、拙者に
従ついて歩いて来るがよい」

捻ねじ取られた自分の腕の肩かたごしに、お杉は、きつと白い眼を武蔵に向けた。——そして
唾つばでも吐くように口をすぼめたと思うと、

「ふッつ！」

と、頬に溜めていた息を鳴らした。

「あっ……」

武蔵は、婆の体を突き放し、片手を左の眼に当てて飛びのいた。

五

ひとみが何かで焼かれたように熱かった。火の塵でも入ったように痛むのである。

武蔵は、^{まぶた}瞼の上を押えていた手を放してみた。手には血しおもっていない。——しかし、左の眼は、開くことも出来なかった。

お杉は、相手の身体に^{からだ}そうした乱れを見つけると、ひどく勝ち誇って、

「南無、かんぜおん菩薩」

と、隙^すかさず、ふた太刀、三太刀斬りつけて行つた。

いささか慌^{あわ}て気味に、武蔵は身を避けて斜めに反^そつた。その時、お杉の太刀が彼の袖裏を透^{とお}して、二の腕の肱^{ひじ}の辺をさつと掠^{かす}めた。綻^{ほころ}びた袂^{たもと}の白い裏地へ血しおが朱^{あか}く滲^{にじ}んで見えた。

「討つたッ」

狂喜しながら、婆は小太刀をやたらに打ち揮^{ふる}つた。根の生えている大木の幹でも伐^きつているようなつもりで、相手が活動しないでいることは考慮に入れないのである。一念にただ清水寺の観^{かん}世^ぜ音^{おん}菩^ぼ薩^{さつ}の名を地へ呼び下^{おろ}して、

「南無、南無」

と、うるさく唱えながら、武蔵の前後を駆け廻るのであった。

武蔵は、それに応じて、ただ体を移しているだけだった。しかし、片方の眼は、眼つぶしを食ったように烈しく痛むし、左の脇ひじは、かすり傷ではあるが、そこから滴したたり落ちる血しおに袂が染まるほどだった。

（不覚！）

と気のついた時が、もうその不覚を身に受けていた時だったのである。彼として、こういう先手を先に取りられて、手傷まで負った例ためしは今までになかったことだろう。——けれど、これは勝負というものではない、なぜならば、武蔵には全然この老婆に対して闘志がないからである。最初から、勝つことも敗けることも考えていなかったに違いない。至って体も敏捷でないこの老婆の刃向いなどは、彼の意識にも入らないのが当然でもあった。

しかし、それがそもそも不覚というものではあるまいか。兵法の大乗的な見地から観れば、これは明らかに武蔵の敗れやぶであり、武蔵の未熟さを、見事にお杉婆の信仰心と切っ先が、暴露して見せたものといつて差しかえなからう。

自身、その不用意を、武蔵も、はっと気づいて、

あやま
（過った！）

同時に彼は全力を出して、なおも図に乗って来るお杉の肩を、とんと一つ、平手ではたたいた。

「あつ」

四ツ這いになったお杉の手を離れて、刀は遠く飛んでいた。

武蔵は、それを拾って左の手に持ち、右の手で、起きかけている婆の体を横ざまに抱きあげた。

「ええ、口惜しい」

亀のように、お杉は、武蔵の脇の下で泳ぎながらさげんだ。

「神もないか、仏もないか。みすみす敵へかたき一太刀つけながら……。ええ、どうしよう、武蔵、この上は、恥を掻かせずに、首を討て、さあ、婆の首を討て」

武蔵は、口を結んだきり、ただ黙々と大股に歩き出した。

絞り出すようなしやがれ声で、その間、お杉婆はいいつづけている。

「こうなることも、武運じや、天命じや、神のお旨むねを思えば、なんの未練むねがあらうぞ。――権叔父も旅で死に、婆も返り討ちになったと聞けば、あの又八も、奮ふるい起って、きつと、仇を討とうという気になるだろう。婆の死は、決して犬死にはならぬ。かえって、あの子

のためにはよい藥じや。武蔵つ、はよう婆の命を奪れ。……どこへ行くのじや？……死に恥搔かす氣か、はよう首を討てつ」

六

武蔵は耳もかさなかつた。

婆のからだを横に抱えて、五条大橋のそばまで来ると、

(どこへ置いたものか)

と、お杉の身の処置を考えるように、辺りを眺め廻していたが、

「そうだ……」

河原へ下りて、その橋杭はしぐいに繋つないであつた河舟の底へ、お杉のからだをそつと卸おろし、

「お婆ば、ここで辛抱しておるがよい。——やがてそのうちに、又八がやって来るだろうから」

「な、なにするのじや」

隠居は、武蔵の手や、辺りの苦とまを刎はね退けて、

「又八など、ここへ来るはずはない。オオ、察するところ、われはこの婆を、ただ返り討ちにしただけでは腹がいえず、五条の人通りへ曝さらし物にし、わしへ生き恥掻かせてから殺す気じゃの」

「まあ、なんどでも、思っているがよい。そのうちにわかる」

「討てっ」

「ははははは」

「何がおかしいぞよ。この婆の細首一つ、ばさりと落すことが出来ぬのか」

「出来ない」

「なんじやと」

婆は、武蔵の手へ咬かみついた。やむを得ぬ手段として、武蔵が、婆の体を船ふな桁げたへ縛りつけようとするからだった。

武蔵は自分の腕を、存分に婆の口へ咬かませておきながら、ゆるゆると婆の体を縛むすってしまつた。

抜ぬ刀きみのまま提さげて来た脇差さやは、鞘さやへおさめて、婆の腰へ元のようにもどして与え、そして立ち去ろうとすると、

「——武蔵ッ、武蔵ッ、汝^われは武士の道^{みち}を知らぬのかッ、知らずば、教えてやろう。まいちど、ここへ寄^よつて来^こうッ」

「——後^ごで」

一顧^{ひと}したまま武蔵は、堤^{どて}へ足をかけたが、まだうしろで、お杉が呶^う号^{ごう}して止まないので、戻^{もど}つて行^いつて、婆^ばの上^{うへ}へ何枚^{なんまい}も苦^{くる}をかぶせた。

ちようどその時、東山の肩^{かた}に、のつと大きな太陽^{たいやう}が真^まつ赤^せな焰^{えん}の環^わの端^はを見せていた。ことしの第一^{だいいち}日の日輪^{にっりん}だつた。

「……………」

五条大橋^{ごじょうだいきし}の前に立^たつて、武蔵は恍惚^{くわうくわう}と見^みとれていた。あかあかと、腹^{はら}の底^{そこ}まで陽^ひの光^{ひかり}が映^さしこむように思^{おも}えた。

一年^{いちねん}のうちの小我^{せうが}な狭^{せま}い考^{こう}えの中に湧^よく愚痴^{ぐし}の虫^{むし}は、この雄大^{ゆうだい}な光^{ひかり}の前に、影^{かげ}をひそめてただ清^{すがすが}々^{ささ}しい。生^なきてい^いるとい^いう欣^{よろこ}び^こだけでも武蔵^{ぶざう}は胸^{むね}がい^いっぱい^いにな^なつた。

「しかも、おれは若^{わか}い！」

五^いツ切^きれの餅^{もち}の力^{ちから}は、踵^{かかと}にまで充^{じゅう}溢^{いつ}して^いた。彼^{かれ}は、踵^{かかと}をめぐらして、

「まだ来^こてい^いないよう^{よう}だな……又^{また}八^{はち}は」

と、橋の上を見まわした。そしてふと、

「あ？ ……」

と、^{つぶや}呟いたが、そこに自分より先へ来て待つていたものは、又八でも他^{ほか}の人間でもなかった。

植田良平以下の吉岡門下が、きのうここに建てて去った例の高札である。

——場所は蓮台寺野。

——日は九日の卯の下刻

「……………」

武蔵は顔を寄せて、生々しいその新^{あらいた}板と墨のにじみを凝視した。文字を読んでいるだけで、彼のからだは針鼠のように闘志と血に膨^{ふく}らんで丸くなった。

「……あ痛、ああ痛い」

武蔵は、またしても、左の眼の激痛に堪えかねて、思わず^{まぶた}瞼へ手を当てたが、ふと俯^{うつむ}向けた顎^{あご}の下に、一本の針を見出してぎよつとした。よく見ると、針は、着物の襟^{えり}や袂^{たもと}に、霜ばしらのように刺さっていて、きらきらと光るのが、四本も五本もすぐ眼にとまった。

七

「あ……これだ」

その一本の針を抜いて、武蔵はつぶさに検^{あらた}めてみた。針の寸法は、ふつうの縫^{ぬい}針と変らないし、太さも同様な物であるが、この針には、糸をとおす針穴がない。そしてまた、針の身にも丸みがなくて、三角であつた。

「おばば奴^め」

武蔵は、河原をのぞいて、こう慄^{りつぜん}然とつぶやいた。

「これは、話に聞いたことのある吹針というものではないか。あのおばばに、こんな隠^{かく}し業^{わざ}があらうとは夢にも思わなかつたが。……ああ、危^{あや}ういことだつた」

彼は、好奇心とつよい知識慾に燃えて、その針を一つ一つ手に納め、改めて、自分の襟の中へ、抜けないように刺し込んだ。

他日の研究の資料とするつもりなのであろう。彼のまだ狭い体験の範囲で聞いているところによると、一般の兵法者のあいだでも、吹針という技術があるという説と、ないと主張する説とがわかれていた。

あるという説をとる者の弁によると、それは非常に古い伝統を持っている一種の護身術で、漢土から帰化した織部おりべの機女はためや縫工女ぬいめたちが、戯れたわむにしていた技法が進んで、武術にまで利用されるようになり、独立した武器とはならないが、攻撃法の前の奇手として、足利時代しかがにまで、吹針というものは、たしかに用いられたものだ、勿体をつけていう。ない——と反対する者は、

（ばかなことをいつては困る。武芸者が、そんな兒戯に類したもののあるなしを論じるだけでも恥かしい）

と、兵法の正道論に拠よつて、

（漢土から来た織女おりめや縫工女ぬいめが、そんなことを遊戲にやったかどうかは知らんが、遊戲はどこまでも遊戲で、武術ではない。第一、人間の口中には、唾液だえきというものがあって、熱い、冷たい、酢すい、辛い、というような刺激は程よく飽和するが、針の先を、痛くないように含んでいることはできまい）

すると、一方は、

（ところが、それができるのだ。もちろん、修練の功だが、何本も唾液につつんで口にふくみ、それを、微妙な息と舌の先で、敵のひとみへ吹くことができる）

と主張する。

それに対して、反対者は、よしんば出来たところで、針の力である、人間の五体のうち、ただ、眼だけが攻撃の焦点ではないか、その眼へ針を吹いても、白眼しろめの部分ではなんの効もない。ひとみ眸の真ん中を刺したら、初めて、敵を盲目にすることが出来るだろうが、それにしても、致命的なものではない。そんな婦女子のする小技こわざが、どうして発達するいわれがあらうと反駁はんぱくする。

それに答えて、また一方は、

（だから、一般の武技のように、発達しているとは誰もいいはしない。けれど、そういう秘し技かくわざが、今も残っているのは事実だ）

という。

武蔵はかつてどこやらで、そんな論議をしているのを、そら耳に聞いたことはあつたが、勿論、彼も、そんな小技は、武道と認めない一人であつたし、実際にそういうことをする人間があらうとも思われなかった。

世間のどんなつまらない雑談のうちにも、聞く者の聞き方によっては、何か他日に役立つものが必ずあるものだということを武蔵は今、痛切に知った。

眼はしきりと痛むが、幸いに、ひとみを刺されたのではないらしい。眼がしらへ寄った白眼の一部がずきずき熱を持つて涙をにじみ出すのだった。

武蔵は、身体をなで廻した。

涙を拭く布を裂きこうとするのであったが、帯も裂けず、袂たもとも裂けず……何を裂いたらと手が迷っていた。

すると。

うしろで誰か、ぴゅつと絹を裂く音をさせた者がある。振向くと、一人の女性が、彼の様子を見ていたらしく、自分の紅あかい下着の袂を一尺ほど齒で裂いて、それを持つて彼のそばへ小走りに駆けて来たのであった。

微笑

一

朱実あけみであつた。

彼女の髪には、元日の化粧よそおいもなかった。着物もみだれ、足も素はだしなのである。

「……あつ？」

眼をみはつて、武蔵は、意味なくそう叫んだが、さて、誰なのか、覚えはあるが、急には思い出せなかった。

朱実は、そうでなかった。自分ほどではなくても、その何分の一でも、武蔵も自分を考へていてくれたことと信じている。いつの間にか、多年の間にそう自分だけで信じて来ている。

「わたしです……たけぞうさん……いいえ武蔵様」

下着の袖を裂いた紅い小布こぎれを手にしながら——怖こわ々と寄つて、

「……眼を、どうかなすつたんですか。手でこすると、なお悪くするでしょう。これでお拭きなさいませ」

武蔵は黙つて好意をうけた。紅い布あかきれで片眼を抑えると、また、朱実の顔をしげしげ見直した。

「お忘れですか？」

「……………」

「わたしを」

「……………」

「わたしを」

手^て応^{こた}えのない相手の無表情な空^{うつ}ろへ向つて、彼女の押詰めて来た切実な気持は不意なよろめきを感じた。傷だらけになった魂にも、これだけは確^{しか}とつかんでいたつもりだったものも、自分だけで作っていた幻像に過ぎなかったことを、ふと覺^{さと}ると、胸先へ、血のかたまりのようなものがこみ上げて来て、

しゅくつ……

と唇や鼻から突き出る嗚咽^{おえつ}を、両手でおおつて、肩をふるわせた。

「才オ……」

思い出したのである。

武蔵は、彼女の今の一瞬の姿に記憶をよび起した。その姿にはまだ、伊吹^{いぶき}の麓^{ふもと}で袂^{たもと}の鈴を鳴らしていた頃の、世間に傷つかない処女^{おとめ}らしさが残っていたからであらう。

いきなり、逞ましい腕が、彼女の病後のような薄い肩を抱きしめた。

「朱実さんじゃないか。——そうだ、朱実さんだ。……どうしてこんなところへ来たのか。

……どうして？ どうして？」

たたみかけていう武蔵の問は、よけいに彼女のかなしみを揺すぶった。

「もう、伊吹の家にはいないのか、お養母^{うち}さんはどうしている？」

お甲のことを訊ねると、武蔵は当然、お甲と又八の關係に思い及び、

「今も又八と一緒に住んでいるのか。——実は今朝ここへ又八が来るはずになっているのだが、おまえが代りに来たわけではあるまいな」

すべてが朱実の心を外れてゆく言葉のみであった。

武蔵の腕の中で、朱実はただ顔を横に振って泣いていた。

「又八は来ないのか。……一体どういうわけだ。わけをいえ、ただ泣いているだけでは分らないではないか」

「……来ません。……又八さんは、あの言伝^{ことづ}てを聞いていないから、ここへは来ません」
やつと、それだけをいつて、朱実^{あけみ}は濡れた顔を、武蔵の胸へ押し当てたまま痙攣^{けいれん}していた。

こういおう、ああいおう、と考えていたことは皆、泡のように、熱い血のなかで明滅しているに過ぎない。——まして、養母^{はは}の手でむごい運命へ突きのめされた——あの住吉の

浦から今日に至るまでのことなどは、どうしても口に出なかった。

もう橋の上には、うららかな初日影を浴びて、清水へ初詣はつまいりにゆく初春着はるぎの女たちや、廻礼にあるく素袍すおうや直垂衣ひたれの人影が、ちらほら通っていた。

その中から、ひよっこり、年の暮も正月もない、河かっ童ばあたまの城太郎が姿を見せた。橋の中ほどまで来て、武蔵と朱実のすがたを彼方かなたに見つけ、

「あれ？ ……お通さんかと思ったら、お通さんじゃないらしいぞ」

怪しい男女の行為でも見たように、城太郎は変な顔して足を止めた。

二

折ふし誰も見ているものがないからいいようなものの、往来の端で、胸と胸を寄せてじつと抱き合っているなんて——大人のくせに——男と女のくせに——と、城太郎はびつくりせずにはいられない。

しかも、尊敬しているお師匠さまが。

女も女だと思ふ。

彼の童心は、わけもなく高い動悸を打ち、嫉ましい気もするし、悲しい気もする。——
なにかこう焦々と腹が立つて、石でも拾って打つけてやろうかとさえ思った。

「なんだ、あの奴は、いつか又八つていう人へ、お師匠様の言伝てをたのんだ朱実じゃな
いか。お茶屋の娘だからませているんだな。いつのまにかお師匠様とあんなに仲よくなっ
たんだろ。お師匠様もお師匠様だ。……お通さんにいつけてやろ」

そこから往来の彼方此方を見まわす。欄干から橋の下を覗いて見る。——だが、お通
の姿は、まだここに見当らない。

「どうしたんだろ？」

先頃から泊っている烏丸家の邸内を出たのは、お通のほうが先ににかけているのである。
お通は今朝、武蔵とここであえるのを確信しているので、年暮のうちに、烏丸家の奥か
ら戴いたという初春の小袖を着、ゆうべは髪を洗ったり結ったりして、今朝を楽しみに寝
もやらない様子であったのだ。

そして、まだ未明のうちから、夜の白むのを待ち遠しがって、

(こうしている間に、祇園神社から清水堂へ初詣りをして、それから五条大橋へ行くとし
よう)

といい出し、城太郎が、

(じゃあ、おいらも)

と、従いて行こうとすると、ふだんはいいが、恋には邪魔物に扱われて、

(いいえ、私は武蔵様に、少し二人きりで話したいことがあるのだから、城太さんは、夜が明けてから、なるべく悠^ゆつくり五条大橋に後からお出で。——だいじょうぶ、きつと、城太さんが来るまでは、武蔵様とあそこで待っていますから)

といつて、一人で先へ出かけてしまったのである。

べつに僻^{ひが}んだり怒ったりはしないが、城太郎も決していい気持ではない。彼にも、明け暮れ共にいるお通の気持ぐらいは、もう解釈できない年頃ではない。男と女の持ち合う感動とはおよそどんなものかということとは、彼自身も、柳生の庄の旅籠屋^{はたごや}の小茶ちゃんと、馬糧^{まぐさ}小屋^{こや}の藁^{わら}の中^{うち}でなんという理^{わけ}もわからずに悶^も掻^かき合った体験がある。

その体験から割り出しても、大人のお通が泣いたり沈^{ふた}んだりしている平常^{ふだん}の様子は、彼にはただ不可解で、おかしくつて、撥^{くす}ぐつたくて、理解も同情も持てなかったが、今、武蔵の胸へすがって泣いている者が、そのお通でなくて、朱実という案外な女性であったことを眼で見ると、城太郎の分別は、俄然、憤りに似たものを持って、

（なんだ、あんな女）

と、お通の肩をもち、

（お師匠様もお師匠様だ）

わがことのように腹を立てて、その結果が、

（お通さんは何してるんだろ。お通さんにいいつけてやるぞ）

という焦躁を帯びて来ると、急に橋の上下をキョロキョロし始めたものだった。

ところが、そのお通が見当らないので、城太郎が独りでやきもきしていると、あなた彼方の男ふ女は、往來の眼を憚るはばかように、橋のたもとに近い欄干へ身の位置を移して、武蔵もその上に腕うでぐ拱みを乗せ、朱実も並んで、河原の下へ面おもてを俯うつむ向けている。

反対側の欄干に沿って、城太郎が通り抜けて行ったのも、男女ふたりの背中はずかしくなかつた。
「愚図だな、いつまで、観音様なんか拝んでるんだろ」

城太郎は呟ささやきながら、五条坂の方へ背伸びをして、待ち焦しれていた。

すると、彼の佇立たたずんでいるところから十歩ほどの距離である、幹の太い四、五本の枯柳があつた。よくこの柳には川魚かわうおを啄つみに来る白鷺しらさぎの群れを見かけるのであるが、きょうはその白鷺が一羽も影を見せていないかわりに、前髪に結った一人の若衆が、臥龍のよ

うに低く這っている老柳の幹へ寄りかかつて、じつと、何ものかを見つめていた。

三

朱実と並びあつて橋の欄へ肱を倚せていた武蔵は、朱実が懸命になつて向ける囁きへ、いちいち微かに頷いてはいるけれど、彼女が女の羞恥もすて、真実の二人になり切ろうと全能で脈搏しているほど、そのつよい低声が、武蔵の耳以上へ滲み徹っているか否かはわからなかった。

なぜならば、よく頷いてはいるくせに、彼の眸は、あらぬ方へ行っているからである。愛しあっている者同士が、ことばを奏であいながら眼を反らしているといったような——ああいう情景とはまるで違つたもので、ひと口にいえば、彼の今持っている眸は、無色無熱の火であつた。そこから一角の焦点へ向つて、かちつと烙きついたまま、眼じろぎもしないのである。

朱実には今、そういう相手の眼を怪しむ認識すら持てない。自分だけの感情の中で、独り問い答えながら突きつめては唇へ咽び出すのだつた。

「……ああ、私はもう、これであなたにみんないうことをいってしまった。秘かくしていることはなにもない」

と欄干へのせている胸を少しずつ寄せて来て、

「——関ヶ原の戦いくさから、もう五年目になるでしょう。その五年のあいだに、私という者は、今すっかり話したように、境遇も、体も変ってしまったんです」

……よよと、噉すすり泣いて、

「けれど——いいえ——私はちつとも変っていない。あなたを思っているこの気持は、みんなも変って来てはおりません。そういいきれます。わかってくれる？ ……武蔵様、その気持を……武蔵様」

「ムム」

「わかって下さいね。……恥はしので私はいいました。朱実は、あなたと初めて伊吹の下で会った時のように、もう穢けがれのない野の花ではありません。人間に流おかされて凡ただの女になってしまったつまらない女です。……けれど貞操みさおというものは体のものでしょうか。心のものでしょうか。体の上だけは清女でも、心がみだらな女だったら、それはもうきれいな処女おとめとはいえないのではありませんか。……私は、私はもう名は……名はいえませんが

或る者のために処女おとめではなくなりました。けれど、心は流おかされてないつもりです。ちつとも穢けがされない心を今も持っているんですの……」

「ウム、ウム」

「かあいそうだと思ってくれます？ ……。真実をささげている人へ、秘かくし事を抱いているのは辛いことです。……あなたに会ったらなんといおう。いうまいか、いおうか、同じことを幾晩も幾晩も考えぬきました。その上で、私が決心したことは、やはり貴方には、偽いつわりを持たないということでしたの。……わかつて下さる。むりもないと思つて下さいますか、それとも厭いとわしいやつだと思ひますか」

「ムム、ああ」

「ね……どつちです。考えると、わ、わたしは、く、くやしい」

欄の上へ顔を伏せて、

「ですから、もう私は、あなたに向つて、愛してくださいなどということは、厚あつかま顔しゆうていえますし……また、いえた義理でもない体ですの。——だけど武蔵様、今いったような心——処女おとめごころ——白珠のような初恋の心——それだけは失なくしません。この後、どんな生活くらしをしようとも、どんな男の巷ちまたを歩こうとも」

髪の毛の一すじ一すじがみな泣きふるえた。欄を濡らしている涙の下は、元日の明るい陽を燿々ようようと乗せて、無限の希望へかがやいて行く若水わかみずのせせらぎであつたが。

「む……うむ……」

もののあわれは頻りと武蔵の頷うなずきを誘っている。——だが、あいかわらず異様な光をおびて、あらぬ方へ吸いつけられている彼の眸なのである。

——で、その視線の先を辿たどつてみると、橋の欄と川岸とのカギ形の二線へ対して、三角形を作り得る一線が真つ直に引けてゆく。

先刻さつきから枯柳の幹に倚よりかかつて、じつと岸に立っている岸柳佐々木小次郎のすがたを、そこに見出すことが出来る。

四

父の無二斎から子供の時に、彼はこういわれたことがある。おまえはわしに似ていない、わしの眸はかくの如く黒いが、おまえの眸は茶色勝ちである。従祖父おおおじの平田ひらたし将監しょうげん様の眼は、焦茶色こげをしていて凄かつたといういい伝えだから、おまえはおそらくお祖父じいさん似

に生れたのであろう……と。

うらうらと、朝の陽を、斜面にうけているせいもあるう。それにしても武蔵の眸は、ヒビのない琥珀こはくのように澄んでいて鋭かった。

（ははあ、この男だな）

かねて聞き及ぶところの宮本武蔵という人間を、佐々木小次郎は、いま見ていた。

武蔵もまた、

（はてな、あの男は）

と、注意を怠らない。

彼より射て来るものと、こつちから迫つてゆくものとが、橋の欄と、河べりの枯柳との間で、最前から無言の裡うちに、お互いの人間の深さを測り合っていたのである。

兵法の場合でいえば——相手の器量を、剣と剣の先でじつと観澄みすましているような——阿伝あうんの息をこらしている時にも似ている。

またさらに、武蔵のほうにも、小次郎のほうにも、べつな疑惑があった。

小次郎にすれば、

（小松谷の阿弥陀堂あみだどうから連れて来て、自分が今、世話をしている朱実と、あの武蔵

と、どういふ縁故があつて、あんなに親しそくに私語ささめごとを交かわしているのか

と思ひ、それに当然、

（いやな奴だ、女たらしかもしれないぬ。朱実も朱実、おれに黙つて、どこへ行くのかと思つて後を尾行つけて来てみれば……あんな男に、泣いたりなどして）

こう不快な氣もむらむらと生睡なまつばになつて湧いて来る。

そのありありと眼に出ている反感や、武者修行同士が行きずりに持つ、自負心と自負心の反瀝てきがしあう妙な敵愾いしん心など、武蔵のひとみに顕然けんぜんと読まれるので、武蔵もおのずから、

（何者か？）

と、彼の存在を疑ひ、

（できるな、相当に）

と、押し測り、

（はて、あの眼の害意は？）

と、警戒して、

（油断のならない人間）

として、眼で見るとはなく、心で観^みつめていたので、ふたりの眸は、今、火花を出しているといつても過言でない。

年齢^{とし}は、武蔵が一つ二つ下か、小次郎のほうが下か、どっちにしても大差のない、お互いが、生意気ざかりで、兵法でも、社会のことも、政治でも、すべてが分ったつもりでいる自負心の満々としている青年なのだ。

猛獣が猛獣を見ると、すぐ唸るように、小次郎も武蔵も、なんとなく、髪の毛のそそけ立つような印象を、この初対面にうけたのである。

——そのうちに、ふと、小次郎が先に眸を横へ反^そらした。

(ふふん……)

そういったような白い蔑^{さげす}みを、武蔵は彼の横顔に見たが、心のうちでは、自分の眼——意力が——彼を遂に圧伏したと思つて、かく愉快だった。

「朱実さん」

欄^{おもて}へ面を当てて泣いている彼女の背へ、武蔵は手を加えて、訊ねた。

「誰だ？ おまえの知^{しりびと}人だろう。あれにいる若衆すがたの武者修行は。……え、誰だ、いったい？」

「……………」

小次郎の姿を、その時初めて気づいた彼女は、泣き腫^はらした顔に、明らかな狼狽^{うろた}えを走らせて、

「ア……あの人が」

「あれは誰だ」

「あの……あの……」

と朱実^{くちごも}は口籠^{くちごも}った。

五

「見事な太刀を背に負って、これ見よがしの伊達^{だて}な装^{よそお}い、よほど兵法自慢の者らしいが……一体朱実さんとあの男とは、どういう仲の知りあいなのか」

「べつに……なにも深い知りあいないんですけれど」

「知っていることはいる人なのだな」

「ええ」

武蔵に誤解されることを惧おそれるように、朱実は、はつきりいった。

「いつぞや、小松谷の阿弥陀堂あみだどうで、どこかの狛犬かりいぬに腕を咬かまれた時、あまり血が出て止まらないので、あの方の泊っている宿へ行つて医者を呼び、それからつい三、四日、お世話になつてゐるんですの」

「では、ひとつ家に住んでいる者だったか」

「住んでいるといつても……べつに、なんでもないんですけど」

朱実は言葉を強めていう。

武蔵はべつに、なんでもあるような意味に訊いているわけではない。それを朱実は、ひとりでべつな意味にはきちがえてゐるのだつた。

「——なるほど、では詳しいことは知るまいが、あの者の姓名ぐらひは聞いておろうが」

「ええ……岸柳とも呼び、本名は佐々木小次郎とかいいました」

「岸柳」

これは初耳ではない、有名というほどではなくても、諸国の兵法者のあいだには相当知られている名である。もちろん実際の人間を見るのは今が初めてであるが、武蔵が聞き及んでいた、また想像していた佐々木岸柳は、もつと年配の男のように考えていたのに、

その案外にも若いのには彼は思いのほかな心地がした。

(……あれが、噂の)

改めて、その小次郎へ武蔵が眼を向けた時である。朱実と武蔵とがそうして囁いている様子を白い眼で見ながら、小次郎の頬へにたと笑靨が泛いた。

——武蔵もまた微笑を送った。

だが、この無言の雄弁は、しゃくそん釈尊と阿難が指に華を拈しながら微笑んだような平和な光も謎もない。

小次郎の笑靨には、複雑な皮肉と挑戦的な揶揄からかいがあつた。

武蔵の笑みにも、それを感じて刎ね返しているただけ毅然たけだけとした争気があつた。

そうした男性と男性のあいだに挟まって、朱実はなお、自分だけの気持ちを、訴えようとするのであつたが、それをいわないうちに、武蔵がいった。

「では朱実さん、おまえはあの人と、ひとまず宿へ帰ったがよろう。そのうちに会おう、……な、そのうちにまた」

「きつと来て下さいます?」

「あ、行くよ」

「宿を覚えていてください。六条御坊前の数珠屋すずやの座敷にいますから」

「ウむ。……ウむ」

単純にうなずかれたのが、物足らなかつたのだろう。朱実は欄のうえに置いている武蔵の手を奪つて、いきなり自分の袂たもとの蔭でぎゅっと握りしめながら眼に情熱をこめた。

「……きつと！ え？ ……きつと！」

突然、彼方で、腹を抱えるように哄笑した者がある。こっちへ、背を見せて歩き去つて行く佐々木小次郎だつた。

「あッはははは、わッはははは。アハハハ。アハハハ」

とんでもない馬鹿笑いをして行く者があるので、城太郎は、むつとしながら、橋の前の往来から小次郎を睨みつけていた。

——それにつけても彼は、お師匠様の武蔵がいまいましい。いつまで経つても来ないお通しやくが癪しやくにさわる。

「どしたんだろ？」

地だんだふむように、町のほうへ少し歩き出してゆくと、すぐその四ツ辻に横たわっている牛車の車の輪のあいだに、チラと、お通の白い顔が見えた。

魚紋

一

「ア、いたッ」

鬼でも見つけたように城太郎はさけんで駈けだした。

牛車の蔭に、お通はしやがみ込んでいた。

めずらしく今朝の彼女の髪や口紅には、ほのかではあるが——下手^{へた}なお化粧ではあるが——匂^{にお}わしいものがただよつていたし、小袖は烏丸家から戴いたという紅梅地に、白と緑の桃山刺繡^{ぬい}が散^ちっている初春^{はる}らしい衣^{もの}であつた。

その白い襟や、紅梅色が、車の輪に透^すいて見えたので、城太郎は牛の鼻づらを摺^すつてそばへ飛びついて行つた。

「なんだつ、こんな所に。お通さん、お通さん、なにしてんのさ」

胸を抱いてかがみ込んでいる彼女のうしろから、城太郎は、その髪やおしろいが台なし

になるのもかまわず襟くびへ抱きついて、

「——何してんのさ、何してんのさ、おいら、ずいぶん待ってしまったぜ。はやくおいでよ」

「……………」

「はやくさ、お通さん」その肩を揺すぶって、

「——武蔵様も、あそこに来てるじゃないか。見えるだろ、ほら、ここからでも。——だけど、おいら、とても癪しやくにさわってるんだ。——おいでよ！ お通さんてば！ はやく来なくちゃ駄目じゃないか」

こんどは、彼女の手くびを取って、抜けるほど引つ張り出したが、ふと、その手くびの濡れていることや、お通が顔を上げて見せないので不審を起し、

「……オヤ、……オヤ、お通さん。なにしていたのかと思ったら泣いていたのかい」

「城太さん」

「なにさ」

「武蔵様のほうから見えないように、お前も、蔭にかくれていてくださいよ。……ネ、ネ」
「なぜさ」

「なぜでも……」

「ちえッ！」

城太郎はまた、ここでも腹が立つて、その鬱憤うつぶんのやり場がないように、

「だから女つて奴は嫌ンなつちやうぜ。こんなわけの分らねえことつてあるだらか。——武蔵様に会いたい会いたいといつてあんなに泣いたり捜したりしていたくせに、今朝になつたら急に、こんな所へ隠れて、おいらにまで隠れていろつて……。けッ、けッ、おかしくつて、笑えもしねえや」

彼のことばを鞭むちのように浴びているお通であつた。紅く腫はれている眼をそつと上げて、「城太さん、城太さん……そういわないでください。……たのむから、そんなにお前までわたしを虐いじめないで」

「どこへ、おいらが、お通さんを虐いじめてるかい」

「黙つていてね……じつと私と一緒に屈かがんでいてください」

「いやだい、牛の糞くそがそこにあるじゃないか。元日から泣いてなどいると、鴉からすが笑わあ」

「……なんでもいいの。もう……もうわたしは」

「笑つてやろう。先刻さつき、彼方むこうへ行つた若衆のように、おいらも、初笑いに手をたたいて笑

つてやるぜ。……いいかいお通さん」

「おわらい、たくさん」

「笑えねえや……」

鼻汁^{はな}をこすりながら、むしろ彼は泣きたそうな顔をした。

「アア、わかった。お通さんは、あそこで武蔵様がよその女と、先刻からあんなこととして話しているんで、嫉妬^{やきもち}をやいているんだね」

「……そ、そうじゃない、そんなことじゃないけれど」

「そうだよ、そうだよ。……だからおいらも癪^{しやく}にさわってるんじゃないか、だからよけいに、お通さんが出て行かなければ駄目じゃないか。わからずやだなあ」

二

いくらお通が強情に屈みこんでいようとしても、城太郎の力で無理やりに手くびを引っ張るのにはかなわなかった。

「痛い。……城太さん、後生だからそんな酷^{ひど}いことをしないでよ。……私をわからずやだ

とおいだけれど、城太さんこそ、私の氣持なんかわからないのです」

「わかつてるよ、嫉妬やきもちをやいてるんじゃないか」

「そんな……そんなことだけではありません……私の今の氣持というものは」

「いいからお出いでッてば」

牛車の蔭から、お通のからだはズルズル地を摺すつてうごき出した。綱曳きでもするよう
に踏んばりながら、城太郎はまた彼方かなたへ伸び上がつて、

「アツ、もういないよ、朱実はもう去いつてしまった」

「朱実。——朱実つて、誰のこと？」

「今、あそこで、武蔵様とならんでいた女さ。……あつ、武蔵様も歩き出した、早く来な
いと、行つてしまふ」

もう女などに関かまつていられないとばかりに、城太郎が走りかけると、

「待つてよ、城太さん」

お通も、自分で立つた。

そこで彼女はもういちど、五条大橋の袂たもとを見直した。朱実がまだその辺にいるかいな
かを確かめるもののように細心な眼まなこで見まわしているのだった。

怖ろしい敵の影が去ったように、お通は眉をひらいて、ほっとした様子をしてまた、慌あわてて牛車の蔭へ寄ると、泣き腫はらした脛まふたを袖口で拭いたり、髪を撫でつけたりして、身じまいを整えていた。

城太郎は、急せいて、

「早くしなよ、お通さん。——武蔵様は河原へ降りて行ったようだぜ、お洒落しやれなんかしくてもいいじゃないか」

「河原へ」

「あ、河原へ。——なにしに降りて行ったのだろう」

ふたりは、姿をそろえて、橋の袂へすぐ駆けて行った。

吉岡方で建てたその高札には、もう往来の者の首がたかっていた。声を出して読みあげている者がある。また、聞きつけない宮本武蔵という者を、何者であろうと、辺りの人々に訊たずねている者がある。

「ア、ごめん」

城太郎は、その人々の体をかすめて、橋の欄から河原の下をのぞいた。

お通も武蔵のすがたを、すぐその下に見られるものとはばかり思っていた。

実に、わずかな間であつたが、武蔵はもうその辺にいなかったのである。

では何処に？

——というと、武蔵はたつた今、朱実の手を振りきつて、無理に彼女を追い返すと、もう本位田又八をこの橋上に待つていたところであるはずもないし——吉岡方から掲示した高札の表も読んだし——ほかに待つべき用事もないので、ヒラリと堤を降りて、橋杭のそばの苦舟へ駈け寄つていた。

苦の下には、お杉隠居が、舟楫に身をしばらく先刻からもがいていたのである。

「お婆、残念だが、又八は来ないぞ。——わしもぜひそのうちにゆき会つて、あの気の

弱い男を励ましてくれるつもりだが、婆も探し出して、親子、達者でお暮らしやれ、——

——そのほうが、この武蔵の首を狙つたりすることより、どんなに、御先祖孝行かしれぬぞ」

小柄を持つて、その手を苦の下へさし入れた。お杉の身を縛った縄目を切つたのである。

「ええ、耳うるさい、ませた口をきく小倅わいの。要らざるおセツかいというよりは、

婆を討つか、討たれるか、武蔵つ、はよう埒をあけい」

顔じゆうに青すじを走らせて、お杉隠居が、苦の中から首を突き出した——その時ですらすでに、武蔵のすがたは、加茂の流れを横に突つ切つて、鵲鵲でもとぶように洲や石

のうえを拾って、対岸の堤へ駆け上がったのであった。

三

お通は見なかったが、ちらと、河向うの遠い人影を、城太郎は見たのであろう。

「アツ、お師匠様だ、お師匠さまあ——」

河原へ向って、跳び下りた。

もちろんお通も。

なぜこの際、すこし廻り道になつても、五条大橋の上を駆け行かなかつたか。お通は、城太郎の勢いにつり込まれたので仕方がないにしても、城太郎が一步を誤つた禍わざわいは、決して、この時、彼女がまたしても武蔵と行き会えなかつたという遺憾ばかりには止まらとどない。

城太郎の元気な足の前には、河も山もあつたものではないが、春の晴着を装よそおっているお通には、すぐ眼のまえに現われた幾いくすじ条もの加茂の水に、はたと困った。

もう武蔵の影は、どこにも見えないのであつたが、彼女は、跳べない流れを見ると思わ

ず、死に別れた者が間際にさけぶように、

「武蔵さまあつ」

——すると、それへ向つて、

「おうつ」

と答えた者がある。

小舟の苦をばらばらと払い退けて、そこに突つ立つたお杉隠居であつた。

お通は、なんの気なく、それへ振向くと共に、

「——きやつ！」

顔をおおつて逃げ走つた。

隠居の白い髪が風に立つた。

「お通阿女あまつ」

次のことばは、老婆の極度に揚げた息のために、声が挫ひしげて、

「用があるツ、待たつしやれつ」

つんぎくように水へ響いた。

お杉隠居の邪推からこの場合の結果を判断すれば、こういう風にはなはだしく悪くとつ

たかも知れない。

武蔵が自分へ苦とまをかぶせたのは、お通とここで逢曳ちわきする約束があつたからにちがいない。その上の痴話ちわが何かにこじれて、武蔵が女を振切つて去つたので、お通阿女あまは泣き声をしぼつて男を呼び返しているのだろう。

（そうだ）

と咄嗟に、自分の思うことをこの老婆は、すぐ自分だけで事実としてしまう。

（憎い阿女あま）

武蔵以上の憎しみを、お杉はお通へ抱くのであつた。

まだ約束だけで家にも入れないうちから、息子の嫁は自分の嫁のように思い、息子が嫌われたことは、自分が嫌われたことのように憤いきどおつたり、怨みに思う老婆としよりだつた。

「待たぬかつ」

ふた声目のさけびが聞えた時は、この隠居が、さながら口を耳まで裂いたかと思われる形相で、風の中を走っている時だつた。

おどろいた城太郎が、

「な、なんだ、この婆」

つかみかかると、

「邪魔なつ」

と、弾力はないが、怖ろしく固い力で刎^はね退ける。

いったいこのお婆さんが何者なのか——なんのためにお通があんなに驚いて逃げたのか——城太郎にはまるでわからない。

わからないが、しかし事態の凡^{ただごと}事でないことだけは感じる。それに、宮本武蔵の一の弟子、青木城太郎ともあるものが、老婆の細^{ほそひじ}肱に刎^はねとばされて引ッ込んでいられたものではあるまい。

「ばばッ、やつたな」

——もう二、三間も先へ行くお杉隠居のうしろから、いきなり跳びついてかかると、婆は孫の首根ッこをつかんで仕置する時のように、左の腕の中に城太郎の顎^{あご}を引っかけ、三つ四つ、ぴしゃぴしゃ撲^{はた}叩いて、

「餓鬼のくせに、邪魔だてするところだぞよ、こうだぞよ」

「力、力、力……」

喉^{のど}の骨を伸ばしたまま、城太郎は、木剣の柄^{つか}を握ることだけは握っていた。

四

かなしいにせよ、辛いにせよ、人はどう見るか知れないが、お通自身にとれば、今の心の置き方は、またその生活は、決して不幸なものでなかった。

希望もあれば、その日その日の楽しさもある若い日の花園だった。もちろん辛いとか悲しいとかのことの多い中ではあるけれど、辛いこと、悲しいことを離れて、ただ楽しいだけの楽しさなどあろうとは、彼女には信じられない。

けれど今日ばかりは、彼女のそうして持ち堪えてきた心も亡^{ほろ}んでしまいそうだった。今までの純真な心へ、ま二つの亀裂^{ひび}が走ったかと自分ですら悲しまれた。

——朱実と武蔵と。

あのふたりが五条の欄^{おぼしま}で人目もなく並んでいたのを遠くから見たせつな、お通は、足がふるえてしまった。あやうく、眩^{めま}いがして倒れかけたので、牛車の蔭にかがみ込んでしまったのである。

——なぜ今朝、ここへ来たろうか。

悔いても泣いても及ばない程に思つて、短い間に、すぐ死を考えてみたり、男性が嘘のかたまりに思われたり、憎しみと愛と、怒りと悲しみと、自分という人間にすら嫌厭けんえんがわいて、泣いたぐらいでは、心の慟哭どうこくがおさまらなかつた。

でも。

武蔵のそばに、朱実のすがたがあるうちは、自分を主張できないお通であつた。もの狂わしいほど、体じゅうの血しおが嫉妬の火と変じながら、なお理性の幾分かが、

——はしたない。

と、必死にたしなめて、

——冷たく、冷たく、冷たく。

と、自己の行為しようとする意思を、みなふだんの女の修養というものの下へじつと抑えつけてしまふのだつた。

しかし、朱実が去ると、彼女はもうそういう忪えこらはかなぐり捨てた。武蔵へ向つて、いうつもりであつた。どういうことをいおうなどと考いえてゐる違ちがはもとよりなかつたが、胸のうちのものをみんないうつもりであつた。

人生の道はいつも、一歩が機微である。また、なにかの場合に、ふだんの常識さえあれ

ば、分りきっていることを、ふと、心へ間違いを映しとってしまうためにその一步が、十年のまちがいになったりする。

武蔵の影を見失ったために、お通は、お杉隠居に出会ってしまった。元日なのに、きょうはなんとという凶い日か、彼女の花園には蛇ばかりが出た。

——夢中で彼女は三、四町ほど逃げた。ふだんでも、怖い夢を見たと思うと、その中にはきつと、お杉の顔があつた。その顔が、夢でもなく、追つて来るのである。

息がつづかなくなつた。

お通は振向いてみた。

ほつとその途端に初めて呼吸が休んだのである。お杉隠居は、半町ほど後ろで、城太郎の首をしめて、立ちどまつている。城太郎はまた、必死になって、打たれても、振廻されても、しがみついて離さない。

今に城太郎が、腰の木剣を抜くかもしれない——必然やるだろう。そうすれば、隠居も刃を抜いて応じるにちがいない。

お通は、あの老婆の、物に仮借しない氣質を、身に沁みて知っている。悪くすれば斬り捨てられる城太郎かも知れないと思う。

「アア、どうしよう」

ここはもう七条の河下^{かわしも}である。堤^{どて}のうえを仰いでも人は見えなかった。

城太郎は救いたいし、お杉隠居のそばへ寄るのは怖ろしいし、彼女はうろろするよりほかなかった。

五

「くそ、くそばば」

城太郎は、木剣を抜いた。

木剣は抜いたがさて、自分の首根ツこは、隠居の腋^{わき}の下へつよく抱え込まれ、これはいくらもがいても離れないのだ。いたずらに、地を蹴^くつてみたり、空^{くう}を打つてみたり、暴れるほど、敵を誇らせるに過ぎないのである。

「この童^{わっぱ}が、なんの芸^うじや、蛙^{まねごと}の真似事かよ」

隠居は、三つ唇^{くち}のように見える長い前歯に、勝ち誇った強味をみせて、なお、ぐいぐいと河原を引き摺^ずつて前へ歩いて来たが、

(待てよ)

彼方^{かなた}に立ちどまっているお通の姿を見てから、急に、老婆^{としより}らしい狡智^{こうち}を思いついて、胸のうちでそう呟いた。

隠居が思うには、これはどうもまずい。老婆の脚で追いかけたり、力ずくで争っているから埒^{らち}があかないというものである。武蔵のような相手では、騙^{だま}しも利^きかないが、この相手は甘やかせば甘やかせる女子供、舌の先でくるめておいて、後でいいように料理してしまうに如^しくはない。

で——隠居^{にわか}は遽^{にわか}に、

「お通よ、お通よ」

手をあげて、彼方^{かなた}の姿を、さしまねいた。

「——のう、お通阿女^{あま}よ、なんで汝^われは、ばばの姿を見るとそのように逃げるのじゃ。以前、三日月茶屋でもそうじゃったが、今も、わしを鬼かのように、すぐ逃げなさる。——その心得が、そもそも解^げせぬというもの。この婆の心底がわからぬかいの。そなたの思い違いじゃ、疑心暗鬼じゃ、ばばは決して、そなたなどに害意は持たぬ」

そう聞くと、彼方に立っているお通はまだ疑わしげな顔していたが、隠居^{わき}の腋^{わき}の下から

城太郎が、

「ほんとかい、ほんとかい、おばば」

「才、あの娘は、この婆の心を、思い違えているらしい。……ただ怖い人間のよう」

「じゃあ、おいらが、お通さんと呼んで来るから、この手を、離してくれ」

「おつと、そんなこというて手を離したら、この婆へ木剣をくれて、逃げる気であろうが」

「そんな卑怯なまね、するもんか。お互いに、思い違いで喧嘩しちゃ、つまらないからさ」

「では、お通阿女のそばへ行つてこういうて来う——本位田の隠居はの、旅先で、河原の権叔父とも死に分れ、白骨を腰に負うて、老い先ない身をこうして旅にまかせているが、

今では、むかしと違うて、氣も萎えた。一時は、お通の心も恨みと思うたが、今ではさら

さらそんな氣もない。……武蔵には知らぬこと、お通阿女は今も嫁のように思っているの

じゃ。元の縁へ返ってくれとはいわぬが、せめては、このばばの過ぎ越し方の愚痴や、こ

の先の相談事でも聞いておくれる氣はないか。このばばを、あわれな者とは思つておくれ

ぬかと……」

「おばば、そんなに文句が長いと、覚えきれないよ」

「それだけでよい」

「じゃ、離しておくれ」

「よう、いうのじゃぞ」

「わかった」

城太郎は、お通のそばへ、駈けて行つた。そして、隠居のことをそのまま、彼女に伝えてゐるらしかった。

「……………」

お杉隠居は、わざと見ない振りをして、河原の岩に腰を下ろした。汀^{みぎわ}の浅瀬に、小さな魚の群れが、のどかな魚紋を描いている。

（来るか？ 来ないか？）

と、お通の様子を、隠居は、その魚の影より迅^{はや}い光で、横目に注意していた。

六

お通は、疑いぶかく、容易に近づいて来なかったが、城太郎が、頻りといったのであろう、やがて怖^{こわ}々お杉隠居のほうへ歩いて来た。

心のうちで、隠居は、

(もうこつちのもの)

と、思ったことであろう。長い前歯を唇にほころばせて、にたりと笑った。

「お通」

「……おば様」

お通は、河原へかがみ込んで、老婆の足もとへ指をついた。

「ゆるして下さい……ゆるして下さい……もう今となつては、なにも、いい訳はいたしませぬ」

「なんのいのう」

お杉隠居のことばは、むかしのように優しく聞えた。

「元々、又八めが悪いのじゃ。いつまでもそなたの心変りを恨んでいようぞ。このばばも、一時は、憎い嫁とも思うたが、もう、心では水にながしている」

「では、かんにんして下さいますか。わたしのわがままを」

「……じゃが」

隠居は、ことばを濁して、彼女とともに、河原へしやがみ込んだ。お通は、川砂を指で

ほじくつていた。冷たい砂の表面を掻き掘ると、その穴から、浸しん々と、温ぬるい春の水が湧いて出た。

「そのことは、母のわしから答えてもよいがの。ともあれ、又八という者と、いったんは許いいなすけ嫁よめであつたそなた、いちど、倅せがれに会うておくれぬか。元より、倅の好きで、おぬしをほかの女子おなごに見替みかえたことじや。今さら、よりをもどせともいうまいし、いうたとて、このばばが、そのような得手勝手えてかつて、承知することじやないほどに」

「……え、え」

「どうじや、お通、会つておくれるか。そなたと、又八と並べておいて、このばばから、きつぱりと倅にいい渡そうではないか。——さすれば、意見の一つもいうて、このばばの、母としての役目もすむ。立場も立つ」

「はい……」

きれいな川砂の中から、蟹かにの子が這い出して、春の日を眩まぶしげに石の蔭へかくれこんだ。城太郎は、蟹をつまんで、お杉隠居のうしろへ廻り、隠居の小さい髭まげのうえに落した。

「……でも、ばば様、今となつてはかえつて、又八さんに会わないほうが」

「わしが側について会うのじや。会うて、きつぱりしておいた方が、そなたの後のちのち々のた

めにもよからうが」

「……ですけれど」

「そうしやい。わしは、そなたの後の^{のち}のためも思うてすすめまする」

「それにしても、又八さんは、今どこにいるのか、分らないではございませぬか。お婆様は、居所^{いどころ}をごぞんじなのでございますか」

「すぐ……わかる……わかるつもりじや。なぜならば、つい先頃、大坂表で会っているのじや。また、いつもの気^きままが出て、わしを振捨てて住吉から去^いんでしもうたが、あの子も、後では悔いて、きつとこの京都あたりに、ばばの後を追うていると思ひまする」

お通は、そう聞くと、急に、不気味な気もちに襲われた。それだけに、お杉隠居のすめることばが、道理のように思われるし、また急に、この息子にめぐまれない老^{としより}婆に、いとしさがこみあげて来て、

「お婆様、ではわたしもご一緒に、又八さんを捜しておあげたいしましょう」

お杉は、砂をいじっている彼女の冷たい手を握りしめ、

「ほんにかいの？」

「ええ。……ええ」

「では、ともあれ、わしの旅舎^{やど}まで来ておくりやれ。……ア、ア」
お杉隠居は、そういつて起ちかけながら、襟くびへ手をやって、蟹^{かに}をつかんだ。

七

「ええ、なんじやと思えば、いやらしい」

隠居が身ぶるいしながら、指先へブラ下がった小蟹を振り飛ばした様子のおかしさに、城太郎は、お通のうしろで、クスリと口を抑えた。

隠居は、気づいて、

「汝^{われ}か、悪戯^{いたずら}したのは」

と、白い眼で、城太郎をねめつける。

「おいらじゃない。おいらのせいじゃないよ」

城太郎は、堤^{どて}の上へ逃げた。

そして上から、

「お通さん——」

「なあに」

「お通さんは、おぼの旅舎やどへ一緒に行くの？」

お通が返辞をしないうちに、隠居がいった。

「そうじゃ、わしの旅舎やどはすぐその三年坂の下、いつも京都に来ればそこに定めてある。
汝われには、用もないから、何処へなど、帰るなら帰るがええ」

「アア、おいらは、烏丸のおやしきへ先へ帰っているぜ。お通さんも、用がすんだらはや
く帰っておいで」

先へ走りかけると、お通は、急に心細くなつたものか、

「お待ち、城太さん」

河原から上がつて、彼を追うと、お杉隠居も、もしお通が逃げる心つもりではないかと狼狽あわてだ
したように、すぐ後ろから駈け上がってゆく。

そのわずかな間に、二人は、話し合つた。

「ネ、城太さん、こんなわけになつて、私はあのおば様と、旅舎やどへ行きますけれど、暇
を見て、ちよいちよい烏丸様の方へも帰りますから、お館やかたの人たちにそういつて、お前は
当分、あそこのご厄介になつて、私の用事の片づくのを待っていて下さい」

「アア、いつまでも、待っているよ」

「そして……その間に、私も心がけるけれど、武蔵様のいらっしやる所をさがしてくれませんか？ ……お願いだから」

「いやだぜ、さがし当てるとまた、牛車の蔭へかくれて出て来ないんじゃないか。……だから先刻、^{さつき} いわないこツちやないんだ」

「わたしはお馬鹿ね」

お杉隠居は、すぐ後から来て、二人の間へ入ってしまった。隠居のことばを信じぬいているにしても、お通は、この老婆^{としより}の側では、武蔵のうわさは、おくびに出しても悪いような気がして、自然に口をつぐんでしまう。

和やかに肩をならべて歩いても、お杉隠居の針のように細い眼は、絶えずお通へ油断のない光を配っていた。今では、姑^{しゅうとめ}とよぶ人でないまでも、お通は、窮屈な感じに身を締められた。——しかし、それ以上の複雑な老婆^{としより}の狡智と、自分の前に横たわりかけている危ない運命を観^みぬくことは出来ないらしい。

以前の五条大橋の畔^{ほとり}まで戻つてくると、ここはもう元日の織るが如き人通りとなつていて、陽もうらうらと柳や梅の上に高い。

「武蔵、はてな」

「——武蔵などという兵法者がいるかしらて」

「聞いたこともないが」

「だが、吉岡を相手に、この通り、晴がましい試合をする程だから、相当な兵法者には違いない」

高札の前は、明け方にまさる人ばかりだった。

お通は、ぎくとして、立ち竦^{すく}んだ。

お杉隠居も、城太郎もそれをながめていた。魚の渦のように、群衆は武蔵武蔵という囁^{ささや}きをのこしながら、去つては来、来ては流れ去つてゆく。

青空文庫情報

底本：「宮本武蔵（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年11月11日第1刷発行

2003（平成15）年1月30日第40刷発行

「宮本武蔵（三）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年11月11日第1刷発行

2003（平成15）年1月5日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2012年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

宮本武蔵

火の巻

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>